女學世界

第三巻第十號

口繪

曲水の宴

室内装飾

南海風景

美術工藝博覽會

可憐小畫

中島歌子刀自

甲府英和女學校

木下川の梅園

美人 山本芳翠筆

明如上人の葬儀

其他




地方よりの御註文は御手紙にて
御申越被下候はゞ小包郵便にて
發送仕る可く候尚ほ註文御
案内書は御一報次第御送り
可申上候
一切の商品は店内一
面に陳列致し置候に
付き御立寄り御
縦覽被下候樣奉
希上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋三丁目

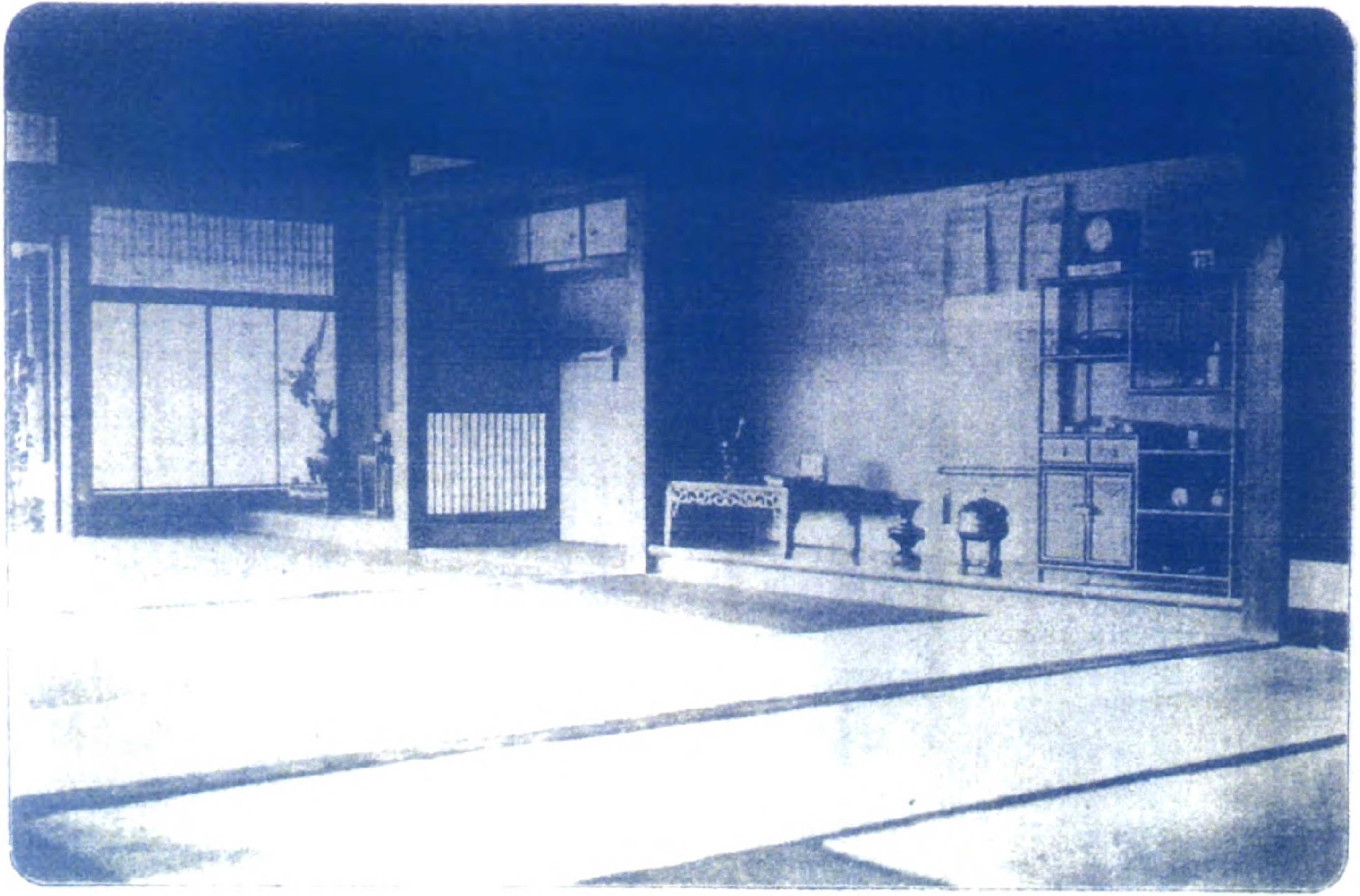
女學世界第參卷第三號目次

宴水曲



山名義海筆

博進社工場印行



客室の裝飾

關西地方富豪の客室



園公山桃町度志州讃



市田幸四郎氏撮影

可憐小品

第九巻第四號

文藝倶樂部

發兌元 博文館

三月一日發行（毎月一回發行）

正價廿五錢 郵稅二錢五厘

―（口繪）―

（小說脚本）（懸賞小說）

―（正價）―

●一冊金二十五錢 ●四冊前金九十五錢 ●八冊前金壹圓八十錢 ●十六冊前金參圓五十錢 ●郵稅壹冊金二錢五厘宛

（甲の一）

文學士 史學專攻 坂本健一先生著

世界史 下卷

（製本既成）

洋裝上製
背皮金字入
正價金貳圓
小包送四百匁

世界史上の幾江流は宛轉曲折玆に數千載輓近に至りて悉く會溜し怒濤狂瀾今や天下を捲く是れ豈古來未曾有の**大史局**にあらずや此時に當り天下の極東に崛して新に振興の運に際會せる我國民は東西古今の往史に鑑みて世界**潮勢の來路**を研めざるを得ず此書上下兩卷通して三千頁撰んで精、述べて密世界東西の淹沓を通叙して餘蘊なし世の史學に想を傾くるの士は邦文世界史中に其精細なる編著を求めば必ず先づ本書を採らざるべからざるなり

發兌元 博文館

高等女學通信教授

目的 女子教育の進歩大に見る可きも、高等女學教授の機關甚だ缺けたるを憂へ、こゝに通信法を以て教授することとせり。高等女學校卒業（又は上級生）同等の學力ある者の講習に適す。

略則 學期二ヶ年○講義錄（百五十頁）月二冊發行○講師は博士學士、いづれも斯道一流の大家也學費は束修四拾錢○月謝五十錢○三ヶ月前納壹圓四拾錢○六ヶ月前納貳圓七十五錢に割引

本院の特色 本院二ヶ年の習講にて優に**高等女學校**程度諸學校の**教員**たるの實力を得可し

目下入學の好期 至急入學手續せらる可し

規則書は往復端書にて申込次第送呈

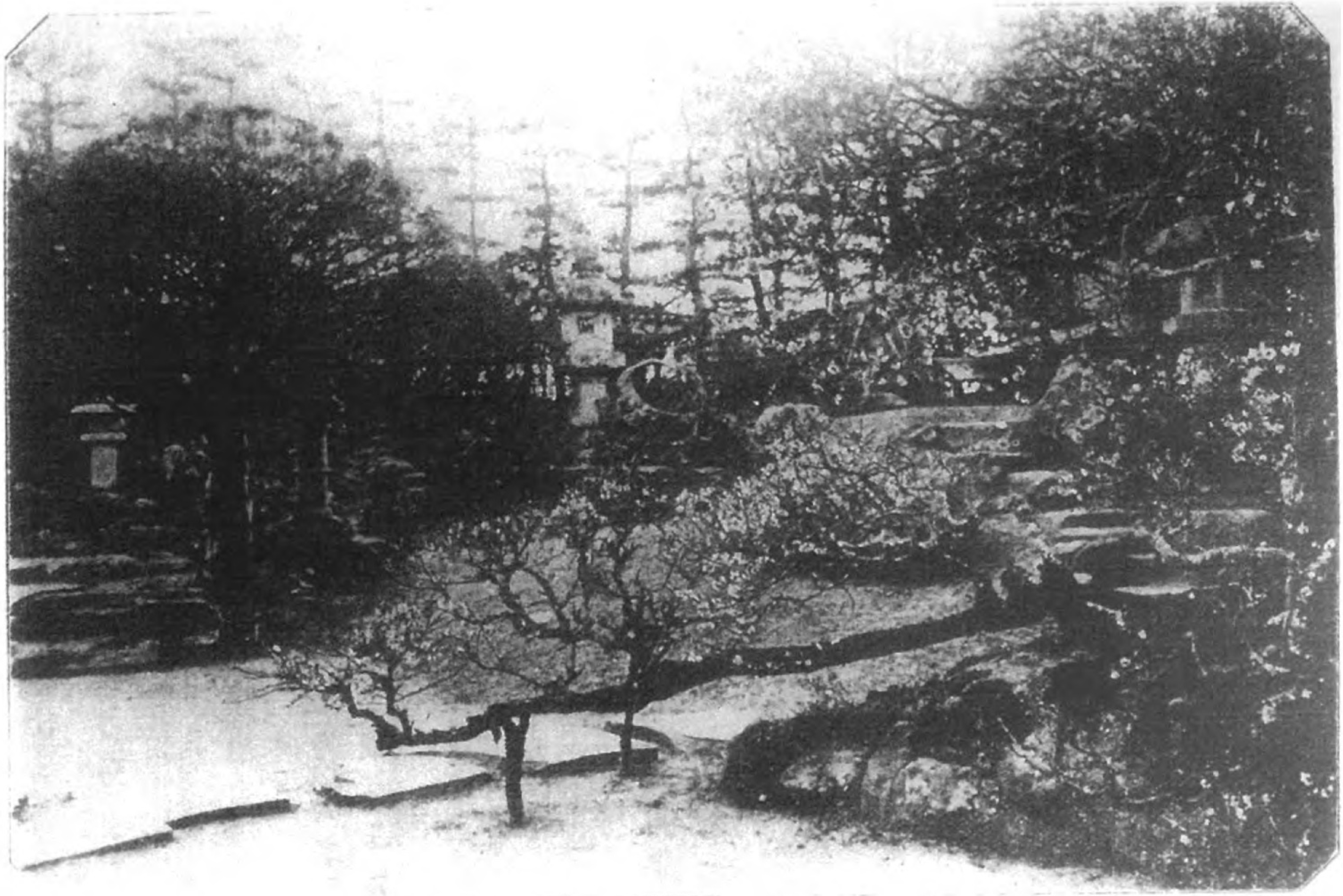
事務所 東京神田西小川町二丁目 **女子高等學院**

（甲の二）

（甲の四）

山本芳翠翁揮毫美人
新橋停車場待合所所掲





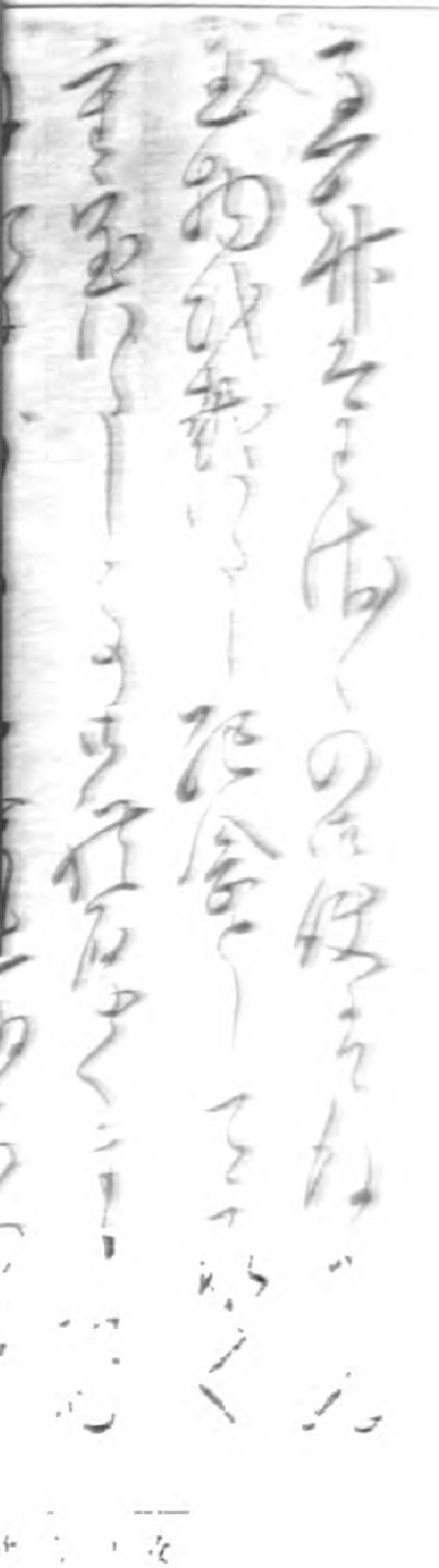
武州木下川の梅園



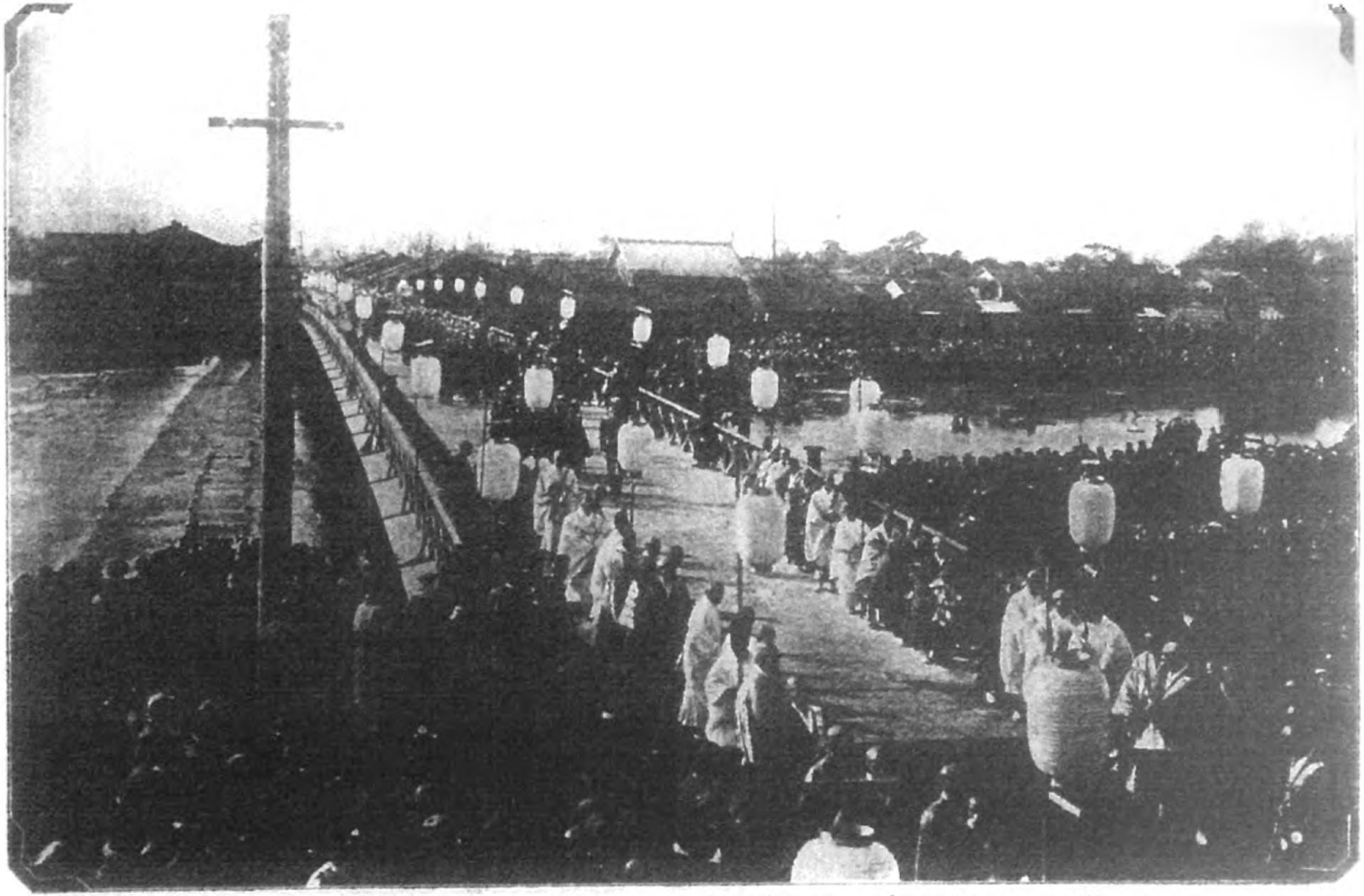
故中島歌子刀自と其筆蹟

記事參照





雜錄記事參照



明如上人の葬式（京都七條大橋通過の撮影）

農學士東條秀介君序文
東京農學園主江原春夢君著

（近刊）

果樹草花 盆栽庭造 續園藝全書

全壹冊洋装菊判美本
紙數四百五十餘頁有
名園藝者所有盆栽盆
石寫眞銅版精巧圖三
十餘入正價郵税未定

曩に園藝全書は上梓して世の好評を博し旬月ならずして數版を重ねたり而して前編は專ら露地（花壇、園圃、山野）培養を主述せしを以て本篇には盆栽培養法を專叙せり、記する所理論を畧して實地經驗の栽培法に則り簡明通俗の文を以て巨多の密圖を挿入し以て前書の闕を補ふ前後併用始めて園藝の妙技に精通するを得べし請ふ陸續御愛讀あらん事を

農學士東條秀介君序文
江原春夢君著

● 果樹草花 盆栽庭造 園藝全書 正價六拾錢 郵税八錢

東京日本橋區本町三丁目

發兌元 博文館

（二〇一）

繪入小僧讀本

村井弦齋君著　小峯大羽君畫

今世學校敎育に用ゆべき讀本多し然れども社會各人の據て以て坐右の友とすべき好著に乏しきは本館の夙に恨事とする處なり村井弦齋君近頃小僧讀本一編九章を綴り鉛槧に付せらる書中小僧の行儀作法を正し貯蓄心を奬勵し德義の觀念を養成する事の如き不規律なる今の社會は往々實行に難きものあらん、只今日の所謂丁稚小僧が異日我國の實業界を組織する大責任わりと知らば其無邪氣の無心なる少年時代に於て人間の軌道を行ふへき良習慣を養ふの急務なるを見る今の世は德敎の人心を正すべきものなし商家の子弟小僧の如き茫として自ら依倚する處を知らす其父兄主人は業務の繁劇に追はれて一々訓誨するの暇なけん師なく友なかるべからす本書の如き寔に人心を戒飾する近來稀有の好著なり嗚呼讀まん哉〱

全一冊
洋裝大判
表紙石版
定價金拾貳錢
郵税金四錢

本書内容

第一●惡い小僧
第二●小僧の禁物
第三●小僧の心掛
第四●小僧の行儀
第五●小僧の貯蓄
第六●小僧の風儀
第七●小僧の勉學
第八●主人の撰擇
第九●小僧の辛抱

以上何れも適切の項目に付て諄々篤實に熱心に敎誨したれば出版を待て是非購讀わらんことを望む

教訓繪ばなし

さア〱少年諸君面白い繪ばなしが出來ましたよ、讀んで爲になるお噺が十二册でるのです、今迄方々から隨分色々な繪ばなしの本が出て居りますがこの教訓繪ばなし位面白いのは他にありませんどうぞ少年諸君賣切れない内に早く買て讀で御覽なさい、最早や第壹編は出來ました第二編第三編續て毎月一回出版します

武田櫻桃君編

第壹編 家庭の卷

▲全壹册　正價金五錢　郵税貳錢

家庭の卷といふと何だかむつかしい樣ですが讀んでみればどんな小さな御兒さんでも、平氣で讀めるばかりでなく、お正月から十二月までの遊びやら、昔の豪らい人の生立やら種々な奇麗な繪が澤山ありますから、飴や御菓子を召し上るよりも、此本を御讀みになれば爲にもなれば面白い、眼の藥にもなればお腹の藥にもなると云ふものですさア〱賣り切れない内に買て下さいまし

- 第貳編▲お噺の卷
- 第參編▲海軍の卷
- 第四編▲陸軍の卷
- 第五編▲動物の卷
- 第六編▲植物の卷
- 第七編▲ポンチの卷
- 第八編▲遊戲の卷
- 第九編▲地理の卷
- 第拾編▲歷史の卷
- 第拾壹編▲立志の卷
- 第拾貳編▲冒險の卷

●全部十二册洋裝大判彩色表紙本文總色刷美本

●正價一册五錢六册二十七錢全部五十二錢郵税一册貳錢

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

(乙の四)

明治お伽噺

日本昔噺以來、先には日本お伽噺を完成し、今又世界お伽噺の大篇を企て、斯道に多年の肝膽を砕ける、御馴染の小波山人、今度は更に歩を進めて、十數年の經營に成れる自作の美麗崭新なるお伽噺を、明治お伽噺なる題目の下に、小冊子として、順次世に公にせんとす。是れ啻に少年讀書界に於ける、無二の良籍たるのみならず、また以て明治文壇に對する稀有の一大貢獻といふべし

第壹編

巖谷小波山人作
武内桂舟畵伯畵

(製本既成)

お伽十番

▲全壹冊洋裝菊判形美本
▲紙數凡百三拾ページ
▲正價金拾貳錢郵稅四錢

((本書目次))

((次刊))

((正價))

●一冊金拾貳錢
●六冊金六拾七錢
●十二冊前金壹圓二十八錢
●郵稅一冊四錢宛
●着金次第送本す

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

(乙の五)

會長 子爵 岡部長職君（一號三月三日發行）

女子學術講義

本紙切秡き入會者に限り入會金特に十錢とす

本會は東京府教育會の附屬として今回新に設立せられ我國女子の學校にて親しく教授を受くる事能はざるものと在校女學生の參考として通信教授の方法を設け高等女學校の學科程度に基き一般女子に必要なる學科目を教授するものなり

新學期開始

講師及受持學科目

●修身科　女子高等師範學校教授　篠田利英
●國語科　女子高等師範學校教授　佐方鎭子
●地理科　東京府立第一高等女學校教諭　伊藤貞勝
●歷史科　東京府立第二高等女學校教諭　高木みつ子
●理科　東京府立女子師範學校長　東京府立第二高等女學校長　林吾一
●家政科　華族女學校學監　下田歌子
●裁縫科　女子高等師範學校舍監　喜多見佐喜子
●作法　華族女學校講師　日本女子大學校講師　小笠原清務
●兒童心理　東京高等師範學校教授　文學士　松本孝次郎
●女子衞生　東京女醫學校長　鷲山彌生子
●割烹科　日本女子大學校講師　治庖會教授　赤堀峰吉
●口繪　寫眞石版數葉挿入

尚講義錄附錄として毎號朝野名家の論説會員其他の投稿にかゝる作文和歌俳句幷に女子の須知を要すべき社會の出來事忠孝貞節に關する美談等を載せ且毎學科講義に用ひたる文字術語等稍々難解のものには一々注釈を加へて卷末に附載することゝせる等一種獨特の方法を工夫せるものなりと云ふ

●講義錄は毎號毎月三日一回發行にして紙數百五十頁餘壹ヶ年半卒業とす

●入會金貳拾錢●會費三ヶ月分七十五錢六ヶ月分一圓五十錢一ヶ年三圓一學期間十八ヶ月金四圓五十錢右の割合にて分納するも差支なし（見本郵劵二十錢）現則二錢にて送附す

帝國教育會內東京府教育會附屬
東京市神田區一橋通町廿一番地

女子講學會

（乙の六）

帝國百科全書

第九拾三編

支那哲學史

文學士中内義一君著

製本既成

上製金五拾錢　郵稅金拾錢
並製金卅五錢　郵稅金八錢

上下茫々四千載就中周末と宋代との如き思想的運動の最も活潑なりし時にして諸家雜出傑さして秋日の星の如く甲論乙駁姑らくも歇まずその多趣にして變化に富める之を今日歐西哲學界の現狀に比して甚た遜しからむるものあり支那哲學史の撰述固より容易ならず刺下の世その書二三之なきに非すと雖も未だ其善さ稱するを得ざるもの比々として皆是なり本書は中内學士精魁苦心の餘に成りしものにして繁簡正に其當を得巨細概れ網羅し盡し殆んと間然すべきところ無し好學の士之に據りて坤輿の半面獨創の文化を開展したる東亞ツラン人種精神的生活變遷の一斑を知悉するを得るに庶幾からむか

發兌元　東京本町　博文館

第九拾四編

園藝通論

農學士高橋久四郎君著

製本既成

上製金五拾錢　郵稅金拾錢
並製金卅五錢　郵稅金八錢

農藝中尤も趣味と利益とを與ふるは園藝に如くは無し加ふるに世の進步は園藝の進步を促して止まず之れ方今園藝の業各地に起り農家の好副業として世已に定論ある所以なり今の時に當り其術を究め空しく進んで珍種佳品を發ひ世の需用に應すれば其利益し大ならむ本書は我國特異と風土に鑑み先づ園藝一般關する理論を說明し次で果樹蔬菜花卉等の栽培に說き及ぼし學理と實地と併せ說述すること詳細を極め然も言簡にして要を悉くし當業者必讀の良書にして讀者を益する事他書と其撰を異にせん

(乙の七)

商業叢書

理學士　藤田外次郎先生著

商業數學

（三月上旬發行）

全壹冊洋裝
紙數四百頁
正價未定
郵稅未定

普通教育の發達に伴ひ商業算術に關する著書も亦少からずされど其多くは唯單に計算應用に外ならずして其理論の湧出する本原を討究せるもの絶無と稱するも可なり故に苟も商事に從事し單獨に研究せんと思ふ士に向て能く大要を了解せしむるの良書なき設に商業の進歩上深く嘆すべき事ならずや理學士藤田先生茲に憂ふる所ありて專門を研究せらるか側英を拔き華を摘み煩に走らず冗に失せず能く其綱要を點綴して大成せられたるものは實に本書即ち是なり商業學校に於ける無二の好參考書にして商業算術の指針たるもの本書を措きて又何れにかあらん

書類

竹貫斐文君著
●算術手引草
正價　金五十錢
郵稅　金六錢

鮫島理學士著
●普通教育 算術教科書 二冊
正價　一冊廿五錢
郵稅　一冊六錢

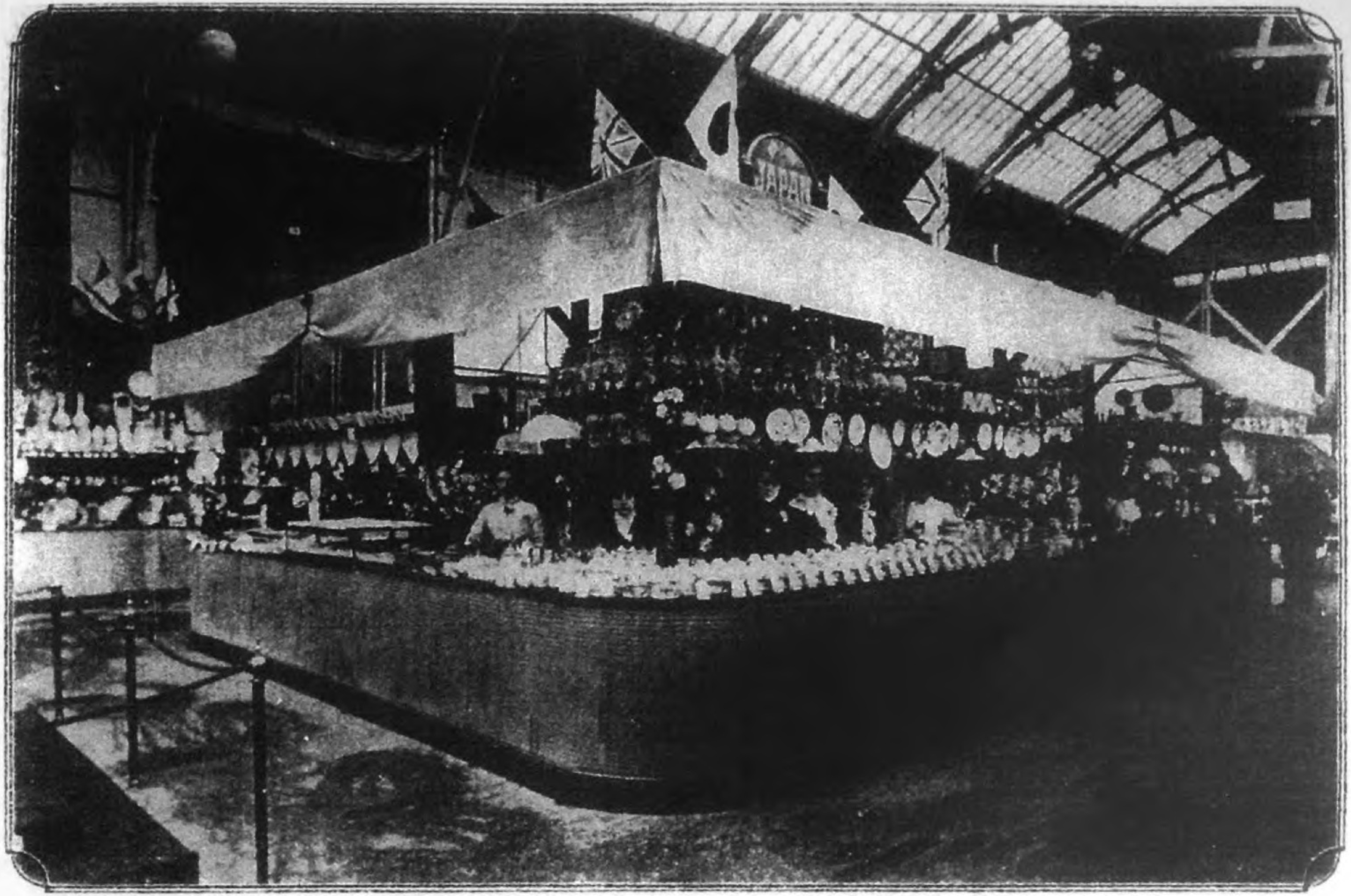
片山清謙君
三田暉信君 合著
●理論適用 普通算術
正價　金參十錢
郵稅　金六錢

三田暉信君著
●實用 數學一萬題
正價　金四十錢
郵稅　金四錢

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館



甲府英和女學校卒業生



美術博覽會日本部販賣店

英國ウオルバーハンプトン工藝博覽會中ニ在リ

阿蘇山の遠望



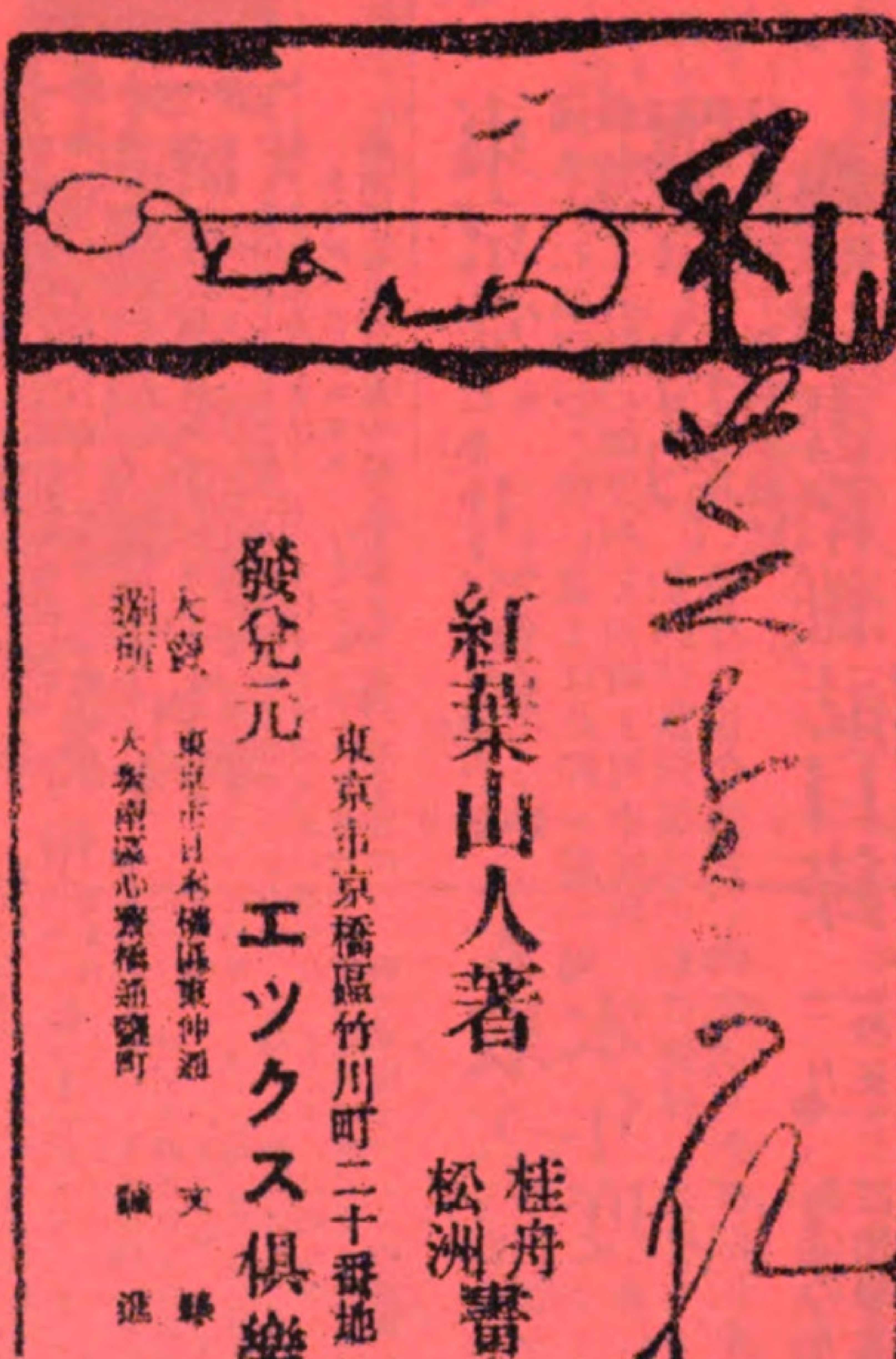
肥後石井長太郎氏撮影

(菊岡小助氏撮影)



春の郊外

東京府下木下川附近の風景


紅葉山人著
桂舟
松洲 書
東京市京橋區竹川町二十番地
發兌元 エックス倶樂部
新意美装本
定價五十錢
郵税四錢

The English Student.

英學新報

主筆 新渡戸稲造。津田梅子

定價 （定價金拾錢郵稅壹錢○半ヶ年（十二冊）郵稅共壹圓貳拾錢○壹ヶ年（廿四冊）同貳圓廿八錢）

所載概目

社說 英語英文學研究社論其他一般青年學生を裨益すべき倫理教育社會等に關する社論 **寄書** 社會一般の事項に關する內外の寄書家の意見 **通信** 英米學生の通信 **講義** 斯業大家の講說

訪問 英語英文學研究等に關する大家の實驗談 **時報** 內外の新事件 **逸話** 歐米帝王名士最近の逸話 **會話** 純良なる談話語になる會話及びダイアログ

註釋 英米大家の詩文拔萃詳註 **飜譯及作文** 諸家の和文英譯、英文和譯の模範●和文英譯指南（新道の大家に依賴す）和文英譯英作文答案修正●懸賞和文英譯及英作文

讀者の隨意英文 **雜說** 英語研究上に注意すべき事項、作文要訣、故事故語、熟語等 **尺牘** 各家の尺牘○作例○答案修正 **商業書簡文** 講義

笑話 古今名士の滑稽譚、笑話 **小品** 從來の改作小話の他に近時英米新聞雜誌に見ゆる彼國大家の健全なる小品文に註釋を附す **雜錄** 近時の文學界○大家修學談○神話○海外文壇

○英語謎○我國英學界○經者の机上○讀者の領分 **質疑解答** に限り、書籍十數種の質問に應じ且つ直接講話者通信解答を與ふるの特典あり、**挿畫**等

（每月二回一日十五日發行）

發兌元 東京神田 東京堂

業務擴張

東京堂は多年**書籍雜誌**の**大取次**を營み來り候處世上の御引立を蒙り業務益々盛大に趣き賣捌方其他の設備も大に擴張致し候に就ては此際一層の勉強を以て各位の御便利を相圖り可申候尚**本年度**よりは更に**歐米諸國**の**出版者**と**特約**を**結**び書籍雜誌の類は何種に拘はらず廣く大方の御註文に應じ精々廉價迅速に御取次可致候間何卒倍舊の御愛顧を以て續々御註文被成下度奉懇願候

東京堂發賣 **書籍雜誌目錄** （三月改正） 御望の方は郵券貳錢封送申込あれば出來次第送呈す

委託販賣部 書籍雜誌御發行の御方にして一手販賣方御委託相成候はゞ諸事御便利を相圖り弊堂獨特の擴張法を以て賣捌方は勉强可仕候間御發行前に御相談被成下度候

圖書雜誌大販賣 東京神田表神保町三番地 特電話本局貳百四拾八番 **東京堂書店**

（丙の三）

自治機關

公民之友

第壹卷第參號

三月十五日發行

其他法令伺指令裁判例行政實例質疑應答寄書地方通信歌俳句新体詩等材料豐富趣味津々乞ふ一本を購ふて其價を知れ

正價金十二錢郵税一錢五厘

三冊三十五錢●六冊六十五錢●十二冊一圓三十錢●增刊一冊代金四冊分
郵税一冊一錢五厘

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

續帝國文庫

第四拾七編

法學士 柳田國男 田山花袋兩君校訂（近刊）

校訂 近世奇談全集

全壹册洋裝
金字入美本
正價六拾錢
郵税拾六錢

架空虛飾の著漸く廢れ今や特に深遠神秘の境に達せんとするに當り所謂現文界の母源資料たる本邦古來の高想靈思より成れる珍聞奇談を輯集し茲に本書を公にす其一**新著聞集** 其二**老媼茶話** 其三**想山著聞奇集** 其四**三州奇談**なりとす校訂嚴密以て我國古昔の文流思潮事實の眞相を知らんと欲する者の座右參考に供す請ふ愛購を賜はらんことを

第四拾八編

幸堂得知翁校訂（近刊）

校訂 名家短篇傑作集

全壹册洋裝
金字入美本
正價六拾錢
郵税拾六錢

●復讐煎茶濫觴（京傳）●敵討宿六娘（三馬）●復讐猫魅橋由來（傳笑）●敵討筆山大全（東里）●會談興晤門人雅話（振鷺亭）●兒ヶ淵誓仇討（月池）●鎌田又八强力譚（雲麿）●志道軒往古講釋（京傳）●帯屋お蝶三世談（正藏）●十三鐘孝子勲績（馬琴）●父母怨敵現腹皷（東子）●戻駕籠故郷錦繪（京山）●開運菊一文字（一九）●女房仇討双六（姥尉）●敵討女夫似我蜂（南杣）●小説比翼文（馬琴）●腕雕一心命（三馬）●床飾錦額無垢（種彦）●西國奇談月廼夜神樂（德升）●黒雲太郎雨夜譚（良齋）●怪談岩倉萬之丞（南北）●摺針太郎豪傑譚（春水）●絲車九尾狐（京傳）●照子池浮名寫繪（馬琴）●浪花浴衣圖七縞（南北）●廿三夜待（山島）●昔唄猿狂言（京山）●枕琴夢通路（仙果）●油丁製菜種黄表紙（仙果）●大盡舞花街始（三馬）

（丙の六）

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

各宗本山名所圖會

故文學博士　高山林次郎先生序
翠葉　石倉重繼君著
（木村武山君畫）

日蓮宗名本山名所圖會

全壹册洋裝
菊版美本寫
眞銅版畫入
正價　未定
郵稅

著者は宗祖日蓮聖跡の靈地として將た一宗の大本山として幾百萬の信徒が渇仰禮拜しつゝある久遠寺、蓮永寺、法華經寺、藻原寺、誕生寺、妙本寺、龍口寺、本門寺等を始め一宗に於て最も重視推尊せらるゝ靈蹟地は普く親しく探見し大は各寺の由緒沿革より小は一片の墓標に至るまで一々舊史に考へ各寺の什寶記錄に參照し記事は極めて平易明細に編述し添ふるに各寺院の重寶建物室内の模樣風景等美麗なる寫眞銅版石版木版三百餘種を挿入したれば一は史家の參考とすべく信者の珍寶として座右缺く可らざる良書なり

續刊

- 第五編　成田山名所圖會　全壹册洋裝菊判美本
- 第六編　善光寺名所圖會　全壹册洋裝菊判美本
- 第七編　高野山名所圖會　全壹册洋裝菊判美本
- 第八編　永平寺名所圖會　全壹册洋裝菊判美本
- 第九編　比叡山名所圖會　全壹册洋裝菊判美本

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

大和田健樹先生著



能を舞ふ人は、われども能を知る人は少なく能を見る人はわれども能を解する人は少なし此書一度出なば知る事も審に解せることも速かなるを得ん斯道の爲めの舟筏とも燈火ともなるべきは獨り此書か

全部六册製本

和綴石版表紙 能舞精巧

木版畫挿入紙數一册二百頁以上

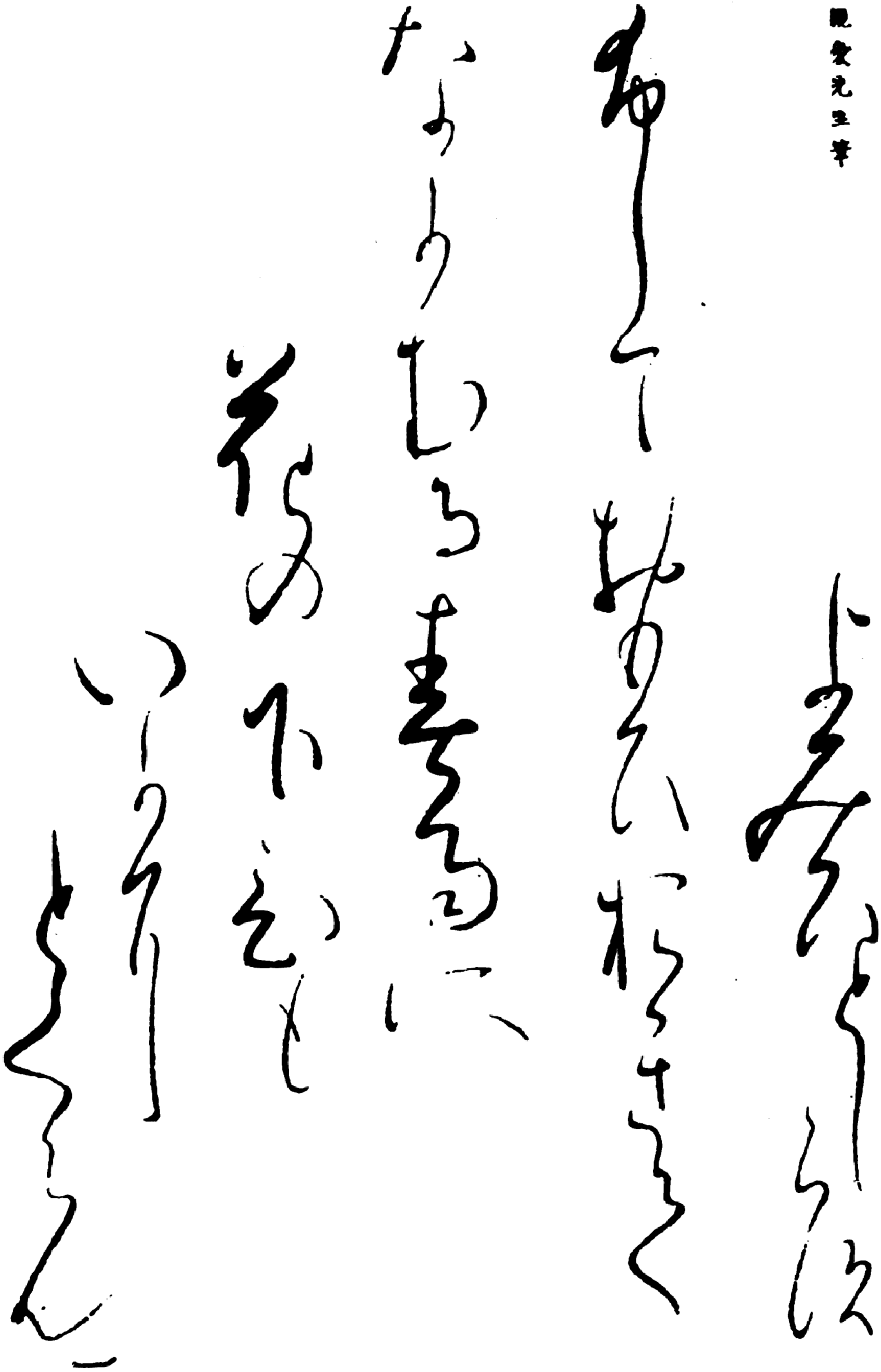
正價 一册四拾錢三册壹圓拾五錢 全部二圓廿錢税郵一册六錢

目次

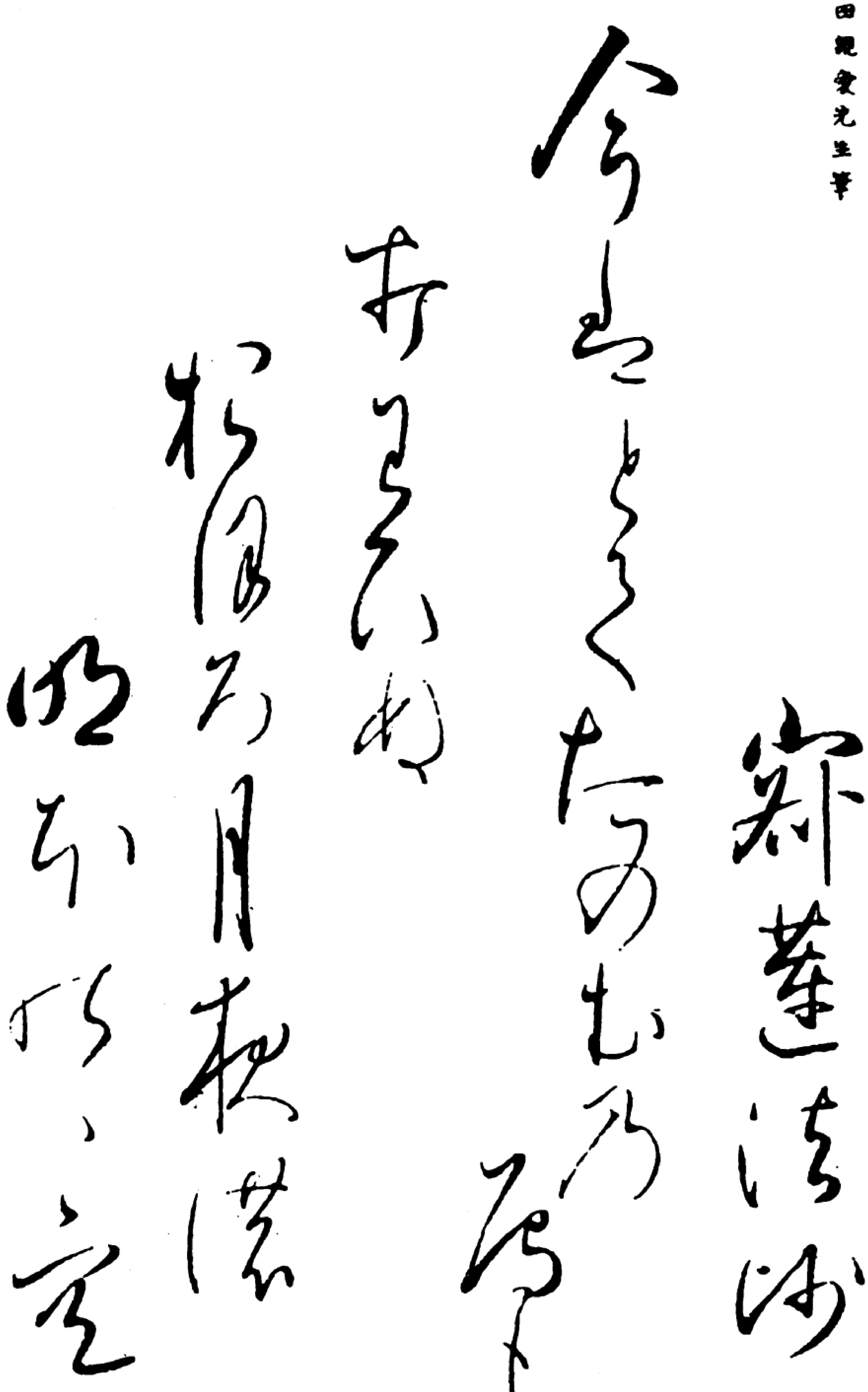
發兌元　東京日本橋區本町　**博文館**

(丙の八)

多田親愛先生筆



多田親愛先生筆



坂正臣先生筆

雛遊び　彼岸

春季皇霊祭

摘草　汐干狩

初ざくら　朧月

坂正臣先生筆

昨日拝借の御傘返上
申上候實は梅見乃
つもりあの折雨にて寒氣
御玄関をこさりませ申候て
おゆるしくだされ御禮申上候
かしこ

桃花楊柳



跡見花蹊女史筆

梅林夜景

跡見花蹊女史筆



桃柳



野口小蘋女史筆

柳陰釣艇

野口小蘋女史筆



(丁の二)

（丁の三）

前田默鳳道人著

書學捷徑

（三月上旬發兌）

全壹册菊判剛
唐本仕立美本
習字實習法
定價金五拾錢
郵稅六錢

サア〳〵皆さん買て御覧なさい、説明は言文一致、習字のはやみちです、作字の改善法です。筆の遣方より點畫結体の作方等順を立て部を分ち、何字でも自由自在に作れる樣に、極めて丁寧に極めて平易に解釋してあります。又執筆用法等の事より、繁文、省文、補空、借換及び古來文選に至りては、一々證を擧けて解するなと、總て書學に關するものは此編中に盡してあります。從來の普通習字帖と同一視すべきものではありませぬ。學校の參考に大に益あるは勿論獨習の諸君は此編を措て他に優るものはないのです

三宅青軒君著●書法自在　正價金貳拾五錢　郵稅六錢

石川鴻齋君著●書法詳論　正價金四拾錢　郵稅六錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（丁の四）

女學世界

第叁號

朝寢を戒しむるの文

春眠曉を覺へずとや申して兎角春は朝寢のなり勝のものに御座候惰眠の習慣破り難き事に御座候間心つくまゝに一寸申上候

鷄鳴に起きざれば日暮に悔ありと申候實我が多年の經驗にて如何にも意味深長の格言に御座候

世に早起き程大切の事はあるまじく候早起は心づよき事の本にして家内安全息災延命の守り本尊かと存じ候

先づ早起を致し候得は身体の爲にて朝の間の清らかな大氣を呼吸し、薄紅ゐに明け初むる空の景色を打眺めて新たな雛にいさめさ謡ふ鷄の飛び行く影の三つ四つ二つを散へ漸ちに昇る朝日の姿を見て身も心もすがくしく立働くも輕やかに家内の人は誰れ彼れとなく打笑み顔の色さへ輝きて見へるものに御座候

夜一夜安らけく休みて新に働らき申候ものから其仕事は思ひの外にはか取り家の内外も片付きてきちんと致し庭の面に箒の痕の新らしく塵一片を止めぬなど得も言はれぬものに御座候

幸福の觀念

慈善心の發動と其の實行

棚橋絢子

凡そ人間と生れて誰しも幸福を願はぬものはありますまい、併しその幸福を願ふにも一定の順序があり又その幸福を解釋するにも種々の區別があらうとおもひます、即ち幸福を急劇に享得しやうとおもふ人と、十善を期して享けやうとおもふ人との差である、その急劇に得やうとおもふのは甚だ危險千萬でもしこの世で斯る希望を持つ人があれは到底身の破滅は免かれまいとおもひます。今是を實際に就て區別して見ますと

第一は自個一身の快樂を得やうとして只管それに走ッて遂にはさもしい心を起して人の目を眩ますやうな結果に及び禍の身に及ぶをも顧みざる人であります。

第二は自分の幸福は勿論一家一族にも幸福を得せしめんとおもふ事に熱心して其の他の事は一切關せず焉てゐる人である、この種の人は滔々たる世間に隨分尠なかなぬ事とおもひます。

第三は自分一家は勿論親戚其他關係あるもの丶幸福を圖りつ丶あるも世間一般の人に對しては一向どうでもよいと言ふのである。

扨て其の次が即ち慈善家である、これは自分は勿論親類緣者は申に及はず赤の他人へまでもなるべく幸福を得せしめやうと思ふ人即ち世に慈善家と認めらる丶人である扨てその上になると我が身の如何は措いて問はず只

啻他人の爲めにのみ圖り他人の窮するを見て之を救はうとする人、即ち人を逆境から救ひ出して自から樂しむものがある是れ即ち故瓜生岩子刀自の如き其の一例で所謂菩薩の心といふのがそれであります。身を捨てゝ他人を救はんとする處ろの行は通常人の能くする處ろではありません。けれども凡て幸福を得る事に急なる時は其の身に禍災を招いて遂に亡びて仕舞ひます、又是れをゆるやかにする時は自身の爲めに眞に幸福を得るのであります、併し精神上に幸福を得んとするものは是又別問題でありますが、彼の釋迦、孔子、耶蘇などの如き聖人は自身の幸福は少しも顧みず唯天賦の賜を無にする事なからん事を期して一身は流浪のやうな生涯をせられたのである、これは我々普通人の到底及ぶ處ろではありません。斯る遠大なる思想は先づ措きまして尤も手近い例即ち自己の餘力で以て他の憫れむべき人々の幸福を幇けてやるのは左程困難な事ではなからうと思ひます。

我身を詰めて他人を救ふといふ事は左程むづかしい事ではありません、我々が平常少しづゝ心掛てさい居れば出來る事ですから皆様に其心得のあらん事を希望いたすのであります、まづ第一には廢物の利用である、是れは實に經濟上に於ても又道德上に於ても善事でありまして、昔しから物に冥利といふ事を申してあります、彼の慈善家で有名な瓜生岩子刀自などは此の點に就て大に心を注がれました。

廢物利用の方法には種々ありますが玆に私の希圖する處ろはさし當り無造作で何人にも又如何なる家にも容易に行はれ易い竹の皮であります、竹の皮は家々の臺所に買物をした度に殘るものでありますがそれを洗つて奇麗に貯へて置いてこれを養育院に寄附して貰いたいのであります、これは隨分うるさい事ではありませうが、

併し慈善事業といふ觀念を確と考へて居れば左程困難なものではあるまいと思はれる、若し自分に出來なかつたならば下婢に命じて置けばよいのであります、但しその際には多少の賃を與へて說諭をしたらば十分効を奏するのであらう即ち竹皮は草履の原料となるのである今一つは糸屑である。勿論是れは銘々の家で丁寧に仕舞ひ置かるゝ方もあらうが大概は廢物にさるゝのが例である、此糸屑を袋に入れて貯へ以前の如く寄贈して戴けば夫を利用して敷布團ともなり又は織つて着物にもなります、但し寄贈に手數を要するとあれば一錢か二錢にて或區域を定めて買ひに參るのである、次に彼の養育院などに往々美服を賜はる方々がありますが是れは可善事には相違ないとは言ふもの丶、在院の小兒に斯る美服を纏はせては奢侈の習慣を作ッて小供の將來の爲め却て不幸であります、されば衣服を御寄贈さるゝ御志の方には寧ろ襤褸を賜はらん事を希望するのであります大家で着古しになりたる衣物を下女に與へ下女の不用の品を養育院等に寄贈されん事却て有益であります、一体斯樣な事柄は弘く社會一般の慈善心に訴へてその實行を求めそうして御互にこの幸福を享得したいものと考へます。（記者筆錄）



婦女雜觀

大町桂月述
女學記者漫評

日本の女性

提燈と釣鐘、つり合ひの取れぬは、日本の男と女となる哉。まづ身体上から言つて見ても、蚤の夫婦をあべこべにしたるもの、これ日本人の夫婦也。すべて動物は、下等のものは、女性大にして、男性小なるものなるが、上等となるに從ひて、男性大に、女性小となる。然しその大小にも差別あり。女の頭、男の肩にも及ばぬものがつれ立つて歩き、これが夫婦で候とは、見て体裁のよきものに非ず。西洋で見れば、例外なきにはあらざるも、概して男女の大小さまでも懸隔せず、女の脚力もさまで弱からざれば、共に手を抱き合ひて散歩してもよし。共に雜踏すれば、猶更結構也。日本の男とても、小さき女の生みたる子なれば、小男なきにあらざるも、五尺三寸くらゐが普通なるべし。女は五尺以上あるものは稀也。男は山高帽子をかぶれるに、女は帽子をかぶらざれば、益つり合ひがとれぬ也。日本の男とても、西洋人にくらぶれば、歩行緩漫なれとも、なほ外輪ふみて、さまでのろからず、女は悉く内輪ふみて、ひよろ〳〵、のそ〳〵、まるであひるの歩くに異ならず。かゝる男女が、生意氣に西洋人の眞似して、つれ立ちて歩くは、本人同士は樂しきかも知らねど、客觀的には、滑稽也、むしろ醜体也。まづ當分釣合のとれぬ間は、夫婦同行は、見合はすがよかるべし。

　精神上に至りては、更に一層釣合ひがとれぬ也。女子にして、男子と話の出來るものは、殆んど稀也。全く話しがなしとには非ず。男の方で、自から馬鹿になりて、下らぬ、卑俗な事をもち出して、はじめて、話が出來る也。政治の話しが出來るでもなく、學問の話が出來るでもなし。文學の話しもなければ、旅行の話

もなし、髪の風がいゝの、惡いの、薩摩芋がうまいのうまくないの、隣りの三毛猫が子を生んだの、姑が邪見だのなどと、女子の話しの出來る事柄は、大抵相場がきまつたもの也。かく話しの出來ぬは、社會上の知識なきに由る。社會上の知識なきは、家にすツこんでばかり居て、社會に出ざるに由る也。甚しきは、夫の從事する仕事の何たるかを解せざる細君も多き也。かゝれば、男は馬鹿にせらるゝも、亦止むを得ざるべし。

身体上、精神上、かく女が男と釣合ひのとれぬやうになりたるは、つまり在來の教育習慣の罪也。女はたゞおとなしく、亭主のいふ所に從へばよし。衣を縫ふとを知り居ればよし。澤庵のつけ方を知つて居ればよし。子供のおもりをすればよし。それで賢妻なり、良妻なりとて、家にばかりとぢこめて、社會を觸接せしめず、男の益進歩するに反して、女は益退歩せり。身体は委小となれり。精神は蒙昧也。社會は男子の專有となり、女子はわづからず。わはれや、日本の女子、彼等に希望もなければ、野心もなし、紋付の三枚がさねでもこしらへてもらへば、天下を取つたよりもうれしく思ふ也。さてその新衣裳を身にまとひ、お多福面に、白粉こて〲ぬりて、ひよこ〲と、往來しげき路をねりゆきて、衆人の目送を博し、芝居でも見物して歸るは、女一代の最も愉快なるわざ也。かばかり女を馬鹿なものにして、一時は男の爲めに、都合よきかも知らねど、つまりは、男の損也、社會の損也、日本も文明國の仲間入りせむとせば、今少し女子に智恵をさづけざるべからず。

女も坐つてばかり居らず、盛に運動して、身体を發達させたきもの也。健全なる精神は、健全なる身体にやどり、健全なる子は、健全なる母の腹にやどる。せめて女も男と一所に歩けるやふになりたきもの也。精神上の教育も、高等女學校を卒業した位では、何にもならず、得た所が、普通學の知識に過ぎず。元來學問のみにては、知識を得てこそすれ、智恵を得るものに非ず。智恵の大半は經驗にもとづく。智恵を得むには、社會と觸接せざるべからず。世の小膽にして近眼なる

教育家、動もすれば言はむ、女をして社會に觸接せしむれば、身持ちが惡くなり、弊害百出せむと。凡そ天下の物、利ばかりあるはなし。利あるものは、必ずまた弊もあらむ。女子をして社會に觸接せしむる當座のうちは、不品行となるもの、十中二三ぐらゐあるとはあらかじめ覺悟し居らざるべからず。智惠がつきさへすれば、妄りに男子の玩弄物になるものに非ず。西洋の娘が、男女交際の自由なる社會に立ちまじりながら案外に純潔なるは、男女交際の結果、智惠がつきたるに由る也。日本の女子も、世の頑冥者流に、おてんばと言はるゝまでに跳ね廻るにあらずんば、女子の進歩改良は期すべからず。女子が依然として男子の玩弄物になり居る間は、日本もまだ文明の仲間入りが出來ざる也。

女學記者曰く「婦女雜觀」は婦人幷に家庭に關する一種の評論なり、その評論に又評論を加ふるはチト異なものなれど、由來大町君の筆、奔放にして縱橫恣雎時に天馬空行の槪あり是を以て單純なる讀者は一見して往々其の意に誤るなきにあらず、是に於て記者は其の文意に註脚を加へ批評を施し聊か理義の異同を正さんと欲す、即ち是れ女學記者が一片の老婆心に外ならず。

男頭提灯と釣鐘の說如何にも御尤に候、是の事に就ては曾て風俗改良會の主唱板垣伯が本誌の爲めに述べられたる論說中にて讀者は疾くに御承知の事ならんと存候。體格上の不釣合は積年の惰性の然らしむる處なれば一朝にして改むる事能はず、前途百年を期してゆる〳〵と改良致すより外に方策はあるまじくと存じ候作去精神上の不釣合に就ては千載の好機會今や幸に女子教育の盛運に伴ふて一般婦人の學問常識共に著るしく進んで復昔日の阿蒙にあらず薩摩芋がうまいの、三毛猫の噂をするのとは裏店の嚊の事にして決して文明の女流には無之事に候、されば單に衣を縫ひ、澤庵をつけ、子供のおもりをするのみにて決して賢母なり良妻なりとは申し難く候但し美服美衣を羨やむは當世婦人の惡弊にして教育

の有無に拘らず、上智下愚おしなべての所望かと存じ候、大町君の言痛切頗る同感の至りに候畢竟女子が男の玩弄物となりて了るは個般精神的の修養なきの致す處ろかと存じ候

從妹を送る

卿、都を去り、親の膝下をはなれ、行いて軍人の妻とならむとす。貧交、贈なく、たゞ多言すとかや。われ請ふ、卿を送るに、物を以てせずして、言を以てせむ。

軍人は、命を國家に許したるもの也。軍人は妻たるものは、先づこの覺悟なかるべからず。夫が軍の門出に、涙をこぼすべからず。夫をして、後髪ひかるゝ思あらしむべからず。苟くも軍人たるもの、死を惜むものは、一人もなけれども、わが戰死したらむ後、遺族扶助料のみにては、一家を支ふる能はず、妻や、子や路頭に迷はむかと思へば、鐵石の腸も寸斷せざるを得ず。然るに、その妻たるもの、賢婦にして、よく一家を整理し、よく子女を敎育し、殊に何か藝能を有すれば、夫なくとも、立派に家を立つるを得べく、かゝる妻を有する軍人は、思ひ殘すとなく討死するを得べし。つまり妻女の如何は、軍人の勇怯に關す。女子が間接の責任も、亦重からずや。

軍人は、質素ならざるべからずとは、大元帥の諭し給へる所也。軍人の妻たるものは、この心得なかるべからず。軍人自身は質素を守らむとするも、愛する細君に衣服をねだられては、三度に一度は、借金しても買ひてやりたくなる也。軍人は最も名譽ある職なれども、物質的報酬は多からず。俊秀の士にして、無事に大尉の難關を通り越すも、少佐となるまでは、少くとも、十箇年を要す。少佐になりたればとて、月給はわづかに百圓内外に過ぎず。今日、百圓の月給は、中等の下也。それくらゐにては、まだ中等の生活が出來ず。而かも少佐になり得るは、すぐれたる人にして、十中六七は、大尉の中隊長にとゞまるものなれば、まづ軍人の平均の月給は六七十圓とせざるべからず。六七十

圓ぐらゐの月給にては、とてもはでやかな生活は出來ざる也。東京では、さまでの事なきも、地方によりては、軍人は土地の人に重く見られ、從つて其細君も重く見らる。重く見らるゝが故、粗末な衣裳も着られずと思ふは、自然の人情也。折々軍人の妻の集會などある場合には、われも〳〵と競ひて美衣を着けむとするは、近時到る處に見うくる惡習慣也。少將や大佐などの妻にありては、世間並の衣裳を着うべきも、大尉中尉の妻では、とてもその眞似が出來べき筈のものにあらず。されど、他の妻君なみに美衣をつけざれば、肩身がせましと思ひ、夫に借金させても、新衣を買はむとする者多し。軍人の妻としては、不心得も亦甚しといふべし。上にたつものゝ妻君が、世俗のうはさをよそに、自から率先して、粗服をつけざるべからず。下にあるものゝ妻君も、思ひ切つて、人並はづれたる粗服をつけて、平氣で居るだけの覺悟なかるべからず。かくてこそ眞の軍人の妻なれ。美衣が着たければ、藝者にでもなるべき也。

婦女と衣裳

衣裳は女にとりては、最も重きをなすもの也。嫁入の時、簞笥長持の數が少なければ、肩身がせまく思ふ也。外出する時、衣裳が惡ければ、きまりが惡き也。學問なきを耻とせず、愚なるを耻とせず、行儀作法を知らざるを耻とせず、たゞ衣裳なきを耻とす。やすつぽき哉。女子一生の大願、まづ長襦袢も二十圓ぐらゐの處で、我慢すれば、四季の衣裳、帶、かんざし、指輪、身のまはりのもの、流行を趁へばとて、千圓か二千圓あれば、それで十分也。かくて、甘んじて男子の玩弄物になる也。浮氣する男で見れば、二三日も家をあけたる時は、さぞや、山の神が角をはやし居るならむと、氣にかゝらざるにもあらず。されど十分に女の弱點を見ぬきたる事なれば、金の指環でもかひて歸れば、さんざん、いやみを言ひてやらむと一夜寢ずして考へたる名案も、忽ち微笑と化し去つて、もらつた指環をさして見たり、拔いて見たり、他愛のなきと、ま

るで小兒が土產に菓物をもらつて喜ぶに異ならず。女はてゝに至りては、譬のなきもの哉。

女學記者曰く質素儉約は婦人の美德、本誌夙に此れを唱道し、每號殆んど口を極めて婦人が流行に逐はるゝの習弊を打擊候。這般の文字實に肉食者流に對する頂門の一針也但し山の神が角を出す云々以下の文字聊か卑陋に陷るなきかと存じ候、雜觀子何に憤る處ありて此の漫罵を逞ふせられし哉。

迷信

智惠と迷信とは、まるで反對なもの也。智惠なきものは、必ず迷信あり。男の中でも、智惠なきものは、迷信あり。女は男に比して、槪して智惠なきものなれば、迷信最も多し。厄年だからとて、氣をもみ、氣をもむの餘、却つて病氣をよび出すとあり。うけに入つたからとて、いはひするものあり。移轉したるに、方角が惡かつたとて心配し、牛の日だから裁縫がはじめられぬの、月の初の日は金を出されぬの、月の末の日は蕎麥をくはねばならぬの、丑の年の子は、家へは置かれぬの、十九だから嫁入りが出來ぬのなど、氣をもむと、一にして足らず。うらなひを信じ、まじなひを信じ、加持祈禱を信じ、半僧坊を難有がり、穴守稻荷を有難がり、お祖師さまを難有がり、天理敎を難有がり、蓮門敎を難有がり、病にかゝりて、迷信一層甚しく、氣で氣をやみ、自から求めて病をかもし、不幸を招く。女子は、到底迷信以外に、超脫する能はず。愚なる哉。

女學記者曰く淫祠に熱中し加持祈禱に依賴するは愚人の常一般に是れ常識欠乏の致す處ろに御座候苟しくも普通敎育を受けたるものにしてこの事あるべからざる次第に候、但し卜筮方位の事は一槪に言ふべからざるものあり、習慣の然からしむる處ろ一片の理屈で埓明け難き場合有之候迷信も時によりて精神の安祥を得ば敢て妨げなかるべしと存じ候。

家庭

質朴倹素の習慣

家庭記者

兒童は幼稚の時から質朴倹素の生活に慣れさせ、自然に此の習性を養成することは極めて肝要である、世の中に愛情が誠で且つ切なるは、親の子に於けるものに及ぶものはない。それ故質朴倹素の良習慣を知らぬわけではないが、知らず識らず愛情の驅るところとなつて、親自から質朴倹素の習ひを破つてしまうのである。衣服は他の子に劣らぬことを希ひ、望むものは望ひに任せて求めてやる。知らず識らず奢侈逸樂の習慣を養成する。もう一旦これに慣れてからは、自分の力で打ち破るのが中々六かしい、遂に一生涯の習慣になつて終るのである。奢侈逸樂の習慣が出來ては、身體は懦弱になり、勇憤の氣象が消磨し、少しの障碍にも挫折ける艱難にも堪へることが出來ない、然るに質朴倹素の習慣あれば、猛進の氣象も盛んである、艱難辛苦と戰ふ勇氣もある、身體も強健である。即ち身を立て家を盛にし事業を興す要素は、此の習慣が最も主である。幼稚の時から此の習慣の養成をつとめねばならぬ。併し斯かる習慣は學校敎育よりは家庭敎育の力が大きい、中等以下の家庭では自然に此習慣が養はれるが最も注意すべきは上流人士である。今此の事に就いて家庭で善い注意のある實例二三を擧げやう。

●●●●

▲松方伯の家庭　松方伯は富貴與に屈指の方であるが、其の御子達を養育するのに、學校へ通つて制服のある場合は別段であるが、家の規定としては、嚴冬の折もシャツを着せぬ、足袋手袋も用ひさせぬ、紋羽の長襦袢に、薩摩飛白の綿入羽織と、同じ地質の綿入と

の三枚に限つてゐる。其の他も是れに準ずる家風だといふことである。伯が御子達は聰明で、社會の要地に立つて仕事に當つて居る方が數人あるが、皆此の流儀で養育せられたのである。

▲岩崎男の家庭　岩崎は兒童走卒も知れる富豪であるが、此の家では、子供を育つのに、十歲になれば書生部屋において書生と同居せしめ、衣服は綿服に限り、食物は書生と與に同じものを食べさせ、學校へ通ふにも曾て車には乘らせぬと、規定してあるさうである且つ同居の書生は可成一段上のものならしめ、小學校時代には中學へ通ふ書生、中學時代には高等學校の學生といふ風で、自然に啓發勉勵せしむる仕組だと聞いて居る。

▲今村氏の家風　今村銀行の主人は元横濱で蠑螺の壺燒を賣て居たことがあつたが、刻苦勉勵して今の地位に達した人で、今は數百萬の富を有する身分だが家庭は至つて質朴儉素である。第一自ら率することが儉素で、それでもつて家人を率ゐる。それゆゑ一家は皆てれに化して、子女の高輪の住居から、一橋の附屬小學校、お茶の水附屬小學校へ通學するのも、總べて徒步で決して車を用ひさせない、子女もこれに慣れて、他の有樣を羨望する樣子もなかつたとの事である。

▲近衞公の家庭　近衞公爵は貴族院議長の榮職に居て、學習院長を兼ね、盛望隆々たる方であるが、其の身體といふは二十二三貫目の體量で、相撲も耻しい體格を備へ、其の健康は强健無比といふことであるが、是れも幼稚の折の質朴儉素な家庭敎育の賜であるまいかとおもふのである、公爵が幼稚の折學校へ通はるるのに、身には粗服をつけ、膝きりの袴を穿ち、風呂敷包に辨當を携へ、雨降りの日は番傘を手にし、缺席なく學校に通はれた。女中の送りも三太夫の迎へもない。大きな朴の木齒の下駄が、人力車の名代であつた。斯かる有樣で、成長されたから、下の事情にも通じ、體格も充分に發達し、天分の聰明は益 光輝を發したのである。公爵は其の子弟の敎育も此の流儀に依られ、決して書生と異なる衣食はさせられぬさうである。

◆岩倉公の家庭　岩倉公爵家の家庭教育は、同族中でも稱贊さるゝよしであるが、多くの子女を躾けらゝるに、學校通ひには必ず徒歩で、人車も馬車も用ひさせず、風雨の時も暑寒のひどい時も、これで推し通さるるよしである、一は體育上の注意から來て居るが、又一は儉素の習慣を附ける爲めである。それ故に稍長じて一人りで事を辨じ得るに至ると、寄宿舍に送るか、又は教師の宅に托するかして、平民的に養成せんことを期し、衣服なども綿服の外は用ひさせず、家に置いて華族的になることを、つとめて避けさせらるゝさうである。

以上の實例は、先年讀賣新聞で、家庭の教育談を集めて掲げたものゝ中から、質朴儉素の養成に注意されて居るものを拔萃したので、確實な事とおもふのである兒童は元來華麗も質素もない、奢侈も儉素も考へないで居る。それを親共は世間へ對するミエから、衣服も着飾らせる車にも乘せる、奴僕で送り迎へもする終に何時の間にか、華奢逸樂を好む習慣を附けてしまうので、形は子を愛するに似てゐるが、是れが一生の習慣となつて、本人自身も止めやうとして止めることが出來ぬやうになつては、寧ろ無慈悲の極といはねばならぬ。最初から綿服になれゝば一向苦にもならぬが、一且絹物を用ひつけては、家の盛衰で之を用ひ難くなつたならば、さぞ肌觸りも惡るからうし、外聞も惡るからうし、人の知らぬ苦痛を感せさせねばならぬわけとなる。

兒童は一切綿服がよい。車は一切用ひさせぬがよい、學用品などでも必要缺くべからざるもの丶外は、一品でも給與せぬがよい。獨りで通學が出來るやうになつたら、決して奴僕などを附けぬがよい。かくして風雨寒暑にも慣れさせ、多少の不自由も忍ばせ、無用の費は毫しもさせず、多少の艱難に堪へ淩がする。是れは本人獨立して後にとれほど其の身の爲めになるかしれぬ、其の身の健康にとれほど効があるか、又どれほど精神の修養になるかしれぬわけである。一時の愛に一生の良慣習を養ふことを忘却しては、決して子を愛

する所以ではないのである。

良家風の紹介

羽仁もと子

石黒男爵家

人の家には自ら特色が御座います。俗に申せば、食ひ道樂、衣道樂、見え張り、無頓着、貴族的、平民的其の他種々でありますが、主婦たるものは、よく我家の位地と必要、收入等の諸點より熟考して、一家生活の方針を定めねばなりませぬ。此事に就て石黒男爵家(忠悳氏)の御家風などは、私共のために最も有益なる參考の材料であると思ひます。で、先日男爵をお訪ねいたし、以上の事柄に就て伺ひましたところ、快く御承諾になりまして、左の如く語られました。

人には種々の流儀があつて、出來るだけ手を擴げて收入の途を計り、思ひ切り派手やかな生活をしやうと云ふ向もある。それも各々の好き〳〵だから、私は敢て惡いと云はん。併し自身はその樣な事を好まぬので、官職に就ての收入の許す限りに於いて、質素な生活に滿足して居る。

私には一人の娘と息子とあるが、娘は先年大學教授の小野塚に嫁いで今は鎌倉に行つて居るし、息子は鹿兒島の高等學校に行つて居るので、今は私と妻、用人、書生、女中が三人(仲働、小間使、飯焚)馭者一人、それだけである。全體私共は早起の方であつたが、今では隱居ばかりだから、女中の起るのは此頃六時、われわれが顏を洗ふと七時になるといふ樣なことだ。

私の家では妻の受持として、一年中に凡ての費を計算して、何々にどれ丈といふ內譯をもつくり、大晦日に私の手許に出すことになつて居る。それは毎日細かに入用をつけ、また時々〆くゝりをして置くので、一年の終りには直きに出來るやうになつて居る。これは他人の參考にもなる事だから、何れ收入表と相對して其の中

世人に示す積だ。石黒の出納中には、めくり（花合せ）をやつてとれだけ負けたといふこともなければ、お三とんを引張つていくら取られたといふこともなし、教科書に關係して何程儲けたといふでもなし、誰に見せても恥かしい事がない。

その代り石黒は吝だ。ナゼなら贅澤をしやうには、筋ならぬとまでには行かぬでも、多少心に染まぬ事でもやつて、金儲けの工夫をしなけりアならん。石黒はそれが嫌だ。そして石黒の最も潔しと信ずる今日の收入丈けでは贅澤を許さぬからである。

此頃、さる所に軍醫總監の正服で、馬車に乘て出掛けて行つたら、或人が『石黒さん、あなたは實に千變萬化する方ぢや、午前はトンビを着てテク〱神樂坂邊を買物して居たぢやないか』と云ふから『お前方のやうに買物をするにも人力車に乘り歩いては、此の正服を着けた時にも矢張お前方同樣人力車のお世話にならにアならんからナー』と云つて大笑であつたよ。

たま〱坐に赤十字社の方がありました。男爵は顧みて、

赤十字社に關係したとて、收入のある筈のものではないが、私も創立以來廿五年と云ふもの、勘定したら三千圓以上も持出して盡力して居る。其の金のいる赤十字社に出て行くのに、石黒の身代で車に乘つたりよい着物の裾を切つたりするやうなことは出來んのだ。それだから公の會合でない限り、夜など提燈を持つてテク〱やつて行く、スルト門番がお辭義をしない、馬車に禮をするのだナと思ひながら這入つて行くと、鍋島さんも來て御坐る、どなたもお出になつて居る、其の方たちは馬車に乘つてお供も連れて入らッしやるであらうが、それだけの事が出來る方だから一向不思議でない。併し此の席では馬車に乘つて來た石黒も、提灯をぶら下げて歩いて來た石黒も、石黒たるに於いて何の變りもない。

先きには一年中支出計算の事を申したが、其の他にもまだ大晦日の例として調べて出すものが種々ある。中

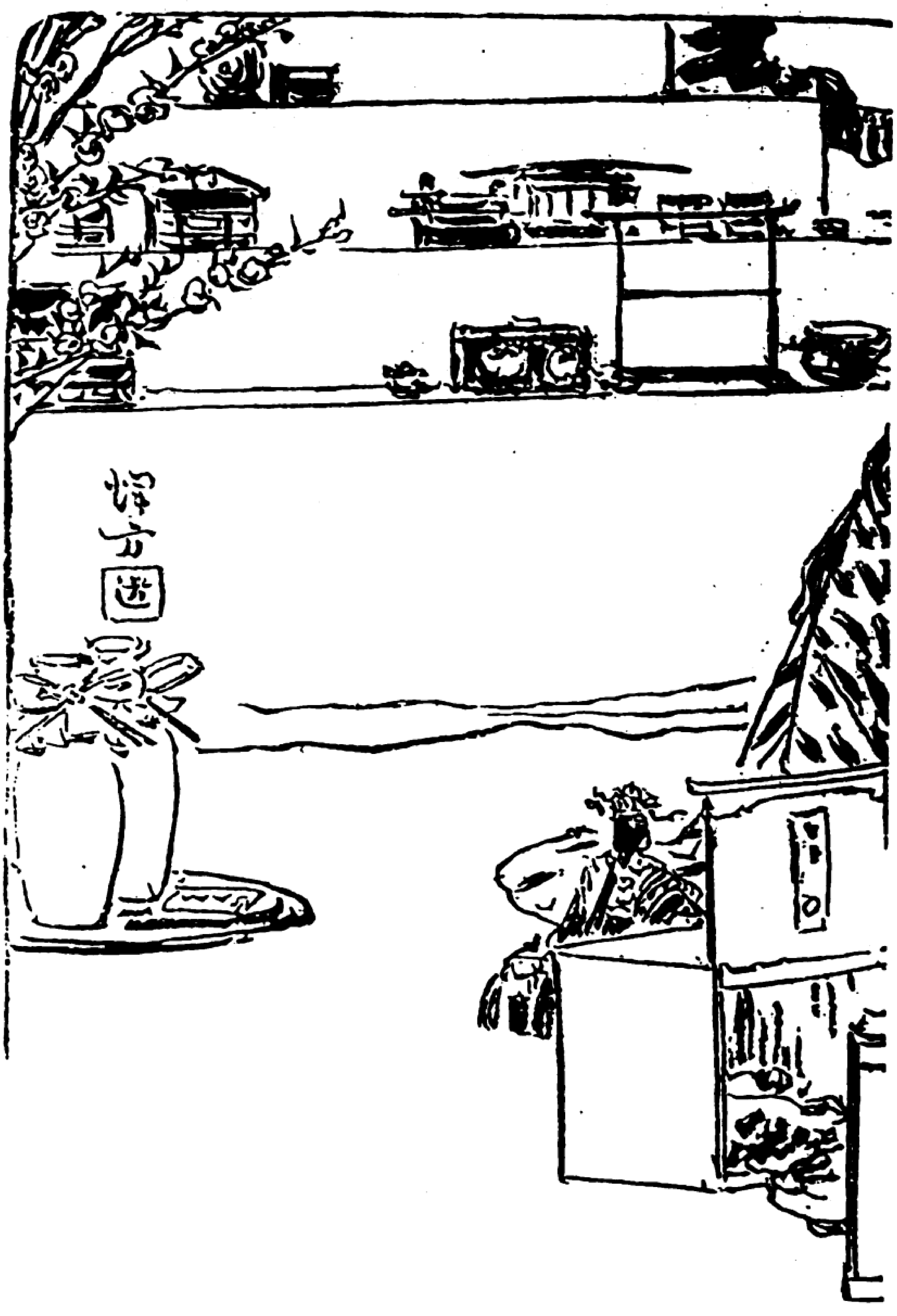
には妻君ばかりでなく、女中の手を借りるものも大分ゐるのだ、これしきの事と打棄て丶置けば何でもない事でも、調べて見ると興味もあり又參考にもなる、女中に調べさせるものは、例へば一年中に家人以外に此の家で食事をしたものが幾人ゐるかと云ふやうなことで、其れから來信來客の數なども調べてゐる。

かくて男爵は手づから一冊の質素なる手帖を持ち來られ



昨年中の來信數が四千百五十三通、內封書が二千六百三十一通、端書が千四百通、外國より百二十二通、此方から出したのが三千四百四通、內封書が千七百十三通、端書が千五百八十八通、外國へ百〇三通、來賓が三千百五十三人、內自身にあふたのが千三百〇五人、細君のあふたのが五百五十四人、面會しなかつ

たのが千二百九十四人である。それから昨年中に忠嘉が病氣で寢たのが十二日、妻が二日ぎりだ。私は廿八歲の時は、芝の山内に居る某老僧にあふたことがある。今は故人になつて居るが、當時その人の話に、自身の生れぬ前六百年前までのことを思ひ出して、日々記して居ると云ふことであつたから、どうして分るかと尋ねたら『ナニ突然では五年三年前のことでもチヨツト



思ひ出せぬものだが、あなたにしても昨日自分は何をしたかと考へて御覽なさい直ぐ分るでせう、それから一昨日、そのまた前の日と一年一年溯ぼりさへすれば、幼い頃まで大方のことを思ひ出すのが雑作もない、生れる後前頃を思ひ出すのには、多少工夫を要するのだが、此の關門を破つて見ると、またそのさきが段々に明かになつて來る』と云つて居た。此の生れぬ前と

云ふとは、まづ石墨の常識では分らぬものとして置いて、生れて廿八年間即ち今日までのことを思ひ出して見やう—、餘程の興味を持つて思立つたのです。スルト成程意外にも此方法を用ゐて見ると、過ぎ去つた事が段々明かに思ひ出せる。で、とう／＼三四歳頃の大畧にまで漕ぎつけて、順を追うて記して置いた。廿八歳以後のことは勿論その時々に記したので、即ちこれが此の小册子です。そして私のをぎやアと初聲をあげてから、穴にいるまでの道中記であるから、此の册子を野邊の道草と名づけて居るのです。

實に妙なものでね、前の樣に順繰りに辿つて行くと、忘れて居た種々な事が意外に明瞭になるものだ、私は三歳の折に兩親に連れられて信州に移つたのだが、其の信州に居る中に地震がありて、母親に抱かれて庭に出た。その時森とか川とか其の邊に光景の眼底に映じて居たものも、矢張この思出しの折に浮み出たやうなことで、ハチは私を負うて居た傳が或時倒れて私の額に少々疵をした、その場所はコンナ所であつたらう、と云ふ樣なことも見えて來るので、後に自分でそれらを畫に描いて、現場に行つて照して見ると、成程よく、似て居たから不思議に思ふた程であつた。

古きを尋ねて新しきを知るとは、唯に社會の歷史の上のみではありませぬ。私共各々の行路も、ナニ過去つた事を、打やつて仕舞ふならそれ迄ですが、もしも注意して日々の變化を詳かに記臆して居りますなら、種々の興味の外に將來の行程の上に意外の光明を得ることでありませう。

これも大晦日に年々共に年越をしたもの丶名や年や生國などを此の册子に記して置くのが私の常例だ。去年の暮は前に申した目下の家人即ち、忠憑、妻の久賀、用人の鹽田霜幹、書生の小林盛枝、馭者の下田友春、女中がすて、なほ、はる、馬の赤龍、犬のエレ、猫の白だ。私は軍に三疋の馬を連れて行つたが、歸つて後も賣て仕舞ふなら、圓太郎馬車でも引くかも知れんと思つて見ると氣の毒になつて來て、一頭は信州の種馬にやつたから今では孫も出來て居る。一頭は極く若か

つたので、少しは別れよく元の牧場に返したが矢張種馬になつてるさうだ。殘りの一頭は即今の赤龍だがこれは去勢してあるので、種馬にもなれないし、幸ひ手許に置いて私の馬車を引かせることにしたのです。

男爵の家庭としての最も大なる長所は、これらの同情にあるかと存じます。

なほ數々伺ふべき事がありましたけれど、恰度お出掛のところでありましたゆゑ、不得已後日重ねて承はることにして、此日は立ち歸つたのであります、終りに曾て男爵の家庭に就て伺つて居りました一二を記しませう。

男爵は酒も煙草も用ゐられぬさうであります故、自ら家庭に面倒の少い事でありませう。また石黒家では春秋二回に知人を招待して鄭重に饗應さるゝといふことですが、平生普通の來客には食事や他のたべものなども成るべくお出しにならぬ流義です。『主人も客も優々と煙草をふかして應接する、食事時にも歸らんで家人に面倒をかけるのはよくない風ぢや。私の家では若し飯を出す時も、招待した人でない限りはその時の有合にして置いて、別段に手數をしないことになつて居る』との事でした。男爵はまた朝餐の前に神前を禮拜なさると云ふことも曾て伺つたことがあります。

家屋の改良

（平尾光子女史談）

女史は素種々の女學校に關係し、棚橋三輪田諸女史と俱に女子教育に貢献されたことは尠なからぬ。又女子教育家中で才名嘖々たる人であるが、それだけ矢張り時に意を得ざるものあつて、今は全く教育社會を退き、少かに某紳士の家庭を預りて日常の務とし、居を早稲田鶴巻町の新開地に構へ、悠々として盆栽の愛玩に耽り、傍ら二三貴紳の令孃方を預りて其の修學の監督をされつゝある左の記事は女史が頃日記者の訪問の際語られた一節である

服製の改良。これはなか〳〵重大問題であります。この頃妙な改良服を着てゐるものを、チヨイ〳〵見懸けますが、彼は一体改良服では無くて、變換服では無いかと思ひます。改良と云ふと、成るべく從來の形を壞はさないやうに、能く素の形式を整へて、而うして便利にすべく工風するのが乃ち改良だらうと思ひますが、今の改良服のやうに、全然素の袖を取つて了つて、洋服紛ひの筒袖にしたのは、取りも直さず變換したので、餘り感心したもので無い。

一体日本の家屋と云ふものが不都合です。服製の改良よりは、第一に家屋の改良が急務だらうと思ひます。それも決して根本的に改築するのでは無い。只從來のものを、建てる時に少し注意すれば可いのです。

先づ私の家を御覧なさい。私は大いに考へてこの家を建てたのです。尤もこの家を建てる時は、今ほど多人數で棲む積りでは無かつたので、今でも別に不自由を感じません。總建坪數が十六坪で、間數が七間あります。而うして建築日數が十五日間の工事で、防風、防濕の用意から、盜難除けまでしてあります。

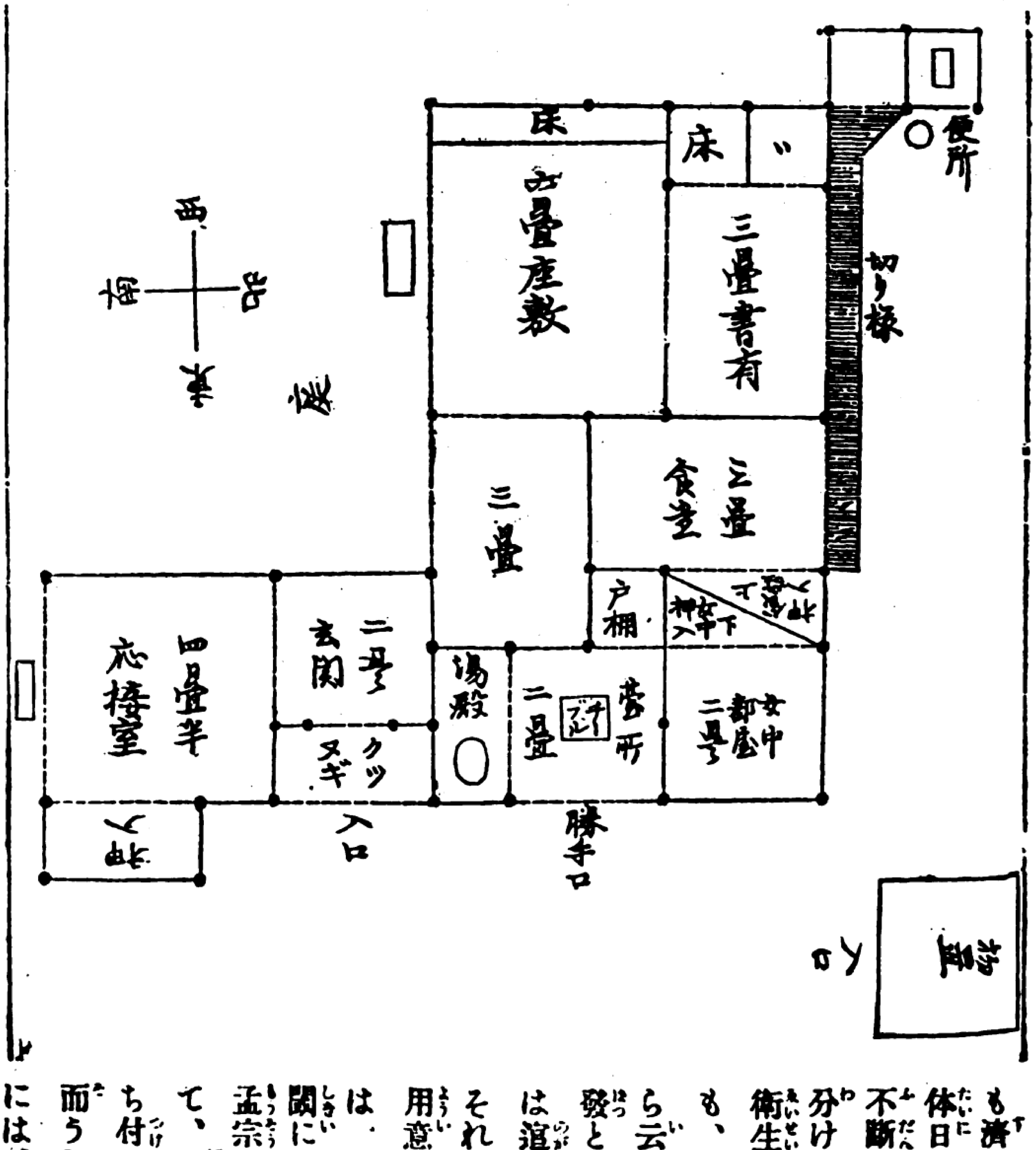
どうも從來の日本建築法は、兎角無用の椽側が多いから、私は成るべく其の椽側を畧いたのです。それから便所を雨戸の外にしたのは、寢てから臭氣のするのは衛生上に有害だから、食物も成るべく内に置かないやうに、外へ物置を拵へて、夜は一切其處へ入れるのですから、從つて家に一匹も鼠がゐませんので、着物など少しぐらゐ不始末にして置いても、鼠に喰はれるやうな憂ひは無い。

家は直南向きに、東を入口にして、北を開けて西を塞いだので、七間の室内一つとして日の當たらない處は無く、椽の下は堅く叩いて雨の降込まない用意をしてあるから、何んな長降りにも決して濕けらないのです屋根は大屋根の組方にして、前から吹く風には後で抑へ、後から吹く時は前の屋根で支へるやうにしてあるので。

勝手は板を敷くと、兎角働らくものが無精になるから、これは一切タヽキにしたのです。而うして中央にチー

プルのやうなものを据付け、其の上に焜爐を置いて煮炊をさせるのですから、何んなに勝手を働いても、ぺタ〱坐らなければ自然着物も汚れないのですから、僅か二疊の勝手でも、優に七人の賄ゐが出來るのです。

こんな建築法なら、別に餘分な費用も懸らず。服裝改良も俄かに不自然な眞似をせんで



も濟むのです。一体日本人は無精で不斷着と仕業着を分けてないのは、衞生上から云つても、働らくことから云つても、不活潑と不健全の缺點は遁れられぬ。

それから盜難除の用意のしてあるのは、凡て戸の外の閾には、身の厚い孟宗竹を細く裂いて、嚴重に針で打ち付てあるので、而うして戸の内方には、一枚毎に錠

を付けてあるから、何んなに外からコヂ開けやうとしても、決して明かないのです。丁度この家が出來上つて引越したばかりに、强盜が入りかけましたが、餘程鋭い刄物でコヂ開けやうとしたけれど、怎うしても開かなかつたので、到頭近所が二三軒荒らされたのです。克く閾の外側へ鐵の細物を打ち付けて置くですが、鐵は可けません。間へ刄物を入れてグイとコヂッたなら、釘も一緒に拔けて了ひましよが、竹なら弱いから折れるばかりで、打ち付けた針は決して拔けないから、戸は錠が少しぐらゐ不完全であつても外れる憂ひは無いのです。

又座敷と應接間を全然離したのは、若し來客中に差合ひのあつた時、互ひに知れないまでの用意で、もう一つ書齋を付けたいと思つてるのです。京都の智恩院に利久の考案で出來た茶室があるさうですが、四疊半の内に水屋と書齋が出來てゐると云ふから、其の圖を取寄せて見たいと思ひます。

私の盆栽はお金を出して求めたのでも無ければ、又實るのでも無いから、何が流行るとか、流行らないとか云ふやうな、世間の流行に依つて嗜むのでは無く、ただ自然を愛するのであつて、何んな雜木でも構はず。自分が可いと思ふのを栽培するのです。假令ば避暑に出掛けた時とか、其の他の旅行の折に、ボンヤリ宿屋の二階に籠つてゐるのが嫌ひで、日光や鹽原のやうな處なら、始終近くの山へ運動に出掛けるので、其處で是れは面白い木だ。如何にも自然であると感じた時に、松なり杉なり、又は其の他の木の芽生へを引拔いて來て、感じた木に擬へて栽培するのです。で、初めの中はよく枯らしましたが、此頃は大分心得て來て、よくよくで無ければ容易に枯らさなく成りました。

然し、なか〳〵六ケ敷いもので、本當に自然の木ぶりで、掌中で觀られるほどのものに仕立てやうと云ふには、隨分技術と研究を要するもので、木としては實に殘酷なものです

歯牙の養生

歯科醫　楢崎東陽

國民體育の忽にすべからずとは當今の通説也然るに未だ歯牙養生の必要を説かざるは樹木の枝葉を説きて莖根を解かざる者の如し抑も身體の發育健康を計らんと欲せば須らく適當の運動と食物の撰擇等にあり而して其食物や必ず歯牙の働力により充分に咀嚼せざる可からず然れども近來食物の變化と與に歯牙軟弱化し爲に健康を損るもの日に多きを見るに至る實に國家の爲め憂へざる可けんや、余や爰に感ずる所あり歯牙養生に於ける二三の注意を通俗簡易に綴りて世の諸氏に頒たんとす

▲乳歯の保護　乳歯は生後大畧七八ヶ月より凡そ三十ヶ月にして調ひ又六歳頃より十二三歳迄に永久歯との交換を終るべき者なり。されど其乳歯の此が期間に一度齲歯に罹れば、大いに身體の發育を妨たげ。爲めに種々の疾患を誘起するのみならず。交換期に至るも乳歯腐蝕の爲め永久歯をして正しき位置に發生せしむる事能はず。爲めに亂排せしむる憂あり。若し永久歯亂排すれば。天賦の美を傷ふ而已ならず。掃除を充分になす事能はざるが故に。永久歯も隨て齲歯等に罹り易し。故に乳歯の時に於て能く注意し。掃除を怠らず傍ら時々歯科醫の診察を請け。若し齲歯あらば速かに治療を加へ。又永久歯との交換期迫れば。相當の手術を受け、終生の不幸を避しむるは。此れ親たるの義務にして。日常能く注意せずんばあるべからず。

▲齲歯の事　齲歯は社會生活程度の高まると步調を同ふする者の如く。近來益々此病の多きを見るに至る。然に世人往々此れを看るに。局處の疾患なりとして。意に留めず。輕々看過するの習慣あり。何ぞ謬れるの甚しきや。抑も齲歯は胃腸直接の關係物にして。隨て身體の健康を害し。或は腦を惱し。大いに壽命を妨るの疾患なり。誠に怖ざる可らず。依て此れが豫防法は種々ありと雖も先づ掃除の完全と。食物の撰擇等を以

て主なる者とす。掃除は毎朝起床後は勿論毎食後、歯刷子を精密に使用し、歯間に食物の殘留なからしむるにあり。此れ第一の要にして。第二は食物中過度の硬固物の咀嚼を避け。以て琺瑯質を損せざらしむるにあり。然れとも吾人の食物中には。啻に柔軟なる物質而已にして。充分なる營養を得ものに非らず。故に硬固の食物も滋養ある物は時として食すべきの必用なきにあらず。されば能く過度の硬固物質而已を避け、能く注意して用ゆれば。琺瑯質を損せざる而已ならず。歯牙、並に歯牙を抱圍せる骨をして。健固ならしむるの効力あり。若し又不幸にして齲歯發生せる時は、速かに歯科醫に就き相當の治療を請ざるべからず。齲歯の爲に續發する恐べき疾患は實に多々あり。世人宜しく豫じめ防ぎて大事に及ばざる樣注意すべし。

▲歯石掃除　歯石は唾液中の一物質の沈澱物なるが故に。如何に常に歯刷子にて清潔に掃除を爲す人と雖。歯石は必ず附着する者なり。而して其歯石の害たる啻に口内の汚臭に止まらずして。歯齦を充血或は退縮せしめ。自然に歯牙をして動搖せしむ。又歯石の爲に一の誘發病あり。此の病は齦緣より膿を漏し。同じく漸次動搖せしめ。歯牙脱落の憂を速ならしむ。故に歯石除去は必ず一年二回以上歯科醫に就きて爲さゞる可からず　歯石除去は前述の害を豫防する而已ならず。歯牙全體の檢査を受ると同くして。未だ自覺せざる疾患潜伏するも。醫師の注意を受れば初期に治療を爲す事を得が故に。大事に及ばずして終生の幸福を得に至る、依て歯石除去の事は何人も能く記臆して。必ず實行すべき要務たり

▲歯刷子と歯磨粉　歯刷子は毛製と護謨製の二種あれとも、必らず毛製を用べし。毛製中又た種々の品あるも。毛は軟硬中性を撰び。總て品質の善良なる物を使用すべし。其使用法は少量の歯磨粉を附け。外側は總て歯の縱に用ひ。臼歯の內側は縱に用る事能はざるが故に横に用ひ、能く內外並に咀嚼面を注意して使用すべし。彼の日本流の房楊子は決して使用すべからず。又た歯磨粉は充分注意せずんば在る可からず。粗惡の

品を用ゆる時は歯牙を損する事甚だし。若し歯磨粉の撰定に困しまば。歯科醫に指教を受るか。或は調製を需むるか。孰にしても充分撰擇すべき事肝要なり。終に歯は一言す世人多く歯は老年に向へば脱落するを正當の如く思慮する者多し。此れ全く誤解の甚しきものにして。人生百年の壽を保てば百年の歯を保つ者にして。歯牙の生に先んじて脱落するは。保護の當を得ざる結果也。所謂脱落を自ら需むる者にして。此れ口に壽を唱へ。行に長壽の道を守らざると異らざる也。何ぞ其れ奇怪の至りならずや。造物者は命を與へつゝ器を奪ふて快樂を妨ぐるが如き無情の者に非らず。世人宜しく一考して可なり。

（完）

庖厨讀本（二）

梅軒主人

庖厨讀本は一歩を進めて益々庖厨の秘訣に切り込んで來る。先づ始めに現はれるものは

▲肉の鋤燒

に就いてである。前回に肉は蛋白質の塊であるから、其の大きな片を、突然に熱い汁に投り込んで、急に又これを取り出すが好いと、述べたが、肉の鋤燒に至ると、大分、趣の違ふ點がある。

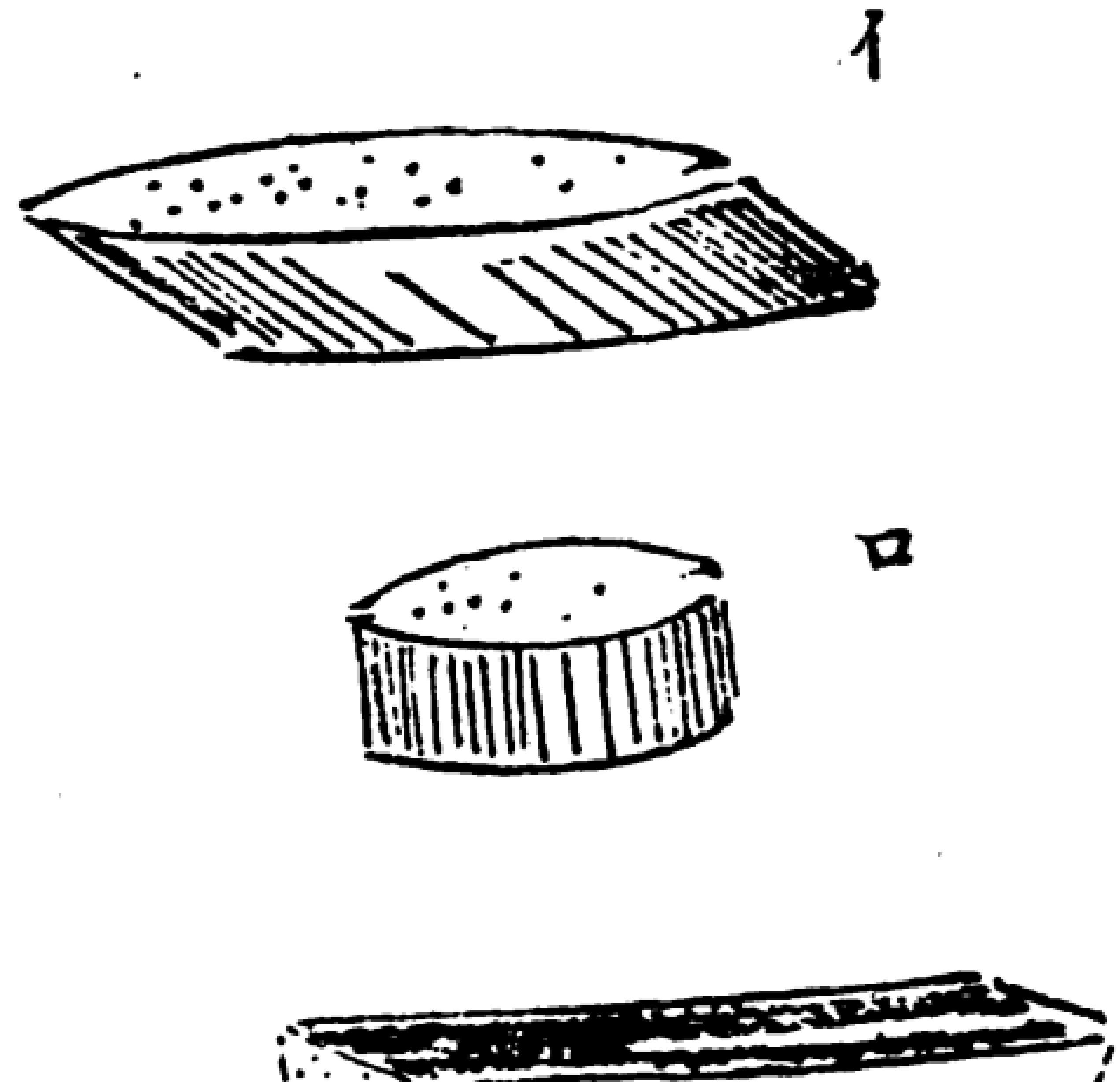
第一、鋤燒には、肉を小い片に切る、即ち、成るべく薄扁い片に切る。それは何故かといふに、凡て鋤燒の如き、謂はゆる鍋物は、即席に煮上げて、これを口にするを目的とするから、此の様に切らなければ早速の間に合はないのである。

すると、此の様に薄くては。前回にも述べた通り、其の内部の滋味が、悉り洩れて出はすまいかとの疑があらう。そこで、鋤燒は、出來るだけ、迅速に煮上がるように工夫してある。それには、其の肉が薄く切つてあるのも、それがためであるが、其の汁を豫め充分に熱くしてあるのである。汁が充分に熱くあれば、急に肉片を投り込んで、急に其の熱が内部へ透される。すると、縦令、肉片が薄くても、滋味が抜け出る暇がない。

そうして其の肉を裏返して全体に色が褐に變はつた所を見定めて、直ちにこれを食する。そうすると、丁度外部一面に、薄い蛋白質の皮が出來て、滋味の出るを防ぎ、それに内部へは、熱が遺憾なく通つて、決して不熟の部分が出來ないのである。

其の汁を豫め充分に熱くするには、肉の脂を先づ鍋の上に熔かして、脂の汁を造るのである。此の脂汁が段段に沸騰すれば、其の熱さが、尋常の水の沸騰したものよりも遙に高い。若しも其の飛汁が、我々の手にでも、振りかゝつたならば、尋常の沸湯よりも恐ろしく熱くて、忽ちの間に爛れて了ふことは請合である。何でも、此のような熱い汁に、肉を投り込むのだから、瞬く間に、充分の熱が肉の内部へ透き通るのである。鋤焼の場合に、肉を始めから鍋に並つて、それからコトコトと煮る人が往々見るようだ。それでは、鋤焼とはいはれない、尋常の鍋で煮ると少しも變らない。尋常の煮方でも、肉の時は全くそうしてはならぬことは、前回に縷々と述べて置いた。充分に脂汁を熱くし猶それに醤油砂糖などの香味を加へて、沸騰して居る所へ、急に肉を投じてこそ旨く食べられるのである。

そこで葱や蒟蒻などは何時これを入れて好いか。これは、肉とは違つて、始から鍋に入れるが宜しい。始めに脂を熔かすときに、段々にこれを入れて、詰まり、肉よりも早く入れ、晩く上げて、長い間これを煮るのである。總体、植物質は多く纖維が剛いから、長く煮る程柔かになり、それに肉のように蛋白質が著しくないから、煮るがために凝まることはない。だから、成るべく長く煮るが好いが、たゞ鋤焼には、又成るべく早く煮えるようにするを目的とするから、葱の如きは、精々これを薄く斜に切るが宜しい。(上圖イ)又眞直



に輪切(上圖ロ)にするも、早く煮えるが、餘り小さくて食べるに面倒である。又長く切つて、更に縦に裂くのも(上圖ハ)あるが、凡て纖維は、其の縦の面を、縦令多く表はすも、左程の効果あるものではなくて、其の横の面、即ち切り口を、成るべく、廣く表はした方が、熱もよく通り、香味も亦よく浸み込むことが出來る、何せといふに、纖維といふものは、極々細い長い管が、幾十幾百となく集まりて、束となつて居るものであるから、其の切り口を、廣く表はせば、それだけ物の浸入に都合が宜しいのである。

▲魚の炙り燒き

魚の炙り燒とは、即ち火の上に載せて、直接に火熱を與へることである。世の人は何故に、煮たものばかりを喜ばずして、燒いたものをも賞味するのであらうか。それは燒物は、亦格別の所があるからと、答へるであらう。其の格別の所とは、何であらうか。煮ては得られない一種の美味のある所をいふのであらう。其の美味とは、寧ろ芳しい香をいふのである。蛋白質ばかりではなく、多くの物は、これを適度に炙り燒けば、一種の芳しい物に變化する。水分が減じて、幾分かは硬くなるが、其の硬くなる所に、一種の芳しさが現はれて來る。

炙り燒の長所は、此れのみに止らない。其の内部にある滋味が全く逃げ去ることのないのが、煮物よりも優れたる點である。煮物になると、どうしても多少其の滋味が汁の中へ溶け出して逃げる憂がある、これには少しも其の心配が要らない。

其の燒方は、決して急いでは、好くないので、若しも強い火の上に近く載せるならば、忽ちに黒焦になつて、而かも其の内部は生々しくて、却つて不快なる味がする、何故そうであるかといふに、火熱が急に強く其の面に觸るれば、蛋白質の薄皮を生ずるよりも、寧ろ燃えて了つて、炭となる、即ち其の品の中にある酸素、水素が皆去つて跡に炭素が遺るから、黒焦となるのである。炭化するといふは即ち此の事である。黒焦になれば、食べて苦いといふが、實に炭素が苦いからである。

焼方には、何も、煮方のように、表面に蛋白質の薄皮を造る必要がない。即ち内部の滋味を失ふ憂がないからである。されば何も急に、これを熱する必要もないから、餘り強くない火で、徐々とこれを炙る方が、宜しいのである。

此の炙り方には、火熱の力が、全体に平等に、渉るようにすれば、益々好い、在來の遣方では、鐵網を掛けて、其の上に品物を載せるが、それでは、下の面ばかりが、焼けて、上の面には熱が及ばない、そこで裏返すか、それでは、今度は前に熱せられた面が冷めて了ふので、どうせ熱が、全体に平等には渉らない。

そこで、我々の望む所は、西洋流である。其れは、焜爐の構造から更めて、炭火を上と下との二個所に入れて、其の間に品物を差入れるのである。日本流でも、豆屋が豆を煎る所を見ると、矢張り其の樣になつて居る。裏返すために多くの時を費し、又それで屢々肉を破すこともある。何にしても、早く改良せねばならぬ。西洋料理には、其の焜爐を用ふるが、日本料理にも、これを應用すれば、好いので、態々これを製造する必要もない。

よく人がすることで、甘藷を爐の灰の中に埋めて、焼くと、實に程好く出來るものであるが、丁度それは、今述べた理窟に適つて居る。其の灰全体が熱せられるから、火の力が甘藷の全体に行き渉り、それに灰が遮るから、火が直接に觸れないで、都合よく徐々に炙ると同じようになる。焼芋屋が、大鍋の上に、蓋を被せて、焼くのも、亦幾分か宜しい、即ち蓋のために、火熱が、鍋の中全体に籠つて、甘藷の上面をも同時に熱することが出來るからである。併しこれを更めて、火を上下にすれば、もつと時間を減じて、もつと味よくなるでもあらうに。

こゝに附けていふことがある。そは蒸すことである。蒸すことは、實に適當な方法で、其の物の滋味を失ふことは毛頭これなく、それに水分を失うて硬くなることもない。焼くように、芳しくはならないが、併し柔かに美味を得るは、亦中々に棄て難い所である。甘藷

や餅米ばかりに、限つたことはない、肉も魚も何も、此の蒸すといふ方法を應用すれば、我日本流の料理法に一生面を開くであらうが、如何にや。

▲油揚げ

油揚げ即ち俗に天麩羅といふが、抑もこれは、どんな理窟があつて、多くの人が、賞味するのであらうか。狸坊主でも鼠の油揚には、マンマと釣られて獵夫の餌となるといふ話もあるが、何がさて餘程旨いものには相違ない。何が故に、それ程旨いのであらうか。油其の物が我々の口に適ふからでもあらうが、前にも述べた通り、油の沸騰熱は水のよりも餘程高いといふことを忘れてはならぬ。熱の高いものは、それだけ煮物を柔かにする力がある。實に油で煮たものは、尋常よりも甚だ柔かにされて了ふ。魚にせよ、甘藷にせよ牛蒡の如き皆柔かにせられる。たとひ、それが冷めて後に、復硬くなることがあるとしても、一旦柔かにされた爲に、外から與へた香味が充分に浸み込んで、確かに旨い味となるのである。

油には、牛の脂でも豕の脂でも、將た又菜種の油でも、胡麻の油でも、何れも大した違はない、勿論風味に多少の差別があるとしても、これを柔かにする原理に至つては、異なる所がない。最上の料理にはオリーヴの油を賞用するのである。そは料理上美しく上品であるものである。

揚げる時には、よく材料の水氣を取り去らねければならぬ、といふが、それにも一應の理がある。水は油よりも其の沸騰熱が低いものであるから、若し水の附いたまゝ沸騰せる油の中に投ずれば、其の水は忽ち蒸氣に化して、烈しく泡となりて跳び出だすこともあらうし、又其の蒸氣が材料を取り圍んで、油をして直接に材料に觸れさせないから、其の材料が充分に煮られて柔かになることが出來なくなる。

こゝに一つ言ひ添ふべきことがある。揚物に醤油を浸すに、滴當な時のあるを忘れてはならぬ。知らぬ者は、これを皿に盛つて、然る後に醤油を注けるが、これは大變に迂濶なことである。總て物は温められてある。

間は、其の物の分子が幾分、擴つて疎になつて居る。此の時には醬油を注せば、容易に其の分子の間を透して、充分に深く浸み込むことが出來る。若しも冷めて了へば、分子は再び引き締つて醬油などの浸込む餘地がなくなる、だから油揚には其の未だ冷めない間に、即ちお膳に上せない前に、味を付けることが大切である、何も油揚にばかり限らない、尋常の炙り燒にも、此も通りすれば好い、彼の燒直しに醬油を注すとは、即ち此の理窟に適つて居ることである。

處女時代の經驗

水原翠香

むかしの家庭教育

ては予翠香が處女たりし昔時實歷實行し來りし事にて我身及他の上にも見聞して感ずる處を其儘に書綴れるにて一も虛談作事に非ず讀者其心して味ひ給はゞば或は益する處有らむ

先務朝早起するを幼少より習慣とすべし既に習慣となれば少々夜更しする事有ても定刻に及べば必自然と眼の醒るもの也然るが故に遲起も又癖つく時は餘程自己勉勵するに非ざるよりは他の呼起す位にては直り難し時是金なる世中に早起と朝寢と人一代に付幾何の損得となるか恐るべく愼むべし

翠香が父母の家にても隨分早起せしかとも嫁したる家は格別にて舅姑は毎日七ッ起して(今の四時なり)長時間の看經せらるゝ事一日も怠りなし故に其木魚の音を聞ては全家蹶起するを例とし天明燈を消す頃に朝飯を喫するの定なりき故に奴婢等は帚を採ながら睡たさに堪ずして倒れんとし雜巾にて椽を拭つゝ鼾聲を發する等毎度の事なりしさる替りに夜は初更(今の八時)より寢に就を定とし稀客など有て十時にも及べば眠らざる者有事なし我夫はかゝる習慣にも拘はらず性質眠たからぬ人にて二時間(今の四時間)就眠すれば十分也とし毎夜十二時比迄讀書に耽らるゝを我も又文學を好めば夫を師として學ぶを此上なき樂事と思ひて夜の更る

を厭はず斯て枕に就かとすれば早木魚の音響きて夫に揺起されて驚き醒手水つかひて舅姑が看經の脊に侍りて共に讀經するに普門品千手陀羅尼の如きは既に暗誦したれども何を誦するか我ながら知覺なき迄睡たくて寢語の如しと夫に笑はるゝ事毎度なりし此事十年一日處に非ず殆二十年に及びしかば舅姑を送りて後も習慣と成果て日の長短に拘はらず朝は必四時頃に目醒て閑居のゝちは家族等の迷惑を思ひて再眠する事はあれと例刻に一度醒ざる事は非ず以て習慣のいちじるきを知るに足れり又當時は女學校もなく女兒には女大學今川より外讀書なく僅に商買往來千字文を知るを以卒業とする世なりしがかゝる文にても綴り得るは全く他の寢る時間を眠らずして讀書し且夫に學びたる結果なり以て時是金なる言を證すべし

既に起出ては母に厄介をかけず自ら髮形を整へ衣服を正しく着て學校に登り其日の課業を修し家に歸りては復修を怠らず試驗毎に優等ならむ事を願ふべし學校の外に遊藝にても何にても學はしめむとすれば學校の課業に寸暇なし學ぶ能はずと云未然り豈夫然らむや贅言を喋り友と戯ぶるゝ時間を省くは一二の專門家へ通學する暇なき事有べからず通ふ路の遠きに非ずば決して爲能はざる事に非ざるべし隔たる人女兒の言を信じて欺かるゝ勿れ然りと雖も又妙齡の頃は身体の發育する最中なるに餘りに勉強にのみ傾きても體育の爲に宜からずされば平日は怠らず勉勵し日曜其他の休日には晴天ならば何方へか遊歩し雨天ならば室内にて友を集へて遊戯し快活に浩然の氣を養はざるべからず然るを休日に迄宅に籠りて勉強するは決して宜き事に非ざる也學事は何に拘らず唯婦女としての心得迄に學ぶとならば中學位に止めて差支なし若又拔出て人に優らむ事を希はゞ學校は學校として別に專門家に附て研究爲べき也然らざれば成就する物に非ず如何となれば學校は多數の生徒を同一に敎授するなれば最下等の者の學力を以標準とせざるべからず一學期間同事をのみ繰返して敏者は疾に暗記し了ても鈍者に附合て月日を送るは迂遠限りならずや專門家なれば各自力の限り敏なれば衆

を超ても進むべく又學校の讀本は何にても皆切拔文にて全部を知る能はず專門家なれば一部通讀し得らるべし學事の利益は專門家の學校に勝れる尚々也然と雖專門家にのみ依て學校に入らざれば斯道を以て世に立に及びて甚損あり爰に甲乙の學士在りとせんに甲は大學の卒業生にて學者の肩書を有せるが故に其學力は普通なれども三十圓に聘せられ乙の實力は甲に優れる事遙なるも大學に入らず肩がきのなきが爲に十五圓より上の口なしと云男子女子共に學校は資格をつくる爲に卒業せざるべからず實力は專門にあらざれば得がたしされば何藝にても是と定めたる以上は專門に入て學ぶべき也實に學藝のみならず世上の事皆な斯の如しと知るべし

凡何藝にても成熟するは二十歲以上にあり拔群の天才はいざ知らず普通十五六歲迄は只父母の命に依て學べとも無趣味にして所謂友そはへ也人により遲速あれど大概十七八歲に及べば自然と欲附て琢磨ひの心發る物なり友勢にて虛心のうちに初級手はときの事終り有れは此時恰も高等に入て其學藝の趣味も漸々と解し得て面白くなり勉强すれば爲る丈めき〳〵と長大足の進歩をなし今後の一年は幼時の五年にも增るべし男兒は此好期を逸せず學ぶが故に順次に進みて大學迄も卒業し得らるれど女兒は多く十七八を以嫁季とし廿を過ては緣遠しと父母の心焦燥て嫁せしむるが故に可惜成熟季を失ひ旣に一家の妻と成ては假令其夫が許して學ばしむるも家政といふ重任あれば處女時代の如く專らなる能はず況や嬰兒を生じては學事は夫限と成卒るされば小學校時代には男兒に頑惡者多くして敎員の言に從はず女兒は逆に柔順なれば敏者の成績よく末賴敷みゆれども十七八にて退學すれば男兒は衝と乘越て遙に高く進む也是即日本婦女の男子に劣る由故也女子とても男子に比しく廿二三もしくは四五迄も一意專心に學ぶ事を得せしめば然ばかり劣る物ならむや其證は下等女子の藝人を見よ彼等は夫に配し子持となりても活計の必用あれば決して伎藝は廢する事なく彌勉勵するが故に終に各々一家をなし父母家族をも養ふに至る中にも天

才ある者は名人とも成者ありされば良家の女兒も又其嫁期を急がずして學ばせよ近來早婚の弊を云ふ者漸々多く聞ゆるは國家の爲に賀すべき也女子廿にしてかひざしす故あれば廿三年にして嫁すと數千年の古すら孔子はいひ置けむまとに金言なる哉

友は自己より優れるを撰び誰にても譽る人に交るべし藝は優るとも惡評ある人は敬して遠ざかるべし親しめば我も又共に惡評を得る事あり又友と何方に遊ぶ共夕暮に及ばゞ必歸宅し猥りに他家に宿泊すべからず是女兒の男兒と異なれる慣也 戯れにも猥がま敷事をいはず行はず又人の批評すべからず心は高尚に身は低くもちて假にも傲慢なる態度を爲べからず

人に向ひて物をいふに虫の鳴く如き小聲にて聽取難く問反せば笑ひて答へず又は前後の順序なく突然に獨合點の言をいひて聞人要領を得ず爲に差錯を生ずる事有是等とかく世なれぬ女兒の通弊也何事に拘はらず問ふべき事答ふべき事共に明瞭にいひて其餘は猥りに多言せず又唱歌をうたひ祝文などの朗讀には音聲の爽やかにして文章句切のよくわかるを宜とす其他には高聲の必用なし然るをいふべき要用は口中に訥言て聽者の耳を煩はす癖に動すれば大聲を出して喧噪く騒ぎ廻るは女兒輩の惡癖なり

侍女下婢を酷く役べからず又友の如く狎しむべからず女兒はとかく下婢を談友として人の批評陰言をいひたがる癖あり是よりして家内に風波發る事多し殊に愼むべきは姪の噂也父母にだも告口すべからず況や下婢に於てをや

女兒たる者は普通學の外に何か必一の職業と成べき伎藝を學ばざるべからず其の藝は各々の撰に任すべし何にても其伎を以多少の金錢を得るを目的とす職業などと賤しき事の樣に思ふは大なる心得違也文筆に達し和歌茶道挿花等に秀でゝ師匠と仰がるゝ等は高尚にして何の卑き事かある就中繪畫は名手となれば後世迄も名を殘し其收入も他伎に増る處なりされど是は天稟ならでは得難き伎也其他刺繡造花等も見苦しからぬ職なるべし假令富貴の家に生れ又豪家に嫁すとも蒼海變じ

て田となる世中何時いかなる出來事の爲に零落爲ましきにも非ずよしやさる不運はなしとても日本は女子に財產を附る父稀なれば富豪の家にても其夫及び子孫又家令の心次第にて思ひの外門外漢の想像すべからざる不自由する事あり　名は憚あれども現在其人在也　然る時に自己の貯金あらば大に都合よきもの也處女の頃より心掛ざれば年たけては故障多くて出來兼るもの也

近頃は西洋主義にて若き男女の交際を憚らねども餘程注意周到ならざれば動すれば人の嫌疑に觸やすし談話するには成べく對座とならぬ樣に誰なりとも壹人傍に在らしめよ然もなし難き時には決して其の席を〆切る擧勿かれ男子への文通は必其母姉妹又妻あらば勿論細君に宛て又獨身にて外に女の宛べき人なくばハガキか開封に限るべし然るを遊步同行するに手を携へ身を摺つけて私語又人目を偸みて文通し或は變名を表書する等却て他の眼に認めて誰かは訝しと疑はざらむ惣じて男女間の事は人の心を動かして何の關係なき者にても面白半分の傍妬にていひはやすが人情の習慣也一物なくして影はさゝず火氣なき處に烟は立たず何か少しにても種子あればこそ針小棒大にもいひ做すなれ假令心中に疚しき事なくとも他の疑を惹出さぬ樣注意の上にも注意して文通も會見も餘り茂々すべからず一度嫌疑を受ぬれば何心なくいふ事爲す事皆其方へ邪推せられて尾鰭を添へて人はいふ也爰に心のつかざるは其智の不足より若年の血氣逆上して物事に偏り沈むが故のみ既に爰に及びては何といはるゝとも辨解の言なかるべし日本にては男女の交際は尙はやし愼て爲ざるにしかず

西洋にては男女交際して其の意氣相投するを撰び女兒自ら配偶を定むとかや此風日本にも吹渡りてより生意氣女子を煽動して自由結婚などゝいひ榮して大に其品行を亂り我國古有の婦德貞淑を弊履視するに至れるは唯歎息の外あらず西洋はともかくもあれ我は我國の美風を失ふべからず女兒いかに聰明の生質なりとも生年僅に十九廿にて世態に通曉すべくも非ねば末始終を洞察する程の見識なきは其筈也唯眼前に男子の容貌風采

の美又其談話應對容の快活なるに惑溺して漫に心身を許し一生の大事を誤つ試に思へ父母は多年社會の經驗を積て其思慮智識共に我に優れるのみならず慈愛と云ふ一種他人の到底及ぶ能はざる實意有りて如何なる場合にも女兒の爲惡かれとは思ふ者に非ず此深切極まる父母を蔑にして表面より其心底の計り難き男子の甘言につく呼危い哉されば若意中の人あらば醜行だにせずば敢て包み蔽さず父母に打わけて其是非を詢ひたとひ父母のみる處我意に適はずとも必然るべき理由有、るべしと思ひて其計る處に從ひて配偶を定むべき也かくても猶不幸ならば天也命也と諦むべきのみ輕跳自ら許して淫奔野合の譏を受け女子の道德を傷けては生涯拭ふべからず僥倖にして時運に乘し一端瑠輿にのる者なきにしも非ねど十中八九迄は終に零落して又浮ぶ瀨なき汚底に沈沒するにも及ぶべし女學生批難の聲高き今日豈愼み恐れざるべけんや（次號には新婦時代の心得を述ぶべし）

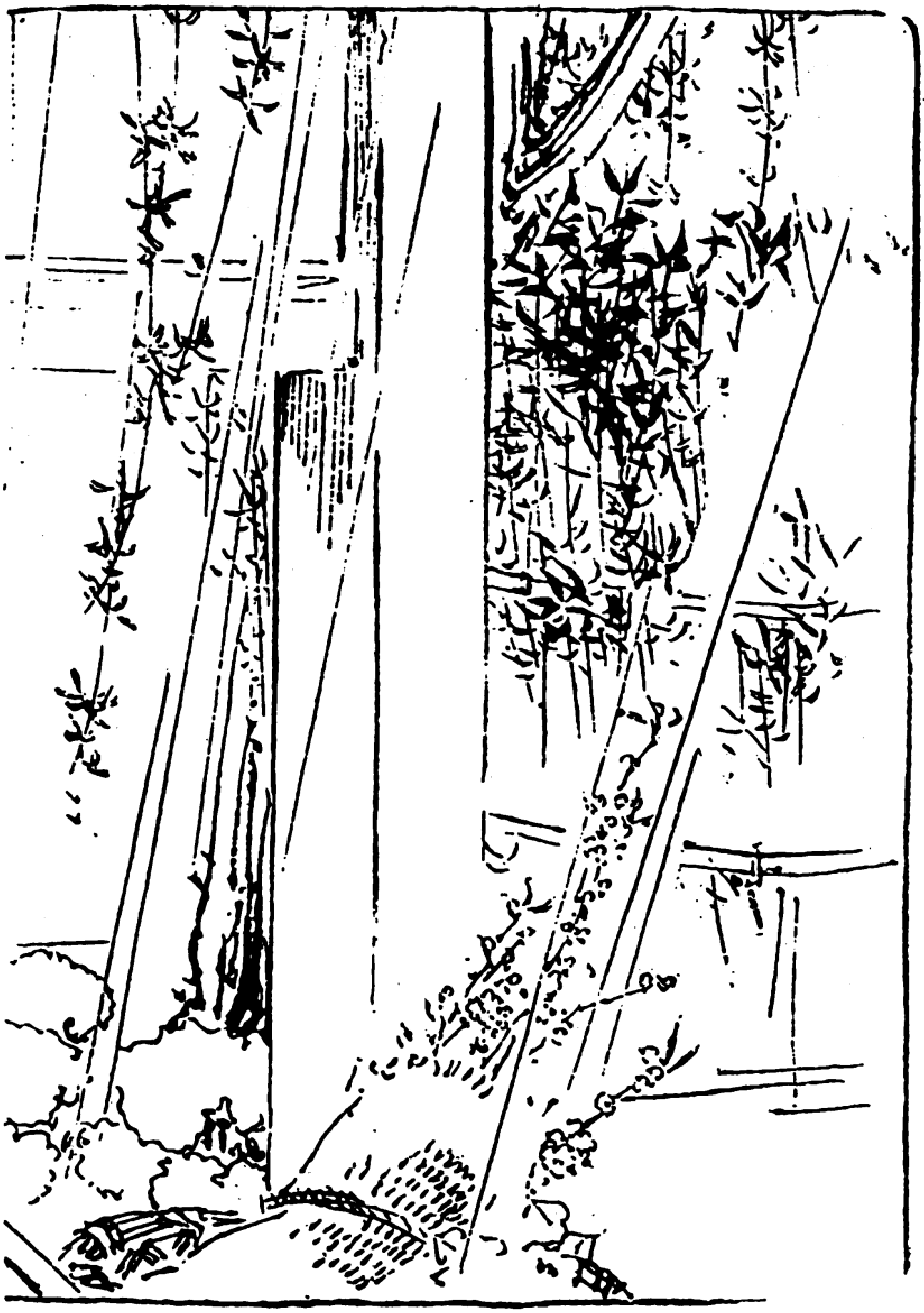
家政小言

飯事教育

若溪女史

明治の女子教育は何と申してもまだ御姬樣教育と申さねばなりません、飯事教育といはねばなりません、教育の精神はそうでなくても、實際の成績を調べて見れば大抵皆飯事教育で畢ッてをります、つまり今日の教育は精神教育でなくて形式教育です何事も唯形式ばかりで、實がないのです、表面に至つて立派でありますが實地の役には容易に立ちません。一つは學校が御勤主義になッてをりますからでせう。學問はよく御出來になりますが、世帶の事にはごく疎い、英語は御達者である、理化の理屈はうまいけれども臺所でお菜が一つ滿足に拵へません、洗濯が一つ出來ません、歌は御詠みになる文章もよく出來ますが、雨降あげくに足駄の仕末が出來ません、幸に華族とか、財産家とかへ生

れた人は萬事人がして呉れますからぼろが出ませんけれとも、若しそんな人が一家を持つとすれば、天井には蜘の巣だらけ、板敷の隅には紙屑や衣類の汚れ物が堆高くなッて、戸棚の奥にはいつも食物の腐敗したものから蛆虫が湧いて臭氣鼻を衝くといふやうな有様、若しそんな人が家に居れば家を腐らし他家へ行けば他家を倒して仕舞ます。いかに容貌が奇麗でも、學問が出來ても、これは女の穀つぶしでなくて家つぶしでせう。姫様教育、形式教育の弊害はこれですから恐ろしい。



教育の精神は決してそんなものではありませんが形式に流れた結果はどうかするとそんなのを多く出します國家の大害になります、一

体女と申すものは、志は飽くまでも立派でなければなりませんが、平常行ふ事はとこまでも鄙近でなければ家が治まつて行きません、鄙しい事に多能でなければ今日の用事に差支へます、ですから六ヶ敷裁縫を教へるよりかまず襤褸ぎれでも接き合せる事が肝腎、結構な割烹を學ばせるよりか、有觸た材料でお總菜をうまく拵らへる氣轉が肝腎・けれどもそういふ事は學校や書物で學んだ智慧では中々出來ません、多年の習慣とその人の忠實な心掛が働らかねばいけません、これは専ら母親の躾けで千萬遍の口の教へや机の上の學問よりは一寸の誠の教へでなければなりません、つまり實踐躬行とはこの事が眞實な母親が



身を手本として敎へる力一つで出來るのです。兎角女の敎育は生きた家庭敎育でなければ實際の役に立ちません、こう申せば女は鄙近な事にばかり心を用ゐて高尙な事や優美な事や、やさしい、うるはしい事を餘所にして仕舞ふやに聞へますが、決してそうではありません。まづ鄙近な事、實際の事に心を用ゐてそれから一身の獨立が出來るやうになッたらば、隨分高尙な事にも優雅な事にも心をひそめて、その人品を高くするがよろしい、譬へば家を建るにしても土臺石からして極めてかゝらねば、家は堅固に建ちません、また土臺の極まらぬ所ろへ、材木を組み立てゝ大廈を築きあげた所ろで直ぐと風に吹き倒されて仕舞ふのと同じ事で、實際の獨立が出來ない内の高尙な考や、優美な身づくろいは、つまり空中樓閣と同樣で、吹けば飛ぶやうなもので一向に値打も何もあつたものでありません。ですから、何處までも一身の獨立が實際に出來るやうになつた上での事、今日のやうな姫樣敎育や形式敎育はそれが覺束ないのであります。

身だしみより家だしなみ

家室、身の廻りを清潔にするは女の身だしなみの一つでありまして、そこに心を注ぐと注がざるとは一見して分るものでありますから、不斷に主婦たるものは身を嗜みて置かねばなりません、家室、身の廻りを清潔にするは第一仕事に秩序を立てゝ毎日或は毎週と時を極めてやらなければ眞實ではありません。西洋の諺にも撓まざる勤勞は礦を變じて黃金と爲すと申すごとく物事は斷へず勤めねば實効があがりません、決して放念してはなりません、若し家を持つ人が半月放心して掃除を怠ッたらばどうでありませう。世間に往々ある例ですが、第一雪隱へ行つて見れば兩便は盛越して臭氣鼻を衝き壁は壞れて窓の障子は破れ、棚の隅には鼠の糞と芥とが山をなし、浴室は汚れて天井には蜘蛛の巣を張り、板敷の隅には紙屑や脱捨の衣類が堆く、いかにも穢くて見も當られず鼻持もならない有樣、こんな家に限ッて必ず押入の片隅には風呂敷と細君の褌の

汚れたのが一つに丸めて突込でありその又片隅には子供の肌着と古足袋とが取組で居り、勝手の戸棚には醤油が溢れて食物の腐ッたものから黴が生へたり、取置の酢は濁ッてその底には鼠の尿と芥とがへばり付、又佛壇を明けて見れば位牌は轉げて線香立は横になり、偶々供へた御飯は鼠が喰ひ散らして、手向の花は枯れて、花立の水から蛆が生くやうになり、それから臺所はと覗いて見れば菜の葉と漬物の腐ッたのが束ねてあり、庖丁は柄がなくて爼板には足がなく、手桶の輪は切れて水が洩り、杓子の底は抜て用を爲さず、釜の底には飯の焦れがくつ付た儘洗はずに放してあり、それから土間を見れば水が溜りて田の泥ぬたやうになり、下駄は跛で御負に向ふ鼻緒が切れて且つ歯は抜けてあり竈の肩は破れて土瓶の手がなく、疊は穢れて芥と垢とが凝りつき、臺所に水が溢れても雑巾がなくて手拭で拭き灰が溢れゝば、足にて踏つけて置くといふやうな有様で、自惰落此の上もない無性の家があります、實に一見しても慄とするほどですが、この自惰落、この無性も何から起るかといへば矢張秩序を重んじないで、家の事に放心した結果でせう、朝夕の拭掃除は勿論の事一週に一度乃至は十日に一度は必らず、押入の隅から戸棚の隅、わけても臺所の隅はよく見廻りて食物の殘物などが其儘にして無いか有るかをよく見廻ッて取片をしなければ、家の蛆はそこから湧き出すものですから時を限りて秩序を正すのは家政學上の一要件であります、殊に夏季などは庖厨の隅から蛆や小蠅が湧き出したら仕末に行けないもので、一旦湧き出すと其後度々掃除しても容易に根を絶やす事が出來ないものです、一體人間が平常住ふ處は空氣が清潔でなければなりません、空氣を清潔にするは何よりも人間攝生の要務で、健康を保護するの最上方便でありますが、その空氣の清潔はつまり居室の清潔に依るもので、家の内外に塵芥を滞らせぬやうに、濕氣の來ないやうに朝夕の掃除に心を用ゆるのが第一であります、諺にも百の病氣は不潔からといふ事があります、又古しから萬事に成功した人に不性、自惰落なものはありません

事を成す人は乾度、爲す事する事に秩序が立つて居て分厘なりとも物にぬかりがありません。（完）

春若丸

若艸のもえ出でんとする好季節に新たに生れ出でたての春若丸は御伽話の開山巖谷小波君が獨逸に行はるる御伽芝居の筋書を我國時代ものに飜案して少年世界定期増刊として出されたもので、一体この御伽芝居といふはこれまで日本に類のないものですが西洋殊に獨逸では兒童の爲めの娯樂機關として熾に行はれてゐるものだそうで筋書も仕くさもすべて無邪氣に出來てゐるとか、小波の君伯林滯在の節深くこの御伽芝居を感せられ今回これを我國の時代物に作り變へたところが御なぐさみ扨て其の筋は大守の若君春若丸といふが山賊の爲めに襲はれて山中にて種々の辛苦を嘗め仙人に救はれて芽出度家に歸るといふ話、主人公春若丸の可憐無邪氣なる大守父母の慈愛溢るゝはかりなる山賊惡婆の獰毒なる、牧童あり狂女あり眞に天來の妙想魂飛び神躍る慨あり家庭のおつかさんたるものよろしく一本を購ひその愛兒の爲めに語草となしたまわん事を

家庭衛生

一日醫者（二）

糸左近

▲月經閉止（「めぐり」の無い病）

〔原因〕身躰發育の遲い人、或は年老ゆれば、月經は勿論無い。任娠すればこれも無論止む。其の外劇しい心配をしたり、或は怒つたり、又は濕地にゐたり、又は感冒・子宮病・痔疾・肺病・胃病・子宮の不具、或は不明の原因から起る。

〔病狀〕病名の通り、あるべき筈の月經が無いのである。故に身躰が何と無く苦しく、食欲も進ます、精神も鬱々する。

〔療法〕身躰發育の遲いために無い人は、その發育を謀らんために、能く運動をなし、日光に觸れ、善い空氣を吸ひ、身体を清潔にし、心を爽快にもち、滋養の

食物を取り、程能く睡眠をすれば、自然と月經を見るやうになるものである。老人の無いのは、當り前であるから、少しも心配をするに及ばぬ、寧無い方が善からう。心配をしたり怒つたりが原因となるのは、其の心配或は怒りを馬鹿なことであると悟り、心を平々淡々春の淡雪の如くに、消えて跡方も無いやうにすれば治る。濕地に居るためになるのは、高燥の場所に移るが何よりの藥である。其の他色々の病氣からなるのは其の病氣を直せば、從つて舊に復す。妊娠の爲に見ぬのは、大いに祝すべしである。子宮の不具は、天の作り樣が悪いので、人間には仕方が無い、けれども文明開化といふものは、豪いもので、能く天爲を補ふことがあるから、婦人科醫に相談するが可い。不明の原因からなるのは、矢張前に述べたやうな養生を守り、溫坐浴刺戟脚浴(これは通常の盥に芥子入及鹽入れ湯をはり能くかき混ぜて脚を温むるなり)をしたり或は前號便秘の處でのべた藥をのんで、少しく下利さしたりすれば善い。一般に左の藥が善い。

蘆薈丁幾二瓦　泊芙蘭丁幾三瓦　白糖適宜水百瓦(半合)

右一日三回に分けて服むべし。

注意‼妊娠の疑ひある時に服んではならぬ。墮胎はせぬけれど幾分の害がある。

▲月經過度(すぎる病 めぐりの多)

[原因] これも精神感動・心臟肺臟の病・子宮病・發疹病から爲り、或は手淫房事過度入浴過度等、或は不明の原因から起る。

[病狀] 普通の月經は、平均半合或は一合までのものなれど、これより多くあつて、矢張月經閉止のやうな苦しみがある上に、頭痛眩暈などすることがある。

[療法] 精神感動が種となるのは、前と同じく氣を鎭め、心を平かにして、山水花鳥でも眺むる氣になれば善い。すべて心配或は立腹は、身体の健康をけづる乃と言つて可い。

腹 何事も横になるのは惡しけれど
この字ばかりは立たぬのがよし。

と、古人の戒められたのは、道理ありといはねばなら

ぬ。他の病氣からなるのは、其の病氣を除けば、何でも無い。次は言ひにくいことであるが、春情燃ゆるが如き時には、昔の御殿女中然たることを行ふ例が往々ある、これは甚だ惡いことであるから、若し意馬心猿我を追うて來らば、聖經とか烈女傳とかいふやうなものを讀みなさいだ。房事過度もこれに準じて惡いから、矢張この聖經的の療法が、夫婦互の爲である。入浴は善いことなれど、これは冷水洗拭を行うて、溫浴は一週に一度位にしておけば、誠に健康を助る良藥である。不明の原因からなるもの、及び一般に身躰を安靜に平臥せしめ、陰部に氷嚢を當て、腰には溫嚢をつけておくが可い。藥品としては。

機那皮四瓦(一匁余)を溫湯半合の中に入れ、更に稀鹽酸七八滴を注ぎ、十五分間煎じ、その煎じつまつただけ水を入れて、又半合とし、これに白砂糖(適宜)をまぜて、一日三度に分けてのむべし。

▲流產(六ヶ月以内に產をするのである)

〔原因〕身体を劇しく動かしたり、高い處から落ちたりするのが、大原因となる。又精神感動子宮病梅毒などより起る。さうして大抵は妊娠三ヶ月に多い。

〔病狀〕手足が大いに疲れを覺え、頭が壓へつけらるゝやうに重く、精神が鬱々し、面貌苦しみを顯はし、眠りに就き難く、食欲進まず、小便を屢々催したく、下腹重苦しく、下に垂るゝやうに覺え、腰痛み、時間を定めて產氣がつき、粘液をもらし、脈搏が速くなり子宮から出血し、產氣を發し、塊りの血と共に、胎卵を出す。

〔療法〕豫防法としては、勿論身体を安靜にし、精神を何時も快活にし、諸病を除きおかねばならぬ。かういふと、妊娠時の心得書のやうにあるけれど、心を常に美麗にするやう、或は天然の美を愛し、或は花鳥人物の畫を喜び、高尚なる詩歌など嗜くのは、善いことで、畢竟流產を防ぐ一方となる。既に流產したる曉は、同じく精神と身体とを安靜にし、平らかに臥さしめ、酸い味の冷たい飲物、消化のし易い滋養の食品を與ふ。出血には醋或は油に浸せる綿撒糸海綿或は布片

の塊りを以て揉ぎ、手を以て劇しく下腹を輪のやうに按摩し、胎兒及び後產は指を以て除き、三四回冷水を子宮に注ぐが可い。次に兩股を合せて水平に仰に臥さしめ、腹帶を以て下腹を壓迫し。左の藥を注ぐが可い。

内服藥としては、

明礬二瓦　水三百瓦

臭剝三瓦　苦丁一瓦　白糖適宜　水百瓦（半合）

右一日三回に分けて服むべし

されど、此の病氣は疎かに出來ぬものなれば、内服藥の如きは、勿論醫者の診察を受けてから貰ふが善い。

▲腦充血（腦に血が溜る病）

〔原因〕 酒類の飲み過ぎ即ち亞爾格保兒の中毒月經の閉止、精神の過勞、胃病、心臟病、肺病、熱病、日射病、劇しい咳嗽などから起る。

〔病狀〕 頭部及び顏面が紅く熱くなり、結膜充血し、瞳孔小さくなり、頭痛、耳鳴、眼から火花が出で、羞明、眠りに就き難く、或は反對に眠りを貪り、時々眩暈を發し、甚しきは精神亂れ、譫語を言つたり、嘔吐を催ふしたりなどとする。

〔療法〕 精神過勞を避け、舟遊登山などを勸め、（乾きものに）茶酒咖啡などの興奮性飲料を禁じ、耳後に時々水蛭をつけ、頭部を冷し、寢る時は上の半身を高く起し病室は涼しく暗くし、上膊に芥子泥をぬり、温脚浴をさせ、按摩を施すが善い。其の他本病の原因となつてゐる病氣は勿論治療せねばならぬ。一般に左の藥品が善い。

硫酸苦土二十瓦　稀鹽酸一瓦　白砂糖適宜　温湯百瓦（半合）

右一日三回に分けてのむべし。

序に日射病のことも說いておかう、これは炎々たる夏の日外出したり、或はストーブなどの熱過る室にゐたりすると起るので、其の病狀は前のと畧同じいが、これは大抵倒れて了ふ。併し日射病で無くて、人事不省となり倒るゝものがあるから、日射病なるや否やの

診斷法を知つてゐねばならぬ。即ち日射病は皮膚が乾いて熱いけれど、他の病で倒れてゐるのは濕ひがあつて冷い。何となれば本病は、熱を漏すところの汗が出盡して倒れたのであるからである。

〔療法〕　は頭部は勿論身体中に冷水を注いでやれば忽ち爽快となるものである。本病にならぬ豫防法は、頭部に濕つた布片を當てゝおくか、或は時々水を飲んで汗を出すが可い。故に若しも、貴女方が、てりはたく日に外出せねばならぬ時は、處々で氷水一杯づゝお上りなさいです。決して毒にはなりませぬ。

嗚呼思ひ出せば、明治二十七八年の日清戰爭に、我が忠勇なる武夫が、百二十度の炎熱を冒し、數多度の日射病を物ともせず、四百餘州を踏み荒したるに非ずや貴女方よ徒らに深窓の下に居らるゝのみが、女性の本分では無くて、熱い時でも外に出でゝ用たしをなし玉へ、かゝる鍊習が積んでをれば、いざといふ時にも身体が堪へられます。蒼白いばかりが美人で無くて、肥太つた淺黑い色のさうして心の優しい方が、實に文明の美人であります。

▲腦貧血（腦が血が減る病）

〔原因〕　身体他部に急に血液を漏す時、例へば外傷・分娩・流產・內臟出血・痔出血などの如し。其の他生力沈衰・驚愕・恐怖或は長い間の下痢などから起る。

〔病狀〕　腦充血と反對の病なれど、其の有樣が能く似てゐる。即ち脈が速くて數多く搏ち耳が鳴り、眼から火花が出て、頭痛眩暈重きは人事を失うて卒倒することがある。慢性の者は睡眠を催ふし易く、意思が變り易く、又倦み易く、食欲進まず、手足が顫ふ。一般に皮膚が蒼白くなり、結膜、唇などの色も褪め、四肢が冷たくなる。

〔療法〕　原因を除くが何よりの必要である。失神卒倒には頭部を低く下げ、平らに臥さしめ、衣服をぬぎ、冷水を注ぎ、濃い茶或は咖啡葡萄酒を飲ましむるが可い。一般に滋養の食品を與へ、心身を安靜にしておかねばならぬ。藥品としては

沃度鐵舍利別三瓦　苦丁一瓦　水百瓦（半合）

右一日三回に分けて服む可し

注意‼此の藥を内服してゐる間は、茶を飲んではならぬ。

◆腦卒中（俗に「ちうき」といふ）

〔原因〕腦の小さき脈管が破裂して出血するのである。四十歳以上の遺傳ある者に發することが多い。又非常に精神の興奮する時力役過度酒精中毒なども ある。

〔病狀〕前徵無く卒然發するものあるけれど、大抵は前徵がある。即ち眩暈、睡氣を催ふす、記憶力が減る、惡心或は嘔吐がある、眼瞼の筋肉が麻痺れ、足が强硬などである。愈發れば其の重いのは俄かに卒倒し、隨つて神識が消え、半身不隨となり、諸感覺廢れ、呼吸は鼾の聲を帶び、大抵二十四時間内に死す。其の輕きものは神識欠乏半身不隨が漸次に來り、長い月日を病魔の床に惱ませられつゝあるのもある。今一層輕きは步行も出來、精神作用も分る程欠乏せず、唯言語不明了手足少しく顫へる位なのもある。

〔療法〕其の急に發する者には、頭部を高く起し、室内を涼しくし、窮屈な衣服を脫ぎ、頭部に氷囊を當て耳後及び顳顬には水蛭を附け、頂部には發胞膏をはり腓腸には芥子泥を塗り、左の藥を灌腸するが可い。

加爾々斯泉鹽二十瓦　微溫湯三百瓦

發作の緩らかなのには左の藥品を與ふべし。

蘆薈末一瓦半　大黃末二瓦　白糖適宜

右よくまぜて三包に分け、一日三回壹回に一包宛服むべし。

偖今回述べたる諸病は、悉く難病であるから、勿論醫者でなければ、治療が出來る筈のものでは無いか、併し急に發るのが多いから、知つてゐないと、醫者の來るまで、大切な父母や、最愛なる家族の苦しみを徒らに見物してゐることになる。其の樣な情無いことが、優しい貴女方の心に忍ばれませうか、否々々。急劇なる病は醫者の來る迄の一刹那が危急存亡命脈の關する時である。（以下續出）

育兒艸（泰西育兒法）

西洋産婆述

▲哺乳を避くべき事

婦人小兒を産めば必ずその乳にて兒を養ふは天然自然の約束なれとも、その母の躰質如何によりて又之を避くべきものありその避くべきものに數種あり。

第一は母に結核の素質ある事、即ち肺勞又は瘰癧を病む母の生みたる兒には、その母の乳を與へざるをよしとす、これその病に感染する恐あるを以てなり、今若しこれに哺乳せんか兒は直ちに母の遺傳病に苦しむことを免かれざるべし故にこの如き場合に於ては乳母に托するをよしとす。

第二には精神病の徴候ある母の乳を與ふべからず、母の性質感覺烈しくして些少の物に感動し易く、時としては我兒の容貌に顕はる、不意の變状などを見て驚ろき、或は平素通常の事にも劇動するが如き母の乳を兒に哺ますは益なくして却て大害あるものなり。斯る母の乳汁には滋養の分子少く、又或時は分量不足し、或時は性質惡しく、爲めに兒の体に障ること少からず、此の原因は多く房事を好むの風あるより來るものもあれど、その他の原因より來ること多し、就中年若くして未だ世間の事に慣れざる婦人か一朝にして他に嫁ぎ始めて兒を産むや、昨日の生娘は今日母となり、我は如何にしてその母たるの職務を盡すべきかなど憂慮するものなとは兎角に精神激動の原因となるものなり。

▲心痛より來れる乳汁の不良

年若き婦人ありて至つて健康なる兒を産みしが三週間過ぐる頃までは多分に乳出で丶兒も至極機嫌よくこれを吸ひて萬事都合よかりしもその後に至りてその兒數は恐怖し、又魘え、且つ腸の作用惡しくして大便秘結し、通ずる毎に苦痛の樣子ありて身体次第に瘠せ衰へ肉落ち骨露はれて見るも憐れなる有樣となり、乳を離せば烈しく啼き叫びて手足をもがき、やがて勞れて眠

氣を催ふすまでは徒らに憤恚を止めざりし、さて何故に斯くありしかといふに、その母の乳汁分量は不足なけれども滋養の性質至つて乏しく爲めに兒の飢を救ひ體を養ふこと能はざりしに因るものなり。こは主として母の心配より起りしものにてその始め母となりて未だ全くその職分を心得ざるに小兒を護り育つるの責を一身に引受けたるより如何にして宜しかるべきかと案じ煩らふの餘り遂にその乳汁にかゝる變常を來したるなり、それより止むを得ず乳汁を抱へてその乳を飲ませければ爾來啼き叫ぶ事止みて快く安眠する事を得隨つて肉づき健康の體に復せるの例ありたりと、されば年少の婦人が心痛より其の乳汁に及ぼす害は實に恐るべきものにて僅かなる心配すらもこの如くなれば、若し人間の變事に遭ふて驚ろき悲しむが如き事あれば決してその乳を小兒に與ふべからざるものと知るべし。

母親に神經病ある時は決して其の乳を哺ますべからず、且又母が己れの都合より時にのみ限りて小兒に哺乳さするが如きは甚だ惡しきことなり、母たる者は哺乳の職分を專務と心掛くべし、哺乳二年間の養育の大切なるは、その兒の爲めには一生涯の身躰に影響するものなれば努め〳〵等閑にはせざるべき事なり。



家庭談叢

倫敦の家庭（二）

（家庭改良の好資料）

▲夫婦の關係と男女の交際

彼方で普通教育の行渡つて居ることは申上ぐるまでもありませぬが亞米利加の婦人などに比べると英國婦人は學者と云はれる程の學問のある人は少ない。殊に既婚の婦人は矢張り家事を主にして他に職業を執つて居るものは少ない尤も慈善的のことは餘暇に大抵致して居ります、婦人でも財產があるから身代は夫婦持寄りで夫が家稅馬車等の外の費用を償へば妻は庖厨を持つとか云ふ樣に費用を分擔して遣つて居ります。夫婦の間は日本に於ける樣に恰も主從のやうではなく、まるで友達のやうで、社會の制裁が強いから男子の品行は好し、妾と云ふやうなものは無論なく、實に西洋に生れた婦人は此點は幸福だと思ひます。それに就ては婦人方へよりは男子に向つて御注意を願ひたいことが澤山ありますが、それを申すのが御話の趣意では御座いませぬから省きます又妻としての側から申しても殘念ながら日本の婦人は及び難い、勿論日本婦人の中にも立派な方もありますが初めに申した通り普通社會の一般を云ふのです、然るに何う云ふ間違ひですか日本人は西洋の婦人は夫に對して大層威張つて居るやうに思ひ違へて居る人もあります併し婚禮の時には夫に從ふと云ふことを誓ふのですから威張つて居る樣なことのないのは勿論感心に從順に擧動もしとやかで御座います。隨分夫の爲めには好みもせぬ遊びをしたり出勤の歸りでも避けれぱ停車塲まで迎ひに行くとか一々口には出しませぬが、矢張り務めるのは女の方です、又一般の男女の間は實に奇麗で淡泊なものです、女子が十八九になつて學校を卒業するとか又は好い處では家庭教師を頼んで一定の敎育を終りますと交際社會に出すのですが少しも厭味なとはなく、男女の交際の道は清らかに開けて居る、倫敦の公園には夕方になると男女

相携へて遊びに往くとか、男女二人で手を引いて散歩して居るとか、他國は存じませぬが倫敦の實際は決してさうぢやないのです。尤も晝は男女連立つて運動に出ることも有りませうが、夜分妄に他人同士の男女が相携へて出ることはありませぬ。彼地では既に許嫁の約束が成立つと演劇に往くと云ふ風があるのですが、他人同士の男女相伴つて劇場に往くと云ふことさへもないけれども、室内で友人同士大勢居るときには殊に親しくピヤノを弾いたり、手を取つて踊つたり、殆ど男女の區別はないかのやうに一寸見えます。が併し男子は婦人の前ではコーセットとか靴下とか下襦袢とか身體に附た話さへ愼んで致しませぬし、婦人の室には父親や兄弟でも濫りに這入りませぬソレですから下女の部屋に一寸でも男が這入るやうなことがあると用事があつて這入つたのでも下女は大變に迷惑がつて謝絶ます、斯う云ふ風に肝腎な處に往くとチャンと掟が立つて居つて、奇麗に男女の交際が出來て居るのですから、誠に結構なことですが、日本の樣に内部は随分猥なことがあつて表面の交際の道は嚴しく塞ぎ女子はいつも閉籠めて置いて急に縁付けると云ふのでは丁度目隠しをして知らない土地に置いて來たやうなもので客待遇も出來ず世間のことも分らぬのは尤ものことで非難攻撃を受けるのは誠に已むを得ない次第と存じます

▲食事のこと

日本の人は西洋人は上下を通じて多く肉食をするやうに思つて居る人が有りますが、實際は決してさうでない、毎日一度は肉食をせねばならぬが二度は多いと申す位、で上流の人は二度通常人は一度で晝食が肉なれば夜食は魚肉とか鶏卵位のもので、西洋人の常食物は朝はベーコン、ハム、鶏卵、ソーセージ、麪食、牛乳其他茶若しくは咖啡類又子供にはリエカオーツ(烏麥)等の輕い淡泊なものを食べさせる殊にベーコンは上、貴人より下、貧民に至るまで食べねばならぬと云ふ位です先づ日曜日の午餐には骨付の牛肉か羊肉又は鶏肉へ馬鈴薯稍豆其他二三種の野菜を交へて調理し是れに魚肉かスープの内の一種を加へます魚肉が出る

スープが出ると云ふのは好ましくないさうです、晩食は下女を休ませる爲めにコールミートに咖啡位で客が來ても別に御馳走をしない又日曜を除いて他の日は午餐には矢張りコールミートに麪食或は前夜の殘物位で別に何も拵へないで食事を樂しく致します、月曜日には前日の殘肉をコールミートとかサラドとかにして用ふる又好い處では之を下の食として上のを新らしくする火曜日には又其殘肉をシチユーにするとか、機械で粉碎して鷄卵其他のものを混ぜて料理にする四日目にはマツトンを附けるとか魚を買ふとかするのですが、魚肉は高くて食べる人は少ない、先づ毎日の食事はこんなもので招待をした時の外は客が來ても別に御馳走をするやうなことはない、併し親しい友達でも來れば家族と共に食卓を圍んで樂しく語りながら食事を致します來客の時は夕食にはスープ又は魚肉牛肉を用ひ出來るだけ種々の御馳走を致します而して彼地では宴席來客の時のみでなく家族だけでも食事の時間がチヤンと極まつて居つて毎日恐らく五分とは違ひませぬ、只朝食だけは時間を定めないで八時より八時半とか七時より八時までとか云ふことになつて居ります前に申す通りで普通の處では決して日本の人が想像するやうな所謂西洋料理を毎日食べて居るのではないが、只食卓を美麗に花などを挿すとか又は器の色なども能く食物に配合する樣にして家內睦じく心持好く食事をいたします即ち是等のことは主婦の働きにあるのです、酒類はビール葡萄酒等で、彼地の婦人は日本の婦人より酒飮みが多いかと思ひます而して酒は主人に屬するものとして一々主人が出し入れをします、若し之を出し放しにして置くやうなことがあると召使に對して甚だ不深切であると云つて彼方の人は此種の不注意をひどく責めるので御座います、大略斯くの如き有樣を日本の風に比べて見ますと假令ひ食料品の程度は高しとも一家の經濟は豫想外に超過すると云ふこともなく、又不時に客が來たと云つて狼狽るやうなこともなく從て時を空費することも少なく、日常の交際も氣安く自ら親みも增すやうに見えて大變に好いことゝ思ひます。

▲訪問及客扱のこと

訪問は急用の外は午後三時から七時までとなつて居りますが上流は三時では少し早過ぎます、先づ四時から六時位が一番宜しい而して特別に招待を受けたときの外は五分から十五分位で決して長居は致しませぬ、兎角日本人の癖は御無沙汰をして居て往くと長居をするのですが、西洋では反對で御沙汰をせずに、而して長居をしないのです又客を招くにも此方では人を招待しやうと云ふには大騷ぎをするのですが、彼地はさうでない、私共様子を知らない中は前に招かれた時非常に盛會であつたから今度も定めしさうだらうなと〻思つて出掛けて往くと、相客は僅に一二人であることなどがあつて、氣抜けのする様なこともありました。大騷ぎをして支度して往くと、御馳走は御茶に御菓子位で立派な服装の人々が立飲みの様に茶を飲んで少し話をすると歸つて往くので何だか妙なことゝ思つて居りましたが、段々慣れて見ますと客を招くのは御馳走をするのが趣意ではなく互に話をして親しくならうとするので、又交際の多い上流の人になりますとアツトホームが開かれると毎日六軒も七軒も招かれて往くのですからサウ長く一箇所には居られないので御座います此交際の季節は夫人方が大變に骨が折れるのです、だから交際季節は二三月頃より六七月まで六月にはアツトホームを終り、二箇月程は海岸に靜養を致しそれから又夜會のシーゾンになるのですが併しそれは上流の方で我々には出來ることでない大抵中流ではお茶に招ばれて往く位なこととです彼地の婦人は交際は人の最も大切のことゝして敎へられて居りますので何れも慣れて居るから話の工合が流暢で、日本なら漢語交りの話をすると云ふやうな苟めにも生意氣風なことは致しませぬ、談話の種類にも注意して品の好い平易な例へば私に話をするには御國には花が澤山あるかとか何を花の王とするかとか云ふやうなことを申して、少しも角がなく、靜に婦人らしい風で決して客をして氣が詰まるとか惡い感情を起すとか云ふことはさせませぬ、亦客の方も如何にも上手で例を言つて見ますと泊客で

もあつて主人は客を厭きさせまいと務めると客も成るべく主人が休息の出來るやうにし、また一寸繪を見せても寫眞を見せてもモウ御勞れでせうと主人の方で言つたときに否少しもなどゝ申すと主人は何時迄も相手をして居らなければなりませぬから、斯う云ふ時には客の方で少し歩るいて來ませうとか云つて切り上げるやうにします、朝なども早く起き過ぎると迷惑なものでが前夜に明朝御飯は何時ですと尋ねて其時が來るまでは支度をして寢部屋に這入つて居つて食事後は新聞を讀み或は手紙（入用の品は供へて有ります）を書くとかして、暫く時を費しソレから買物に一所に往き晝前に歸つて又食後は一時間位寢部屋に居りまして心安い間ならば夫人なり娘なりと共に編物とかテーブル掛の繍とか云ふ奇麗な仕事をし（彼地の人は何處に往くにも仕事を以て往く）それから運動に出て市中を見て來るとか、田舎ならば後園を散歩するとか、テニスをするとかして、夕食後にはピヤノを彈じ、或はカルタの遊びなどして十時頃になりて就寢ます、是れだけのことを主客互に注意して致して居りますから退屈をすると云ふこともなく、氣詰りで困ると云ふこともなく、是は大變に好いことと思ひます。（故中井芳楠氏夫人の談）

季節料理

▲雞卵の椀盛　椀盛一個に付雞卵一個半とし、さて雞卵を割り能く攪き交せそれより沸騰したる湯へ鹽をば少々加へこれに右雞卵を一面に引入れ杓子もて浮上る泡を掬ひ棄て火の透りたる頃を見計らひ毛水嚢又は味噌漉の底へ布巾を敷き其上へ右雞卵を鍋の湯なりに移し揚げ手早く布巾にて角形に包みこれを板へ乘せ其上に又杓子を乘せて少しく押を掛け湯を絞り夫より布巾に乘せたる儘角形其他適宜に細かく切りて用うべしまた椀妻は淺草海苔を燒きて適宜に切りたるもの及び茹たる三つ葉又は罐詰の松茸の薄く切りたるを用ゆべし

▲牛肉の煮物　牛肉をば魚の刺身の如くに切りたるを買ひ求め、それを一片づゝ出刃庖丁の横にて叩きそれ

より鍋へ味淋或は砂糖湯を入れて沸騰せしめ此中に右牛肉を入れ胡椒又は生姜の汁を加へて煮る時は味ひ頗る美なり

▲馬鈴薯の煮物　馬鈴薯は先づ皮を剥き其の大小に依りて三つ切或ひは四つ切、六つ切とし水へ浸してアクを抜きそれより鍋へ移し薯の上まで湯を注入れ鍋蓋を施し暫らく煮たる上砂糖をば適宜に加へ鹽味となし右の汁乾きて薯に白き粉の吹くまで煮上ぐるなり

尚馬鈴薯は人も知る如く澱粉に富み消化極めてよろしき食物なるが其の品質は黄色を含めるものを上等としこれに次ぐは白色のものにして青色を含めるものは味ひ宜しからず又産地は甲州を第一とす

▲酢の物（細魚と獨活）　先づ細魚の腸を取除き能く洗ひて三枚に卸し腹部の骨を掬取り鹽を薄く振り掛け凡そ一時間程經ちたる時再び水にて洗ひそれより酢に浸し置き肉の色の變りたる頃を見計らひ皮の身を上に向け肩際より皮を剥き刺身の如くに細く作りて適宜の器へ盛り、更に獨活をば一寸程に切り皮を剥ぎたる上縦に切り水にてアクを抜きたる上酢に鹽を交せたる中へ少時浸け置きこれを右の細魚と盛合せ甘酢を掛け山椒を添へて食膳に供するなり、偖また右甘酢の仕立方は煮切（味淋に砂糖を加へて煮つめたるもの）へ酢を適宜に加へ、鹽と醬油とにて味を着くるなり

▲煮物（牛肉と切干大根）　これは牛肉をば一寸角程に切り深き鍋へ入れ肉の上まで水を加へて火を掛くれば煮立つに隨ひ段々とカスが浮上るゆゑこれを掬ひ取り（カスを掬ひ取るにはお玉杓子に燒火箸もて穴を開けたるものを用うるがよろし）それより少時弱き火に掛けて煮たる上竹或ひは木の箸にて肉を突き試み、箸の突通るを適度として引揚げ置き更に切干大根をば水にて洗ひ能き程に庖丁して右牛肉を煮たる汁の中へ入れ少時煮て少々柔かになりたる頃件の肉を細く切りて之を切干の中へ入れ甘味を加へ醬油にて味を着くるなり

尚之に胡椒をば少々振掛くるか又はあがり際に生姜の卸汁を入れば味殊に妙なるべし

▲燒附鷄卵の椀盛　これは鷄卵を割りて能く攪交せ其

の中へ三つ葉の五分切、又は海苔を焼きて揉込み更に
鰹節汁を右鶏卵の分量と同じ割にして入れ、これに少
少煮切を加へ醤油にて味を附け置き、夫より焜爐に火
を充分起し、此火を炮烙へ移し其の跡に鐵鍋をかけて
胡麻の油を引き煙の立ちたる時件の鶏卵を入れ其の上
に右の炮烙を載せ火を透したる上適宜に掬取り椀盛へ
入れ醤油にて鰹節汁へ味を附けるなり、吸口は生姜の
卸したるものか又は柚子、木の芽等を用う、此椀盛は
年中何時にても用うべく不意の來客には頗る便利なり
尚此焼附鶏卵を製する時注意すべきことは、火箸を以
つて炮烙を取上げ中を見て鶏卵にこんがりと色が附き
たれば其の上に洋紙を載せ鶏卵の充分脹れたる頃竹又
は木の箸を眞中に突刺し鍋の底まで突試み汁が出でね
ば火の透りたるものと心得てよろし、偖また普通の椀
盛ならば一つに付き大なる鶏卵一個の割にて用うるな
り、尚焼附鶏卵は丼へ入れ汁に少々甘味を附け醤油味
にて生姜の卸汁を絞り入れ汁を少し掛くれば別に一品
の肴となるなり

因にいふ、鍋は必らず鐵製の品を使用すべし、尤も鐵
鍋の新らしきものは最初金氣を抜く爲めに手數を要す
るゆゑ規則に觸れぬ瀬戸引鍋、即ち毒の無き瀬戸引鍋
を用うるも便利なり、又惣菜用の唐銅鍋の白み並に料
理用の器具等には錫八分鉛二分の合金を用うべき規則
なるが錫の少しにても剥げたるものは用ゐざるやう心
得置くこと肝要なり

▲鳥の霜ふり　鳥の身のよき部分をとり、兩手に一杯
あるときは、鹽十匁を加へ、よく鹽のからむまで凡そ
十分間置く。煮汁なり肉汁なりを鍋へ入れ、これに生
酒少許を加へその煮立つたところへ、まへの鳥肉を入
れザット色のかはる位を度に煮る、鳥の身ばかりを中
揚げ、あとの汁は煮つめ、再び鳥を入れかきまはして
直に卸す、これはあまり長く煮ると肉がかたくなるゆ
ゑ、中揚げをして、汁のみ煮つめるのである。客へは
鉢でも小皿でもまへの煎り葉などつけ合せて侑めてよ
ろし

▲栗の烏羽玉　烏羽玉にする栗は大粒のがよろし。煮

方は肅目または金團と同一である。冷えたときくづれぬ分をより出して板の上へ載せ、くづれた方は裏漉しにかけ、この餡を崩れぬ栗の上へかぶせ置く。別に長芋をゆで竹のへらでその皮をとすると白くなる、これを又裏漉しにかけ砂糖をその芋の甘くなるほど入れ火にかけて煉る、この砂糖はアク引の方よろし。煉れて来たとき、葛ひとつかみを水でとかしてその中へ加へて又煉る、指へ水をつけ觸れてその指へつかぬを度に鍋を卸す、これをまへの栗へかける、その時は手掌へ砂糖蜜を抹して扱ふのがよろしい。そのうへまた引筒で糸を引く。白い芋へは紅色の糸を引く、この糸はまへの上にかけたのと同じものと少し柔らか目にして食料紅を加へたものである。引筒へ入れるときは、竹皮長二寸五分ぐらゐにきり、これで下包みをして入れる。乾いた布巾で引筒の上部をつゝみ、ねぢるやうに押せば糸は自然に繰り出づる。白い糸もこれと同様でたゞ紅白の彩色をわけるまでゝある。これは口取の前盛りか、又は菓子に用ゆ。

▲イナの魚田　イナの魚田はまづ鱗をはらひ、腹をさき、水にてあらひ腹を左方に向け、頭部を手元に、眼玉のところから串をさす、皿につけて上へ出る方の損じない様に串をうつがよろしい、火にかけるときも初め頭尾を下へ向けて焼き、それよりかへして他の方を焼く、傍に丼に醤油を入れて置き、焼けた魚の上に二度ほどかけて焼く、それより味噌を刷毛で塗抹する味噌は上赤がよろしい、摺つた味噌は（味噌二百目につき砂糖百目、味淋少々の割合にて入れる）裏漉にかけ、鍋に入れ煉る、この時も生酒なり味淋なり五勺位を加へ、又凡そ十五分時煉り、皿へとりてさまし、鶏卵一個を入れかきまはす、これは味噌をはやくかはかすためである。

（注意）魚を焼く時は串のまはらぬやうに、そのさきに大根でもニンジンでも賽形に切り、突きさして鎮めにして置く、串はやきつかぬやうかへすときまはして置く。

家庭日記

大阪　をちば

△二月一日——寒さいと厳しく朝起き出でゝ見れば手水鉢に薄き氷張りてありき久しく北海道の方に旅行ましゝ父君のけふ歸り來給ふ可き知らせありしかば朝のほどより座敷掃き清めて床の花などさし替ねつ又しても英三さんの弄物などひろげらるゝにつぶやきつゝ採取りしも三度四度表に車の音する毎に胸轟かして走り出つればあらぬ方へそれ行に、なぞき事よと獨言ては知らせ越し給ひし時間にはいまだ二時あまりもあるものを母上に笑はれぬ夕方父上は御機嫌いと/\うるわしく歸り來ましぬ、妾には美しき/\金物つきたる帶〆英三さんには模型の細工うるはしき術の弄物お土産にと賜りぬ母上の御袖の下に隱れながら給はりし物を盜るゝ喜に滿てる目さしもて見つめたる英三さん何ですのそれは、と尋ねるにアン/\ペチと云ふに父上もほゝ笑み給ひてむゝよく分るの、とほめ給はるに妾もうれしくて△二日雨降りいでゝいとわびし英三さんはほんとのペチと弄物のペチとにて朝より御機嫌なゝめならず父君歸り給ひしを知り給ひて山口の叔父様来給ひその他引續客人あり暫く晩食後皆々茶の間に集りてそれや これや と久々振にて物語りす、彼の地より歸り來ればこゝは恰も彼の地の四五月頃の心地すと父上の宣ひ道の途一面に雪の積りて銀の如く初めて渡道する人などはひげ生せし立派な男がつるり/\と滑るなど面白き物語來け、夜の更くるも知らず十一時と云ふに驚かされ寢につく、△三日うらゝかに晴れ渡りたり父上各所へ訪問にとて出で行き給ふ妾午后よりやく子の君許赴き三時歸宅す夕食に妾が拙なき手料理とゝのへて薦上くるにうましと賞め給はるにいとうれし夜に林の叔母様久様と訪ない給はる英三さんの好める鯉のお饅頭給はりぬ

用意周到筆意こまやか也(入賞)

松山　彌生

△一月二十九日——今日は舊のお正月、何となう春めきて心も朝日と共にうらゝかなり、未だ舊習を忘れずゝにや、雜煮して祝ふ。八十の祖父君、目出度年を重ね給ひて、雜煮餅八つ召上るゝ今更に益々の御年長かれと、祈り参らせつ。午後弟學校より歸りて云ふ、姉樣先生が今日は支那の正月なり、今日正月する者は日本人に非らず」と、夜は歌留多に心奪はれ、母上にうながされて床につく。

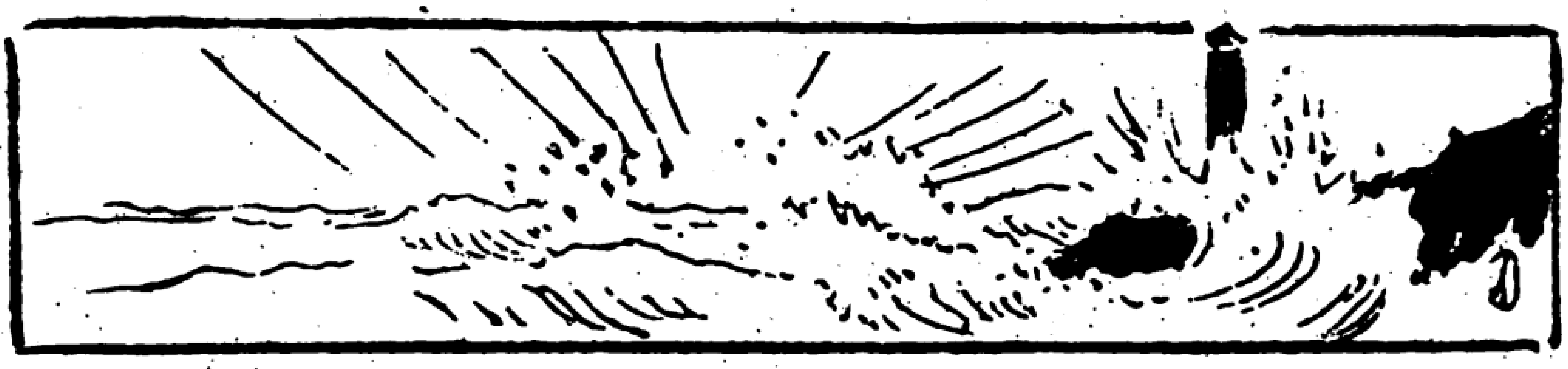
△三十日——天氣よし、今日こそ初寅なれ、十二時頃よりカランコロンの下駄の音頻なり、さても慾深き人々哉、此寒き夜を、此れむさき夜を等と嘲ひながら寢つ。叔父君の歸り給ひて、「濡物買はんとて、二錢を出して、福神に一錢八厘のコマを買ひやれり。然るに濡物所か、釣錢をも失れず、外三錢從して辛うじて得たり」と皆々大笑ひす。炬燵に寄りて終日雜誌を讀む、夜は又かるた會なり、向への座敷は顔一面黒くなり給へり、某の君は菅原の時平公の様なりといふ。十二時散會なれば嚴ひを濟して別る、今日ぞ笑ひ盡したる、福の神や舞こまん。

△三十一日——晴、母上畑中の親類へ赴かる、早く歸り給ひてよと、ステーションまで送り参らす、寂しく日を暮らす。

△二月一日――よく眠りつゞく、母上内架浮山詣ち帰り給ふ、御土産さして。
午後綾子の君来ます、文金の高髷うろにしうあつぱれ姉様さなり給へり、心合の友とて話はつきず、今夜はぜひ宿り給へ等云ふに、心強くも帰り給ふ、人の心も知り給はざるにや
△二日――風強し格栄麗なり、今日をにれさ着飾りて絵超取り行く、綾女も、慶賞女も、百性も。
夜葉父君のお肩をもみながら、昔の江戸の話を聞く。
△三日――例の事ども仕舞へて、鍛錬に余念なき頃「天つ日かげの高めくら」と歌ふ琴の聞ゆるに、いさなかしくて、ふさ見れば隣の友チヤンなり、夜早く寝る。
記者曰く浮輪とは如何なるものか内架とは何なるか願はくは説明せられよ、土地固有の名称なれば一般に知る由なし（入宮）

摂津國豊能郡岡町　田中瑜璞子

△二月七日――晴天　けふこそはと楽みし女學世界いまだ来らずちから落ちぬ。近頃になく春日うらゝに暖かければ母上さ共に弟つれて散歩す、なづな、はこべなぞは早やこゝかしこに芽を出して吹く風も寒からず鶏の声さへ長閑に聞こゆ。
午後姿結来りし房高髷に結ぶ。心地すがく\しうなれり。けふは妹等の古衣のつくろひに一日をつひやしぬ、今度はさてもさ裏ひしに手を入るれば、また見まがふ如くなりたり。女は針事にもつゞまやかなるこそ宜けれさ母上はほゝ笑み給ふ。



△八日――晴天　まちにまちたる女學世界は来たれり。口絵の美麗、諸嬢の投書文目もあやなり。家庭時言何よりも前に読む海卯耳いたき事のみ。されど是によりて自ら省みる處いと多し何卒此雑誌あらん限り掲載されん事を望む。
夜は岩崎様御夫婦御ごし、別家の嬢さん迎ひにやりて歌加留多の遊をなす、無遠慮者のより合さて勝てば喜び負ければ力み時のたつを覚ねず岩崎様は黒き額に十字架のしるし目立てをかしく奥様美しき御顔もまつくろになりぬ。妾も墨くろ\／＼さ額に真一文字。実に近頃になき愉快なりしかど思ひの外夜ふけて下女達には気の毒なりし。
△仝九日――晴天　母様相変らず胸痛にて困り給ふ　もしか肺にならずやなさ神経なやまし給ふに妾もむ配にて堪らず。午前のうちは妹等が紀元節に着る衣の腰上げ肩上げなぞ身にあふ様なほしぬ何でもなき様なれど面倒なるものなり
午後珍らしくも前田来り酒なぞ出す、暫く見ぬ間に理屈つぽくなりしには驚きぬ、信州地方の雪の積りたる話を聞く。此頃にても雪は五尺や六尺はつもり居るとの事なり。弟は其を聞てそんなに雪の降る處へ行きたいな、大きなだるまを造て遊のに、此な處は致方がない冬の中に只たの一度しか降らぬさ大こぼし。いや此如な好い土地は何處へ行でも御座いません眞内の人間が意気地のないのもあまり土地が好すぎるからですさ彼は語りぬ。今宵の月の清さそゞろあくがれて庭におりたちあてなくさまよひぬ。数寄屋に通ふ枝折戸によそへるか如く暫し身をよせつ。おゝ此月を浪華の友や吾妻の師はいかに眺め給ふらん思ひつ空を仰げば棒の音高し。

筆つき優にしてどこまでも女の日記なり以後はチト料理の事物價の事なぞ記すべし（入賞）

神戸市元町通六丁目　山田榮子

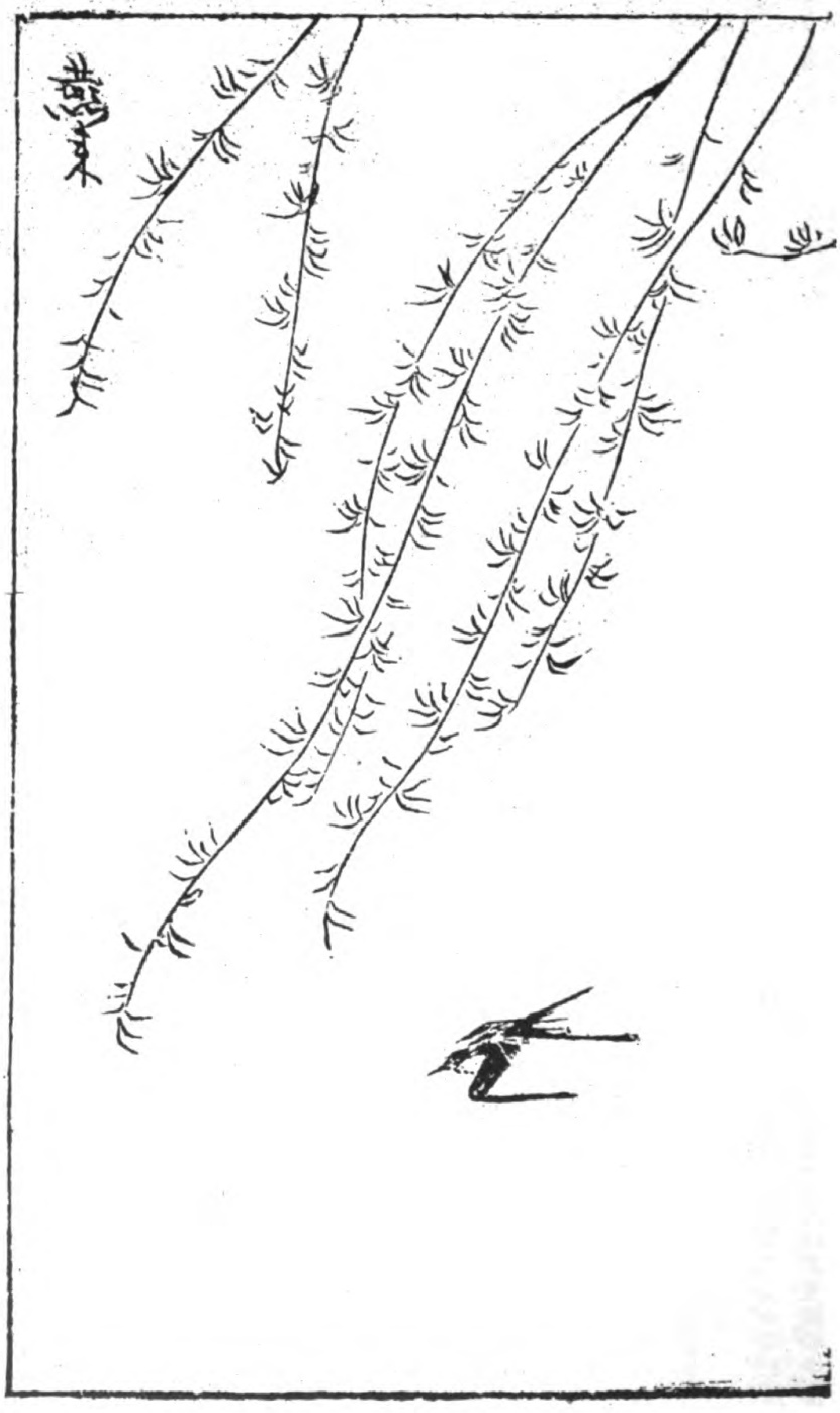
△一月廿九日——天氣淸朗正に花笑ひ鳥うたふ好時季の如し七時起床、庭の梅二三輪開く大阪の兄上より來狀、小學校同窓會の明日開會の通知あり午後一時、安藤仲子君の加留多會行く廣瀨みつ子君、小園たつ子君等とかるたをとり後琴を彈じなどして遊ぶ六時すぎ歸宅、今宵散歩旁楠公社に詣で境内の香具師の口々に云ふ言をきく中々面白し、とりわけ齒磨屋の口上殊の外面白く歸宅後其言をまねて談じ、皆々大に笑はる



△一月三十日——先の帝孝明天皇陛下の御崩去日にて朝より天氣晴快日の丸の御國の旗もゆるやかなる春の風にひらめき渡る前日通知ありし同窓會に午前十時より馬島さい子の君と赴くはや親しき友のたはむれ居たまふ

十時中食なりて會々校堂に集る校長の君の閉會のお言葉あり次に前校長の衣服の流行についての御話あり後知名方々のそれ〳〵有益なる御話あり終りに校長の君の學校と保守的なる家庭の中間にたつ女學生の心得についていろ〳〵御さとしあり時恰も正午幹事の君の御骨折になりし御馳走の饗應あり中中御加減なり午後かるたに時を費して五時頃歸宅三木美女喜の君より來狀寫眞誘手とあり東京の事などこまくとかき添らる

△二月六日——晴れ定刻起床さきに敎へを受けし師の君の四國へ赴かる由をきゝ十時頃登校して師の君に永々と御別れの言ばを述べ正午歸宅午後より姉上兄君と豐屋へ赴かる六時歸宅夕飯後又々補社に赴く香具師の口上例によりて例の如し一人の讀者もなきに得意氣にいふなど中々に面白し（入賞）



駿東郡　栗田よし子

△一月一日——晴れ今日は年の始の目出度き日なれば朝疾く起き見れ

ば庭の梅が枝も何となう嬉しげに今にも笑み初めん許りの風情なりき隣の間には妹の何やつぶやく聲の聞ゆれば何をなし居るらんとそつとのぞき見れば妹は樂げに羽子を〳〵に持ち交ては物歌唱ひゐたりあや子もう起きたのと云ひたれば姉さん私今朝は嬉しくつて寝て居られなくて起きたのと云ふも愛らしさよ先皆打揃ひて無事に年の始の盃をし納れり妹は學校の年始にと早くより挑割れにと望めば思ふに任せて髪結ひやりたれば嬉しさ一方ならずよろこびつゝ衣服を着かへて學校に行きけり我れも去年迄通ひなれし妹の學びやに年始せんと出で行きしたれば師の君達はいたく悦ばれ給ひて私もいと嬉しかりき學校の式を終へ小澤師君の御宅に行き五人の先生と四五人の同級なる友と樂しく勇ましく歌留多の合戰を始めて一度は勝ち一度はやぶれ共に勢力強くして戰ひ盛んにして思はず時を移し四時歸宅せり八時より妹と文机によりて共に樂しき今日の事を記し終りて十一時床に付く。　一月二日晴れぬたり人幾多に打驚き起出づれば母上はもういつにか起き給ひて我が用迄なし給へり妹は笑ひつゝれーちやん今朝は寝忘れてと朝起せしを自慢顔に云はれしも面目なかりき私も急ぎ用をなし先朝用を終へ髪なでつけて表に出で妹と羽つき遊び居る内郵便配達入九枚の端書と一封をもち來れり何處よりと見れば三四友より一は都なるまさ子の君よりの封書取る手をそしと打見れば何れも友情の厚きは紙面に現はれてげに〳〵うれしくよみ下せば兼れてちぎり置きし寫眞送るとありければ其嬉しさ鶯の初音にもまして悦ばしく聞へたり疾く文机に向ひて年賀の返し事かきたり今幾月をへなば來らんか女學世界も二三日の内には來らんよと月日はまたず待へゆくも思はず一日もいと長き心地ぞするあまりうれしや〳〵と云へば祖母様は來給ひて何をかく悦ぶのと問はれし時は又一入の樂しさ優さりけり夕飯を六時に過ごして八時より昨日に優る今日の樂しき思ひ事を燈火の下にて記し終り十時床につく（入賞）

備後國御調郡一二五　小山松枝

▲二月五日――母君實家へ行き給ふ。昨日春立ちしといふに、今までの暖けさに引きかへ、風さへ出でゝ寒さ身にしむ、午後はひら〳〵とむつの花散れるに、例の少女は來りて遊ぶ。夕げさへ祖母君と二人のみにて淋しければ、夜は小説にても御耳に入れまほしとおもへど、咽喉のいたむに、談話もあまりなさで早く床につく。

▲六日――頭おもし寒さも一しほなれど掃除などおわましなしたへぬ、午後堪へがたくて床をまうけよるのもの引きかつぎ、頭痛烈し、晝と晩との二食事はせんなく出で調へて祖母君に參らせつ、夕かた隣りの少女の遊びより歸れる頃はや戸をさゝしてふしどに入りぬ。

▲七日――うら〳〵とさす日影のさかにて、心地もすが〳〵しうなりぬ、園に出づればえならぬ香りのしていく株の梅花はわれをむかへ顔なり、げにわびしきわが家も風情あるは此頃よ、兄君の今頃歸省なしたまはゞとおもひぬ。くりやの方を片つけなれば祖母君の何をなすぞとゝひ給ふに、昨日のかはり御馳走いたすべしといへばそは母上歸りて、とましめにのたまふ。さる方から蜜柑到來風邪の口には何よりもうれしかりき。

▲八日――叔父君御來訪いされしころにわが家の外事につきて相談御世話なし下さる。あまりの寒さに母君も如何とおもひしに、午後四時すぎ御歸宅。炬燵によりてめづらしきおはなしどもうけたまはる。

▲九日――朝少しくもりたれど後晴る何子の君音づれ給ふ、久々なればゆるりと遊ばせといふに、こたび女の嫁ぐに、明日よりは其支度の手傳

に義雄のいそがしければこのたまふ、御土產に梅花を手折りて參らす。夜書見をなす。
▲十日――曇、女學世界到着、兄君の每に送らしたまふを、これの月はうれしう早く來る、さるにても兄君の御情深さよ、御公務繁き中よりも、わらはの將來を氣づかひ給ひ勉强なせよ忍るなどいふも有がたき御言葉、御書はもさより雜誌見るにつけ淚ぞこぼるゝ。夕かたより雨ふる。
人に見するはやさしけれどこたびの號題家庭日記と見ねたれは今宵書きぬきて其一端をもらしぬ。
記者曰く到着の女學世界を讀みて如何なる記事か尤も有益にして且つ趣味多かりしか記されたし

しらゆき

二十七日雪――五時起床六時過朝飯をすましそれより母上さ共に妹の來年七ツの祝にきるはれ着を縫ひ午後三時頃遠方の中學に在る弟の突然只今と云ひつゝニコ〳〵して來りぬ今日より寒中休さなりし故驚かせようさ思つてわざさ知らせなかつたさの事夕食の時たね子の兄さんが學校に行つたら大きくなつて仁王樣みたやうだの子ーわたしも七ツのおさしをさると學校に行ツて兄さんより大きくなるわさ楓の如き兩手を高くさし上げたるにぞ皆々ふきはだしぬ
夜は友に送る手紙をかきぬ九時過就床
二十八日――飛雪紛々定時起床今日父上の東京より歸りたまふよしなれば山茶花を活け床をかざり家中を掃除し湯を立て



待ち居りぬ
正午頃歸りきたまふ降りしきる吹雪は向ふをも見ねざるに此寒さをおかしてきたまひしなればさぞかしおさむく入らせられしならむ
やがて東京土產なりさて弟に胃腺譚五册妹に被布我に肩掛などりき皆うちよろこびぬ午後は荷物をかたづけ夕食は皆々のよろこぶこん立をなさんと例よりも早くいそ〳〵と立ち間もなく夕食を珍しくも打そろひて膳にむかひたり弟の此馳走は姉さんが一生懸命にこしらいたんだから格別子ーなどいひて皆々たのしく夕飯をすましたり夜に至りて來客一人ありき寒さはひさしほはげしく青森の行軍も思ひ出でられて身ぶるひをなしぬ

京都府紀伊郡深草村　氷室浪子

△二月四日、登校、先週の習字淸書を渡さる、今度は甲下、文子さんカタル多で寢て居らツしやるから御見舞に參上したら、もう起きて居られる。
夜、お母さんの代筆で大阪の祖母樣へ御手紙を上げる、妹みち子の被布を縫ひかける、節分なれば小兄さん年男になツて豆まくのに大きな濁み聲で「福は內鬼は外」さ云はれるをお母さん、そんな强い聲でどなられたら、どんな鬼でも逃げ出すだらうよさお笑ひになれば、小兄さん、これで逃げなけやこの手で鬼位潰してやります、さ威張ツて云はれたので、皆んな大笑ひ、支出帳附けて寢る。

△二月五日、晝後、午後四時頃より雪降り出す、みち子喜んで、綿降ろ降る、と云ひながら飛んで廻る、

井原呉服御店でになる、今日下婢藪入に彦根へ歸る、

△二月六日、下婢留守中炊事を云ひ附けられたので、今日は早く起きて御飯をたく、不出來だつたから、小兄さんに、新米の下女にはいけません、お母さんもう追ひ出したら如何です、と笑はれる、學校で小出さん、今日歌留多をなさりますからお出でなさいな、と親切に誘ツて下さツたが下女が留守ですから勝手を手傳はなければなりませんから、と辭を御謝しして御斷りする、女學世界が來たから急いで見たら、歌一首秀逸に選ばれてたのでお母さんと小兄さんに賞められる、夜、女學世界家庭欄、鼻のをしへ、だけ讀むで、被布の縫ひかけたのを縫ふ、

家庭日記の買物の直段臺所の模様を記せざるは闕點なり

鳥取市元魚町一丁目　尾崎靜子

よべいそしみし針の業に、今朝は風の心地さへうちそひて、肩のあたりたゞならず、いと苦しく覺ゆれど、妾常にか弱くして、父上母上さては姉上などの、一方ならぬむつかひかしこければ、六時つとめて起きいづ。姉上朝かれいの仕度氣がはしき程に、妾は調度など並べ、いつものやうに拭き掃除くまなくし終へて、皆ヽ膳につく。都大路は松の内とて、男もおみなも、骨牌とり羽子つきなどすゝめるを、鄙には來し冬まりあへず、鄙しき正月は舊暦を用ゆる習ひなるこそ是非なけれ、など語り合ひつゝ姉上と共に、春のいそぎ暇なくものす。風寒けれど空うち晴れたれば、硝子障子にうつる日影も嬉しく、山花の白き垣根も眺められたり。

晝飯たうべて、父上は炬燵に倚りて文見てなど在す。流元など終りてより、姉上は花瓶に水仙の花美はしく生けいで給へば、妾は新聞など母上に讀み聞けまひらせつ。さかくする程に、れいの八百屋來りければ、夜のもの少し買ひとゝのへて、五時にもなりぬれば、やがて臺所にたち出でゝ、竈焚きつけ、鍋かけなどす。さてもこの頃の日のたち易きことゝ、明くれば暮るゝ生計の道に追はるゝ身の、物煮る業は姉上に、妾はそを手傳ひつゝ、父上の酒の肴もつくり出られぬ。灯ともして夕餉したゝむ、父上の今宵は姉妹の心づくしに、思はずも食すゝみたりと、氣色なのめならず仰せらるゝに、心うれしく、あるは理想の家庭の話など説きいで給へば、母上は世にたちてより、主婦たるものゝ心得など、何くれとねもころに示されたり。外もは風やゝ募りて、折々は霰さへ降り來りぬ、妾の姉上よりは、少しく早く臥床に入りたるは十時過ぎなりしにや。

日記の中に風俗の一斑と物價の書落されしは遺憾也

長野縣上水内郡
柴村大字住頁木　小林つね子

●一月三十一日—土—晴—三十二度。今日は月の終りの日とて何となう物淋しう覺ゆ。長野なる友の大町へ行く序とて來訪す、聞けばこたびその學校の裁縫教師に榮轉して今し赴任の途次なりとはめでたし。子供らは學校より歸りて お正月の名殘にと同好の友をよびて終日カルタ取に興ず。本月分支出合計五十五圓十七錢三厘、收入合計百八十三圓 詳細は家計簿記にあり。發信三、受信五。●

二月一日—日—晴—三十度。今朝は良人近縣（旅行勸業）にたゝせ給へ

ておはまゞりしに遂來りて今日迄延びし煤掃を執行せんもの
と昨日よりの計畫なれば眞人もろ共朝まだきよりなかしき服
装して召使共を指揮し、晝過ぐる頃漸くに了りぬ。いづれも顔
も手足も眞黒々になりしが其心地のすがくしさは又云ふば
かりなかりき。新調台所の隅にて古びたる大黒天の像を見出し
たりとて下男の手柄顔に語るも興なし。眞人とりあへず「千両
の黒蕨しものや煤掃」と。又妾を揶揄したまひて「煤掃て居るさ
はやさし雛女房」「煤は掃けど可憐花嫁を古びかし」など口吟
まゐ給ふ。子供は終日雛等の煤掃にすこぶるくなどす。隣家の若
人金剛にて甚だ重きよし、さるものもとりあへず見舞ふ。高府
銀行へ金百五十圓を當座預けにす。發信五。受信六。

●二日—月—雨—四十度。寒の雨始めて降る。眞人、恙ありて
缺勤したまふ、早速醫師を迎ふ。みさけに他事なし。午後分家に
て愛らしき男子の出産せりと、男兒は之が始めなればあはれ年
老いたるおふばゝ君の、家の継出來たりとていかばかりか喜び
給ふらん。眞人にもめでたき此しらせを聞きて、貰ひ喜びの餘
り病ひ稍々うすらぎたまふこはいとも嬉しきことにこそ。發信
五受信二。

●三日—火—雪—三十八度。眞人、昨日に打て變り、み氣色す
ぐれて自ら出勤したまふと仰せられど、醫師よりの注意もあり
强て與麻二三日なと止めまゐらせぬ。近隣の某氏、金を借りに
來りたれど眞人にはあやにくと云ひたまふ、妾おこがましけれ
ど側隱の情とゞめがたく眞人に勸め參らせて、まづは乞はるゝ
半ばを貢に會はしやりつ。夕新聞の老人金恢すと報あり。發信
二受信一。



●四日—木—吹雪—二十八度。街上、往來の人稀にして僅の戸
隙をも洩るゝ雪は宛ら身を切るやう、さすがに時ならぬ花とも
眺められざりき。眞人にはな甘やかしそ仰せらるれど、家に在
りても此寒さなど今日許りは子供な召使になんぶらせて學校
へやる。千葉なる姉君のもとよりふみに添へて自園の蜜柑な
りとてあまたおこせらる。子供の歸るを待ちてこれは今日のお
ほうびよと與ふ、さらでも大好物の品とてかたみに喜ぶこと限
りなし。夕餉を早う節分のとしさろ、豆はわざと子供等に撒か
せつ。眞人また俳句をつくり給ふ「豆打や鳳は内輪のつぶまや
か」と。發信四受信二。

●五日—木—晴—二十五度。眞人漸く出勤したまふ。寒既に明
けて却て寒氣きびしければ、還た風邪などひかぬやうくれぐ
も頼み參らす。嬉しや正午に歸り給ふ。(ロ)個にてなつかしき
女學世界來る、例の大町先生の家庭雜觀、加納子爵の家庭、佐
木木大人の女歌人など云ふばかりなく嬉しかりき。夜深く定ま
りて後靜かに「花にしき扇面」をものす。眞人、又俳句を示し給
ふ。「寒よりも餘寒厳き不順哉」「春や立つ雪にかくるゝ庵なが
ら」「初東風と名はりかしくも肌寒し」など。此夜名にし負ふ祈
の雪眠るが如き月影を掠めてひらりくと大地にこぼれけれ
ば何法を解せぬ身さへも坐ろに感興とゞめがたく「淡雪と末は
消ねなん此身かも」と吟す。眞人にはほゝゑみ給ひて、おまへ
たちの人生觀は大抵そんな物かも知れぬ、と。發信一受信〇。

●六日—金—晴—三十度。かねて三井呉服店へ注文し置きたる
品物到來す、そは分家の幼主に贈るべき産衣の料なり、即ち叢
誌に掛りて又餘念なし。

此夜、玉、初めて大きな鼠を捕る。其人を始め一同太く玉の手柄を譽めそやせば、得意がりてやゞーく〳〵さ唸り早や半ば死したるを放ちては咬へ咬へては放ちてなぶるとやゝしばしなるに、子供のいさこはさうに「かあちやん鼠の子ごもは屹度玉を恨んで呪ひませう？」さ罪なき笑ひ種播く。　發信三受信三。

記者曰く家庭日記に庖厨の事料理の事又物價の事なきは甚だ遺憾なり。庖厨は一家團欒の基なれば詳記して後日に殘し、物價は時のありさまを知るの楽りさなるものなり

周防　中谷鳥羽子

二月一日。晴天、朝のほご少し風立ちたれご後をさまりぬ、今日は亡き祖母君の三七の命日にあたれば妹をいざなひて墓參にゆく、歸り路野邊の白梅を二枝三枝手折りて家づさになす、午後神代村の伯父君おさづれ給ひぬ、久々の事さて一こん差上げぬ、三時頃御歸宅それより縫ひかけの羽織さゝのへ、夜は書輪文をひもさき、十一時四十分床に付く。

二月二日、今日も晴天なればさて足袋の洗たくをなす。午後來客數名いさ忙がはし六時すぎ東京の知己より郵書來る。夜は「かなのてほごき」を習字なす十一時十分前床に入る。

二月三日。朝の程より小雨ふりいで、いさしめやかなり。朝げを終し後繁子の君に送るべき手紙認めこま使に發送さす。午後母上の髮を結びて自分はあげ卷になす夜は豐川の伯母君來給ひて終夜楽しく語りあひぬ。

二月四日、雨やまず、つれ〴〵なるまゝ母上に新聞の小說を披露す、三時頃御歸宅。午後田中繁子の君光來、妹、弟、打集ひて双六をふり初めぬ。三人長火鉢のそばに居たる折しも北海道の叔母君より親書來る。夜は女學世界投書のしたがきをなし十一時十分床につく。

二月五日、チウチウさ軒端にさえづる雀の聲に眼をさませば雨戸のすきよりさしこむ日影はなやかなり。驚いて床をはなれ勝手に出づれば、昨日にかはる晴天なりさいさ嬉しげにさけぶ隣の下婢の大聲も聞へぬ。終日裁縫。夜は日本女禮式を讀む、後母上より叔母君に送らるゝ手紙の代筆をなし十一時二十分床に入る。

二月六日。同じく晴天。昨夜より少し風邪の心地にて常になく頭おもければ終日床に暮す。夜は新聞の小說をよみ十時十分前床に入る。

二月七日。朝のほごより少し曇る。女學世界は來たらずやさ待にまちたる甲斐もなく未だ來たらず。

正午幼き弟は學校より歸り來て今日の清書に三〇の多くつきたるを母上に示し。はなうごかしほこり顏なるものいさをかし。自分は傍よりそんなに、はなを高くするさ天狗になるよ。さ云へば弟は無邪氣にぼくがなにになつたら母さまや姉さんを羽に乘してごつこへでも連て行くさいつた。一同大笑ひ。午後廣瀨村の姉上より。かち栗を送り給ひぬ。餘りたくさんあればさて隣家に分配なす。夜は書輪文をひもさき。新編獸がたりを讀む事十二頁半。十一時二十分床につく。

日記さしては簡單にしてよしされご今少し趣味あらましほけん

ゆずる

一月廿日　朝疾く起出でゝ先づ眺むれば家々の屋根每におく霜雪かさ計り夕べ木枯しに吹きよせられたる木の葉が上に白う咲きたる霜の花朝げの風いさ寒けれご仰げば新氣充ち渡りたる青空一點の雲の影だに

立めず今しうら〳〵とさし上りたる日影昨日今日寒中の様とも覚ねず今日は祖母君が幼きを連れ玉ひて大師詣せんとのたまひたれば午后の見聞き思ひやられていと嬉しき心地す

朝の事何くれと整ふほどに夫の君も起きまし祖母君も幼きに異なき事語り玉ひつゝ楽しき一汁一菜の朝餉終はりし後夫は例の勤にといでませ給ひぬ

今日を楽しみに指折り数へて待ちし幼きは仲々に霜柱やう〳〵解けなん道のあしきに堂すくる頃よりこそよからめといふも聞かで早く〳〵と祖母君に迫り奉るに詮術なくて麁未なれど去年仕てし海老茶の袴羽織の一重ね着せつ竹を連れていでましぬ

只残さ六畳の居間座敷廣からねどぬきかへたる衣引き放したる押入さては草箱など取乱したる何れを先に手をつけんやうもなし扨も人一人二人の門出にあたる規律なき事よと独りつぶやきつゝも實に長閑なる日はまばゆき斗り南の窓にさし入りて机硯などの上に塵白う積りたるいと心地あしくていそぎそこはかとなく取片つけて今こそ我世と縫さしの夫が小袖今日こそ仕立上んと針箱引きよせ針とる程もなくがらがらと鈴の音門外に止りて人のけはひするいで見ればこはなつかしき露子の君にて美しき御子さへ伴ひ玉ひなり　よき時にこそ来ませしと心隔てぬ昔ながらの友垣誰に憚る物もなく火桶囲みて思ふまゝ語らふ楽しさ何にか譬へん幼きが留守にていと興なけれどなどいひて御子には美つしき繪草紙など與へて四時頃おしき袂を分ちぬ

やがてがら〳〵と鈴の音先づ聞えて小さき足音しぬこは幼きが帰れるなりさるほどに夫も帰り玉ひ祖母君もみけしき殊の外美はしうて幼きが道すがらの事記さしいふべきか種々の事語り顔に語りつゝくるに皆々笑ひ興しつゝ温き夕餉のまとゐ如何に楽ししかりしよ

家庭日記

愛媛縣越智郡盛口村　兩島まさ

一月二十九日．今日は陰暦の正月元日．近年はかゝる片田舎も年賀状のやりとりさては門松や國旗やなど押立てることは陽暦によるなめれどおほかたの儀式はなほ陰暦によるが多かればかずの子なよしやうのものも自然この正月ならではもとめがたし郷に入りては郷にしたがふとかやわがうちにおいても普通のもうけはなせり隣りも向ひもみな家の内外を掃ひ浄めたるにまいて今日は朝日のうら〳〵とてり渡れるに大路往きかふ人も常にかはりて何となう時代のことも思ひ出されぬべきさまなりかくて文机にうちむかひて女学世界第一號をひもときけるに折しも庭の梅が枝に鶯の初音をもらしたるはなれもことぶきいふにやさおかし

朝日かげ匂へる梅が枝に
　こゑのどかにも鶯のなく

午後二時のころ友たち三五人音づれ給ふいと〳〵うれしかたみによろこびかはして終日かたりくらす

三十日、きのふの如く世間はなほ賑々しう静まれるに夜べよりふりゐたりし雪の八時のほどよりいたくふりまさり十一時のころにはすでに一面に雪の積むこと二三寸あたりの茅屋も端ぐるも瓊宮瑤臺とかはりて天地も改まりぬる心ちすめり「霜だにもおかぬ」てふ南國のこの冬はわき暖きものから雪をば見ることはなきなめりと思へるにおかしくもふるものかな友のもとにこの雪いかゞ見給ふるなどいひやりたるに二階の扉を挽きてなどいひおこせたるも心にくし隣の翁らの秋の實りのしろしなんめりとよろこぶめれば

秋の田の實を見ッて門松の
　ねたもたをゝにつめる雪かな

春のあけぼの

すみれ女子

○霞

霞をつゝみ靄をつゝむの霞が行方よ、杳として窺ろ所を知らず、さばれ秋のゆふぐれ、うら寂しき際のそれとは異りて、野山に棚引くさま、長閑けく、げにもろ〳〵の瑞相この中にこもるらんとおもへば、花なく鳥なきの如月、春の消息の能くこれによりて傳はるゝよ、さても我等は海に川に野に山にたなびきつゞく朝た夕べの霞によりて、美くしき春は姫の御たよりをきかん哉

○淡雪

誰ぞや、花にまがへて散る雪と歌ひしもの、まことにかも、淡き淡き春の雪、ちらと霞める野邊に、賤が垣根白うつもる間もなし、いつとはなしに消へゆくこと、たとへば、天才のゆくにも似て、そゞろに春の寒きをおぼゆ、まして紅梅の立枝にふりつむさま優ならずや、再びこぼるらん露の涙山と里との間にまよひ〳〵て、緑こまやかなる竹村に、つめたき羽根をうちはたけば、淡雪のこぼれて、落ちて、ばさとの響を傳へつ、白きものゝばら〳〵と障子い紙をうてるもあはれなり。

○餘寒

暦は春立つとつげて、寒いよ嚴、さすがに鉢の梅は百花に魁の姿いぢるしけれど、釣弁のこほりて、瀧元には殊更の冬をくりかへすぞうかりける、さても高殿は餘の寒やいかなるらん、姫君が琴ひく御手たゆむべくや、位あり名ある人の囚屋にめされたるが、この頃の餘寒に、きのふまでひし衣の薄しう、かされし身ぶすまやおもひいづらん、道ならぬ道に手折りし山吹の花、さても大なる寛力のこもりてさわななかれぬ。衣類の花がきに輝き精鋭のこほれるを歎くなかれ、御身等夫れ心の満足にいたりてはならぶもののなげん、軒もる月にのこんの寒の身にしむ夕べ、そゞろに人生をおもはれつ。

○鶯

誰なれや、貫之女、彼女はかしこき御帝の御仰事をも小さき鳥の爲には紅涙の袂する能はざりき、一天萬乘の君が勅をかしこしとおもひぬ、而も、うたふて曰く、鶯の宿はとはゞ、いかゞ答へん、と、清楚細やかなる紅梅は彼女が惜しむ事にあらざりき、彼女はやさしき女性、鶯のねぐらまでふに思ひおよばでば、殆ど勅の尊きをわすれんとせり、女性と愛、我ば數百年の昔にかゝる此の種の歌ありしを識す、朧朧保護何すれぞ、嘶嘶しく唳々を爽せんや。

噫呼精前に老人逝きぬ、君がいためる病床の軒に、往年詠歌鶯とまへずりし鳥の、今年いかなる調をや奏すらん、悲しい哉。

○鶯

靄々たる春風のいまだおさづれなくて、野山もましろなる頃、雪国はさすがに雲意深き叢の中よりほゝゑむ梅の、態ならずや、是を月下の美人、雪中の高士と称ふ、詩人寒叉美人来の句、偶れたましうき人もあらんが、春の夢のあけがた寒き頃、梅一點寒屋のそれにも似たるが、幽香暗に匂る、誰か情韻なかるらんや、そもそも梅は、林をなして眼に見るの楽よりも、月を賞すの夜、歌に吟るの夕、人に遁れる香ぞすべてに勝れてぞゆかし。

○柳

俗謡に曰ずや

　何なくよくよく川端柳、水の流を見てくらす。　是は

夫れぬるき春の水の流るゝあたり、風にもまれて、東に西になびくらん柳の下、さゞれ浪のいろも緑に見ねて、紋つくれるさま、長閑ならずや　是は世の中より超然と立ちて、濁水の清きをながめつゝあり、さても其風情の優なる歟、これは佐保姫のみだれ髪、春風といへる官女かくしけづり来るな。水鏡にうつし見て、笑にはこるべしや、春の柳は我に二つのこゝろをもらしぬ。

○若　艸

眞紅を作つて千歳に老いゆくを人願ふや、將た燃ゆるが如き春の野の、みどり初々しき若艸となりて、世に見ゆるをこひ願ふや、一つは理想界に辿る人、他は即ち現實界の人間なり、彼は天使の面影あり、これは年若き女の姿にこそ。

　花をのみまつらん人に山里の
　　ゆきまの草の春を見せばや

世人よ、濃き紅の花を願ふて、小道の草の燃ふるを見ずや、可憐なる若草は我等が一顧をこひ願ひつゝあり。

○蕨

きのふ住みつる我が故里の山に、さわらびやもねいでにけん、若き処女の姉様かぶりをかしう、白き手拭に結たての髪をつゝみて、思ふ人、恩はぬ人と摘すり合すらんよ、そが若菜の初わらび、そもそも何のゆかりさやなるらん。

○春　曙

詩人うたふて曰く

　露の身をつれにもかなさ思ふまで
　　こゝろぞとまる春のあけぼの

厭世の人、猶すてがたうおもふは、香霞める春の曙ならずや、まして我等世を楽しむものゝ、あはぬながめはこれなりけり。花のいろ漸う明らかに、峯の横雲うすれゆくまゝに、そこ千萬軍天使の来降ありて、春の讃美歌奏づらんとおもはるゝ其色、げにおぼろおぼろ、朧月のかゝりし夜のあけゆくまゝ、椿の花を空へまで持ちゆきしやと怪しう物狂はしき迄に納なるは、はた何にかたさへん。

さくら花匂ふわたりに
ひとつみえふたつ
あらはれ
ときのまに
かず〳〵いでき
うち群れて
むつるゝ蝶よ
飛びわかれ
とび
あつ
まりて
たはれ
つゝ
遊ぶ胡蝶よ





*誰もみなみつゝわかぬを
おもしろといひつゝわるを
さくら花枝うち動き
△風ふけば
また
ちり〴〵に
飛びぞ別るゝ



△反歌
蝶やはな
花や蝶とも
みゆる哉
吹く
春風に
みだれ
みだれて

すが鈴子

文藝

支那第一戯曲の梗概（三）

幸田露伴

こゝに洛陽の名高い寺に彌陀寺といふのがござります、其寺の和尚が無礙の道場を設けて現當二世利益の法莚を開いて居るところへ、丁度辿り着いた彼の趙氏は、女道士の打扮を仕て琵琶を抱きながら出て參り、幾錢かを得て亡き父母の菩提のために供へやうと致します。先づ其風躰は我が邦の朝顔の極上品なので、そしてずつと氣位のゐるのと申しても差支無いのでござりまする。まことに可憫な有樣でございます。そこへ兩人の下らない奴が搦んで白で琵琶を彈かせ歌を唱はせます。朝顔は情人の遺した歌を唱ふのですが、趙氏の方は親子の情合を歌ひまして、暗に蔡邕が二人の老いた親に負いて仕舞つたことを恨み悲むやうに利かせてゐります。散々歌はせて置いて二人は去つて仕舞ひますので趙氏は草臥儲けを仕ますが、仕方が無いので諦めまして、別に供へる物もありませんが先づ兩親の畫像を取り出して其處へ掛けまして、香を焚いて禮拜致し、何卒後世安樂に御坐すやう、兼ては御冥助をもつて我が夫にも邂逅はせ玉へ、と念じて居ります。ところへ蔡邕は從人を隨へて今日の佛會へ參り合はせます。これは故鄕へ李旺をやつて父母眷屬を迎へさせましたが道程も遠い事だし父母は老年でもありまするから登山渡水の旅路のほどの佛神の呵護に賴つて無難ならんことを祈るので來合はせたのでござります。趙氏は我が夫とは知りません、急に人々が騷ぎ合ひましてそれ狀元が御入來である、退け〳〵といふので、慌て狼狽いて像畫の軸を收める暇も無く、巻いたなりに其處へ置き忘れて貴人を避けて外面へ去りますが、蔡邕は何の氣も付かずに其處に置き忘れてある畫軸をば、

まあ取り收めて置いて持主へ還して遣るが宜からう、と從者に申します。其處へ和尙が出て參りますので、自分の父母の無事ならん事を祈る由を告げまして香金を送り、和尙の禮佛呪願の終るを待つて自己も焚香禮拜致して歸つて行きますが、物蔭に隱れ避けた趙五娘は見るとも無しに隙見をしますと牛丞相の女を貰つて蔡狀元と評判の其人は我が尋ぬる夫でございまするから、ハッとばかりに驚きまして其塲へ駈け出して取り縋りたくは思ひましたが、いやまて少時、前後の思案も無く取り上せてはならぬ、夫の心、他人の前、彼方は狀元の貴き身、妾は袖乞の悲しき姿、張太公の注意さへ思ひ出しましてヂッと堪へて仕舞ひます心の中には既夫の居所も知り得たから焦躁るには當らぬといふ賢い分別があるからしての餘裕もあるのでござりませう。さあ既難かしい事は無い、女道士になつて居るこそ幸ひ、牛丞相の御邸へ出て勸化を乞ふに托けて夫の樣子を探らねば、と屹度自ら氣を引立てます。

牛小姐の方では首を長くして李旺の歸つて來るのを待つて居りますが、それにつけても舅姑御の御入來になつた時、御召使になる侍婢の萬事に氣のつく敏慧いのを御傍に置きたいと思ふけれど、府中には其に打つて付けといふやうな侍婢も丁度無ければ、良い奉公人を探させねばならぬといふので、院子に其事を命じますと、院子は敬諾つて出掛けまするところへ、丁度遣つて參つたのは趙五娘で、遠國から來たものであるが勸化に就いて下され、と云ひます。院子はそこで取り次ぎますと、女道士の事であるから通しまして、見ると窶れては居りますが人品も打上つた淸らな人ですによつて牛氏も優しく甚の本事を憑むで勸化をするかと問ひますと、趙氏は女一ト通りの事なら大抵な事は致します、といひます。それなら何も苦んで勸化をせずとも此方の府中に居たが宜からうに、といひますと、それは有り難い事でござりまする、といふ。して幼い時から出家しやつた歟、と問ふと、實を申せば夫ある身、と云ひますので、牛氏の方では吃驚しまして、夫ある身とあつて見れば、府中へ置くてとはならぬ故、

寄進布施して遣りませう、といふと、今は何をか包みませう、實は勸化のためならず、此の御府中に居る由の丈夫を尋ねにまゐりました、と云ひ出します。你の夫の名は何と云やるか、而して何として此の府中へ尋ねては來やつた、と問ひますると、直に明白にも云へませんから、夫は蔡白喈と申まする、此方の御府中に居る由を確に聞きまして、と云ひまする。牛氏は院子を呼んで表の方やなんぞを糺させますが、固より其樣な男の別にある譯ではありませんから、僕從は多勢ありまするが左樣いふものは居りませぬといふ返答です。これを聞くと女道士は泣き悲みまして、確に此方に居ると聞いたに、扨は亡くなりでもなされたか、誰を頼りに此からは世を過さうか、と歎きますると、兎に角それでは此の府中に居て心長に安否を尋ねたが可い、併し不吉な其の衣裝は換へねばならぬ、と牛氏は云ひます。趙氏は府中に留められるのは悦びましたが、十二年の忌服がありますから衣服は換へられぬ、と云ひます、と牛氏は驚いて、親の服でさへ三年なものを、

と云ひますから、實は公々の服三年に婆々の服が三年でございます上、夫に替つて夫の分六年の服を身に負ふて居りますから十二年の服がありまする譯で、と答へます、之を聞いて牛氏は其婦道を重んじ孝を盡すのを感心致しますが、何にせよ衣服を換へよといふので衣服を持出させますが趙氏は衣を換へません、髪を梳り粧を改めよといつても其も仕ません、せめてそれでは釵兒でも挿すがよい、と金雀の釵を與へても其も挿しませんで、優しく云はるゝにつけて却つて公婆の事を思ひ出して涙を墮します。牛氏は詐ならぬ孝行の其樣子を見るにつけても感じまして、自分にも自分の公婆が無いでは無いが儘ならぬ世の習でまだ一盃の茶を奉するだけの孝行を盡すにも及ばないのですから不幸ではあるが汝の方が心一杯に孝行したゞけ妾の胸苦しう日を送るより未だ増しなところもあるやうな、それにしてもまあ汝の公婆は何樣して二人とも亡くなつた、と問ひますると、趙氏は今更想ひ起す當時の悲しさ遣る瀬なく、涙片手に。夫の不在に大饑饉に遇

ひ棘を喫ひ髪を賣つて千辛萬苦し、終に自ら土を麻裙に包んで墳墓を築き、手指傷つき破れて血衣を染むるに至るまでの一部始終を語りますと、牛氏は之を聞いて涙漣々として断えません、そこで趙氏は、まあ何として其様に奥様は御涙を御浴しになりまするか、と問ひますと、實は我が夫も久しい間御兩親の許を離れ去つて此地に居らるゝので身につまされて、思はず涙を催した譯、と答へます、そこで趙氏は突込んで、何故また此家の旦那様は御家へ御回りにはなりませんか、と云ふと、妾の父に抑留められるので、といふ返答です、して又此家の旦那様の故郷の御家に御家内は、と又一句深く問ひますると、幸ひ御父様御母様の御世話をする人は有るなれど、汝のやうに行き届いて呉れるか何様かと案じられると答へます。では其方々をお迎へになつたら宜うござりませうに、と云ひますと、其故人を遣つてお迎へに出してあるが未だ音沙汰が知れぬので案じてばかり居まする、との挨拶です。そこで趙氏は段々との談話の中に牛氏の心が優しくて貞しい人であるといふことを悟りまして、何様も虚假などを云ふやうな人でないとは思ひましたが、散々に世の憂い辛い味を嘗めて來た人ですから、とは仰やつて奥様まあ旦那様の御故郷にも奥様が御有りなすつて見る日には行末の御折合が御面倒でござりませうに。と云ひますと、牛氏は些も妬がましい様子も無くて、たゞ向ふの方が汝のやうに公々婆々を大切にしてさへ下さつた方であつたら妾は其方の下に就いて何様なに嬉しいか知れやしない、と飽まで理義に明るくて情の敦い本性を現しますので、趙氏もつく〴〵感じまして、何をお隠し申ませう、實は妾は蔡伯喈の故郷の妻でござりまする、と實を告げて名乗りますと、牛氏は吾とばかりに驚きまして、原來你は我のために幾千の苦勞艱難を御受けなされたか、わゝ濟みませぬ、と云ひさま坐を立つて姐分として拜禮しまして、公々の亡くなられたのも妾のため、婆々の亡くなられたのも妾のため妾が你の喪服を着て此の身の粧を取り棄てたい、と自己の罪を强く責めます。實女と實女とがお互の心の誠を

明かし合つて語ふのですから、聞きも聞かれもする間に一切の事情が解つて仕舞ひます。そこで牛氏は趙氏の衣服が餘り甚いのに、其を換へろと云つても換へませんから、伯喈が歸つて來て趙氏を見た時、自分への手前、人々への手前もあつて、此が我妻とは云ひ難からう、との懸念から、役所から御歸りになると直に書齋へ御入りになるのが常であれば、書齋の中の便宜のものに幾句の言葉を寫して置いて心を強く激まして其後仔細を語るやうになされたら宜からうと勸めますから、趙氏も其意に從ひまする。琵琶記もいよ／＼大詰に近づいてまゐりまする。

さて趙氏は夫の書齋へ入つて何か便宜のものに詩句を題して置きたいと思ひました四邊を見ますと、丁度昨日彌陀寺の中で假に取り收めて置いた畫像の軸を何の圖であるだらうかと書齋掛りの召使の男が掛けて置きまして相公が御歸りになつて御覽になるやうにと其處へ其儘置きさしたのがありましたから、其畫を見るにつけても涙が催されまするが、其軸の裏へと詩を題します。怕るゝところは惟夫の心の風向ですが、此畫の公々 婆々 は甚く窶れて居らつしやるから其とは分らぬにせよ妾の筆蹟を御承知無い事は無ければ、との一事を頼みにして物蔭へ入りまする。

頓て蔡邕は歸つて參りまして常の通りに書齋へ入りまする。古來勸學の文といふものがありまして、書をさへ讀めば其中に自ら黄金の屋もあり顏玉の如き女もあり富貴幸福は自在に得られるといふ事が書いてありまするが、今の自分は却つて字を識り學をなしたゝめに困つて居るので、畢竟 文章 我を誤り我父母を誤り妻房を誤つたと歎きまして、書經を看れば舜の親孝行の事があり春秋を看れば潁考叔が孝心でもつて莊公を感發せしむる廉があるので自分が孝養を盡す事が出來ぬにつけて心苦しく思ひまするから、書籍も看るに懶くて、壁間を不圖見ますると、昨日假に收めさせて置いた畫を何としてか掛けてありまする。見ると誰が書いたものか知りませぬが自分の兩親に酷く肖て居る老いた人が書いてありまするので ハッと思ひましたが、我

が、妻は縫針の道もよく知つて居れば、此畫のやうに破れた衣裳を御父樣や御母樣に着せて置かう筈も無く、また御變りも無いといふ事なれば、此畫のやうに御窶れなされて居られやう筈も無いし、また書信の便りさへ難い此地と故郷との遠い〳〵道程を此の都まで誰が御兩親の御肖像を持つて來やう、さすれば他人の空似には定つて居る、と思ひ返しましたが、ヂッと見て居ると何となく胸が疼くなつて參りまするので、一躰まあ此は神佛の像でゞもあらうか何であらう、背面に標題でもありはせぬか、と背面を見ますと詩が題してあります る。其詩を見ると蔡伯喈は非常に激しまする。其處へ牛氏が入つて參りまするので、誰が書齋へ入つて此軸へ詩を題したと見える、墨さへ未だ乾きゝらぬが、扨怪しからぬと、尋ねまする。一躰何樣いふ詩でござりまする、其意を御聞かせなされて、と云ひまするので蔡邕は一々説いて聞かせまする。「崑山有㆓良璧㆒、鬱々璠璵委、嗟彼一點瑕、掩㆓此連城瑜㆒といふ歌ひ起しは、崑山の璧は美しいが一點の瑕があれば連城の價も下る道理ぢや、といふこと、人生非㆓孔顏㆒、名節鮮㆑不㆑虧、といふのは、孔子顏回にあらぬ人の忠孝の道の缺け勝なのを悲んだ語で、拙哉西河守、何不㆑如㆓皐魚㆒、といふ二句は、魏に仕へて西河守となつた吳起が、一旦立てた我が誓のため、母が死んでも喪のために歸らなかつた事を憾み歎いて、何故に皐魚といふ人のやうにはあらぬといふたので、皐魚は列國に周遊して父母の死目に逢はなかつたゝめに痛哭して、樹靜ならんと欲すれども風寧まらず、子養はんと欲すれども親在さず、と云つて終に悲恨して自刎した古の孝子である。宋弘既以義、王允何其愚、といふのは、宋弘は糟糠之妻は堂より下さず、と云つたんで、王允は妻を去つて特に權門の女を娶つた男であるから、其意も明らかで、風木有㆓餘恨㆒、連理無㆓旁枝㆒、といふ二句の風木といふのは前の皐魚の語によつたので、連理の樹に幾個も旁に出た枝は無いと云ふ意と合せて、父子夫婦の關係は大切にせねばならぬといふのである、寄語靑雲客、愼勿㆑棄㆓天彝㆒といふ二句で全篇を收めてあるが、

此は云ふまでもなく官にありて志を得たる人も立身出世が叶ふたればとて切に天倫に違ふ勿れ、といふのである、と云ふて聞かせまするど、牛氏はまた、それでは親の喪に走るのと走らないのと、妻を棄てるのと棄てないのと、いづれを御學びになりまする、喪に奔らぬやうな事はなさるまいが、今は此のやうに御出世遊ばして居らつしやるに、若し那の糟糠の妻とやらんが襤褸をさげて醜惡だつたら御外聞にも關りませうはどに休書を書いてお仕舞ひにはなりますまいか、と云ひまする。これを聞いて伯喈は怒りまして、無禮なことを云つて人を焦立たせずと此詩を題したものは誰であるか、云つて聞かせよ、と逼りまする。そこで牛氏は趙氏を引出しまするど、愕然として心迷ふ伯喈、愴然として悲みに堪へぬ趙氏、少時は口も互に利かれませんが、段々と趙氏が一部始終を語りまするので、それを聞いて伯喈は痛哭して倒れまする。

李旺は蔡伯喈の故郷へ到りまして蔡老を尋ねましたが分りません、漸く張太公に尋ね當りまして仔細を聞いてすご〳〵と歸ります。牛丞相は強ひて伯喈を婿にして抑へつけて居りましたが、其父母が倶に歿したのであるから、官を辭して故郷に歸らうといふのを止める譯には行きません、特に娘も伯喈に從いて同に行かうと云ひまするのには今更非常の苦痛を感じまして、遣りとも無いが山々ですが人倫の大事ですから仕方がありません、牛氏を手放して遣りました。

伯喈趙氏牛氏等は故郷へ歸りまして父母の墓側に廬を結んで三年の喪に服しまする。其の喪の濟む時に朝廷より一門の孝義を御感になつて御褒美の御使が下りまする。蔡邕には中郎將を授けられ、趙氏牛氏にも御加恩がありまして、亡父母にまで勳位を贈られまする。其御使を牛丞相が勤めまして、それで芽出度一期榮えまする。

文學美術が現世の敎法の範圍の中に押籠めらるべきもので無いことは勿論でござりまするが、されぱと申して放肆淫縱を是としたり橫暴敗德を可としたりするやうな事が文學美術の上の傾向の一つとして讚稱すべき

で無いことは、定まりきつて居る事でござりまする。なんだか餘りに近來色戀の失敗から自棄になつて暴れたり自殺したりするといふやうな事を道理でゝもあるやうに見做して書いた歟と思はるゝ如き小説などが流行致しますやうですから特と其風潮に「まがり」を乘つて此樣いふものもあるどいふことを御眼にかけましたまでゞす。　(をはり)

文園落花錄(一)

文學士　塩井雨江

一、かぐや姫

かぐや姫とは、竹取物語の主人公なる天女なり。姫の故郷は、紫雲の奥、月世界の上なり。故ありて、この下界の竹中にやどられ、竹取の翁に養はれぬ。にはふかんばせ、光るみ姿、もと人界のものにあらず。これをほの見るに、世のうかれ男の心は、皆、空に迷ひゆきぬ。中には、石作皇子、車持皇子、右大臣阿部御主人、大伴大納言、石上中納言の五人は、心も身もうち忘れて、はてもなくあこがれ、是非に我が妻に得させよとて、翁の袖にすがりまつはり給ふに、翁もいとど困じはてつ、いづれにもあれ、よしとおぼす方にと姫に求めぬ、されど、もと貴き天上のおん身なり、低き下界の人と、あだし緣を結ばんことは、姫のみ心にあらず、姫のつひに結びがたき緣なれば、とてもうけひき給ふべきおん事にもあらず、さはいへ、翁が年月の養育の恩義、翁がとかくわづらふ心の中を思ひやれば、さのみうちつけにいなみはてむも、姫のみ心にあらず、よし得難き贈物を求めて、此の人々の遂げがたき願ひを知らせむものとおぼし立たれつ、一人には天竺にある佛の御石の鉢、一人には寶萊山の金銀玉に成れる木の枝、一人には火鼠の裘、一人には龍の首なる五色の玉、一人には燕の子安貝をこそと求め給ひぬ。いづれも世には得がたき物たり、されど、これを取りて得させむ人にとあるに、あこがれたる人々は、いかにもしてと迷ひゆきぬ。小才ある石作皇子は、山寺に

煤けたる賓頭盧の前の鉢を、それと詐り贈りたるが、光りなきによりて棄てられつ。權謀ありて輕薄なる車持皇子は、内匠をあつめて玉の枝を作り出で、欺かむとしたるが、匠等に給金を拂はざりしより事あらはれて、失敗しつ。思慮なき右大臣は、千金に購ひ得たる裘、めら〳〵と火に燒けたるより、其の願ひ空しくなりつ。武家育ちの大納言は、龍首を斬らむと、自から乘り出でたる海上、狂風怒濤、雷鳴に、危くも命を取られむとして、大に姫を恚りて、自から思ひ斷ち、意氣地なき中納言は、高樓の軒に燕の子安貝を取らせむとして、すがりたる綱のきれて、まつさかさまに落ち、燕の糞を握りたるまゝ、腰折れて立たずなりぬ。

五人の人々は、かゝるさまにて、つひに姫をば得ずなりぬ。さるに、姫のおん事、いつしか天皇のおん耳に達しつ。宮中に迎へむとのおぼしめし、おん使に行幸にいと切なり。姫は、それまたうけひくべくもあらず。されど、大かたのきはにはあらねば、さすがになつかしきみ歌など取りかはし居給ひしを、いつしか天上の故郷よりの迎へ下りて、姫は月界に歸へらねばかなはぬ事と成りぬ。やさしき年ごろの翁夫婦に永く別れむは、いと悲し。天皇のみ心に遂に反きまつるも、さすがにいとかしこし。されど、せむ方なきをいかにせむ。姫にとて天上の使のもたらしたる不死の藥を、遣しとゞめて、うれしくおぼえたる人の情けの喜びをつげ、「今はとて天の羽衣着る時は、君をあはれと思ひいでぬる」とのゆかしき一言を、名殘りにして、なくなくも姫はつひにもとの月界の天女と去りゆき給ひぬ。かぐや姫が下界の假り寢はかくて終りぬ。これ、竹取物語一篇の趣向たり。竹取物語は、平安朝の早く出來たるものにて、我が物語文學の祖たり。

これ、もとより作り物語なり。然れども、我れは此の天女を敬愛す。このかぐや姫を敬愛す、姫は誠に我が理想の女子たり。清きやさしき情のいと深きあり、け高き見識のいとたかきあり。我れは實に此の姫を以て理想の女子とし、女子の手本とせまほしうおぼゆ。姫が、人々をすて、翁夫婦をすて天皇をさへにすて

天上に歸り去りたる、其のかたはしばかりを見ば、人情にもとりたりとも思ひひがめられむ。されと、そはせむ方もなきよしありてなり。誠にさり難きに出でたる業なり。姫は、翁夫婦を限りなくなつかしく思ひぬ飽くまでも翁夫婦に別れを惜しみぬ。姫は、かねても天上よりの迎への來たらむを知れば、いつか此のかなしき翁夫婦に別れむことを惜しみて、月夜毎にはいとかなしげにて思ひながめたりといふ。、いよ〳〵其の別離の近く去りがたきを知るや、せめて今一年の猶豫をと、遙に乞ひもとむれども、天上の命いときびしくして、つひに聞き届けられざるに、悲しさ惜しさやる方なくて、月下によ〳〵と泣きふして、人知れぬ涙にくれたりといふ。しかも、今はとの別れの袖に、ふりはへて書きとゞめたまへる形見の筆。

此の國に生まれぬとならば、歎かせ奉らぬほどまで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬる事、かへすがへすはいなくてこそおぼえ侍れ。脱ぎ置く衣を、形見と見給へ。月の出でたらん夜は、見おこせ給へ。

見すて奉りて、まかる空よりも落ちぬべき心地す言、皆情なり、語、皆涙なり。やさしき其の心、深き其の情、誠に泣かるゝものあるにあらずや。しかも、天使の許さゞる不死の藥を、強いて形見に添へとゞめたるの一事、其の情、其の愛つくしたりといふべし。かばかりやさしき情愛の限りなきものあり。去るは、誠に去り難きの事情に出づ。この情愛あり、去つて、何にのもとるべき道もなし。去られて、何にの恨むべきふしもなし。去るも去らざるも、この情愛には、人情は盡きたりといふべし。

情愛のかばかり深きのみならず、姫はまた其の見識の高きあり。さばかりに慕ひよる人々を固く退け、・天皇のあり難きみ志にも、たゞかしこみよろこびの答歌にのみとゞめたる、いとかたくなに似たれども、もと天女の身たり、下界の人と、あだし緣を結ぶべきにはあらず、姫は、固く此の見識に立ち、固く其の品位を守りたるなり。此の見識なるかな、此の見識なるかな。彼の利につき慾に まか する當世の 汚き女子の世界に

は、夢にも覩るべからず、すべて、今日下界の女子は、自家の見識自家の品位を守るの氣節に乏し。我れは、この姫が見識を、理想として、浮世の女子の、これにならはむことを望むものなり。

姫は、飽くまでもやさしき女子の德を具へたり。而して、其の別れんとするにわたり、うれしき心の形見にとて、脫ぎおく衣に、不死の藥を包み遺さむとするを、迎への天人どもは、これを許さずして、疾く天の羽衣を着せ奉らむとのゝしり騷ぐや、姫は、しばし待てと叱して、心靜に天皇の許へのおん文を書きいで、今はさすがにあはれに名殘りをしとのみ歌をさへによませられ、しかも、自ら强いて不死の藥をも、心のまゝにとゞめたまへる、沈着にして物に動せず、凛として犯すべからざる威風の誠に仰がるゝものあり。此の沈着かな。此の凛たる威風かな。由來、今日下界の女子は、柔弱にして物に屈しやすく、氣弱くして、物に騷ぎ動き易し。

溫順柔和は女子の美德、缺くべからず。然れども、また、此の動せぬ氣性、この犯すべからざる威風、且つは必ず具へざるべからず。然らざれば、健全なる德をそなへたる女子にはあらざるなり。我れは、此のかぐや姫の此の氣性を以て、浮世の女子が精神の修養を願ふものたり。

此の情愛、此の見識、此の氣性、此の尊ぶべき天女これぞ、誠に竹取物語の文學が、浮世の女子に與へたるの手本なる。あはれ、大かたの淑女よ、此のかぐや姫の人物を敬慕せよ。敬慕して、而して、此のかぐや姫の心に行ひにならへよ。ならうて、而して、健全なる女子とならむことを。

二、萬葉集に得たる可憐の夫婦

萬葉集は、我が歌を集めたる、最も舊き書なるは、人の知るところなるべし。此の歌集を讀みて、我れは可憐なる夫婦を得たり。十三の卷に出でたり。

○

つぎねふ山背路を、人づまの馬より行くに、おの

づまの歩行より行けば、見る毎に音のみし泣かゆ。そこ思ふに、心し痛しゝたらちねの母が形見と、我が持たるまそ鏡にあきつ頭巾負ひ並めもちて、馬買へ、わがせ。

まそ鏡持てれど、吾れはしるしなし、
君が歩行よりなづみ行く見れば。

歌の意は、「山城への山又山の嶮路を、他の人の良人たちは、皆馬乗にて安らかに行くに、我が良人は獨り歩行にて苦しみ行く。それを見るに、我れは悲しくて涙のみこぼる。さぞや良人の苦しからむと思ふに、いとゞ痛はしくて悲しさ堪へ難し。あはれ、我が良人よ。我が母の形見とて、我れは鏡と頭巾とを所持せり。此の二品を共に賣りて、其の金にて馬を買ひ給へ。さて馬に乘りて行き給へ。母の形見の鏡、もとよりいと大切なり。されど、我が良人のかく難義せらるゝを見れば、徒らに此の鏡を秘藏するとも、何んのかひもなし。君の難義を輕うする爲めには、鏡も惜しからじ。賣るとも更に惜しからじ」といふ意なり。

大和に住みたる貧しき夫婦の者が、山城へと志して作れ立ちて旅に出でたるなり。途中、人々は皆乘馬にて安らかに行くを、此の夫婦は貧しければ、馬ももたぬ故に、徒歩にて山路をたどり行きたるなり。人々の乘馬を見るに、また、良人の徒歩の苦しさを思ふに、貞婦の情、さぞやといとゞ忍びかねつ、我が母の形見の鏡を賣りて、馬を買ひ乘りて行き給へと、良人にすゝめたる歌なり。良人を思ふ貞婦が可憐の心情、いかに斷腸の限りならずや。これを聞きたる良人の心は如何。

○

馬買へば、妹歩行ならむ。よしえやし
石は踏むとも、吾は二人行かむ。

これ、良人が、妻に答へたる歌なり。意は、「汝の情けにまかせて、馬を買はゞ、我れは、それに乘るを得て、安らかに行くを得べし。されど妻の汝は、やはり苦しき徒歩を爲す事なり。いかでさる事に忍びんや。よし嶮岨なる岩路の徒歩、いかに難義なりとも、我れ

はやはり斯くて伴れ立ちて徒歩して行かむ。難儀すべくは、夫婦、難儀を共にして行かむ」といへるなり。妻を愛する良人の情、誠に可憐にやさしからずや。妻たり、良人たり、斯くてこそ、眞に夫婦が同心一體の實を得たりといふべけれ。此の愛情此の同情、かくてこそ、いかに苦しき生路にもあれ、いかに貧しき境遇にもあれ、いかなる寒屋破窓のいぶせき内にもあれ、樂しき温き家庭は作るを得べきなれ。彼の妻女を、おのが劣情の奴隷視して、更にあはれともかへり見ず、獨りわだし酒池肉林の間の獸行に耽る世間の男子、さては、良人が生路の苦勞も知らぬ顔に、徒らに美衣を競ひ逸樂をはてる世間の女子、少しく、これ等古人が夫婦の情愛を聞け。聞きて、而して、これ等の夫婦にならへ。ならうて、而して、人間、眞實の夫婦となれ。而して、美なる家庭の父母となれ。

物語と歴史

鷹野止水

國史と國文とは密接な關係を有して居る、國史を學ばんには國文の力をも要し、國文を學ぶには亦國史の力をかりねばならぬ、其國の文學は其國時代現象の反映であれば、文學の上に其時代の現象は如何であつたかといふ事をあらはして居る、試に吾國上代の記錄、古事記、日本紀等の中に見ゆる所の歌、萬葉集の歌などを見れば、上代の人情風俗から其時代全般の事情が現はれて居つて、上代の人情風俗の如何に質朴であつて虚飾がなく天眞爛漫であつたかといふ事が知られる、又少しく降つて平安朝の文學は如何であつたかを見たならば、平安朝の時代思想は此時代の日記物語等に現はれて居る、平安時代は世は泰平になれて、天下の風俗は益々浮華に流れ、文學盛に行はれ、經國理財の實學を省みるものなく、皆文筆を弄して、文弱の弊を流した、隨つて此時代の文學は優麗婉美で、雄健の風は

更になくつて、よく此時代の暗流をあらはして居る、此時代にあらはれて日記物語等にうつし出された人情風俗、殊に男女の狀態等を觀察して見れば、實に想像意外のものがある、又降つて武家の世となつて軍記物語、紀行等を見、又近く德川時代の小說戲曲等を見たならば、各時代の狀態を知る事が出來る、殊に此小說戲曲、物語等は、歷史にも載せられぬ樣な風俗情態を忌憚用捨なく露骨に描してあるから、虛飾ある歷史の補遺として見る事が出來る、故に余はこれらの國文書類を見るものは、單に文學として詞華言葉を翫ぶのみでなく、歷史の補ひとして、眼光紙背に徹すといふ樣に研究する事を望むのである、今次に其實例をあげて其關係を明にいたします。

（一）　物語と歷史

物語については中内文學士の、物語の發達といふ題で本誌に委しい御說がありましたから、茲には別に述べるの必要はありません、たゞ文學と國史との關係は前述の如くでありますから、物語類を御讀みなさる時は其心で、單に文學として見るばかりでなく、又一部の歷史として充分に玩味したならば、國史國文と並びに得る得が多く、一擧兩得といふべきである。物語の種類はすでに御承知の事なれば省略して茲に史的方面から大別して見れば

一、史的物語　史的事實を記したもので、榮華物語、大和物語等は事實を主として記したものであるから、大鏡、水鏡、增鏡等と共に史籍として、見る事が出來る、凡て史的事實を主としたものは此部類に屬する。

二、作り物語　架空の作もあれば、事實と虛僞と半半のものもあれば、又寓意的の作、諷刺的の作もある、源氏物語、空穗物語等は架空の作物で今日の小說の如きものである、伊勢物語、大和物語、住吉物語、今昔物語、平家物語、秋の夜長物語等は虛實半して居る、竹取物語は架空の作なれど、寓意の作である事は讀者のすでに知る所、

一の史的物語の歷史と密接の關係あるは勿論であるが

この架空の作物語でも其時代の人情風俗の眞想を知るには是非一讀せねばならぬ、亦文學史、言語學史等を研究するには、兩者共に尤も必要の材料である。

（二）　歌集と歴史

物語と歷史との關係は前述の如くであるが、今度は歌集と歷史とは如何なる關係を有して居るかといふと、もと歌といふものは古今集の序にもある如く、人の心を種として、見るもの聞くものにつけて、已れが思想感情を言葉にあらはしたものであるから、感情きはまりてあはれ深き歌には、天地も動き鬼神も泣くといふ樣な次第である、で中世になつては題詠といふて題を設けて詠んだものが多いから、あまり歷史に關係したものは少ないけれども、上世の歌は題を設けず、其折の事物を詠じたのであるから、歷史の一助となるものが多い、今先づ歌集の種類を擧げで、次に歷史の事實と關係の深い歌について述べる事としやう（歌の種類沿革等につきては他日別に記す事とし茲にはたゞ歌集と歷史との關係につき記述す）

一　撰集

撰集には勅撰と私撰とある、勅撰集は勅を受けて數多の人の作歌を集めたもので、古今集の如きものである、三代集、八代集、二十一代集などいふのは勅撰集の總稱である、今勅撰集の時代及作者を擧げて見れば

古今集

醍醐天皇の延喜五年四月、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒等が勅を受けて撰したもの

後撰和歌集

村上天皇の天暦五年十月、清原元輔、源順、紀時文、阪上望城等の撰したもの

拾遺和歌集

此集は花山天皇の親ら撰ばれたものだといふ説があるけれど、加茂眞淵翁の説によれば一條天皇の長德年中藤原公任卿が撰したものである、以上の三を合せて三代集といふ

後拾遺集

白河天皇の應德三年、中納言通俊卿の撰したもの

である

金葉和歌集

崇德天皇の天治元年、白河法皇の院宣によりて木工頭俊頼の撰進したものである

詞花和歌集

近衛天皇の天養元年、左近太夫藤原顯輔が崇德上皇の命によりて撰進したるもの

千載和歌集

後鳥羽天皇の文治四年に、藤原俊成卿が後白河法皇の院宣によりて撰進したもの

新古今集

土御門天皇の文久三年に、後鳥羽院の院宣を受けて、藤原定家卿外五人で撰したもので、古今集以下此迄の八集を八代集といふ

新勅撰和歌集

後堀河天皇は貞永元年　藤原定家卿の撰進したものである

續後撰和歌集

此集は後深草天皇の建長三年に、藤原定家の子爲家が後嵯峨上皇の院宣を受けて撰したもの

續古今和歌集

龜山天皇の文永二年に、藤原爲家、藤原基道等が後嵯峨院の院宣によりて撰す

續拾遺和歌集

龜山天皇の文永十一年藤原爲氏が撰びしもの

新後撰和歌集

後伏見天皇の正安三年に、藤原爲世が後宇多上皇の院宣によりて撰したもの

玉葉和歌集

花園天皇の朝に藤原爲兼の撰進したもの

續千載和歌集

花園天皇の文保三年藤原爲世が後宇多院の院宣によりて撰進したもの

續後拾遺和歌集

後醍醐天皇の元亨三年　藤原爲藤撰す

風雅和歌集

光明天皇の貞和年中花園院の親ら御撰あらせられしもの

新千載和歌集　後光嚴天皇の延文二年に藤原爲定の撰進したるもの

新拾遺和歌集　後光嚴天皇の貞治二年に藤原爲明の撰したもの

新後拾遺和歌集　後圓融天皇の永和元年に藤原爲遠の撰したもの

新續古今和歌集　後花園天皇の永享年中に飛鳥井雅世の撰したもの

以上二十一集を總稱して二十一代集といふ

私撰集　は一個人で數多の人の作歌を集めたもので其時代々々に澤山ある、此外類題集といふものがある、これは數多の人の作歌を集めて其歌を春秋夏冬雜といふ樣に分類して、其中を又類別して梅の歌は梅の部に集め、月の歌は月の部に集めるといふ樣に分類のものを集めたものである、

家集　これは自分の作歌を集めたもので、古から今までのものを擧げたならば、其數は迚も數へ盡せるものでない、

歌集の種類は前述の如くである、それで歌はもと物事に感じて、其感情をあらはしたものであるから、其歌は其人の思想のある限りは何程でも出來る、で中世の題詠の歌には少ないが、上世の歌は題詠は少なく、其歌を詠んだ時とか場合とか場所とかは其はしがきで分る、凡て歌を解するには時と場所とを知らねばならぬ此歌は誰々が何れの時に、何々の事情があつて作つたのであるとか、又此歌は誰々が何々に感じて作つたのであるとかいふ事が分つて初めて其歌の眞意が分るのである。只何の意もなく言葉を弄した計りのものは人の心を動かすことは出來ない、で其歌を詠んだ時と場合と分つて其歌を解し其時代の歴史と比較して見ると物語と歴史とに於ける如き關係を見出す事が出來る、其關係を精密に研究すると、或は正史に漏れて居る事實を發見する事もあり、或は正史の誤謬であるといふ

事を見出す事も出來る、例へば、古今集の春の部の

　君が爲め春の野に出で丶若菜摘む
　　我衣手にゆきはふりつ丶

といふ歌がある、此歌の大意は、今君に若菜を贈るが此若菜はワザ〳〵君に贈るために、自ら野邊に出かけて摘んだのであるが、まだ野邊は寒くて、若菜を摘む時に雪が袖に降りかゝつて、大に難儀したが、たゞ君に贈るためなれば、別に難儀とも思はなかつたといふ意で、今からいへば、随分おもはせぶりの歌である、でたゞ此歌丈けでは其れだけの意味であるが、此若菜の贈り主は誰れで、贈られた人は誰れであるかといへば、此歌のはし書きに

　仁和のみかど、みこにおまし〳〵ける時に人に若菜賜ひける御歌

とかいてある、これで其贈主も贈られた人も、其時も分る、仁和のみかどとは即ち光孝天皇である、仁和は光孝天皇の御代の年號であるからこういふたのである。みこにおはしまし〳〵ける時といふのは、光孝天皇が未だ位に即かず、親王でありし時といふのである。それで人といふのは藤原基經をさしたのである、されば、光孝天皇未だ親王の中に藤原基經に若菜を贈つたのである、で此事實と歴史と比較して見るとなか〳〵面白い事實が分る、此時の歴史は如何であるかといへば、藤原基經は實妹高子を清和天皇の女御に納れて、高子は貞明親王を生まれた、基經は外舅となりて威を振はんとして、天皇に強ひて位を貞明親王に遜らして、陽成天皇と申すは此貞明親王である、處が陽成天皇は御性質人主の器に堪へ給はぬといふので、諸皇子の賢者を撰んで位を遜らせ申さんとし、宮中に諸皇子を撰ばれた、其時諸皇子は皆粧飾して御出でたのに光孝天皇は常のまゝでおはしました、それで基經が天皇の賢を知つて立て申したといふ樣にある、で前の歌の事實を比べて見ると、此前にすでに基經は光孝天皇の親王でおはしました時御知り申て居つたのである、で此歴史の事實は三代實錄に依つたもので、三代實錄は藤原時平が勅命を奉じてかいたものであるから萬事藤氏の都合

のよい樣に虛飾したのである、
此關係を今一歩進めて精細に觀察して見れば、基經は始め其妹高子(即ち二條の后)を淸和天皇の女御に納れて、其出の皇子を天皇に戴き、外戚となつて權勢を振はうとした、處が在原業平朝臣はもとより藤氏の權勢を惡んで、これを抑へ樣と欲して、高子の入内を妨げた(此事は伊勢物語に委し、物語と歷史の關係深き又知るべし)それで高子は實は女御となる事は出來なかつたのだ、その中に陽成天皇を御生みなされたのだ、それを實錄には實に女御となりし樣にかゝれてある、これは藤氏が藤家の爲めに事實を枉げて虛飾を加へたのである、此事は古今集に文屋の康秀の。

二條の后の東宮の御息所ときこえける時云々

とあるにても分る、この東宮の御息所といふのは、東宮の御息所といふ意でなく、東宮即ち陽成天皇を生みし御息所といふ意である、
又全しく古今集春の部に

二條の后のとう宮のみやす所ときこえける時、正月三日おまへにめして、おほせごとあるあひだに日は照りながら雪の頭に降りかゝりけるをよませ給ひける、

春の日の光にあたるわれなれど
頭の雪となるぞわびしき

とあるは、二條の后は前に申せし通り藤原高子をさし東宮は皇太子、「東宮の御息所」といふは皇太子の奥方といふ意であるけれど、此所は東宮は陽成天皇をさし此東宮を生みし御息所といふ意で、源氏物語に東宮を生み奉りし女御を、東宮の女御といふと全しく、此頃の一習慣であつたのである、おまへは御息所の御前で康秀を御前に召されて、何か仰せ事ありしとき日は照りながら雪があたまにかゝりたのを、康秀に詠ましめた時春の日の光云々と詠まれたので、一首の意は東宮の御息所の御前にあるなれば、東宮を春宮とかくより春宮の寵命を蒙るのを、春の日ののどかなる光にたとへて、春宮の寵を蒙つて身は榮なれど、すでに年老て白髮になり餘命少なきをかこちなげいたのである、

次に萬葉集に
天智天皇の御製の三山の歌といふのがある、

中大兄三山歌

かぐやまは、うねびををしと、みゝなしとあひあらそひき。かみよより、かくなるらし、古も、しかなれこそ、うつせみも、つまを、あらそうらしき、

この歌の大意は、かの大和にある、かぐ山(男山)みゝなし山(男山)うねび山(女山)の三山のむかしがたりをきくに、かぐ山(男山)はうねび山(女山)を愛して、耳梨山(男山)と相爭ひたゝかいしといふが、神代から非情の山ですら、かやうにあらそひしといへば、今の世の人の妻を爭ふも道理であるといはれた意である、たゞ此歌のみでは此れだけの意なれど、これを當時の事情にてらして見れば、たゞ單に其歌の意のみでなく何か寓意があるのである、即ち此時、額田女皇操行修らず。天智、天武御兄弟になびきし故、御兄弟にて此女王を爭ひ給ひし時の意を寓して詠まれし歌である、額田女王の歌も澤山出で居るがこれらの歌によりて、壬申の亂の原因を考へて見れば、壬申の亂は、正史に見ゆる如く、全く政治上の關係ばかりでなく、すでに御兄弟相爭ひて御中がよくなかつたのである、

以上述し如く物語と歴史との關係、歌集と歴史との關係は大畧述べつくした。猶日記、記錄、と歴史の關係紀行文と歴史の關係につきては物語、家集等の歴史に於けるが如き密接の關係があるから、號を追ッて記すことゝいたします、



史傳

光榮ある露國皇帝の保姆（其三）

丹下時子譯

光榮ある生涯（上）

メレーは、夫人の親切なすゝめに、とう〳〵大公爵ミカエル殿下のお附になり、彼の美しい宮殿に住ふ身となりました、

さて、其頃ミカエル大公爵殿下の御養育掛長と申すのは、貴族中第一位の夫人アブラクシニ内親王であらせられて、其嚴しい事は皇帝ニコラス第一世にも劣らぬ方でありました、さればかゝる夫人の心に叶ふ樣にする事は、並大ていの事ではありませんでした。

しかしメレーは、只々自分の本分は、いかなる事かと云ふ事を考へて、身をつゝしみ事を處理して行きました。

宮中にあつても、メレーを知らぬ者は、メレーの出世をねたんで、色々惡樣に云ふ者がありましたが、其樣な時にも親切なやさしい心から、決して其人を恨んだり、憎んだりなどはせず、かへつて親切に仕まするので、

果はたれ一人惡しく云ふ者もない樣になりました。

それにメレーは、自分の預り君の上、只々御身體御健康のよろしい事のみに滿足はしませんで、常々から、人は凡て子供の內のしつけが最も大切なものであると、精神教育に付てしきりと心を碎きました。

ニコラス第一世陛下は、皇帝として實にお嚴しくあらせられましたが、また一方には、極やさしい父君であらせられました。

されば御子樣方の御寢時間前に、お暇があらせられさへすれば、いつもお訪ひ遊ばすので、またそれを何よりのお樂しみと遊ばされました。陛下はよく英語に通じ給うた故、メレーとよくお話を遊ばされました、そして

或夜の事、ミカエル大公爵の御寢なる御樣子を御覽せんとて、御寢所へ成り遊ばされました。

其時陛下の御目に入りましたのは、お附の寢臺の後に淺黃色のリボンで結んであつた杖が御ざりました。陛下は、

「あれは何か」

と、御問ひ遊ばされましたからメレーは

「御意で御ざります。これは、ミカエル大公爵が、いかゝな御所業のあらせられた時、お打ち申上る杖で御座ります。」と申し上げると陛下は

「して、大公爵は今までに、あの杖の入用の事が、あツたかね。」

「御意に御座ります。露國皇帝の皇子であらせらるゝ御方樣が、お湯を召すときおむづかり遊ばすなどとは、御身分に似合ぬ事で御座ります。そこで始めておむづかり遊ばした時、あの杖を御覽に入れました。二度目には杖に接吻をおさせ申しました。それから、三度目には私がその杖をうけました。それからは決して彼の杖

の入用が、御座りません。」

と言葉しづかに言上しました。陛下は、まことに御機嫌麗はしく、しづかに右の手を眞實なお附人の肩へお置き遊ばされて、

「朕は、我國中に己が本分を盡すところの一婦人のある事を、深く感謝する」

と、仰せられました。

實にミカエル大公爵が、メレーに依つて養はせられたる克己性は、全くあやまりませんでした。其後十數年を經て、大公爵が、すでに成人せられてからの事でありましたが、陛下はメレーに、陛下の御不興を受けられなかつたのは、只にミカエル大公爵ばかりでおはしたと、仰せられた程でした。

都府の人々は、度々天氣のよい日、彼の大公爵が、メレーに連れられて、チーバー河の堤上、しかも花剛石だたみの堤の上を、運動遊ばされるのや、また曇つた樣なうつとうしい天氣には、馬車を驅つて、運動に出られるのを見上げました。かくして七年も時の間に經ちました。大公爵は、此の眞實なお附の手から離れて、學問掛りの手に、かゝらせられる事になりました。

しかしメレーには、お暇は出ず、美しい宮中の部屋を給はつて、そこにをりました。大公爵は、古い御附の事を少しもお忘れなく、度々メレーの許を音づれなされた。しかも此皇子こそは、後にコーカサス及びジョージャ地方の准皇帝にならせられたお方でありました。

さてメレーの娘マーガレットは、年もはや二十歳をこえ、教育も十分に調ふて、立派な婦人となりましたが、當時位置もない工學士の妻となりました、まことや母親のかくまで、心を入れて育てた程あつて、マーガレツトも母を思ふ事一方ならず、常に母メレーを、彼の美しい宮殿の部屋に訪ひました。

メレーも、大公爵の御成人遊ばされたので、手が明きましたかと申すと、決して左樣でなく、一日として空しく日を暮しはしませんでした。丁度其頃ニコラス皇帝の第一の皇子、後にアレキサンダー第二世とならせられたお方の皇子が、御誕生遊ばされました。

其皇子は、即ち露國の皇嗣であらせられましたが、其ニコラス殿下を、七年間御養育申上る事になりました。此度は前の經驗もあり、一しは立派におそだて申す事が、出來ました。其上今は、メレーの位置も高くなり、また眞實な、謙遜な、最も尊敬すべき行狀等に、宮中の人々も全く敬服して、誰敬はぬ者もない程でありましたので、あづかり君のニコラス殿下などは、伯父君ミカエル大公爵のしたはれた樣に、非常に夫人をしたはれました。

しかし夫人が、殿下をおあづかり申てから四年目に、一つ心配がおこりました。それは外の事でもない、其頃或男爵夫人が、殿下の御養育主任となられましたが、此の夫人は、何でも自分の敏腕家であると云ふ事をあらはしたいので、しきりと新職務に付て新らしい規則や、色々自分が斯うと思つた事は、さつさと改正すると云ふ風にせられました、それ故あれも悪い、此所も斯うせねばならぬなどゝ云はれて、多くの人とも、あれこれと相談をせられました。そこでメレーは、自分がかつて十年以上も力を盡してやつて來たのに、それを、新参の人にとやかくと批評をせられたり、干渉せられたりするのは、何分體面を損する次第であると思ひ、其上に男爵夫人の改革の方法が、よろしくない事を確信したので、これでは行かぬ、もし夫人が、此の樣な下手な改革を、仕られなかつたならば、自分はどこまでも、自分の感情はおさへて、夫人の指揮に從ひもせうけれど、何分これでは捨て置かれぬ、もはや皇帝へ直々に上申するより外に、策はないと思ひました。そこで直に陛下へ、

「此の度男爵夫人が、御養育法に付て改革案を提出なされましたが、自分は斯様々々しかじかの次第で、それに賛成は出來ませぬ、もし男爵夫人の意見通りに實行せらるゝとならば、とても此の役目はつとめかねまする故、お暇を下しおかれまする樣に、」
と事を譯て上申しました。そこで陛下は、直にメレーの心をお悟りになりまして、
「男爵夫人は天下澤山あるが、メレーは只一人である」
と仰せられて、男爵夫人を免せられました。

光榮ある生涯(下)

さて、第二回目の七年の終りで、メレーのおつとめも全く終を告げました。メレーは、夏は夏御殿に、冬は冬御殿と御殿内におへやを給はつて、退隱の身となり、娘の許へ行きたい時は行て見たり、極々氣樂な餘命を送つて居りました。そして宮中のお方々のおぼえも目出たく、皇帝陛下は、早御他界遊ばされましたが、皇太后からは、毎々御召がありました。

かつて貴族にとり立んとの仰も御ざりましたれど、メレーは勿體ない其樣な事は、自分の身にふさはぬ事で、以前の身分に對しても、相等しませぬからと、固く御辭退申て受けませんでした。

これ程でありました故、朝廷よりは、メレーの爲め遂せる丈け、何から何まで手厚い御待遇で、馬車なども、皇族方お召用のを用ふる事まで、ゆるされました。

メレーは、馬車に乘つて森の中や、市街を通行する時に、いつでも自分が幼かつた時を思ひ出しては、そゞろにない母親の事をしのびました。

「アヽ彼の時、おとなりの人に途中であつた時、荷車の上へ乗せて連れて歸つて貰つた時には、母上のあの樣な顔をせられた、今はそれを見る事も出來ぬ。しかし、もうまたお目にかゝる時に間もあるまい、こんどは何んな處で、お目にかゝるかしらん」

などゝ、現世身のはかない命、いかに此の世の名譽榮華が、むなしい、賤しいものかと、思はれました。

一千八百五十五年ニコラス帝はおかくれ遊ばして、第二世アレキサンダー帝が、國權を握られました。然るに此の君は、早くお他界遊ばされましたので、弟皇子がアレキサンダー第三世として、御代をしろしめし給ふた。メレーは、いよ／＼宮中に時を得る身分となりました。

けれど昔の事を決して忘れず、極々質素に身をつゝしんで、おごらず、たかぶらず、持つて生れた謙遜な性質のまゝに、ふるまひました。それ故にかねてより、メレーを尊敬して居つた女官方に對しても、好い手本でありました。

よはひも多く重ね、曾孫も見、親戚朋友も多くありましたので、一日とて訪問者のない日とては、ありませなんだ。

其訪問者の中で一番足しげく見えられたのは、メレーがもと育てあげたエドガー氏で、毎日三十分位づゝは止まつて、昔なじみの乳母と、色々の話をしたり、部屋にかざられてある畫などを、賞美せられました。

其畫の内には、無雙の品があつめられてありました。それは皇帝皇后などの、御幼少時代のおすがたから、また皇位に昇らせられた御立派なおすがたまでを、集めたものでありました。尤もミカエル大公爵のは、畫中でも眞正坐にかけてありました。

かく大切に人々から尊敬せられた夫人も、年には勝てず老衰して、床につく樣になりました。多くの皇族方は、

皆夫人の病床にまゐられて、看護もせられましたが、絶えず病床を離れずあらせられたお方は、ミカエル大公爵夫人でありました。

か丶る勿体ない有様の内にも、メレーは信仰愈々固く、しかも其信仰に依て、昔から今まで凡ての困難や、苦痛に凌いで來たのでありましたが、またそれに依て、平和に永い眠につきました。

教會で盛々式を擧げ樣とする時、大公爵ミカエル殿下、及皇太子殿下には式場に列せられました。

それから祈禱埋葬式文の終りますや、大公爵は立つて棺のそばにより、本日の喪主になつたエドガー氏を助けて、ひつぎをひつぎ臺の上までのせられました。さて被り物も被らせられず、徒歩して此の棺を送られました。

其後露西亞皇族よりは、ピータスバルグの近郊の、外國人埋葬地へ、大理石で美しい立派な、石碑を建立せられました。

かくの如くにして、彼の愛蘭の片田舍の、つまらぬ家に生れたメレーヒユースは、彼の女を知つた者に皆な愛せられ敬せれて世を終りました。

實にメレーは、己が引受けたる事は、潤々誠意を以てなし遂げやう。務に對しては、どこまでも忠實に盡さう。かつまた高きに昇つても、ます／＼謙遜に只眞實の名譽を重んじて、それを得やうと、つとめられた人でした。

かくの如き人こそ、實に我等の手本として、學ぶべきであると思ひます。元よりメレーが得た樣な地位などは、萬人が得やうとて、得られぬかもしれられぬ。しかし私共に對しては、露西亞皇帝のおほめ言葉よりも、なほ大なるお言葉があります、即ち人各が此の世の旅路を終へた時に、

「忠義にして良きしもべよ、汝よく務をなし終へたり。わがよろこびに入れよ。」

との神の御言葉であります。ア丶其御言葉を受けた時の喜びは、どんなでありませうか。これにまさる喜びが外にありませうか。

（終）

科學

冬の世界（下）

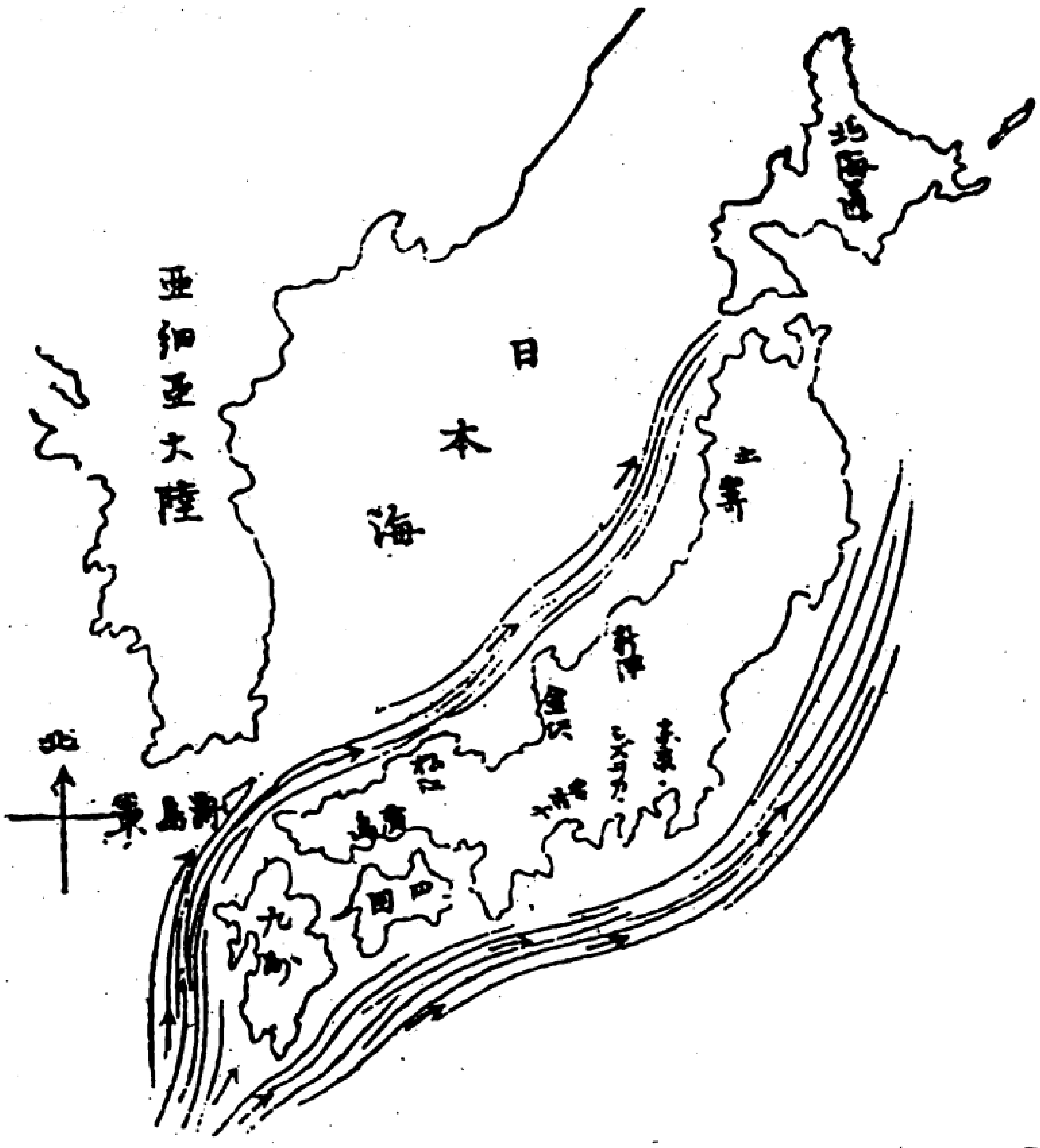
藤堂梅軒

三月といへば、既に冬は過ぎて、春の中に進んで居るそれに冬の世界として話し出すもチト不調子であるかは知らぬが、併し猶餘寒の季節に屬して、屢々雪は一面に銀世界を呈することもあり、未だ我々の家は火櫃に親しみ、學校はストーブを見棄てぬ折柄である。全體、今度の冬の長さは、暦に依りては、二月三日までと定められてはあるが、實際に於ては、地方によりて違つて居る。東京や中國邊では、此の暦通りに合ふであらうが、九州や琉球に至れば段々と早く濟み、殊に臺灣になると、我々の考へて居るやうな寒い冬はないといつても差支ない。即ち南方に至れば、段々に、冬の始まるも遲く、終るも早いといふことになつて、詰まり、臺灣邊では、餘り遲く始まり、餘り早く終るので、殆んど冬は一度も來ないかのやうになるのである。

ところが、仙臺や青森のやうに、段々と北へ進むと、これに反して、冬の始まることは早く、終ることは遲くなるので、丁度此の頃の三月に、仙臺から、綿入を厚く重ねて、東京へ來ると、屢々汽車が未だ東京に着かぬ頃から、ムー〳〵と暑さに堪へられなくなる例がある。又東京の人が既に梅の花に見倦きて、青森に行くと、未だ一粒の梅を見ることの出來なかつた話は幾等もある。して見ると、冬の長さは地方によりて、違ふことが分かる。それで梅軒が今時に冬の世界をつゞいて話すも、差支なからうと思ふ。

日本では冬時、何處が一番に寒いであらうか。それは

北海道だとは、離れしもいふが、東京や静岡名古屋廣島などの東海道山陽道筋と、新潟、金澤、松江などの北陸道、山陰道筋とは、どちらが寒いか。多くの人は前の方が温かで、後の方が寒いと考へるだらうが。實はそんなに違はないで。矢張り新潟の寒さは、東京くらゐで、廣島の暑さは、松江と差程に變らない。何故にそうであらうか、總て氣候は海に關係するもので、北の海の水が温かであれば氣候も暖く、冷ければ寒い。日本には南の方臺灣の邊から東北へ流れて來る潮流があつて、その水が温いから、其の流れ行く近傍の地方は皆氣候が暖かである。此の潮流を日本海流といふて、それが琉球から東北へ進んで九州に觸れると、二つに分かれて一は九州の南東から四國の南に沿うて、東海道を掠めつゝ東北へ遠く去つて了ふ。これを黒潮といふ。他の一は九州の西岸を洗うて、對島の海峡から日本海に入り、山陰北陸に沿うて、北の方へ去つて了ふ。これを對島流といふ。此の對島流と黒潮との二流は、共に其の本は一つの温い日本海流であるから、從つて此の二流に沿うて居る地方は何れにしても温かいに違ひがない譯である。



ところで、此處に一つの疑がある。北陸、山陰は雪の

降ることが多いに、東海山陽は甚だ少い。世間にもいふ通り、雪が多く降るから寒いといふ理窟もないので詰まり雪は地方によりて多く降ると少く降るとの差別がある。そこで何故に北陸、山陰は雪が多いかといふに、前にも說した、彼の對馬海流の溫いために、盛んに水蒸氣を上げて、其の地方の空氣が濕つぽくなつて居るところへ、絕へず亞細亞大陸から吹き來る冷い風が、これに觸れて、急に其の水蒸氣を冷やし固めて雪にして了ふのである。越後地方の如きは、今頃でも猶大した雪降りで、七八尺も一丈餘も積り、人は屋根の天窓から出入するとかいふ話で、隨分北國の雪に就いては面白い奇談もある。越後の高田の如きは、日本中で最も雪の多く積る所だといはれて居る。

雪といふものは、どうして出來るのであるか。それは空氣中にある水蒸氣が、寒さに出遇つて、極細かな水玉となり、それが空中に浮び漂ふて集まれば、即ち雲といふものである。鐵瓶から上る湯氣や、我々の口から出る呼氣のやうなものを集めれば、即ち雲と同じものとなるのである。此の雲が、モ一つ冷えれば、固まつて大きな水玉となり、それが重くなつて地上に落ち下れば即ち雨といふのである。

雪は雲が雨とならぬ前に、極冷かにされたために、細かな水玉が其のまゝに、固まつて出來るのである。今袖の上に落ちた雪の一片を注意して視るならば、まるで花のやうである。更にそれを虫眼鏡で眺めるならば實に何ともいはれぬ美しい紋形をなして居る。其の紋形は何れも六角形や六本の矢車のやうになつて、天然の仕事の美妙には驚き入る外はないであらう。

此の樣に冬の間は土地一面に雪が積る程であるから、植物も動物も靜まり切つて、何處に居るか、何處に榮えて居るか、殆んど認められない。

植物を見渡せば、松や檜等の如きは相變らずして綠の操を改めないが、他の植物になると、萬木枯れ失せたるが如く、青草は影だも見ることはない。何が故に冬の世界には、植物が此のやうに、癈れるのであるか、只寒のために、一時を凌がんとて休息するのである。

秋風颯と吹き渡つて、肌に冷氣を感ずる頃となれば、樹の葉は漸くに其の緑色を變じて錦を染める。斯くいへば、何となく好いが、實は其の色の移ろうたので、即ち植物の老衰を兆して來たのである。其の移ろい去る緑色とは、葉の生活に必要なる有機物で、これが所を轉じて、段々と莖などへ逃げ去るので、跡に廢物の





無機物等が褐色となつて殘る。枯葉とは即ちこれをいふので、斯くなつては、其の枝に安閑として居ることが出來なくて、容易く其の柄根からもぎ去られて了ふのである。

此の樣に葉が無くなれば、植物の呼吸も、消化も、皆其の作用を止めて了ふから、そこで根から水分や滋養分を吸ひ上げることも、冬の間には暫く休むのである。それだから、冬の間に樹を移し植ゑると枯れることが少いといふので、即ち根は勿論植物全躰が休んで居る折柄であるから、何處に場所を移されて一時は根の尖を痛められても、堪えられるのである。松や柏のやうな、根の付き難い樹は往々此の間に栽ゑ易えられる。又冬の間に寒肥を與へるが好いとい

ふのは、何も其の間に肥料を吸ひ取るといふのではなくて、植物の休息中に、其の肥料が土中で充分、分解して、春に植物が眼覺めて養分を盛んに吸ひ取らんとするに用意するためである。

何にせよ、植物は、冬の間に休んで眠りをなして居るといはれるので、枯れ失せたやうな狀をなすのである。草の如きは更に甚しいもので、其の莖さへも枯れ失せて痕形も留めないやうになる。併しそれでは、全体が枯れ死すると同じやうになるから、責めて其の種子を澤山に殘すか、左なくば、地中に其の莖や根を留めて、來春に芽を發するためにして置く。百合や葱や慈姑の如きは、其の莖の塊まりて殘るもの、甘藷の如きは根の養分を蓄へて殘るものである。だから、これ等の芋や塊は、冬の前、即ち秋の末頃にならなくては、充分に肥つて大きくなることはない。何分にも冬のために用意するのであるから、其の頃にならねば肥つた旨さうな品は得られない。

動物に於ても、冬の間には、一時休息して飲まず食はずに、呼吸さへも、運動をも全く營まないものが多くある。冬の間には蛇を見るか、蛙を見るか、龜を見るか、蝙蝠を見るか、或は蜻蛉を見るか、蝶を見るか、實に我々は冬の間に認むる動物は甚だ少いといはなければならん。

全體、これ等は、どうしたのであらうか。蛇、蛙、龜の如きは深く土の中、石の下などに潜みて、全く眠つて居り、蜻蛉、蝶などの昆虫は或る物は殘つて物影に隱れるもあり、或る物は卵を土中水底に留めて、自分は死に失せるもあり。其の眠つて休む有様は、全く植物の葉枯れ枝落つるのと同じやうな譯である。これを動物の冬眠といふので、植物の冬枯と相對すべき事柄である。

人間でも、冬になると、どうも萎縮し勝ちで、仕事も餘り活潑にはならぬので、兎角、家の内に引込んで居る。寒帶地方の人になると、年が年中寒いものだから大きくもなり得ないで、大人でも、三尺程の小兒同然である。亞細亞、亞米利加などの北端には、此の種族

の人間が、氷の家に住んで半年は、全く夜ばかり、半年は全く晝ばかりの生活をして居る。人間も此のやうな冬ばかりの生活をすると氣の毒なもので、毎日小くなつて、體と頭とには獸の毛皮を纏ひ包んで、チヨツト見ると人間らしくない。これをエキスモー人（アラスカ地方に住す）といふのである。

氷の家といへば、どうも變に聞える。何だか解けはせぬかと思はれる。ところが一年中冬で、たとひ其の冬の中に春のやうな氣候があつても日本のやうな春とは



丸で違うから、氷の家は決して解けることはない。して見ると、氷とはいひ條、石やセメントで以て築いたのとは、少しも變らないといつても差支ない。エスキモー人は此の堅固な家に生活して生涯を何不足なく送りて居る。其の家の入口は極めて小くて、出入するには、どうでも、這ひつくばらなくてはならぬのである。そうして、中は決して暗くない、氷であるから能く外の光を透すからである。中には敷物を敷き、種々の家具も揃ひ、火を焚いても烟は天井の小穴から洩れて出るやうになつて居る。彼の夜ばかり

の季節になると、最も寒い頃であるから、全く口を閉ぢて、冬籠をすること恰も動植物のやうである。一家族は殆んど一歩も外へ踏み出すことのない程で、其の中に食物も澤山貯へてゐるといふことである。

此の樣に冬の世界に於ては、人間も動植物も冬籠をして、天地の間何となく寂寞しく思はれるが、こゝに此の冬の世界に却つて盛んに生活するものがある。牛馬の如きは、夏よりも冬を好ぶとは、誰れしも知る所であるが、寒帯地方に至ると、白熊や馴鹿が生々として氷の上を走り雪の間を窺つて、各々餌を漁つて居る。北海探險者は屢々此の白熊に出逢つて、膽を冷やすことがあるさうだ。又馴鹿はエキスモー人や其の他の土人に使はれて、恰も馬の如くに橇を引き廻して忙しさうにして居る。

それから北海の表面には、常に噴泉のやうな叉霧吹のやうな、柱が二本づゝ彼方此方に見えることがある。それは鯨が水中にゐりて、俗に謂ふ潮吹をして居るのである。潮吹とは、潮水を吹くのではなくて、大きな肺から吹き出る呼氣の水蒸氣が、寒い空氣の觸れて、右のように見えるのである。此の呼吸は一分間に七八回づゝ行ひ、行うた後は高く尾を上げて海の中に沈み十五分間程經て再び浮び出る。此のやうな鯨をせみくぢらといふので、鯨には、少くも三十種以上もあるがせみくぢらを最も普通なるものとする。

せみくぢらは頭は大きくて殆んど全身の三分の一を占めて居り、それに眼は非常に小くて、大きな口の隅にある。兩腕は全く魚の鰭のやうになつて、泳ぐに良しく、後足は全く無くて、體の末端には二つに割れたる尾がある。此の尾を足の變形したものと思ふ人があるやうだが、それは丸で間違つて、尾は只の附屬物である。其の尾の働は、魚のやうに、主として身を前方へ泳ぎ進めるに大切の道具である。しかし其の形は魚のやうに縦にならずして横に平になつて居る。口には三百六十餘枚の鬚があつて、これが、歯の用をする。鯨は口の大きいにもかゝはらず、其の咽喉の穴は甚だ小くて、且、嚼みこなす歯がないから、食物は鰯や烏賊



などの小いものや、柔かなものを、海水と共に丸呑にし然る後に水だけを鬚の間から濾し出すのである。

全身の肌が黒くて極めて滑かであるから、水中の運動は實に自在である。それも兒の間には、踈に毛が生へて居るが、成長するに從ひて段々に脱けて來るのである。肌の皮の下には、夥しい油があつて、一匹に付き、二百石もあるといふ話である。此の油は中々重寶で、第一、機械油として用ひ、又蠟燭などを造る。それに鯨の肉と皮とは、共に食用になり、鬚は彈力があるから、齒磨楊子などに造られる。

實に一頭の鯨を漁すれば、七郷富を致すとまでいはれて居る。日本の千島近海に澤山居るから、此處へ行つて、これを漁する日本人は少くて、却つて亞米利加などから密かに獵に來るものが多いといふことである。日本人の空閑氣さ加減には驚き入る。冬になると、南の方へ下りて、紀伊、土佐、長門、肥前の沖にまで來ることがある。これ等の國々の漁夫は、盛に其の頃に獵するのである。

其の外、冬の季節にははまぐりやいひだこやえびの如きも隨分盛んであるが、今一々これ等を記すに暇がない。冬の世界の話も大抵これで以て切り上げることゝする。

（完）

音樂談

女子大學講師 白井規矩郎

音樂を學ぶ心得

これは歐洲屈指の音樂家でありました、ロベルト、シユーマン氏が『初めて音樂を習ふ方の心得』にとて書

き遣されました、有名の遺訓であります、ピヤノなり唱歌なり又たオルガンなりを稽古なされる嬢方には至極有益な事でありますゆゑ、猶ほ其中から直接日本の婦人に行はれさうな處計りを拔いて、申しませう。

（一）歌を歌ふこと、又た樂器を奏することの、細かい規則を話さうと致すのは誠に無益のことで、之れらは實地師に就て習はれるより他に途がないのです、其故茲に申すことは初めて音樂を習はれる方に必要な心得を申すのであります。

（二）音樂を習はふとなさるには、先づ第一に耳が肝心であります、必竟種々の音色を聽別けられる樣になりますと、從て進みも速かであります。

（三）音樂なり又た總て指の稽古となりますものは、怠らす學ばねばなりません、ケレ共世間には毎日數時間づゝ機械の動作と同じ樣に、唯だ稽古さへすれば何んでも出來ると思ふて居られる方もありますが、之は丁度いろはの復習を毎日の業として、其が早く讀める樣になりたいといふのに同じ事ですから、諸嬢は決して斯樣な無益な事に時間を費してはなりません。

（四）奏樂は必ず其時間を定めて置いて、勉めるときには十分勉め、休むときは全く休む樣に致すのです世間で多くの人の奏樂を見ますに丸で酩酊者が道を歩む樣な仕方ですから、斯んなものを手本としない樣に氣を付るのです。

（五）十分に音樂を修め樣と致すのには、和聲學と申す學問を少しでも心得て居ると大層便利です。

（六）絃や鍵（オルガンやピアノの前にある白と黑との小板を鍵と申します）を、徒らにザラ〳〵と鳴らす杯は宜くない事です、常に赤心を以て奏すとです。

（七）稽古の時は別段ですが其他では、決して一ツの曲を細かに分けて少しづゝ奏してはなりません。

（八）奏樂のときは能く曲譜の速さに氣を付けられて遲速を間違ひない樣になされ。

（九）無暗に六ヶ敷い曲譜を奏しますよりは、出來易いものを過ちなく愉快に奏するのが、宜しいです。

（一〇）自分の樂器は平生能く調子に氣を付けて、

少しでも狂つて居つたなら直ぐに直させる樣になさい調子の惡るい樂器は不快でもあり又た之れに連れて歌ひますと聲を損じます。

(一一)　唱歌は樂器なしでも歌へる樣にならねば本當でない又歌の節位は暗誦する樣に稽古するのです。

(一二)　自分が稽古して居る中は、誰れか立聽をしては居るまいか、などゝ思つてはなりません、常に敎師が傍らに居られる積りで致すのです。

(一三)　少々位音聲の惡るいものでも勉めて習ひますと立派な聲になりますから、決して諦らめずになさい、又た善い聲の方は猶更勉められて、益々美しい聲になる樣に鍛えることを望みます。

(一四)　毎日定の時間丈稽古して疲れましたら決して其以上の練習をしてはなりませぬ、不活潑に不愉快に技をなす位なら休養する方が遙かに勝であります。

(一五)　諸嬢は決して無益のものを歌つたり彈いたりしてはなりません、時間は頗る貴重すべきものでありますのに、世人がこれは佳作だと申されるもの計りを習ひますのにも、百人の壽命を一人で持てさへ致し盡されない位です。

(一六)　糖類や菓物などで育てられました小供は、決して健康でありません、音樂を習ふのも之れと同樣で淡白で滋養分に富むもので養はなければならんのです、然るに世の中には隨分甘い言を云つて弟子どもを瞞着する音樂先生がありますから、能く氣を付けて先生を選ばないと飛んだ目に逢ひます。

(一七)　誰んな人に賞められても決して、油斷したり自惚たりしてはなりません、唯だ音樂に巧な人から讃められたなら確かに上手になつたのです。

(一八)　名高い人の作曲を稽古する樣に致すと自然に巧妙になります、其故に日々の勉强は段々名家の作曲を知る心掛で致すのです。

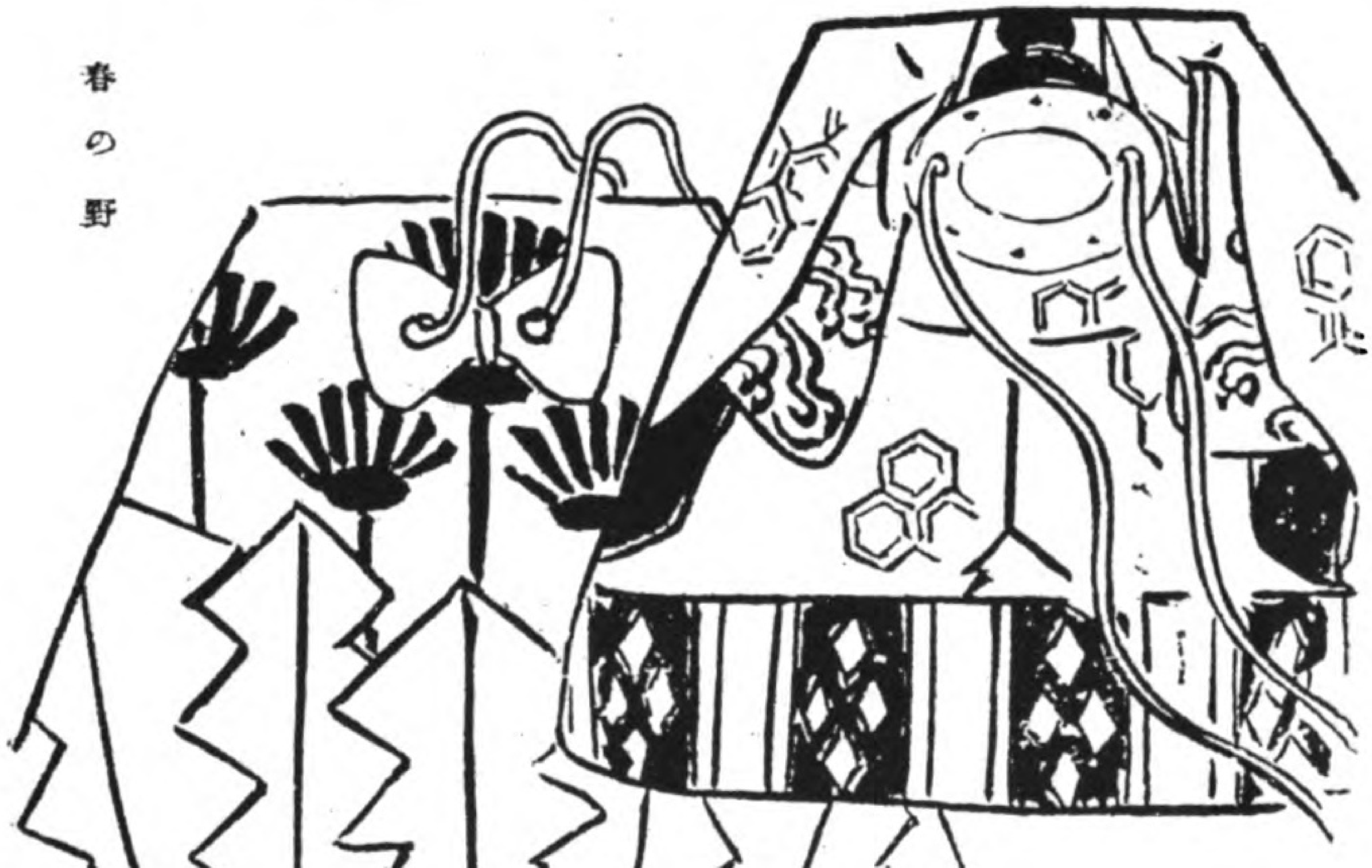
(一九)　自分よりは技の立ち越えた人を友達と致すのは何によりです。又た何處へでも時間の許す限りは音樂を傍聽に行くのが宜しいです。併し自分の品格を汚す樣な處へは決して行かぬことです。

(二〇)　一時の流行ものは直ぐに廢りますから、流行に逐はれて、音樂の稽古をしてはなりません。

春宵一刻價千金



春の野



英語實習

千貞生譯

CONVERSATION. 會話

英文和譯

Girl—Good morning.	娘—おはよー
Mother—Good morning.	母—おはよー
G.—I am going to school now.	娘—私は唯今學校へ參いる所です
M.—Oh, you are going very early this morning!	母—おー今朝は大層早く御出でだねー
G.—Yes, to-day my histry class begins from seven O'clock.	娘—はい今日は歴史の組が七時からはじまりますの
M.—Have yon gat your break-fast?	母—朝飯をたべましたか
G.—Yes mother and my lunch is ready too.	娘—はいおべんとーも出來ました
M.—Well, it is quite cold so wrap up your self wormly.	母—まー大變さむいからよくくるまつておいでなさい
G.—Mother, please buy me a new pair of mitten, because this one is worn aut.	娘—おつかさんどーか新しいてぶくろを買つてくださいなこれはもーやぶれてしまいましたから
M.—All right, I Will get you a new one, now hurry up, you will be late.	母—宜しいあたらしいのをかつてあげましよう おいそぎでないとをくれますよ

會話

和文英譯

娘—おつかさん明日私の組では大森へ行くのですよ	Girl—Mother, to-morrow our class is going to Omori.
母—そー先生も入らつしやるの	Mother—Well, is your teacher going too?
娘—えー先生がつれていつてくださるのです	G.—Yes, our teacher is going to take us.
母—それならよく今夜仕度をしてお置きなさい	M.—Then make every thing ready to night.
娘—おつかさんどの衣物を着て行きましよう	G.—Mother, what dress shall I wear?
母—衣物なんかなんでもいゝでしよー	M.—Never mind about your dress.
娘—でも松子さんはりつぱにして入らつしやるんですと	G.—But Miss Matsu is going with fine dress.
母—人樣はどーでもかまいませんよ	M.—We don't care about others.
娘—ほんとーねーおつかさん學問がよくできた方がいゝとねー	G.—Indeed mother, it is better to be a good scholer than to dress up finely.
母—そーですとも今の生徒はあまりみなりをおごりすぎるよーですからお前なぞはそれにならつてはなりません	M.—Yes it is so, I think the school girls dress up rather finely, now but you must not imitate them.

WIT AND HUMOUR. 一口噺

DIDN'T USE HIS OWN MEDICINE.

Doctor—Take this medicine as directed, and your cold will be gone in two or three days.

Patient—You seem quite hoarse, doctor.

Doctor—Yes; I've had a bad cold for four weeks.

醫師—指定通りに此お藥をお用ひなさい、すれば二三日中にお風邪は全快しますでしやう。

患者—先生、あなたは、お聲が大變嗄れて居らつしやるやうでムいますね。

醫師—はい、私も四週間ばかり風邪で困つて居りますのです。

（其藥を飯めば眞に二三日で全快する者ならば、何故自分の處方の藥を服用せぬのであらう？）

Little Girl—Ma!

Her Mother—Don't say "ma", my dear, say "mama." What do you want?

Little Girl—Did you see uncle's new Panamama?

少女—お母さん（マー）

母親—"マー"なんて言はなくて、"ママ"とお言ひよ。何か欲しいの？

少女—あなた、あの伯父さんの新しい"パナママ"（パナマの帽子）をお見なすつて？

（註）少女が mama といふべきを ma といふは西洋の小供の常なり。之を母親が正しく mama と言へと言へば、今度は"パナマ"といふべきを、わざ〳〵"パナママ"と言ひたるなり、之れ滑稽のある所なり。

Pretty Dorothy—Tell me honestly, professor, what made you propose to me?

Professor—Dear girl, it suddenly struck me that you would be a handsome addition to my library.

美しきドロシー孃—先生、とういふ譯であなたは私に結婚をお求めなさいますのですか、正直に聞かせて戴きたいのです。

敎授の博士—そらあなた、ふと私はかう思つたからだ、あなたは私の本箱に入れて置くのには、大層奇麗でいゝから。

（註）學者は書齋に一册でも美本を備へんとて熱心なれば、かく滑稽の意に諷したるなり。

名　句　集

When found, make a note of.—*Dickens.*

見出でたる時、必ずそを記せよ。

Talking is one of the fine arts.—*Holmes.*

談話は一の美術なり。

To love and to be loved is the greatest happiness of existence.—

Sydney Smith.

愛しまた愛せられん事は人間生存の至大の幸福なり。

Some of the most famous books are least worth reading. Their fame was due to their doing something that needed in their day to be done. The work done, the virtue of the book expires.—*John Morley.*

最も有名の書と雖も、其或物は殆むど讀むの値なし。蓋し其評判たるや、其當時の何等かの需要にかなひたるが爲のみ。故にその任務だに爲し終へたらば、こゝに其書の德は全く滅し終るなり。

No wonder lasts over three days.—*Proverb.*

いかなる珍事異聞も三日以上はつゞかず、(三日を經過すれば人は最早之を見聞して驚かざるに至る)。

Self-trust is the first secret of success.—*Emerson.*

自己を信頼する事、これ成功第一の要訣なり。

An innocent man needs no eloquence; his innocence is instead of it.—

Ben Jonson.

無邪氣の人には辯舌の要なし、無邪氣は即ち辯舌の用をなせばなり。

Silent men, like still waters, are deep and dangerous.—*Proverb.*

靜默の人は、動かぬ水のやうに、深くして危險なるものなり。

No woman can be handsome by the force of features alone, any more than she can be witty only by the help of speech.—*Hughes.*

婦人は單に辯舌を以てのみ才氣ありと言ふを得ざる如く、又容貌の力のみにて美なりとなす能はず。

名家小品

ATTENTION.

THE VALUE OF MOMENTS.

LORD CHESTERFIELD.

What I do and ever shall regret, is the time which, while young, I lost in were idleness and in doing nothing. This is the common effect of the inconsideracy of youth, against which I beg you will be most carefully upon your guard. The value of moments, when cast up, is immense, if well employed; if thrown away, their loss is irrecoverable. Every moment may be put to some use, and that with much more pleasure than if unemployed. Do not imagine that, by the employment of time, I mean an uninterrupted application to serious studies. No; pleasures are, at proper times, both as necessary and as useful: they fashion and form you for the world; they teach yon characters, and show you the human heart in its unguarded minutes. But, then, remember to make that use of them. I have known many people, from laziness of mind, go through both pleasure and business with equal inattention;

自分が今も又今後も常に遺憾に思ふだらうといふのは、若い頃唯だぶら々々したり又何事も爲さずに失つた時間である。之は年のいかぬ時代に、意を用ひなかつた、人々に有り勝ちの結果なので、此點は非常によく注意して貰ひたいのだ。何分といふ時間の値も能く活用すれば、合算すると非常な者である、また之を空費すると取り返しの出來ない者で、一分毎皆何かに活用され得べき者で、之を利用するのは、空費したよりも遙に愉快な者である。然し時間活用といふても、いつも絶えず眞面目の勉强のみをせよと言ふのではない。否な適宜の時に快樂を取るのは、必要にして又有益なる事で、此に由り巧まく世に處して行く人にもなれるのである。人の品性はどのやうなもの、又氣をつけて居ない時に、人の心情は如何の者であるかといふ事を示すのは、此快樂のうちにあるのだ。で、これを利用する事を忘れぬやうにせねばならぬ。いつまでもグズ々々して、

neither enjoying the one, nor doing the other; thinking themselves men of pleasure, because they were mingled with those who were; and men of business, because they had business to do, though they did not do it.

仕事にも快樂にも、共に身の入らぬ人は隨分多いが、此人等は快を覓めて樂むにも非ず、業に勉めるのでもない。唯だ樂むで居る人の中に交つて居るといふだけで、自分も矢張りさうだと思ひ、爲すべき仕事があるといふ丈けで、自分は働て居る人だと思ふて居るので其實際は矢張り何事も爲しては居らないのである。

新刊紹介

▲家庭夜話の二（堺枯川編輯　加藤眠柳譯）　家庭の新風味の後を承けたる家庭夜話の第二冊は出でたり、こは英國有名の文人ゴルドスミス氏の傑作「ヴーカー、オブ、エーキフイールド」を譯したるものにて質素倹約の話といふ、家庭の讀み本として好適のものなり。

▲婦女文藝（大澤天仙子主幹）　曩に中學文藝を出して成効せる秀英舍は本春に入りて新らたに雜誌婦女文藝を發刊したり、女學界の師友として益々發達せられんを望む。

▲少年世界文學第六編（石原萬岳編）　此の編に載せてあるのに兎さむぐら、糸つむぎ姫、木樵の娘、六勇士、鵞鳥娘、料理番の六編です、孰れも面白いもの許り、お子様達にはほんに好い御友達です。



小説



博愛醫師

西村渚山

「ぢや正雄、お前は愈結婚する積りかい？」と、叔父が如何にも嚴格な調子で、此方の意志を確めたのである。正雄は少しも臆する色なく、

「はい。左樣です。」

「して終日粥ばかりで？」

「無論の事です。それも尚ほむづかしければ、あの雜炊を啜つても暮して行く覺悟で御座います。」

「ふむ。成程、だがね正雄、數子は汝と一所に苦勞をする氣でゐるかどうだかなア……」

「それはもう充分彼女も承知して居ります。ですから私は一生懸命に勉強して、兎も角生活の必要丈は儲けてゆく考へです。」

「そうはいふけれど實際それが出來るかなア？」

正雄は決然として、

「叔父さん有難い事には、私は頗る強健な身躰と精魂とを持つて居ります、これこそ實に積極的の財産だらう

と私は考へます。一體金錢のやうな貴い品物には直ぐに羽が生えて飛び去ります、又水や火に遭へば直ぐ滅えて仕舞ひます。然るに私の所持して居る物は、なか〳〵そんな脆いものぢやありません。」

「お前の所持して居るものとは一體何の事だね？」

「先づ第一に私の健康でせう。次には活氣、それに職業が確かな財産です。元來醫師と云ふものは、患者に對して注意深くて、丁寧でさへあれば、常に繁昌するものです。併しこれからの生活に最も大切なのは、餘り大きな慾を出さずに、極々單純な範圍で滿足する點です。御承知でも御座いませうが、數子ももう美しい衣類を着やうなと丶云ふ浮いた考へは、少しも持つて居りません。」

叔父は目をしば叩いて、

「それぢやとうあつても結婚しやうと云ふのだな。それならそれで議論はないさ。」

「はい、只叔父樣の御承諾を……」

「乃公は別に何も言はん……唯數子の心次第だらう。とうだ數子の方はそれで愈異存はないのか。」

と振返つて姪の意向を伺ふと、數子は口を噤んだ儘、一言も發せないけれども、その心のうちには自然同意らしい微笑を洩して居る。叔父はやがて少しく頭を傾けて、

「只僅かの收入で以て、儉約して暮して行かうと云ふ分には差支へないが、どうもそれでは一向お前達の身に面白味がなからうと思はれるがどうだらうな。」

と態と諷するやうに云つた。それを數子はとう聞取つたのか、俄に編みかけて居た毛糸細工を疊の上へ置きながら。

「あら、叔父樣、妾は不自由してもよう御座んすけれども、決して犬や猫のやうに無意味につまらなく暮した

いと申すのでは御座いませんよ。それはもう、少しでも世間に善い事をしやうと云ふ望みは、ちやんと私共の心の内に据ゑて置くのですもの。只贅澤な眞似丈は奇麗サツパリと慾の中から取のけてゐますわ。」

叔父は聞いて少しく首を傾けた「世間には善い事をして、そして自分等は粥を啜る――危いものだなア。汝達にそれが出來やうか。」

「いゝえ。屹度實行します。生活費を收入以上に上すやうな事は決して致しません。」

と、正雄は熱心に辨解する。

「さうか。汝が其規則を守つて居る間は、勿論安全に行くだらう。併し、こゝに誘惑と云ふ奴が控へて居るから油斷はならない。現に乃公がそのよい手本だ。」

「叔父樣大丈夫で御座いますすよ。正雄はもう眞實の必要品――机と火鉢と、書物より外に、何も不用の物は置きますまい。其代り、二人の間には情愛といふものがちやんと番をしてゐますから……」

叔父が問ひ起すすべての疑問に對して兩人は一々應答をして悉く叔父を納得させた。そして、其日から丁度二週間目に、彼等は目出度結婚の式を擧げたのである。恐らく世の中に、正雄と數子と程琴瑟相和した良緣はないであらう。最初は一文の負債をもこしらへぬと云ふ考へから、家賃の安い場末に小さな一戸を構へたが、それとても、大抵の醫者が開業する時のやうに外觀を張らず、至極質素な體裁であつた。

玄關の左側に、「磯谷醫院」と書いた欅の看板を揭げたが、まだ新しいので人の注意を惹かぬ所爲か、終日家に在て待ちかまへて居ても、一向來診者が見えないのである。働かぬ時は讀み、讀まぬ時は談すると云ふ風で兎も角退屈はしなかつたけれど、開業當日から一週間と云ふものは、到頭藥に手を付けずにしまつた。そこで正雄は考へ直して、「診察無料」と云ふ張紙をしたが、それでも思はしくなかつたと見え、今度は又思切つて、

「貧民には施療す」と書加へた。すると、間もなくそれに注目して讀みつゝ通る通行人の聲が聞えるので、正雄は飛び立つ程に喜び勇んだが、人間の慾と云ふものは恐ろしいもので、其翌日からは種々な患者が續々と詰かけて來て、氣儘に遊んでは居られない。勿論藥禮と云つては一文も入るのではなかつたけれど、蒔かぬ種は生えぬ譬へで、正雄は寧ろそれを賀すべき事に思つて居た。

斯樣に施藥ばかりして、中には往診さへ承諾してやる病家もあつたが、或日の事、見る目もいぢらしいやうな、慘憺たる病褥を見舞はねばならぬ運命に逢うたのである。患者は三人の幼兒を抱えて居る哀れな母で、枕元に孰れかの泣聲が聞えぬ時はない。多分頑是なく空腹を訴へるのであらう。數子が此有樣を夫から聞いた折には、早速羽織を一枚着換へて其家を訪れた事もある。かやうな慈善の行は職務に勉強して居るのと同じく、心に一種の愉快が湧いて來るものであるが、折惡しく其頃は月末の家賃と諸拂をやつと濟せた計りで、最早家には一錢の小使錢もない位。だと云つて、その憫然な貧亡人をば、其儘に手放しにするにもしのびない。身躰の健康な者はどんな勞働をしたとて、其日其日の命は繫げる、と、かう殊勝にも考へを定めた磯谷夫婦は、今日もまた少しばかりの食物を携へて例の病家へ歩みを運ばせた。

道程は家から何程もない。やがて案内も乞はずに病婦の部屋へ通つて見ると、まだ朝飯も食べないで、垢だらけの顏をした小供等は、長火鉢を圍んで居る、そして、不圖氣が付いたのはきたない寢床の傍に一人の見馴れぬ年若な貴夫人が座を占めて居る事なのである。其健やかな顏色と、婀娜な姿とは、目下流行の頂上に達して居る、身なりの華美な衣裳と相待つて、如何にも人生の花の時代の眼前で誇つて居るやうである。若い貴夫人は暫時驚いた眼で以て、この磯谷新夫婦を見詰めて居たが、俄に病婦の方を振返つて、小聲で來訪者の誰であるかを尋ねた。すると、小供等は各自火鉢の傍から這出して來て、數子の信玄袋を以て貢物の犬の子のやうに

うるさく嗅ぎまはつてゐるのである。數子がそれを制するのは一通りの苦心ではなかつた。此樣子を眺めた貴夫人は、美しい顔を一寸顰めて、慌しく香水を染ませたハンケチを鼻のあたりへ持つて來乍ら、

「大丈夫で御座いませうねえ。よもや傳染病ぢや御座いますまいねえ。」と言つた磯谷はそれに答へて、

「さうですとも。これはあまりひどく勞働をした處へ、少しも滋養物を給らなかつたので、こんな風に衰弱したのです。」

「おや。」と貴女は態とらしく、ハンケチを目にあてがつて、「何故また慈惠病院へ行かなかつたのでせうか。一體下等社會には一つの惡い迷信が御座いまして、慈惠病院へ這入る位なら乞食をするなんて、申すのですもの。」

「成程、併し輕々しく市の厄介にならずに、飽く迄も自分で支へて行かうと云ふ獨立心は、寧ろ感ずべき心掛けですなア。」と磯谷は答へた。

「妾は今更殘念でならないので御座いますよ。何故早く妾にかうと打明けなかつたのでせう。此病人一人世話する位はどうかなるでしたのに。」

「奥樣、この病人を御存じで入らつしやいましたか。」と、そこで初めて數子は口を開いた。

「えゝ、よくは存じませんが一月餘り宅の洗濯物をして居ましたので。」

此時病婦は苦しさうな聲を絞り出して、

「半年餘り……」と心細い横槍を入れたが、貴夫人は一向それに頓着なく、

「處が五六日前にやつと馬丁が此家を探したばかりで、それ迄はちつとも知らないで居ましたの。今朝はあなた少々身體がいけなかつたのですが、押して參つたやうな譯ですの。」

「まあ、どうも御親切に……」と、數子は非常に貴夫人の慈悲心に打たれたやうな面持であつた。

「眞に此方は不仕合せですねえ。」

「さうですよ。だけれども、あなた方が大層御世話をして下さいますので、此女も仕合せで御座います。」

「つい〳〵御世話が好きなものですから。」

「それは妾達の義務ですよ。妾達のやうな身分の者は、何時も困つて居る人を救ふてやらねばなりませぬ。これからは御一所にこの哀れな女を助けませう。」と云ひ〳〵、帶の間からきらびやかな錦の紙入をとり出し、な



にがしかの金を包んで病婦の痩衰えた掌へにぎらせてやつたが不思議な事には病婦の顔に感謝の色が浮ばぬのみか、寧ろそれを拒絶したいと云ふ氣味があり〳〵と見えたのである。數子は氣を利かして、

「あゝ、氣分が

悪いのでお暇も申兼ねるので御座いませう。若し妾をお信じ下さいますなら、妾が一時お預り致して置きませう。日々の糊口も出來ない位ですから、大層喜んで御座いませう。」

『ぢや、どうか宜しいやうに。御願ひ申ませう で若しあなたに御親切が御座いましたなら、此女の消息を妾迄御知らせ下さいまし。つい身躰がいけないものですから、態々訪ねて來る事が容易でないので。』



數子はこの三人の小供の處置に就て、少しく考へて居る事があつた故、早速四五日の内に訪問する事を肯うた。で二人はこの貴夫人を入口の處迄ではなく、猶一歩すゝめて馬車迄丁寧に見送つて、態々の枉駕を謝したのである。

家へ歸つて來ると、數子は衣服も着換えぬ内から、良人に向ッて、『あの病人は仕合でしたねえ。お金持の方があんなに親切に……』

『何處を見てお前はあの夫人を金持だと云ふのかい？』

『何處って貴郎、あの立派な衣裳を御覧なさらなくって？』

磯谷は怪しみながら、

『立派な衣裳が金持の證據になるものか。』

『だって、あなた、あの方のお身分は妾達のとは大變違って居るですわ。御覧なすったでせう、あのお羽織でも、妾のこの服装そつくりよりも、お金が澤山かゝッて居るのですもの。』

『ふむ。若しあの夫人が衣裳の方にさう金をかける位だと、屹度それは心から人を羨むやうな事をしないのに違ひない。』

敏子は少し不足らしく、

『貴郎それは餘りお酷ひですわ。ちやんと立派な服装をした人でしたら、それを金持の方だと見たっていゝでせう。』と敏子は少しく言葉を勵ましていつた。

『それはいゝさ。若し世の中の萬事が正直にばかり動いて行くのならいゝさ。併し、僕等は外觀で以て直に内容を推測する事は出來ません、それと同じ事で何だかあの夫人がわたしたち二人を金のある者だと思って居たらしいねえ』

『イエそんな事はないでせう。妾のこの様を一目見てもわかるんですもの。』

『さうか。おやさうにして置かう。羨しさうに眺めて居たのは、多分お前のその目元であつたらう。』

磯谷醫師が苦心空しからず、哀れな寡婦の病氣は追々と快くなッて來た。一方では磯谷の親切に感じて、

購求の懸念などを申込む人も出來たので、彼女の家には俄に春が廻つて來たやうで、日々の生活にはさまで不自由なく過せる事となつて、障子には紙が張られ、天窓からは煙が棚曳いて、彼女は以前の如く縫物の内職に餘念なかつた。

　磯谷醫院も此頃になつて、やう〳〵評判が高くなり、施藥の外に相當の收入があるやうになつた。すると、或日の事、一輛の馬車が威勢よく磯谷の玄關先へ止まつたが、差出した名刺を見た數子は、胸に多少の鼓動を覺えずには居られなかつた。來診者は男爵日下廣三と云つて、五十萬以上の富豪家名鑑に載せられて居る一人である。彼は以前から憂鬱病に罹つて居たが、今迄に數人の國手の投藥も、何等の著しい效果を示さない。で近來頻に名聲を擧げた磯谷の診察をば、是非共受けて見たいと、かう云ふ希望で來たのであつた。實際磯谷の身にとつては、これ程また幸な機會があらう筈もない。何とかいゝ工合に癒るかして、樂を貰らうと思へば重の儀であつたのだけれど、正直に云ふと、彼にはそんな腹黒い處が微塵もない。それ故、若し男爵が病氣の快復を望むなら、醫師に依頼するよりは多く自己に依頼せねばならぬ。と云ふ事から、運動の方法、食事の加減並びに身體を閑散な位置に置く事などを、いろ〳〵と懇切に注意をしてやつた。

　男爵はこの若い醫師の正直な心に動かざるを得なかつた。そして、それと同時に餘裕のなさゝうな生活の様子を見て、甚しく氣の毒に感じたのである。で彼は辭するに臨み、過分な謝禮を包んで、

『貧民には施療をなさるのだから、私共は二倍の御禮を致さねばなりません。』

と云つて、無理に磯谷が日々往診するやうに頼んで置いて歸つた。其後暇間さへあれば男爵家を見舞ひ、愉快な談話をして種々男爵を樂しませた揚句は、あらゆる治療法にも越えて結果がよく、一時病症は忘れるやうに癒えたのである。かやうにして居る内に、磯谷の家庭は漸次に膨脹されて、會計術の必要をも感じて來ると同

時に、數子が貧民を救助する事にも、今迄のやうに苦勞をせずに濟む事になつた。

話はてゝて一寸換つて、かの貴夫人の上に移る。彼女は今日しも華美な朝の衣裳に身を包んで、軟かい友禪の座蒲團の上に滑し込んで居るのである。何を思ひ出したのか、急に柱のベルに手を掛けると、可愛い小間使がすぐ顯はれて來て三つ指をつく。

「彼の肩掛はまだ持つて來ないのかい。」

「はい。」

「屹度持つて來るやうにと、さう云つて置いたのだらうねえ。」

「左樣申して置きました。」

「ふむ。一寸その罎をおかし。」

かう云つて、彼女が香水をハンカチに灑いだ時丁度番頭らしい男が一個の匣を小脇に抱えて、夫人の部屋へ這入つて來た。云ふ迄もなく待兼ねて居た肩掛を持參したのであつたが、ずらりとならべた五六種の正札を見ると、何れも五十圓から百圓迄の間である。最初の分は流行後れと云ふ廉で、見事に刎ねられ、最后に殘つたのは色合と云ひ模樣と云ひ、流石に申分のない品物。併し、價が百圓と云ふのには夫人も少しく躊躇の姿であつたけれど、番頭が例の如才ない調子で、「此品ならば御買上げになつても御損は御座りませぬ。」と效能を述べ立てたから、自然と夫人の心がそれに傾いて來た。彼女の恍惚とした眸は、執念くもその最上等の肩掛の上に注がれて居たが、やがて彼女は起上り、華奢な自分の撫肩へ被て見て、前を見後付を見、丸めて見たり擴げて見たり、さては四つに折つて片腕に掛けたりしてなしでをして、

「似合つてよ。どうせ一つはいるのだもの。殘つて置くゞゝ他のとは割合が安いやうだわ。」と、夫人はてのう

へもない歡びを面にあらはして居る矢先、俄に磯谷の奥様が來たとの知らせで、番頭は早々にして辭して歸る肩掛は鮮やかに衣桁を飾つた。

「まあ、よくお訪ね下さいましたねえ。實はあなたのお出を待つて居つたのですよ。」

と、聊かの隔てもなく、美しい笑顔で以て迎へてくれるので、數子も非常に心嬉しく思つたのである。早速ながら彼女は今日の來訪の趣を告げて、

「貴女は屹度御贊成下さる事と存じて居ります。お蔭で病人は以前の身躰になりましたけれど、三人の小供を教育する事は、實際彼女にはむつかしいので御座います。」

「眞實に御親切ねえ。妾も大抵なら多分に寄附をしたいのですが、どうも諸方から絶えず申して來るものですからねえ、只今の處では一錢のお金も都合が出來ませんの。だけれど、主旨は如何にも贊成なのですから、どうかねえ、あなたがお出しなさるのと同じ額を、立換えて置いて下さいな。此次にお出遭ひ申した時にお返しをするとして……」

數子は快くそれを承諾して、間もなく暇を告げたのである。併し、數子は彼の夫人に對して何う考へても不思議でならないから、家へかへツて夫の顔を見ると逸早く、

「あの、一寸、妾何だか不審でなりませんわ。あれほど贅澤に暮して居ながら、僅か五圓や十圓のお金がないなんて！」

「はゝゝゝお前にはまだあの夫人が貧乏だと云ふ事は信せられまい。それを今少し合點の行くやうに話して聞かさう。早い話が、お前と私とはて、一月前と較べると、餘程内裏の工面がよくなつて居るだらう。併し、若しこれが高價な物を買込んで、儲けた丈を皆な仕拂ふ事にしたらばどうだい、他人に義捐などする餘裕がとて

にあらう。強て作れば借金さ。』

『さうしますと、富の人と云ふのは、自分の收入以内で生活する方なのですねえ。』

『無論さ。して見ると、お前はこんな處世哲學の眞髓を極めた人と夫婦になつたのを、難有く思つたがよからう。』

敎子は眞實良人の言にきゝほれた。

『僅かなお金で富貴の人とでも云ふのでせうねえ。はゝゝゝ』

翌日敎子は寡婦の家を訪れて、小供の爲に寄附金を募集した事を告げ、一々名前を讀上げて例の貴夫人に及ふと、彼女は急に身慄を初めた。そしてさゝやくやうに、

『奥樣！ とうぞあの方丈は、假令御親切があつてもお斷り致したう御座います。』

と云ふので、怪しみ作ら段々理由を聞いて見ると、彼女は殆んど一年の間 洗濯女に雇はれて、到頭一文の仕拂も受けない程の、慘酷目に逢うたとの事である。

『あんな方で御座いますから、わたしたちの住所なんぞお知らせをしないで居りましたけれど、差當り食物に困りましたし、一つは又妾が病付いて弱つて居る所を御覽なすつたら、憫然な者だと少しは思つて下さらうかと存じましてねえ。つい馬丁さんに傳言を頼んだやうな譯なので御座いました。』

敎子は無情な貴夫人の仕打を聞いて、暫時呆れて居たがやがて小聲で、『まア酷い方なのねえ。』

『妾はあんな方に出逢つたのは初めてゞ御座います。だけれど奥樣、お金持と云ふ者は察しのないものでしてねえ。せめて御自分の身邊に氣をお採みになる半分でも、稼人に目を付けて下さいましたら、まあどんなに喜ぶことでせう。』

數子は此時燃えるやうな同情の念を抑える事が出來なかつた。

その後二年の月日は無事に過ぎたが、磯谷醫院の評判は院長の名聲と共に、侮りがたい勢力を市内で占めたのである。若しそれ更に家庭の内部を覗ふ時には、大に敬すべき點が澤山あつた。總じて自分の家庭の圓滿を誇る人々は、必ず立派な品格を作るべき一種の強い感化力を持つて居るだらう。實に母としての數子は義務を重んじ、勞働を惜まず、今の世の中には珍らしい好模範であつた。日々の生活は別に最初の主義を捨てた譯ではないけれど、段々と豐かに暮せるやうになり、一年の終りには又幾分かの殘餘金を見る事も出來た。昔からの格言に、貧を嘆くな富を望むなと云ふのがあるが、磯谷夫婦の處世法はこれを事實に顯はしたものと申しても好い。一代の富豪日下伯爵さへ、勤勉でそして正直なこの醫師夫婦から學ぶ處が多かつたので、伯爵は何時も充分の敬意を拂ひ、豪奢を極めた王城の奥殿よりも、この鳥の巣のやうな家庭の方が羨ましい。と述懷した折もあつた。丁度其翌年、彼は到頭神經衰弱の爲めに斃れてしまつたが、驚いたのは磯谷夫婦に五千圓の金子を贈りたいと云ふ遺言状を發見した事で、其時は二人も夢かとばかり思つた。

麹町の番町を通つた人があつたら、直きに氣がつく事であらう。南向の門構で洋式の建築物が高く雲に聳えて居る。これが膨脹した磯谷醫院の外觀であつた。

（をはり）



トルストイ伯童話 罪の兒（六）

武田櫻桃

數

父に敎はつた通り、太郎は急いで歩行いて行きましたが、さてどうしたら自分のした罪が雪げやう、人間は惡い事をすれば懲役に行く、流罪になる、死刑になつて、それで罪が雪げるやうに思つて居るが、他人の罪を身に負擔はずに罪を雪ぐのはどうしたらいゝのだう、と考へ〳〵來ましたが、どうしても思出す事が出來ません、で、漸く敎父の云つた野原へ來て見ますと、もう稻が悉皆實つて居て、其實つた稻はまた刈禾器にかゝるばかりになつて居るのですが、不圖見ると一疋の小さな牝犢が何處からともやつて來て其稻を食べやうとしました、すると一人の百姓が馬へ乘つてやつて來ましたが、牝犢が今稻を食べやうとするのを見ると、突然其牝犢を追廻して、丁度牝犢が稻の生へて居る處から出やうとした途端、また一人の馬に乘つた百姓が出て來て前から追つたものですから、牝犢は驚いて後へ引返す、二人の百姓は夢中になつて野原中追かけ廻して居ります、畝道へ一人の婦人が出て來て、

「われ〳〵、あの人達は妾の大切な牝犢を殺さうとするのだ！

と云つて泣いて居るのです、太郎は見るに見兼ねましたから、百姓に向ひまして、

「おい〳〵お前達は何故そんな眞似をするのだ、そんなに追廻さなくつても、此處に此人が居るのだから、呼ばせて見ればいゝぢやないか？

そこで婦人は野の端れへ來て、

「トプラシ！　トプラシ！
と呼びますと、牝犢は自分の主人が來たと思つたから、急いで婦人の裾へ纏りつき、危い命を免れましたが、只此婦人がトプラシ！　トプラシ！、と二聲呼んだばかりに百姓も悦べば、婦人も悦び、牝犢も悦んだ事になつたのです。

牝犢の命も無事に助かつたので、其處を出てだん〳〵やつて來ましたが、あゝさうだ今の牝犢の事にしても、凡そ人間と云ふものは惡は惡を生むもので、人間は始終惡を孵して居るが、惡はまた始終人間から生れて居るのだ、だが其惡をどうしたらよされるかと云ふ事は解らない、牝犢にした所が婦人に呼ばれたからいゝものゝ若し婦人が呼ばなかつたら、什麼なつたらう、考へ〳〵歩行いてるのだがさわ其理由は解らない、只もう夢中で歩行いて居るのです。

（七）

さて太郎は考へ〳〵歩行いて行きましたが、或る村へ來て日がくれかゝりましたので、一軒の家へ行き、とうか宿めてくださいと賴みますと、其處の女主人はやさしい人と見えまして早速泊めてくれる事になりました、で、部屋へ這入つて見ると女主人は卓子の掃除を始めたのですが、そんなに汚れて居ない卓子を汚い雑巾で拭いたから堪りません、悉皆汚れてしまつたのをまた其汚れた雑巾で拭き〳〵して居ますから、此方が綺麗になるかと思ふと、彼方が汚れ、到底もさつぱりなる事はありませんから、太郎は見て居て可笑くもあり、氣の毒でもあり側から聲をかけました。「貴孃は一躰何をなさらうと云ふのですえ
すると女主人は吃驚したやうな顏をして、

「お前は見てたのかえ、かう直きお祭りが來るからね、かうして道具を拭いて居るのだが、どうしても落ちないから、もう疲勞れてしまつたのさ、

「そりやアその筈ぢやありませんか、汚れた雜巾で拭いてるんですもの、一反洗滌いでやれば直ぐ綺麗になりますアね

女主人は早速雜巾を洗滌いで拭いて見ますとすつかり綺麗になりました。

『難有う、お前に云つて貰はなければ、綺麗になりつこはなかつたのだよ

翌る朝は早く女主人に別れを告げて、また或る森へ參りますと、一人の百姓がまた頻りと車の輪を撓めて居るのですが、臺を置かずに矢鱈にやつて居るものですから、どうしたつて撓りつこはありません。

『おい〳〵お前は何をして居るんだい

太郎が見兼ねてかう云ひますと、百姓はこれも吃驚した顔をして、

『お前さん見て居たのですか、この通りね一生懸命輪を撓めやうとしてるのですが少し撓めるかと思ふと、直ぐに撥ね反すので、もう疲勞れてしまいやしたよ

と云ひますから、太郎は可笑しく思ひまして、

『それは其筈だ、下へ臺も据ゑずに撓めやうとするのだもの、いくらやつたつて撓りつこはありアしない、まア臺を据えてから撓つて御覽!

百姓が其通りしますと、直ぐ撓りましたから百姓は大悅びで、其晩は此處へ泊る事になりましたが、翌る朝また早く出掛けて行きますと、其處には大勢の羊商人が屯をして、火をたかふとして居るのです、で、始め小さな枯枝を寄蒐めて、火を點けて、直ぐに濕つた大木を其上へ載せては火の勢を弱くさせやうとして居るので

すが、未だ悉皆燃え上りもしない中から濕つた大木を載せるものですから、折角點いた火も消えてしまつて、いつまで距つても燃え出す氣遣ひはありません、太郎は氣の毒になりましたから、

『そりやアいけないや、未だ燃えつきもしない中から濕つた木を載せるから、直ぐ消えてしまふのさ、まア其小さな枝が能く燃えてから、大きなのを載せて御覧！』

と云ひましたから、羊商人も成程と思ひまして、直ぐ太郎の云ふ通りやつて見ますと、濕つた木もめり〳〵燃え初めて、立派な焼火になりましたから、太郎も暫らく此火に暖つて居ましたが、さて歩行き出して考へて見ると能くもかう三度揃つて訝しな事があつたものだと不思議でなりませんが、どうしても其理由を解く事が出來ませんでした。

（八）

さて此處を立つて太郎は日の暮まで歩行き通しに歩行きましたが、教父の云つた森へ來て見ますと、成程一つの洞窟がありました、太郎は直ぐ其前へ行つて、荐りと戸を叩きますと、中から大きな聲がして、

『誰だ、其處へ來たのは？』と云ひました。

『俺は罪人でございます、他人の罪まで身に負つた罪人でございます』

太郎がかう云ひますと、やがて一人の聖人が出て來まして、

『お前が他人から負つた罪と云ふのは一體什麽云ふ事だね』

そこで太郎は雌熊が子熊を殺した事から、秘密の室へ這入つて、教父に叱られた事から、教父の云ふ通り野原

へ來て、百姓が牛を殺さうとして居た事から、悉皆話しまして、

『だから俺は惡は惡で雪がれると云ふ事は解りましたが、どうしたら自分のした惡を雪ぐ事が出來るでせうか、これを考へる事が出來ません』と云ひますと、聖人は首頷いて、

『よし〳〵！、まアお前が教父の處を出て此處まで來た道で見た事を云ふがいゝ』太郎はまた教父の家を出てから、此森へ來たまでの事を悉皆話して聞かせますと、聖人は默つて太郎を連れて自分の室へ連れて行き、さて鈍刀の斧を持出して、

『さア此室を明るくするのだ、こゝに木があるから、此斧で伐つて見ろ

と云ひましたから、太郎は其通り伐りますと今度はまた其木を三つに伐れと吩咐ける、三つに伐つた木へ更に火を點けろと云ひますから、小兒はまた其通り火を點けますと、

『よし〳〵！　火を點けたらな、お前が此處へ來る道に山の裾を通つて居る河があつたらう、其河の水を口にくゝんで來て三本の木の火にかけるのだ、始めにはお前が雑巾で卓子を拭いて居た婦人に教へた通りの積り、次は臺なしで輪を撓めて居た百姓に教へた通りの積り、終局は羊商人に教へてやつた通りの積りでかけるのだすると三本の燒木杭から芽を吹いて、直ぐに大きな林檎の樹になる、さうすればお前の今まで解らなかつた事が悉皆解るし、お前の罪が消えてしまふのだ

と云ひながら、自分の室へ這入つてしまひました、太郎は什麽考へても聖人の云ふ事が解りませんが、まア何かなしに聖人の云ふ通りやつて見る事にいたしました。

そこで太郎は河へ行つて、口一杯水をくゝんでは燒木杭へかけ、また行つて水をくゝんではかけ、都合三度火の上へ灑けましたが、もう疲勞れた上へお腹が减つて堪りませんから、何か食物はないかしらんと、聖人の室の戸を開けて見ますと、こはいかに、聖人は寢床の上にもう死んでしまつて居るのです、什麽も不思議でなりませんが、今更呼び生かす理由にも行きませんから、一挺の鍬があつたのを幸ひに、一つの穴を掘りましたで、夜は河の水をくゝんで來ては燒木杭へ灑け、晝はこつ〳〵穴を掘つて居ましたが、丁度穴を掘つてしまひ、聖人を埋めてしまつた時に、村から人が來て聖人に麵麭を持つて來てくれました、で、聖人が死つた事を云つて聞かせますと、其人は反つて太郎の爲めに祝つてくれて、もう聖人が居なくなれば、此處へとまつてくれと云ひまして、これからお前に麵麭を持つて來てやらうと心切に云つてくれましたから、太郎は矢張りこゝに居て、毎日河へ行つては水をくゝみ、くゝんだ水を燒木杭に灑けて居ました。

丁度これが一年續きましたが、或日大勢の人が此處へ來ましたと云ふのは、太郎の信心が村の評判になりましたので、森の中に居る信心な小兒の口へ水をくゝんでは燒木杭にかけて居るのは、何と云ふ感心な事だらうと云ふので、だん〳〵大勢の人が來るやうになりました、其中に立派な商人もやつて來て、太郎にお布施を上げやうと云ひましたが、太郎は貰ひさうにもしませんから、商人は其お布施を貧乏人にやつてしまつたさうですから云ふ有樣で太郎は一生懸命に河の水を燒木杭に灑けては、自分の罪の消えるのを俟つて居ましたが、其間二年と云ふもの、一日も仕事を休みませんが、燒木杭はどうしても芽を吹きさうにもしないのです。

ある日太郎が自分の室に坐つて居ますと、外方を馬の通る音がして、其馬にはまた歌を唄ひながら騎つて居る人があるらしいので、太郎ははて何者だらうと出て見ますと、其人と云ふは若い立派な男で、華美な衣服を着、光つた鞍へ跨がつて居るのですが、馬も肥つた立派な馬です、

『貴郎は一躰誰です、さうして何處へ行かうと云ふのです』と太郎は思はず聞きますと、其人は馬をとめて、

『俺か？　俺は盗賊だ、これから街道へ出て人を殺すのだ、人を殺す程面白い事は世界にない、人を殺すのだと思ふと、つひ氣が消々して鼻唄が出るのよ！

太郎は一時吃驚りもしましたが、さうだ此奴に俺の罪を負はしてやらう、此奴は今自分の罪を俺の前で白狀して居る、然し此奴は自分の罪を自慢で居る、さア什麽したらよからうかしらん、此奴が一反村へ這入つたら、それこそ村中脅かされて、これが爲めに俺の處へ逃げてくるものもあらうし、村の人が釣込まれて飛んだ惡事をしないとも限らないと思ひましたから、

『僕の家へも隨分種々な人が來るが、お前見たやうに自分の罪を自慢するものはない、僕の家へ來るものは、大槪自分の罪を懺悔して祈禱を上げて行く、お前は神樣が恐くはないか、もし神樣が恐ければよし、さもなければもう二度と此所を通つてくれるな、お前のやうな人が居ると、村の人が恐がつて來なくなつてしまふ、どうだえ、解つたかえ、僕の云ふ事を聞かないと、神樣の罰が當るよ！

と云ひましたが、盗賊は平氣なもので、

『俺は神樣なんさア恐くない、神樣が恐くない位だもの、お前の云ふ事なんか聞くものか、さうぢやないか、俺はお前の家來ぢやなしさ、お前はお前の勝手にするがよし、俺は俺の勝手だらうぢやないかお前の說法は婆さんにでもするがいゝ、俺に云つたつて無駄な事だ、お前が憖じそんな事を云つたから、倘俺は人が殺したくなつて來た、明日は二人からの人を殺めてやらうか、それとも今日の今お前から殺つてしまはうか、人を殺したからつて俺の手は決して汚れやアしない、もう二度とこんな所へ來るものかえ！

盗賊は其まゝ行つてしまひましたが、もう二度と來ませんでした、で、太郎はまた八年同じやうな事をして、其

處に住みました。

（十一）

ある晩太郎が例の燒木杭へ水を灑けた擧句、茫然坐つて居ましたが、誰も來てくれませんので、大變不幸のやうに感じまして、自分の身の上を考へ始めました、が盜賊に懺悔をしろと勸めた事を思ひ出して、さてまた自分の上へ返つて見ると、自分は聖人の云つた通り懺悔をして、其懺悔で今からうして生活せるのだ、人が來ないのがいかにも哀しく感せられる程、自分は今幸福なのだ、何故と云へば來る人は皆自分の信心を讃めてくれる、かうしてさへ居れば自然に自分の古い罪は消えて行くだらうが、また新らしい罪を造つて居はしまいか、新らしい罪を拵へて居るやうでは、村へ出たつて自分を信じてくれる者はない筈だ、あゝ、かうして俺は一人で生活して居ればいゝのだ、そして古い罪も新しい罪も悉皆雪ぐ事が出來ればそれでいゝのだ！太郎はかう考へますと、直ぐに麵麭の一袋と鍬とを持つて室を出ましたが、これは一つの洞窟を掘つて、其中へ這入り、人に遇はない積りです、で、麵麭の袋を引摺つて鍬を提げて、寂しい庭の方へ來ますと、其處には年前見た盜賊が立つて居ましたから、驚いて逃げ出さうとしますと、盜賊は中々逃がしません。

「お前は一躰何處へ行くのだ」と聞きますから、

「僕は村の人達に遇ふのが面倒だから、誰も來ない所へ行かふと思ふのだ

「人の來ない所へ行つてお前は何をしやうと云ふのだえ

盜賊に聞かれるまで、自分は洞窟へ這入つて何をしやうと云ふ事に氣が注きませんでしたが、さてから云はれて見ると食物にさしづめ困るのは請合です、盜賊は默つて乘出して來ますから、よし、何にも云ふまい、誰が

盗賊に話をしてやることがあるものか、然し彼奴も大分後悔して大人しくなつたらしいから、其逆先のやうに俺を殺すなんど〻脅かす事もあるまいと度胸を極めまして、

『お前はもうい〻加減に後悔したらう、さもなければ神様の罸が當るから

と云ひますと、盗賊は突然陰袋から小刀を拔いて脅かしましたから、太郎は一生懸命に逃げ廻つて、森の中へ逼入りましたが、盗賊は別に追駈けもせず。

『これでお前の命を見逃がすのは二度目だ今度俺の眼にとまるが最後生かしちやア置かないぞ

と云ひながら、ひらりと馬へ飛乘つて行つてしまひました、夕方太郎が燒木杭へ水を灑けに行きますと、其中の一本から芽が生へて、小さな林檎の木がそれから出來て居るのです。

（十一）

かくて太郎は人から隱れてしまつて寂しく住つて居ましたが、其中に麵麭がなくなつてしまひましたから、よし〳〵！　もう一つ探して來やう、と早速探し始めますと木の枝に一つの小さな麵麭袋が懸つて居ましたが、太郎はそれを採つて食べて居ますと、また亡くなる。また探す、と云ふ風で、別段腹も減かさず居ましたが、只恐いのは盗賊の事で、盗賊が來たら直ぐ隱れるやうに用心して、

『盗賊が今度來たら乾度俺を殺すに違ない俺は殺され〻ばもう自分の罪を雪ぐ事が出來なくなるのだ！

と云つて莽りに心配してとう〳〵それでも十年距つてしまいました、一本の林檎は大層大きくなりましたが、未だ二本の燒木杭はそのま〻で居るのです。

ある朝太郎はいつもの通り河へ水をく〻みに行つて、さて燒木杭の廻りへ吹かけて居ましたが、少し疲勞れて

來ましたから、其處へ坐つて考へ込みました、さうだ！　自分は罪を犯して居る、それに自分は死ぬと云ふ事を恐かつたのだ、死ぬと云ふ事で若し神樣が自分の罪を赦して下されば、自分はいつそ死んだ方がいゝ！　かう氣が注いた時に何となく盗賊が來た樣子ですから、なアに、己を善くするも惡くするも神樣の外はないのだ、と云ひながら、今度は此方から盗賊に會ひに出て行きました、見ると盗賊は獨りでなく、馬の鞍へ誰か縛りつけてある人があるやうですが、其人の口は聲を立てないやうに、手は暴れ出さないやうにしてありますから、默つて大人しくして居ますのに、盗賊は荐りに其人を脅かして居るのです、太郎は突然馬の前へ立塞がつて、

『什麼してお前は此人を鞍へ縛つて置くのだ、そして何處へ連れて行かうと云ふのだ？』と聞きますと、盗賊は眞面目な顏で、

『これか、これア商人の伜だが、親父の錢の隱匿してある所を白狀しないから、これから野へ行つて一責め責めてやるのだ

盗賊はもう馬を曳張つて行きさうにしましたが、太郎は中々遣りません、馬の轡を掴んで

『とうして遣ることぢやアない、此人を赦しやア行つてもいゝ！

と云ひますと、盗賊は酷く怒つた樣子で、ギラリと小刀を拔いて身まがえながら、

『野郎！　いゝ加減にしろ、他人はお前のするやうにやアなりやアしない、一躰お前は三度目に遇つたが最後殺す約束ぢやないか、放せッてば放さねえか

太郎は少しも驚きません

『僕はそんな事で驚きはしない、神樣より外に恐いものはないのだ、其神樣が僕に吩咐けてお前の手から其人

を救けさせるのだ、大悪人めー

盗賊が少し沈んだ間に、其持つて居る小刀でもつて、太郎は其人の縄を伐つてやり、

「さア二人とも何處へでも行つてしまへ二度と此邊をまごつくぢやアないぞ！

と放してやりますと、商人の伜は悦んで飛ぶやうに森の方へ駈け行きましたが、後を追かけやうとする盗賊を、太郎はまたとめて種々と云つて聞かせ、とう〳〵商人の伜の後を追はせずに、別の方へ逃がしてやりまして、翌る朝例の燒木杭に水をかけに行つて視ますと、また一本のから林檎が生へて居りました。

（十二）

十年がまたとう〳〵經つてしまひましたが太郎は未だ其儘洞窟の中に住んで居ました、もう太郎は心に何の望みもなければ何の苦しみもなくなりましたので、或日自分で考へますには、神様から授かる幸程人間にとつて難有い事はない、一躰人間と云ふやつは無駄に自分を苦めて、とう〳〵幸せと云ふ事を知らずに死んでしまふ、人間は罪の兒だ、だから自分で自分を苦しめて居る、なんと哀れではないか、自分のやうにして居れば少しも苦しい事はないのだもの、今度人に遇つたら能くさう云つてやらう！

こんな事を考へて居ますから其處へ例の盗賊が、通るやうですから、あゝ、また彼の盗賊めが通るな、未だ悪い事を廢さないと見えるだが、彼奴は自分の云ふ事を聞いた事がないのだから、もう説教をしてやる事もないと、今度は遇ふまいと思ひましたが、また何と思ひかへしたか、戸外へ出て行つて見ますと、盗賊は例の通り馬に騎つて居るのですが、何となく心配さうに見えましたから、突然下から其向脛を押へて、

「おう、兄弟、お前は少し後悔したやうぢやないか、お前はいつまで自分を苦しめて居るんだえ、神様はお前

を可愛がつて被入るのだ、お前は自分で勝手に罪をつくつては苦んで居る、い丶加減に盗賊の足を洗つておしまひな」と云ひますと、盗賊は、

「もうそんな説法は俺だけにやア廢してくれ！

そろ〳〵出懸けやうとする盗賊の足を緊り摑んで、太郎は兩方の眼から涙をぽろ〳〵〳〵翻しながら、

「まア、お待ちと云ふに！

と停めますと、盗賊は暫らくもぢ〳〵〳〵やつて居ましたが、軈て靜かに馬から下りて蹲踞り

「わ丶眞個にお前は豪い人だ、とう〳〵此俺に勝つてしまつた、俺は二十年の間お前と根競べをしたが、今日と云ふ今日負けてしまつた、始めてお前に逢つて意見をされた時には、只もう腹ばかり立つてお前の云ふ事なんぞは耳へ這入らなかつたが、二度目に逢つた時に、お前が人を避けて洞窟の中へ住うと云つたんで、信心と云ふものはそれ程偉いものかと思つたら、何だか訝しな心持になつて、あの、枝へ引か丶つて居た麵麭は皆俺が持つてつてやつたのさ。

盗賊の懺悔を始めて聞た太郎は、いつか汚れた雜巾で卓子を拭いて居た婦人の事を思ひ出してさうだ彼の婦人が汚れた雜巾で卓子を拭ひても落ちなかつたやうに、自分も始めは汚れた心で人に意見をしたのだから其人が綺麗になる筈はなかつたのだ、と考へました。するとまた盗賊は、

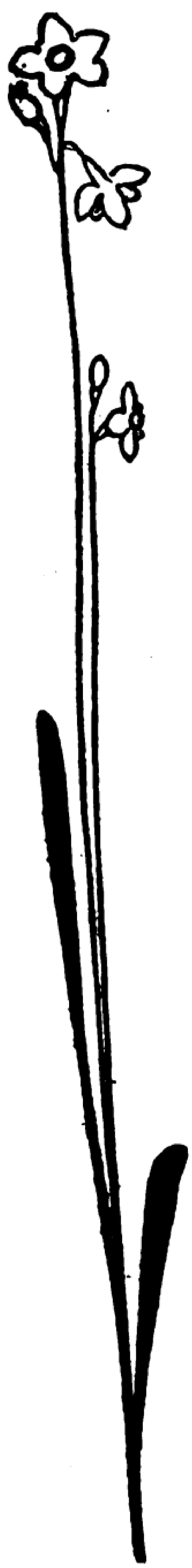
「何も二度目に逢つた時だつて、お前が洞窟へ這入つた事に感服はしないのだが、只あの時にお前の心が死ぬと云ふ事を何とも思つて居なかつたから、俺は其處へ氣が注くと、何となく自分が恥かしくなつたのだ

それでまた太郎の思ひ出したのは臺も据ゑずに車の輪を撓めやうとして居た人の事で、自分が死ぬと云ふ事が恐くない土臺を置いたから、こそ此盗賊の心を少し、撓める事が出來たのだ、若し死ぬと云ふ事がいつまでも

恐く自分の命を神樣へ捧げなければ、とても撓める事は出來なかつた、と思つて居ますと、盜賊はまた、
「で、お前が今涙を翻して意見してくれた時に、自分で自分の心が溶けたやうな心もちだつた、
太郎は盜賊が本心になりましたから嬉しくて堪りません、燒木杭の處へ盜賊を案内して來て見ますと、こはいかに、殘り一本の燒木杭から靑々とした林檎が芽を吹いて居ました、太郎は其所でまたいつか羊商人が濕つて居る大木へ火を點けやうとして居た事を思ひ出して、自分の心が充分に燃えなければ、自分より罪の深い人の心を燃す事は出來ない、丁度小さな枝の火が燃え盛つて、始めて濕つた木へ點くやうなものだと思ふと、こゝできた始めて自分の罪を悉皆雪いでしまひましたから、嬉しさは一通りでありませんが、罪が悉皆雪げた故か、この事を盜賊に話してしまふと、太郎はもう、、、コロリと死んでしまひました、そこで盜賊は直ぐに太郎を燒いてしまつて、今度は太郎の云つた通りに盜賊を廢してしまひ、長く此處に住んで、大勢の人にお說敎をしてやつたと云ふ事です。

(完)

因曰此篇原名をゴッドソンと云ひ、耶蘇敎國に所謂敎童が屬すべきですが、我國にに當らない所もあるので、罪と罪の兒と改へました、人間は罪の兒であると云ふ所にとつたのですが、餘り適當の題ではないと思ひます、敎父、敎母、これは前申す通り耶蘇敎國で洗禮の時假りになつて貰ふ父母を云ふのであります。



海（竹柏會兼題）

樺山つれ子

限なき大うな原をとぶ鳥の
翅やすむる帆ばしらの上

小林しげ子

久方のあめのぬ矛のしたゝりや
大海ばらのはしめなりけむ

佐藤朝嘉子

櫻しま遠くかすみて眞帆片帆
かぞへもあへぬ浪の上かな

久保よりゐ

智の鍵に探るとすれと極なき
海のみ神のみ幸をぞ思ふ

大竹伊鈴子

望多き人のこゝろはうなばらの
果なきよりもはてなかりけり

中村文子

越の海おきつ老は風吹きあれて
空よりおつるあらなみの聲

山本芳子

鴎あそび波靜なる春の海
われも小舟を浮べ遊ばむ

有賀晴子

わたつみの底の心はしらねども
長閑に見ゆるはるの海かな

金井繁子

龍神の怒おそれし海原も
ゆきさまゝなる世となりにけり

四方てつ子

別れにし舟は程なく見えわかず
霞にこもる沖つしら浪

清水錦子

青疊しけるが如きうなばらに
遊ぶが如く見ゆる舟かな

長谷部和子

のぞみある益良武夫を沈めけん
海とも見えずかすむ春かな

松井友子

老まかくれ又島かくれ行く舟の
いつ着くらむかしらぬ湊に

大澤園子

いづこより汐はみつらむいつ方に
汐はひくらむ海のあやしさ

佐々木雪子

磯つたひ日毎あゆめば幼子も
波を恐れずなりにけるかな



春宵歌不多

月の桂のや

神にえし玉のかうぶり身にそはでうし黒髪を世のかせのふく
つゝまれて一世夢みむ幸はあらずいたづらなりや峯のしらくも
かりそめの雪の旅ねに里なれてことしふゝきに兎かゝるわざ
由井が濱波の聲のみときめきてやみの暗きにわがひとりなく
嵐とも火とも岩ともけぶりとも魂さまぐ\に世にのこりけむ
ゆめにゑふ夜の玉手やあたたかき人にうつりてゆびわさちある
たなでゝろ人の思ひにむすびえで旅路の杖にやせむとすらむ
いづこより雲にいるべき道ならむ山も流れもうつし世のもの
水白うあしのなかゆく稻瀬川思ひのうちに年はくれにけり
なかばより亂れそめたる筆の跡は人も似るらむ去年のわが日記
ひらさきをえらびし頃のおもはくは手筥のひもとともにふりたり
かの珠を海にとらずやをでゝろに幸のわれあり母ぎみもあり
玉章はいつはりならじをてゝに今きみはつめたき世の衣をとる
海にいらむかの荒浪のよするときくだくるときよ魂も消ゆらむ
神ひとたび飜へしたるうすものの舞のたもとに野はかすみけり



姉さ妹

はな子

今わが書かんさするふたりを、何れの國いかなる人の令嬢なるかさ問ひたまふなかれ、たゞいまゝかその性情の一端をうつさんさおもへばなり。姉のマリアさ妹のアンナさは共に絶世の容貌を備へて、才藝ふかく、されどもその性は互に遠く相距たりて、姉は碧霄の大空にかゞやける月の如く、妹は地上に榮へる彼の櫻花の如し妹のアンナ常に暴へらく、

妾の輝やくばかりの容貌を視ずや、一たびわが百の媚ある眸をそゝげば、世の有情男子はたゞちに、われの美に魅せられ、名花の香に醉へるが如く幻のうちに、さまよへるならずや、われまたにこやかに眞珠の齒を露はしてほゝゑめば、彼等は細めたる眼を更に閉ぢて、魂いづくにか飛びゆきにけむ、ぶら/\さして再びわれを仰ぎ視る勇氣はなきにあらずや、あなお可笑う。妾はそが上にも羅帯を、もて弄ばん爲めに身に纏へる服裝より、腕環、胸飾りに至るまで粧をこらしぬ、されば妾が身は恰もかの地上櫻花の如く、燦々さして、あらゆる花やかなる美の極みを現はせり。

妾が鶯喉より流れ出づるこわれはいかなる精巧の樂器さ雖も及ぶべくもあらず、いさも愛らしき鳥の音も尙遠くわれには及ばじな、アゝいつかの夜會なりしか滿堂の貴顯紳士の集りつどひたる眞中に、わがこの妙態をしづ/\さかの音樂臺に登して。天來の美音はり揚げ、謳ひたる時は人々は半しく首を傾けてきゝ惚れり、妾が節を終りたる時は耳を聾ゆるばかりの喝采どよめき、花の雨の降る中に立ちゐたりき。妾が魅力はげにかくの如し、扨又王宮に愛賞さるゝ舞蹈の快樂さ云へる國にて、色彩艶麗つくしたる宮殿の高樓に一美人臥して心地よき夢に入りたるを驚きしはまさしくこの妾か舞になりき、世の畫家何れもふかくこれを讃美なしけり。

げに/\妾はかくの如く才色をもて世の榮華を極めんさす、或姉は妾を妬みて惡魔さ云ひ、男子を迷はする妖婦なりさ云ひぬ、いかにもわれは妖婦ならめ、妾は多くの男子を惱殺し迷はしぬ、されど妾ばそをつゆ惡しさも思はずむしろ喜ばしく思ふなり、何んさなれば妾は一人を愛せんさ思はずしてたゞ多くの人に愛さるゝを、こよなく樂しめばなり。

それ等を難じて妬むものは皆われにおさりたるものなり、かゝる側の人はわが姉上マリアを賞めたゝゐて婦女の鑑さなせど、妾は姉上の如き人を好まず、容貌は美けれども晴々しからず、服裝はつれに質素にして妾がそばにもよりつけず、姉上の好むさころ少しも妾には解せざ

るなり、妾はたゞわが欲するところを行ふのみ。

また姉のマリアは常にこの妹を冷やかに視て思へらく、嗟あさましき哉、アンナは時の間の泡沫にひとしき榮華の夢に耽りて、この外の大なる樂しみを知らず、歎かはしきは今の世の貴婦人達にこそ、多くはこの如き性情をもてるになん、妾は幸にさる浮薄なる事を好まず、常に靜なる處にゆきて詩人の如く大なる自然の意味を味へり。滾々盡せざる泉はそこに絶えず湧き出づるなり、神聖高潔なるおもひは溢れ／＼て妾を無上の樂土に誘ひゆくなり。渠等が右往左往に喧ましく馬車を驅りて交際場裡の女王に擧らるゝうちに、妾は自然の母の懷に抱れて、或は寺院の壯嚴をおもひ、古城の寂莫に憧がれさては時に名婦偉人の事蹟を誦みて、その生涯のいかばかり華ばしき事よとなつかしみ、またわが心の上に及びては少しも恥づる事なきを誇れり。げに妾もアンナの如く音樂を好めり、されど藝を多くの人の中に示すを好まず、たゞそゝふる雨の無聊につられて彈づる時か、或は月夜湖上に舟をうかべて月に對し、いさゝか閑かに謳はんとこそおもへ、アンナはゆめよりゆめに入りて、誠の樂しみを樂しむ能はず。已がすがたにまよひおのが才を誇りて人々にあがめられむことをひたすら願ふなり、今の世の多くの男子は旣に醉ひぬ。

されど醉へるは醒むる時あらむ、さめて本心にたち復へりたる時は、いかにその愚かしさを悔ゆるならん、アンナよ御身の運命はもはや定まりて亡びたるものなり、遂には飽てよきもて弄びものにされて捨てられむ、

げにアンナは人の爲めに容貌をもち、人によりて快樂を得るなれば一朝その樂しみ水泡の如く消えゆけば早やわれと云へるものはなくて、形骸に辛しき人とならん。



春のすさび

壺井麗子

高慢顏、自慢がほなるばかり、實にかたはらいたく、浅ましく感ぜらるゝはあらじ。母と共に寺に詣でしかへるさ、汽車にのりて、乗りかへの車を、新宿の停車場に待ち居たるに、年の頃は三十五六とおぼしき、紳士にもあらず、紳商にもあらず、會社の下役か、何ぞ、何れ此のごろ少しくなり上がりたる、學問も教育も、心もなき人ぞとおぼしき男、廿五六の田舎茶屋の女か、何か、見ぐるしきばかりに白粉をぬりたてたる、見るもむれわろき女も、女の母らしきとを伴ひて、上等の待合席に入り來りたるが、眼もおろさで、ばた〳〵と我がものがほに、室の彼方此方を歩るきまはし。もう何分をまつにや、彼處に電話をかけたか、彼方に電話もて知らせおかんなど、さも、知人多げに、云はずもすむ事をひとう云ひなるも、中々に心なく、聞きぐるしう覺ねらるゝを、よし〳〵[illegible]の何處にこそ電話をけかおかめ、只今、行くほどに、用意してまてよなど、人々の面を見まはすは、此處らの人にも深きなじみあるを知らせんとにや徒らに云ひわめくのみにて、實に何處にも電話もかけず、やがて切符うり出る時刻來りたるに、妻とおぼしきに買はせにやるとて、錢を出しながら、新宿より飯田町まで二等、一人前十錢、よきか、二等ぞ、二等なるぞなど云ひつゝ渡しなりしが、少しく遠くなりし頃、二等ぞ、二等なるぞ大聲に二聲云ひきかすあさましさ。中々に品がらを損ずるよと、かたはらいたく、身はす汗も握らるゝを、なほ得意がほに、ひとり誰にもてる如く、人にもてる如く、婦女子にもてる如く、藝者にもてる如く、人にも聞ねよがしに云ひちらすさま、三馬の百馬鹿の事未馬鹿とやらんを、さながら狂言に見るやうの心地したり。

鳥の玉子をかへさんとて、兄なる人、日本、人の家にて信用すると云ふ鳥屋より、巣鳥になりたるをあがない玉ひ、よろしき鳥の玉子、十二ばかりを人に求めて、抱かせけるに、初め二日ばかりは熱心に抱きたるが、三日目、四日目になるまゝ、外にのみ出でゝ、玉子抱かむともせざるを、何としたる鳥ならん、不熱心のものよなど云ひつゝ、十八九日がほど、強ひては入れて、かゝへさせけるを、いつしか王子こはしなどして、遂に強ひても〳〵抱かずなりたり、あやしや、鳥の中の悪鳥かなどとて、近きほとりの鳥屋に見せ、飼ひなれたる人にも尋ねしに、一度かへし來たりたる鳥なり、もはや巣鳥の熱もさめなりぬと云ふ。たばかられたり。知らぬ鳥屋にては、かゝる事もされんかと、人の信用すると云ふ鳥屋と聞きて、遠く芝のあたりより、時日をさへまち、價も高うあがなひたるを、憎くや、自らの家の

たかへませおきて、知らぬ顔にも来れるなり。いとなしきは王子かな。もはやかへらんとて働くよしなり。他に業鳥を求めたれど居らず、湯婆にてかへろと聞くまゝ、温度をはかり、夜業手をつくしゝかど、もはや、手も足も生ずるばかりになりて、鳥となる能はず、動物とは云へど、十二個をむざん、空しく殺したり。人はあはれに思はずや、いとなしくは思はずや、人のもの、かゝはじとにや。己れのみ利して心地よしとする小人、凡そ此の徒の商人ばかりたのまれぬものはあらずかし。人を見ば盗人と思へよと、かつて人の云ひけるを、無情の言の葉かなと思ひにしが。かやうの人の多き世の中、まことに金言にこそはありにしか。

何れをたのみても、動物屋、此の徒の鳥のみ多く返るを、はからずも近きほとりの鳥屋に、雛鳥のいつくしきを見あて玉ひぬとて、あがない得られぬ、まだ昨日かへりしのみのひよつ子、ひよ〳〵と泣く聲も親をしたふかとそゞろいたましう感ぜらるゝを、もと飼ひおける鶏の、此の子の籠のまはりをまはりて、つゝきぬるを、ひよつ子は、昨日の親のはぐくみを忘れでか、つゝきぬる口ばしをしたひて、足長に、彼方此方にありきまはるさま、あはれ無邪氣なりけるよ。人ならば、如何なる情けなきものとて、かゝるとき慈愛の情は起らんものを、如何に鳥類なればとて、無情なるかな。なほこれをつゝきいぢめ、あまつさへ、これが餌を奪ひ拾ひぬ。邪見極まるものよ、强欲きはまるものかな。動物は飼ふものにはあらじと、そゞろすさまじう覺ゆれど、無情の性、そのまゝにあらはす此の鳥は中々に、有情に見せたる無情の徒よりはまさりたらんかも思はれたり。

嗚呼人生はおぼつかなきものかな。そのなほ東西を知らぬほどに、一度、親の情、人の情を失はゞ、如何なる釋迦と云ふとも、孔子にありとも、人と成長する事は叶ふまじを、あはれ、人情ばかりいみじきものはあらぬよ。嗚呼勿躰なし、勿体なし父君よ、母君よ。六尺の孤を托せらるゝ人、よには、一人もあらずかしと、此頃、つく〴〵と感ぜらるれど、されど、なほ、それを、殺ろすに至るもまたまれなるよ。なほ人情の存する所なるか。

今年、我が師の還暦の賀とて、きれんのため、多年揮はれたる繪畫のかずを集められ、上野の美術協會に陳列して、廣く世の人に示されぬ。また櫻が岡、花もなき三月の初めなりしかど、催されし一週間のほどは、此の會のため、満山、人の波に埋もれ、雨の日などにも車のきしる音、さながら雷とそゞろき耳りぬ。

貴きには貴にやありけん、花を見るばかり我が心のうれしきはなく、花を摘まむばかりたのしきわざはなきよ。まして、花の一輪咲きそめたるを見つけたる心地、何にかたぐへん、見つけたりと、誰れにも／＼聞えまほしく、ほこらまほしくぞ思ふ。まちつけぬ人の庭に、見つけ出でたるうれしさ。我が心にさへ、今にほこられて。ものゝかなしき折りも、その花の咲きさま、思ひ出づれば、何となく心ゆきぬ。

花は、梅の花、一輪雪の中よりほゝ笑みそめたる、こよなくかぐはし。先つとし、まだ梅の花の極めて、稀なる頃、道の邊に、たゞ一輪誠にうつくしく、よき形したるが、落ちありしを、拾ひかけて、拾はざりし、今に殘念、折りふし口惜しく思ひ出でられぬ。今年、龜井戸の梅見に至り、天滿宮の茶屋の垣根に、白梅のつぼみ、殊に大きなるが、他よりは目とまり、みだりに折るべからずとは、よく心に解しぬれば、たゞ一輪を、寫生の色みにとつまみしを、忽ち嫗の聲に叱りつけられぬ。人を見て帆をさけ、子供にもなきに、一つぶに、かく邪見なりしも、隣りの茶屋に、暫く、腰をかけたる程と、そゞろ世の中悲しくなりて、泣く／＼歸へりぬ。遂に、そのつぼみの色、そめず捨てたり。あはれ、花の心にはあらざりけんを。今も、その嫗の聲は、耳とゞまりて、世の邪見を聞く毎に、あらたに耳に聞えぬ。

桃のつぼみふくよかなる。櫻の花のみごと朝日に匂ひたる、うれしく、かなし。

とくかへりまたやながめん櫻花
　しばしが程の旅ねとを知れ

とゞめて行かれし父君はや、かへらぬ旅の門出とも知らで別れし父君はや、今年も花は咲きぬ。

もろともにながめんとこそまちにしか
　とくかへらんといひし君はや

散れ、散れ、散れ、散らずとも、我がまつ人のかへりくるべき春にはあらねば、櫻花よ。

菫の花、何よりもいつくし。つばなをかし、つく／＼し。おもしろし、れんげ草。またにぎはし、何も／＼、花はみながらなつかしよ。わらび、竹の子、いさましく、一夜のほどに、土をもち上げたるも、他に抜け出でゝ、見らるゝよ。麥の秀でたる、似るものなくいさまし、菜の花の盛んなる、たぐへんものなく長閑なり。されども。たゞ笑子の心察すれば、春の心もかなしくなりぬ。むらさきの花に、如何に咲きけん、名を聞くだにも、あはれに覺えられぬ。此處、むかしの、むさし野にかへさまほしき思ひす。

萩の花、尾花、くず花、女郎花、桔梗、朝顔、蘭、かるかや、秋の花、みなあはれに身にしみてこそながめらるれ、撫子の花、中にもやさしく、野菊の花、殊にあはれなるよ。われもかう、何ながうと云ひけん、なかし。花も、まためづらし。鈴虫、松虫、きりぎりす、さりしくあはれなる中にも、蟋蟀のなく音、殊にあわれに身にしみぬ。此の頃、かへりたる鶉の可愛き〳〵ひよつ子にもこればかりは、かなしくて、さらせぬなり、ずい一〳〵と泣きはこりたる虫こそはをかしけれ、ひぐらしも、聲をもすゞし。すゞしき所ならでは泣ぬ虫なり。

眞宗の寺に、說教ありて、その擅家の老母、門徒宗の同じ年頃の老婆を伴ひて、詣でたるに、何とや聚ゆる、少しく名のある高僧と云ふが、說教して、世の若きらのは、とかく何事をするにも、人にほめられん、よく稱くられ、よき返禮をうけんなどとて、人の手前ばかりにてなすものあれど、それは、きたなき下司心にて、決してさやうの心になすものにあらず、人の居る時も、居らぬも、同じかれよと云になど說かれたるよし、歸へりて、眞宗の人、今日のみなしへ如何にし、門徒の人に尋ねしに、少しもありがたくなかりしよし云ふ。げに、己れの身を責みるはありがたからぬ事にて、一度も南無阿彌陀佛と云ふ人は、蓮の上に行くべかりけるの教へか、殺ろされても、蓮花往生をとく宗旨ならでは、かやうの人には、ありがたからざるべしと、人のものがたりぬ。嗚呼、一身を奴にするには如しかずとの、長明の言草、かやうの所にも思ひ得られぬるかな。

物よりのかへり、牛込の矢來町の交番所の前に、人の集りたれば、喧嘩か、醉人か、何ぞと思ひつゝ、近づきぬるに、汝は一枚地圖を心得て居るのか、此處へ來て見なさいとて、まだ若き車夫を、巡査の引きて、交番の中に入れたり。立つもはしたなく覺ねられ、如何なる事か、聞かまほしき好奇心を忍びて過ぎはてけるが、車夫につりあはぬ、いやしからぬ人品、むかしは、由緒ある者とまでは覺ねれど、にはかに親におくれたるか、親に背きて都に遊學の子か、學資のためにか、何れ、昨日今日引き出でたる行路なるべし。たま〳〵、乗せられたる客の誰も氣の毒なれど、其の主の誰また一人に推ひせられぬ。聲かまし、行路の人、如何に感じて立てるや。



雜錄

伯林娘氣質（下）

巖谷小波

さて伯林の女學生は如何か?、これを少し話して見やう。

尤も伯林、否、獨乙と云ふ所は、彼の米國や英國はと、女權の勃興した國では無く、丁度我が日本と、此等二國との中間にある有樣で、日本よりは無論進んで居るが、米國ほどに又突飛でも無い。從つて女子敎育の機關は、それ〴〵備つて居る。けれども、最高等の敎育部、即ち大學に入學する女學生は、獨乙人よりは寧ろ他國人の方が、多數である樣に見受けられる

これは獨乙と云ふ國が、學術國として、諸外國より拔んでゝ居る爲めに、各國の女學生が、皆此地に笈を負うて來るので、所謂燈臺下暗しとやら、獨乙それ自國は、さほど女子敎育を重んせぬから、さては右の狀況を呈したのであらう。

又音樂の如きも、獨乙は世界に冠たりと云はれる國であるから、之が爲めに遙々修業に來る者も、決して少くないのである。現にわが文部省から派遣された、幸田幸子女史の如きも、伯林の高等音樂學校に入つて有名なヨアヒム氏の敎授を受けて居たのだ。このヨアヒムと云ふ先生は頗る見識の高い、そして亦大の嚴重な樂師であるから、容易に自分の弟子を取らず、入學試驗も非常に嚴しくしてある。されば數ある音樂研究生の中でも、私はヨアヒム先生の弟子であると云ふと大いに肩巾が廣いとやら聞いた。

さて此種の女學生は、元より年を取つて居り、又他國からわざ〳〵來て居る者でもあるから、皆平常は下

宿仕居、乃至親戚知人の許に同居して居るが、前にも云ふ通り、皆個人獨立主義であるから、必しも他の束縛は受けず、料理屋へも一人で行つて食つて居れば芝居へも一人で出かけ、殆んど男子の學生と異りは無く、只此等の如く、飲んだくれたり、血闘したりはしない許だ。

次に中學程度の女學生、即ち高等女學校の生徒に成ると、大方親がゝりであるから、從つて監督も嚴しく一人歩行も容易に許されて無い位だ。又親がゝりで無い者、例へば地方から出て居る者の如きは、パンジオンと云つて、一種の寄宿舍に入れられて居る。

パンジオンとは、俗に下宿と云ふ意味であるが、其中に只女子計り入れて、之を監督する組織のものをも又パンジオンと云つて居る。これは日本で云ふと、下田歌子先生とか、棚橋絢子先生とか、津田梅子先生とか云つた樣な、女流教育家が主に成つて、然る可き紹介を以て、各種の子女を預り、且つ監督するのである。尤も其中には、定規の課程を設けて、諸般の學課を教へる所もあるが、只監督丈に止まつて居るのもある。

で、此等のパンジオンに居る女學生は、特別の許可を得た場合で無ければ、獨りで外出する事ならず、一寸散歩に出るのでも、又氷辷り、ロン、テニスの遊戯などにも、皆之に伍々隊を組んで出かけて行き、それに然る可き監督が付いて居る。

又時候が好くなると、此等の連中が大擧して、近郊へ遠足に出かける事などもある。其折には、舍主の知り合ひの男子なぞも、案内を受けて出かけて行き、鬼事だの、毬投だの、又舞踏だのと相手に成つて居るが元よりその交際は、單に無邪氣なもの丶如く見える。

更に大なるものとしては、高等女學校同窓會の名の下に、數百人の妙齡の女子が、小蒸汽を買切つてスプレイ川を溯つたり、汽車でグルテワルドの森へ出かけたりする事がある。余の如きも度々此會へ招かれた事もあるが、その場合には、學校の先生も行けば、家の阿父さんも行き、また叔父さん、兄さんなどの、男子

も共に行くのであるが、主人役は皆女子であるから、彼等は自由に遊び廻はり狂ひ廻はるので、如何にも愉快らしく見うけられるのである。

元より日本とちがつて、男女交際は自由な所であるから、年の行かない女子と雖も、或種の日本のお孃さんの樣に、男子に對して、妙にはにかむ樣な素振は無い。で、其間によく男子の性情を解して、やがては例の約婚の段に成る。——是が所謂る自由結婚なるものであるのだ。

さて自由結婚！此語を日本で聞く者は、或は非常に買ひ被つて、頗る羨むべき美習と思ふもあり。或は大いに氣遣つて、甚だ恐るべき惡習と云ふもある。が、余に云はせると、兎に角これは考へ物だと思ふ。

況んや日本では、まだこの自由結婚なるものを、眞に解し得た者少なく。甚だしきに至つては、所謂野合、馴合など、、相去る遠からぬもの、樣に思ふ。これは大きな間違なのである。

と云つて、余は之を實驗したと云ふのでは無いが、まづ余の觀る所によると、——玆に甲の女と乙の男とがある。この兩人が或る機會で、例へば前にも云つた樣な、遠足會とか舞踏會とかの折、互ひに初めて知り合つたとする。元より是も然る可き紹介者があつての事で、普通の妙齡の處女は、紹介の無い若い男と、輕輕しく語を交へないのが常だ。

で、この兩人が、所謂る合緣奇緣で、互ひに虫が好き合つたとする。するとまづ女子の方が、自分の兩親或は叔父、兄に紹介して、それから初は友人としてつき合ふ。其中に意氣投合して、此人ならばと思ふに至つて、まづ双方眞面目に胸中をうち明け、そこで男子の方から、公然自分の兩親に、約婚の申込をしてもらふのである

其時兩親も考へて見て、是ならばと思つたら、直ぐ約婚を許すのであるが、さうなると今度は親類、知人へ、公然その披露をし、さて一定の時日を經てから、いよ〳〵芽出度結婚をさせる。是が正當の順序であるので、其間に穴隙を鑚るなど、云ふ、如何はしい振舞

は、決して出來ないのみか、却つてこの約婚の間が、頗る監督の厳しいもので。例へばその男が、女を散歩に連れ出す場合にも、多くは弟とか妹とか、或は叔母とか従弟とか云ふ者が、その監視に付いて行くのである。

然しその兩人の間は、無論甚だ睦ましいもので、その兩親の前でも、決して遠慮は無く、却つてその眼の前ほど、更に親しげに振舞つて見せる、是等は日本風に考へると、「親の前の見堺も無い」と、眉を顰めるべき所でわらうが、彼地ではまるで反對で、親の前ほど睦ましく見せる風がある、此は國情の大いに異つて居る所だから、必しも咎めるには及ぶまい。

さて女が男に對しての態度。これは如何であるかと云ふに、是も日本などで考へると、甚だ面白からぬ風に見えるが、彼地では普通の事として、女は男より頭が高い。例へば宴會の席上などで、或る男と女とが、挨拶をする場合でも、男は立つて丁寧に辭儀するのに女は座のまゝ一寸點頭く位。大抵なものに、決して輕輕しく手を出さない。況んや男の方から手を出すのは甚い失禮としてある位だ。

共に散歩をすればと云つても女を必ず男の右に立てねばならぬ。これは敬意を現はしたもので、宴會の席に伴ふ場合、舞踏場に案内する時、乃至滊車馬車等に乘つても、凡て男は相手の女を、その右に立てるのが禮だ。

又その女に、外套とか傘とか、何か邪魔らしい物のある時は、男は皆持つてやる。これは必しも女を尊む男を卑むと云ふ譯では無く、畢竟女は弱い者であるから、男が之を助けるのだと、かう解釋して可いのである。

されば女の方でも、男にこれ程の仕向けを受けるのを、元より正當の權理として居り、却つて之を爲ぬ男をば、禮に倣はぬ野人として、之と交るを好まない。現に余の知つた男で、或る女と交際して居つたが、或時共に馬車に乘るのに、急いで自分が先に乘つたらそれから女は機嫌を損じて、遂に間が疎くなつたと云

ふ、何と恐ろしい見識では無いか。

が、其の内心を叩いて見ると、必しも伯林の女は、男卑の念が強いとも云へまい。ちと立入つた批評か知らぬが、前の樣な男に好遇を待つのは、畢竟一種の虚榮心から出たので、人の前でこそ、男に外套を持たせ男の先に立ちはすれ、只二人さし向ひの折は、女は矢張り女だ、何所やらにしほらしい所もあり、男の外套も着せてやれば、男の後に立ちもする。

要するに獨乙の女は、その自尊の點に於て、元より英米の女ほどでは無い。彼のシルレルの詩にもある如く、「夫は外に働き、婦は内に勉む」と云ふ考が、何所までもあるらしく見うけられる。それを近來の若い女殊に都の——伯林の女の、やゝもすれば自尊の態度を取り、男の好遇を需めて、之に得々たる風のあるには是も例のハイカラ風の、遙々太西洋を越えて、此邊をも吹き込んだ故でがなあらう。

（完）

下婢學校參觀記（架空談）

石井研堂

何の職業でも、資格の明なものでなければ、雇ひ手はございません。病院で看護婦を雇ふ、學校で教師を雇ふ、新聞社で記者を雇ふ、工場で監督者を雇ふ、何れもどこの卒業看護婦だとか、工學師、文學士だとかその肩書に對して、技倆を信じ雇ひ入るゝので、郵便の配達夫でさへ、學力と體格を檢査した上でなければ採用は致しませぬ。

所が、獨り下女のみはどうでせう。昨日國元から出て來て、今日桂庵の處に申込めば、右から左と、口があつて、すぐに立派な月給取になることを得るのであつて、爪の垢ほどの修業をもせずに、勤めのできるのは、天下廣けれども、下女の外には又無いです。積年苦學の秀才が、たとひ高等文官試驗に及第しても、中々思ふやうな口が見付からぬと聞くに、さりとは、下

女ばかり、何の果報でせう。

どうも、手前の女などは、桂庵が連れて來ました時には、十八になるといふて參つたのですが、證文を入れて仕舞ふと、すぐその翌日は、十六だといふでありませんか。それで、來る早々、こんなに客の多い家は無いの、庭が廣くて、掃除が思ひやらるゝの、廻り椽が多くて、雜巾がけに骨折れさうだの、やれ子供が多いの、井戸が遠いのと、罪もない猫に、當り散らし、目見えから三日目までに、こわしたのが、ランプのほやが五つ、お茶碗が四つ、急須が一つ半――半は鼎だけこわしたのです。でも、幾らか、働きぶりでも、よろしいなら、格別ですが、朝から晩まで「朝ねがすきで、宵ねして、時々起きて坐睡をする」方なんですし御飯を炊かせては、お焦なんかばかり作り、お香の物を切るからッたつて、滿足に切れはせず、灰吹が、たとひこぼれさうになつてをつても、言ひ付けなければ明けやうでもなく、三日にあげず、やれ阿部川町の伯母が、餅がつかへて苦んでる筈だから、往つて來たいの、辨慶橋の姉に頼まれたので、七つ屋に往つて來るのといふて、小半日づゝ用を缺いてると始終なんです。それでも、居つきさへすればよいと思ひますから却て、氣兼氣苦勞をして使つて居りますが、さつとすると、「わたしはやがて暇とつて、風呂敷包みに下駄さげて、奥さんさよなら、旦那さんによろしく」なんて謠ひ出し、主人が使うのか使はれるのか知れませんです。ほんとうに、此のせち辛い世の中に、下女ほど樂なものはありますまい。私なども、小さいのでも無ければ、下女奉公に出た方が、餘程樂だと、毎度宿に申すのでございますと、どこかの奥さんの、湯屋で演説してるのを、耳にしたことがございますが、これ一家の私言ならず、「奥さん」社會の公論でございませう。

が、世の中すべてのことが、日に月に、世界的に開け行く今日のことですから、獨りわが下女社會にばかり、專横を許して居りません。給料が安くて、勤勉で主人の爲め思ひなる、支那婦人が、どし〴〵流入して來て、舊來の下女と競爭を始めましたから、下女の價

格は俄に暴落して、大恐慌を生じ、大きく言へば、社會問題とかいふやうな、實地問題が起きて來、わが國の下女改良の論説は、新聞雜誌や演説に現はれ、下女の輸入退治を標榜して、下女黨の肩を持つ者も少くありませんでした。これ寧ろ當然のなり行でせう。

かうなつて來ると、本邦の下女も、舊來のまゝでは雇ひ手がないので、勢、其給料を安くし、其勤めを忠實にし、特に下女の下女たる資格を備へて、後始めて奉公に出るやうになり、「下女教範」などいふ振がな付き繪入の書物が、誠に能く賣れ、下女學校の入學試驗には、常に定員の十倍以上の志願者があるやうになつて來ました。それもその筈でせう。此の學校の卒業證書を持てるものは、つッかけ十圓近くの給料を得るに反して、然らざるものは、無資格者として、どこへ往つても雇ひ手の無いやうな風に、世の中が變つて來ましたからです。

この下女學校は、今、府内にばかり、十餘校ありますが、駿河臺袋町の三女學校は、僕も評議員の一人にされて居ますので、少しは内部の摸樣も分つてます。三女とは、飯たき、仲働、小間使の三種をいひますので、附屬科に、乳母、お針の二部をおきます。

ことし、一月の授業始でしたが、教授の摸樣を參觀しました。生徒は皆、盲目縞の筒袖で、行燈袴の代りに、赤盲目縞の三布の前垂をかけ、簪にはたきを打違にした紀章を、左の胸の處につけてをります。

教室に入る前に、教師が生徒の點呼をいたしましたが、並の學校ならば、一、二、三、なんどゝ唱ふべきを、この學校は學校だけあつて、椀、豆腐、擂鉢、簪、灰吹、火ッ消、なんて番號を唱へること、外には無いことでせう。

さて、最初に觀ましたのは、應接科の教室でした。教師が、身ぶりをしながら、

『今、こゝに、客人が參りまして、戸をこんな風に、さら〳〵と明けて、入つて來て、ごめん下さいましと、呼ぶ聲を聞きました時に、皆さんは、どんな風に取次をいたしますか。こゝに出て來て、實地の通

りにやつてごらんなさい。鍋田さん。』

といひました。すると、一番前列に腰かけて居た、體格に申分なき、雲つくばかりの大女が、とつし／＼と梅ヶ谷がして踏むやうな工合に、床板を震動させて、進み出でましたが、敎師の前に、兩手を突いて、中腰になり、蝦蟇が小蟲を狙ふやうな姿勢をして、屹と前方に目を配り、

『にしやー、とッけから來たんか。』

と、われ鐘のやうな聲で、言ひ放ちました。して、席に復ると、敎師は又、

『釜井さんは。』

といひました。釜井と呼ばれた女子の、鍋田の後の列に起ちて椅子を離るゝを見れば、天井の低い家に生れたので、竪に伸びられなかつた人か、身の長は僅三尺に出でずして、橫幅は五尺に過ぎ、ゐかぎれを病める爲めでせう、足を爪立てゝ敎師の前に出で、左の握り拳を膝頭の上に、右の握り拳を小膝に當て、長刀使に似たる身構して、

『姉で、わじョしに來たゞか。妾はこゝのはした女にはべる。』

とやつてのけました。其次に呼ばれて出て來た、篩井といふ生徒は、暫時無言で起つてましたが、一足戻つて後を向き、主人に注進の思ひ入れで、

『おなでが來たよ。』

と言ひ乍ら、坐に着きました。

多分、これから、客と一二の問答あり、敎師は、惡い處を修正し、『お通り遊ばせ』に歸着せしむるのでせうが、時間が掛りさうなれば、この室を出でゝ、炊事科の室に入つて見ました。こゝも、生徒との問答の最中で、敎師の、

『朝起きると直に、火を焚きつける時、どんな方法を執りますか。』

といふ間に應へて、一生徒は、

『松子を拾つて焚き付けます。』

といひ、一生徒は、

『薪に、一合ばかりの石油を打かけ、それにマッチで

火を移します。』
と應へました。その他に應へる者がなかつたので、敎師が説明して、
『田舍と違つて、東京の市内では、松葉を拾ふことなとは、できません。又東京の生活方は、すべて、火打箱の中で火を焚くやうな、けちなやり方を撰ばんと、奥さまの御機嫌を害ひます。で、朝の焚付は、旦那のお持返りになつた料理屋の折のこわれ、肉屋菓子屋味噌やなどの、物を包んでよこす竹の皮などを、平日心がけて溜めおき、之を焚付に使ひます。火の種は、マッチなどを費すは、奢の沙汰ですから摺木のさきを板間に當て、錐を揉むやうに、兩の手で揉めば、摩擦熱から火の出るものです。その火を秋くそに移し、焚付くるが最も經濟の新法で、西洋では、この法ばかり用ひて居ります。』
といふと、一生徒が質問を起して、
『西洋にも、摺木といふ物がございませうか。』
と、急所に一本參りました。敎師は敎師だけあッて、
『西洋には、摺木がございません代り、スチッキを使ひます。で、西洋人のスチッキは、たゞ、形容の爲めに、ついて歩くのではなく、土砂をつけおいて、摩擦の時の發火を助ける、つまり實用上から起きたことなんです。』
と、辯明し、生徒はこれで承知したやうでしたが、僕は、腑に落ちませんでした。
次に觀ましたのは、洗濯科の敎室で、生徒は、『お針部』の者も、交ッてました。
敎『三股さん、洗濯物を乾す場所の少い家では、どんなことにしませうか。』
三『輕氣球を作ッて、それを騰らせ、その綱に、乾すべきものを吊します。かうすれば、いかに澤山の洗濯物でも、天まで屆けますから、納りがつきます。それは、赤い切、白い切、淺黃、紺など、色々の物が、上より下へ連りますから、色彩粲然として、市の美觀をも增すと思ひます。』
敎『それでよろしいです。舊式の乾物は、横に連ねて

日に當てますから、面積を費しますが、この方は、上に連るですから、最も狹い面積で間に合ひます。且つ、濕氣を乾かすには、溫熱と、空氣の流通で、水分の蒸發を促すが主眼ですから、特に輕氣球式が適當してるです。併し、風のある時には、輕氣球が眞直に上にばかり騰りますまい、風向によッては、隣所の輕氣球がやッて來て、邪魔をすることもございませう。その時にはどうしませうか。」

三度「それは、我に、その輕氣球主に向ッて、球の退去を請求する權利がございますから、少しも不便を感じません。民法の、千八百六十五條に、

「洗濯用輕氣球ノ、斜ニ騰上シテ、乙某ノ地上權ヲ侵ス時、乙某ハ、球主ニ對シ、球ノ撤退ヲ請求スルヿヲ得、球主若シ之ヲ肯ゼザル時ハ、球ノ綱ヲ切斷スルモ其責ヲ負ハザルモノトス。但シ此場合ニハ、球主ヲシテ、拒ミ證書ヲ作成セシムルヲ要ス。……

など、何だか、女辯護士でもあるやうに、喋々と、權利義務の主張に力瘤を入れて來ましたから、僕は、この室を出でました。

尚、時間に、少し餘りがありましたので、唱歌室に入ッて觀ました。

敎師は、各生徒に、知ッてる歌を一曲づゝ謠はせましたが追分節を謠ふ者、漁笛一聲を謠ふ者、大津繪節を謠ふ者、様々に、皆お國自慢の節面白をかしく謠ひました。中にも、桶田といふ生徒が、聲張り上げて高らかに、

ハラー、ハラート、フライキトンデセー。ハラー、ハラート、センガリヨマセ。ソワセンデ、コオロフラットナットセンデセ、ワレイシユンゴマッチンチヨージ、

と謠ッたについては、室内皆耳を澄まして聽いてました。これは、煙草やの廣告樂隊が、田舍に往いた時、聽いて覺えたのだといひます。

敎師も、この節を面白がッて、生徒と共に、二三回合誦しました。すると、皆が忽ち覺えて、ハラー、ハラート、フライキトンデセー、と、手拍子足踏で敎室

内を踊り狂ひ、敎師も共に浮かれて、近くにゐッた十能を執ッて、左の肩にかけ、右の手の鞭をその上にのせ、首を妙に左少し曲げて、バイオリンでも彈くやうな身振をして、ハラー、ハラート、センガリヨマセ。ソヲセンデ、コオロフラツトナツトセンデセ。と、淺草公園の見世物じみた騒ぎになつて來ましたから、この室を出てしまひましたが、掃除、裁縫、料理などの敎室は、時間の都合で、見ないでしまひました。

何しろ、明治聖世の有り難いことには、下女までもその敎育を受くる此の如くで、すでに、下女學修業の爲めに、洋行したものさへあるさうです。下女も、遠からず、辨當持ちで通勤し、出席簿に認印を押したり日曜と大祭日には、出ないやうなことになるでありませう。

○最も樂しき生活

都府の生活と田舍の生活と孰れが愉快にして且つ便利なりやとの問題は英國倫敦に於て識者の考慮するところなりしが此頃元と倫敦の新聞記者たりし或人が種々研究の末「デイリー、メール」紙上に公にせるものは移して以て我國の人々の參考に資すべきものあり玆に之を紹介せんに

▲愉快と苦痛　彼の謂へるには倫敦に生活せんは如何に節約なるも一箇年二百七十三圓を費さゞるべからず然かも此の二百七十三圓を得る事は即ち一箇年毫も斷間なく苦痛を感ぜざるべからざるを意味せるものにして其の愉快を求めて勞作し消費するときは影の形に隨ふ如く苦痛も終始相離れざるものなれば畢竟其の人は零なるものにて全く無意味の生活と謂ふの外なし

▲幸福の生活　加之一箇年二百七十三圓の費用を支へ得んも倫敦の生活は單調子にして寧ろ苦痛を感ずること多ければ宜しく田舍に退きて幸福なる生計を營むに如かざるべし而して田舍に退きたる身は如何にすべきやといふに其の人は己が田園を求め自ら働き自ら生活すべし此くせば假令家を築くに佛蘭西の釘食卓を飾るに甘き鹽、書簡を認むるに光澤ある紙を得る無からんも田園は多く必需品を殖やし夏來らば新鮮なる蔬菜夥しく生じ馬鈴薯、葱等を冬の用意に納屋に貯ふべきのみならず美しき果物、豆類は潤澤に味はれ且つ戸外の生活は人の壽命を長くし食物も田園に產する物を最も適當とすべきにより屠獸場より運ばるゝ肉類の支拂も不必要と爲らん

▲賑かな田園　田園生活の副產物とし家禽は歎ひ兎は小屋に躍り小山羊は鳴き小羊は戯れ鷄、鵞、鵞鳥の類亦た養はれ池には鯉を捕ふべく此くて都大路の市場に人手を經し乳酪、干酪、牛乳等を購はずとも肉も乳も卵も十分に樂しき食卓に堆く供せられ倫敦にて味ふとの出來ぬものさへ口にすべく且つ數年ならずして都にて勉めて猶は購ふ能はざるシルクハツトを戴き禮服を着くるの資を剩すべし

樂しき結婚　無論此の生活にも多少の經驗を要せん然かも勞働の問題は只た一にして良好の手段は此の田園の生活に歸へらんと希望する都大路の勞働者と交代して己が身は他日再び倫敦新聞の編輯局に復り田園の福音を世に告ぐるに在り而して終りに家庭問題の解決のため貞淑の女と樂しき結婚を爲さんか

名家談叢

女子の同感

下田歌子女史

○同感と云ふ事は、他人が怪我を仕たのを見れば、あゝ痛からうと思つたり、他人が疾病の爲めに苦んで居るのを見れば、あゝ苦しからうと云ふ様に、悲しい面白い悔しいと云ふ、種々な事を見たり聞たりする時に自分には少しも痛痒の感が無いのに、其人の心中を想像して、同様の感じが興つて來るのが、同感であつて此性は獨り女子計りでなく、男子も有つて居るが、取分け女子の方が深い、此深いと云ふのは、理性と云ふものが、男子に及ばないで、感情が打勝つて居る所以であるから、人と同じに憤つたり恐れたり悲んだりする、其れは恰度燐寸を擦つて火を點ずると同時に、手に燃え移つたかの如く、熱いと云ふ同感が興ると同様で、此同感が種々の美徳を生み出すのであります。同感は都て他の事に依つて感ずるので　大變に善い事には違ひありませんが、之れを制限する事が大に必要であります。同感から直ぐに出るのが物の憐れで儒教では是を仁と云ひ、佛教では之を慈悲と云ひ、基督教では之を愛と云つて居りますが、日本には斯ふ云ふ短かい言葉でなく、物の憐れを知ると云ふ事になつて居ります。

○他を思ひ遣つて、物の憐れを知ると云ふ事は、暖かい清い情愛が、博く深く籠つて居るのですから、實に立派な女であつて、之れが一般の女子の德である、是程結構な嬉しい事はないのですが、其同感の持つて來處が違ふ爲に、大變に惡い事になつて仕舞のであります。女學生に就て此道理をお話すれば、同一の學校の中は、同一の家族になつて、自分に難儀な事があれば他人にはどうか此難儀をさせたくない、惡い話しを仕て、共に心配させたくないと云ふ様に、萬事に就けて思ひ遣りのあるのが、眞の同感でありますのに、事實

は大いに違つて居ります。一校内は一家族のやう、親密に交際して、同級中學力其他が何程卓越しても差支へはありません、而巳で無く自分から進んで、卓越するやうに勉强するのが肝心です、處が茲に卓越した人に對して、教員が賞美の詞でも與へると、他の生徒は直に妬みと云ふ心が出で、賞められた人を、善良な感情を以て迎へない事になるのは、殆んど通弊になつて居ります。

○西洋でも女子は男子と違つて、方寸が狹い處から、妬み心が一般に有りますが、日本の婦人は最も多く、最も甚しいので、何所の學校でも、生徒の優劣を定める事には、非常に心配をするのであります。是等は同感の進み方が乏しい處から起るので、人が傷けられた時、殘念だと思つた時、痛からう口惜からうと云ふ同感を寄せると同じ心を有て居たなら、決して妬み猜み抔の心の起る筈がありませんが、同感の持て來處が全然反對になるから、妬み心が起つて、其が爲に、學校で成績の優劣を判するに、困難する抔とは、決して女子の名譽ではありますまい。

○女子の善い處と惡い處とを、突合せて見ると、氷炭相容れぬ事になります。詳しく申せば女子は天の使、慈悲の化身として、佛教では女子を摸擬した容貌を、地藏尊に取つてあります、試ろみに諸君彼の地藏尊の顏を、熟く御覽なさい、實に優しい慈悲深い、温順なしい顏をして居るではありませんか、慈悲心が男子より優つて居る所から、無邪氣で清く愛らしい處の小兒を、一人前に育てる事を、女子に托したと云ふ事が云つてありますが、是れは全く自然から來た道理で、母が子を育てる時の心持は、早く立派に仕上げて、報酬を得やうと思ふではなし、名譽を得たいと思ふではなし、是程高尚な心はありません。

○偖其れ程善い者に見立てられて居る女子が、一方の惡い方から云へば、女子は妬み僻みの強い者で、到底成佛することが出來ない、罪障の深い者である、蛇の性だ鬼の心だと云はれて居ります。實に前後撞着して大さうな相違でありますが又考へて見れば其れも其筈

で、自分計り好くなれば、人はどうなつても構はない人が好くなると、妬むとか猜むとか云ふ心が強く、人の好くなるのを嫌ふのですから、さう惡い者にされるのも無理の無い處で、彫刻や畫にある般若の面を御覽なさい、眞靑な恐ろしい顏をして、蛇のやうな目で、口が耳まで裂け、二目と見られない顏をして居ります彼れが女の嫉妬を形に取つたものであります、一方からは地藏尊の慈悲深い顏となり、一方からは般若の面の惡形となる、此の道理を能くお考へなすつて下さい。

○小兒を育てるにも、他人と交際するにも、慈善事業を行ふにも、同感の情と云ふものが第一の基礎でありますが、單に其ればかりでは、却て意外な結果を生ずる事がありまして、善惡邪正を見分ける所の判斷力、即ち聰明なる智識が、最も必要で御座います。其れ故學校でも種々の知識を修養して、同情を寄せて好いものと、惡いものとの區別を立て、感情一遍に走りて、惡處へ踏み込まないやうに、監督しなければなりません。處が女子は元來同情に富んだ性質から、理性の判斷即ち聰明なる知識の乏しい者は、動もすれば同情を表すべからざる者にまで同情を寄せて、自から損害を招き、或ひは罪惡に陷る事があります。

○同感の情は女子の天性で、實に貴ぶべく敬ふべき、愛の泉で御座いますが、之に理性の判斷力を加へて、惡い者は之を矯正し、善い者は之を助長するは勿論、どう矯正しても、改善らない者に對しては、女々しい考へを棄てゝ、斷然とした處置をしなければ可けません。其舵の取方がむづかしいもので、譬へば小兒を敎育するにも、叱責を加へて宜い處を、若し叱つたら泣くだらう、自分も幼少い時に叱られるのは辛かつたからと、同感の情を先に立てゝ、懲戒の必要を忘れて仕舞ふので、小兒は益々好い氣になつて增長し、終局には箸にも棒にも懸らない腕白者を拵へ上げます。ですから此同情と云ふものは、舵の取方一つで、意外の結果になります。そこで知識の修養を以て、其弱點を矯正し、下らない事は打棄てゝ置くやうにしなければな

りません。それを東洋の女子は、古來何でも構はず、温柔しいとか優美とかを、一本槍に本分と心得て、花が落ちたと云つては泣き、木の葉が飛んだと云つては驚き、ソレ蟲が啼いた、さぞ悲しからう、露は其の涙であるとか、秋風が吹いて、山が裸になつた、定めて寒からうとか、種々下らない詰らない事にまで、同感の情を惹起して習ひ性となり、年が年中、めそ〳〵して居るので、優柔不斷は女子の通弊と極つてしまひました。日本でもずつと昔の女は、中々强かつたものですが、一條天皇以降、一帶に柔順過ぎるやうになりましたが、是は感情を主とする詩歌物語類の文學が專ら行はれて、理性の教育即ち知識の修養が不足した弊害だらうと思はれます。

◎近い處の例を擧ぐれば先頃崩御あらせられた、英國の女皇陛下は我々女子が龜鑑と申しても恐れ多い次第でありますが實に有難い御方でありました。陛下は非常に同感の深いお方で入らせられまして、司法大臣より總理大臣を經て、罪人の死刑を奏上致し、御裁可の勅諚を請はれる度毎に、大臣方も非常に困つたと云ふ事です、其れは陛下に、斯う云ふ事を奏上すると、御顏の色を變へて、種々の御訊ねがあらせられ、容易に御裁可にならない。大臣から具さに事情を申し上げて、どうも此者は斯く〳〵の重罪を犯した上は、死刑に行はなければ、國法に背くからとて再三の奏上を經て、愈々御裁可になる時には、それではどうしても、助命の議は叶はぬかと、繰返しての仰せに、大臣及び侍從は恐れ入つて、顏を上げる事が出來ません位、陛下御自身も其日一日は御氣色麗しからず、と云ふ事でありましたが又歷史上有名の、クリミヤ戰爭の時も、陛下は始終御心痛遊はされて、國家の爲めとは云へ、罪の無い數多の兵士に、父母兄弟妻子に別れて、生命を的の戰場に、勇んで往けと云ふ、命令を發するのは如何にも心苦しい、是程辛い事は無い、ア丶一國の帝王となる程、世に切ない思ひをする者は無からうと仰せられて、食上り物の量も減り、戰爭の終るまでは、兎角御健康も勝れさせ給はず、侍從の人々も御氣遣ひ

申し上げた位であります、なんとお慈悲深い有難い事では御座いませんか、是皆同感の作用であります。

（本篇は女子修養會に於ける女史の演説を筆記したものにて文字の責は記者に在り）

割烹上の私見

赤堀峯吉氏

日本料理も所謂十年前といふものは、實に思はしからぬ有様であつて、唯西洋料理のみ跋扈して、此分では無くなつて仕舞ふかと、思ふ程でありました、「きんとん」に「かまぼこ」といふもので、何時も何時も相變らすので困つて、居りましたから、之を改良して見やうと、師範學校にて、日本料理を設けて私共が其稽古の任にあたり學校の學課中に加へるやうになりました、此時に奮發して、是非恢復したいと思ひまして、それから力を出して、騒いだ、それで西洋料理を課して、學校にて教へるやうたしたのは、私共の方が始めであります、日本人が西洋料理をしますに輸入品を高く買ひ入れて、それで、なければ、甘く食べられないやうに思ひますが、而し、別に遠く海外から仰ぐ程のこともなくとも、在來のものを調理して、衛生にも叶ひ、又甘く、食べられるものですから、餘り、外國品許り、澤山取らないで、それで、和洋折衷といふ風にして、やつて行きたいと思ふのであります。

西洋料理を學ぶ奥様方にしても、日本料理を習ひます方にしても、どちらでもその一方を學びましたらば、少しく之を應用すれば、和洋折衷といふことは出來る例へば玉菜をば、糠味噌の中に漬けて、朝夕の澤庵の代りに用ゆるやうにするとか、或は、又日本料理に用うる葱を細かに切り込んで、「ヲムレツ」の中に入れて焼くといふことになるその大体のことが修つて居ると何れの方にも應用が出來る、それで、日本の料理法も知らず、西洋の料理法も知らず、唯我流先生が一番困まるのである、我流で行つて行くものは、料理書の講義錄を取つたり、種々の料理の本に依て試めすといふ

ことであるけれども、多少實地に就て、その大体を修ひるといふことは必要であらう。

私は或る會で某奥樣の話しを聽いたことがある。御料理の方を行つて見ましても、宅に歸りまして、大勢の賄をするときに、臨機應用が出來ぬ、又餘り高尚過ぎて困るといふものもあれば、又モツト簡易なものを、教えて呉れといふものもある、所が割烹の教授杯といふものは、習ひに來るものにも、樣々あつて、來月お嫁に行くので、お料理を少し教へて下さい、今日は歸つて、旦那樣に肴を上げるのであるから、教へて呉れといふやうのことで、それで教へまするに誠に行り難いけれども大体を教へ要領を教へたならば、當らずと雖も、遠からずで、火の弱いもので燒いた魚は、不味のみならず、滋養分を失つて、仕舞ふ、それ故何を調理するにも、其心得が肝腎です蒸しものをするにも、唯々蒸すといふ許りでは解らぬ、「せいろ」の蓋をづらして、湯氣を吹かせて蒸すものもあれば、又一杯に蓋をして、どん〳〵と强く蒸さなければならぬものもある、此蒸物にかゝるには、釜か鍋に八分目以上湯を沸騰してからでなければ、蒸物は甘く出來ませぬ、うしほ煮にも、煮汁、鹽、醬油、此三點の合せあんばいが色々違います、又「あんかけ」であるとか、薄葛であるとか、葛を用うる惣菜用として、砂糖を加へ能くするには味淋を煮かへして、入れるといふ調理法もある、そこらの邊は何程料理の本を讀んでも、講義錄を讀んだとて、實地に就いて行らなければ、了解しにくい、所謂百聞は一見に若かずで、其實地を見ると大に發明する所がある、それで私は皆樣に割烹の心得のある人に就て、多少に拘はらず、實地に就て、御稽古をなさることを希望する、一週一回づゝ料理法の講習をなさいましたらば平易な割烹上の實驗は得られませうから同志相會合して閑時日を利用されん事を希望します。

▲露國の婦人旅館　露國に於ける女權擴張の運動は近來益す盛大となれるが露國の婦人衞生會にては婦人の專用に供する旅館を露京に設立する計畫中なる由にて此旅館は株式組織なれども株主は悉く婦人とし婦人の建築家に設計を依賴する筈なり而して此客人は勿論旅館の給仕人料理人等に至るまで一切婦人に限る都合なりと其工事は多分今春より着手せらるべしと云ふ

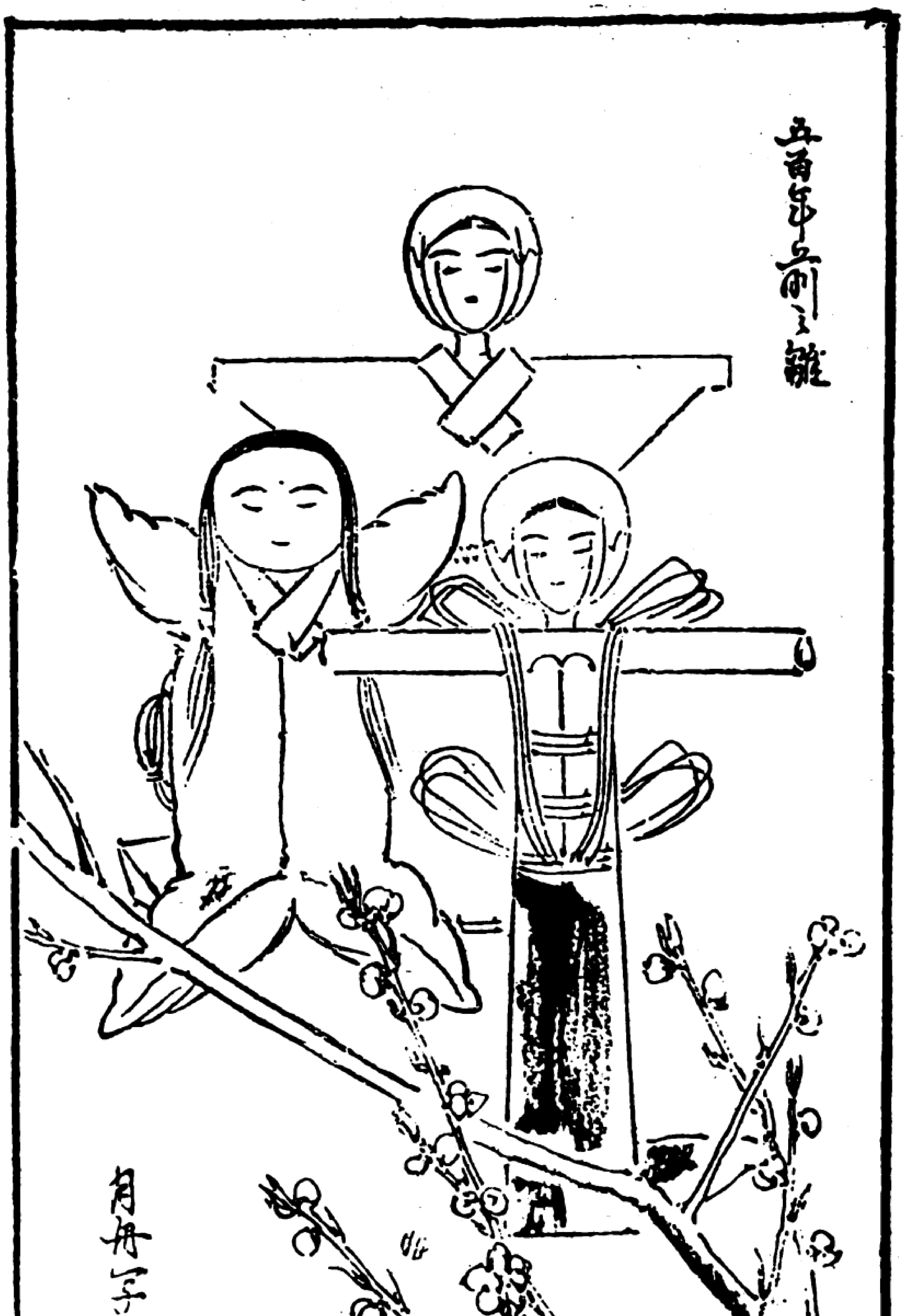
娛樂

雛まつり

三浦雙餌

三月三日は、女子の節句と申しまして、現今でも、全國至る所で、雛祭を致しまして、可愛らしい人形を可愛らしい罪のない處女子が、翫びます、諸嬢も、御承知の通り、まづ雛壇といふ物を設けて、上段、二段、三段と數段に階級をつけ、赤い毛氈などを布きまして、上段の中央には、金屏風を建て、其の前に、内裏様といふのを第一の御主人様の様に、其の次には五人囃子、左大臣、右大臣と謂ふのが、常式で、其の外は各自に思ひ〱に種々の人形をかざります、又御雛様の御道具だと申しまして、簞子、長持、其の他、澤山の調度を備へつけ、其の邊には、美しい桃の花などを挿して、其の前で、二三の少い女子が、煎り豆だの、白酒だのを、可愛い器物にいれて、御雛様に奉るやら自分が食べるやら、實に優美な毒氣のない遊で御座います、處で、私は此の雛祭といふ事が、何時の頃から起つたか、如何して、三月の三日に、之を祭る様になつたのでせうか等いふ事を、すこし御話して見たいと思ひます、釋日本紀といふ書籍に、崇神天皇の十年に、比賣那素幾殊岐といふ歌の句が御座います、ひめなそびといふのはひめなあそびといふ言の切まつたのですが、僧、契沖とか、本居宣長などいふ、國學者は、種々異說を唱へましたが、古い處の註釋によりますとひゝなあそびと謂ふ事だと御座います、其れでは、ひゝな遊びといふ言は何だらうと申しますと、昔は、今日の雛祭の事を、ひゝなあそびと申しました、さて、此の釋日本紀にあるのが、實際、今日の雛祭だと申しますれば、隨分、古い者です、其れから後、此の遊びの事の澤山見えるのは、紫式部の源氏物語などゝいふ平安朝時代の日記や物語で御座います、其の頃は藤原氏が、全く天下の權力を握つて、其の勢力といふ者は實に盛んな者でした、いはゞ。此の源氏物語なぞの出

來た頃は藤原氏の極盛時代で、天下の人は、唯々、詩を吟じたり、歌を詠むだり、管絃と申して、笛や篳篥をふく事を、日々の務の樣に致して居りました、言ひかへますと、遊ぶ事が大變流行つたのです、隨て、只今、申しわけます雛遊びも、此の頃から、追々、世間に廣く行はれる樣になりました、殊に源氏物語といふ書籍は、女子の事を、重に書いた



小說の樣な者ですから、此の雛遊の事が、澤山出ています、淸少納言といふ人の書いた、枕の草子にも、ひゝな遊びの調度などゝいふ文句が御

座います、其の他、宇津保物語とか、某々の日記などといふ此の頃の書籍には、大方此の遊の事が載つて居ます、江家次第といふ大江家の立派な記錄にも、亦、此の事が麗々と掲げてあります、さて、其の頃の御雛樣は、今日の樣に、立派な物で有つたでせうか、如何でせうか、これは一つの問題です、或る人は此の頃の雛は大方、紙で製造へたなぞと申しますが、私の考へでは、一般に、さうは謂はれまいと思ひます、其の頃雛遊びが盛に行はれたと申す者の、未だ、漸く、上流社會にのみ翫ばれたので、今日の樣に、何處でも、何人でもといふ譯には參りませんだらうと思はれます、而して上流に翫ばれた、今日でいふたなら、華族樣の樣な人々に流行たゞけ、なか〳〵立派な物であつたらうと思はれます、其の譯はと申しますと、其の頃の古い記錄に、雛遊の料に絹某々なぞと御座います、而して見ると、矢張り人形に立派な衣裝を着せたらしいのです。然し、其の頃は、何時、御雛樣を祭るといふ定は御座いません、何時でも、自分の思ひ附いた時分に出して翫だので、勿論、三月三日といふ定も有りませんでした、所が、藤原家の隆盛も追々と傾いて參りまして、平家や源氏が勢を得、それから、北條、足利、戰國といふ始末で、日本の國中戰爭ばかり、續いて、御雛樣どころでは無い樣になりました、其故、此の遊びも、一時廢れてしまいましたが、戰爭が續いて人間が澤山死ぬ、父子でも、夫婦でも、兄弟でも、今日は一所に樂しむで居りましても、明日は生別や死別といふので、世の中の人が、何となく、浮世の頼みにならないと謂ふ事に、氣が付きました、すると、宗教まづ其の頃では佛教が益々盛になりましたが、又一方には陰陽師といふ者が非常に行はれました、こゝに、平安朝の頃から、五節といふ事がありまして、一月七日を人日、三月三日を上巳、五月五日を端午、七月七日を七夕、九月九日を重陽と申しまして、今日でいはば、大祭日の樣に、天下の人が業を休で、樂しむ事と定めて御座いました、其の三月の上の巳日には、陰陽師が、紙の人形を作りまして、其で、各自の身体を撫

で濟つた後、其の人形を祓ひまして、河へ流す例が行りました、これは、人の災を、撫で擦する人形にうつします故、其の人形を祓つて流せば、其の人の災が無くなると謂ふ意味で、行はれた者ですが、こんな事が戰國時代には、益々盛に成りまして、其の上巳の人形と雛祭の人形とが、一所に成つて、三月の雛祭といふ事が起つたらしいのです、まづ、豐臣秀吉の時代から愈々三月三日と定まつたと心得て置けば大した誤は御座いません、御雛樣への供物は、膳部の外、豆煎り、はせ、白酒、菱餅、蛤などで、特に、蛤は時候物ですから、唯、供へますのみならず、昔は蛤の貝に、種種の物を容れて、上げた樣で御座います、百姓五節句遊といふ草紙に、雛遊の形をかいた繪の賛に、『蛤は雛に對して昔椀』といふ、句が、あります、是は有名な、俳諧士で、其角といふ人の『もとかしや、雛に對して小盃』といふ句に倣た狂句で御座います、其から、德川家康が天下を取りまして、又第二の平安朝時代とも謂ふべき泰平無事の世の中になりました、泰平に成れば遊が流行ます、雛祭も德川時代に成て、非常に盛になり、立派な内裏樣だの、鶴龜、松竹梅の金屏風だの、蒔繪の御重だの、御雛樣も、其の器物も、今日の樣に大變贅澤に成つて來たのです。

まづ、雛祭の歴史は右の樣ですが、夫婦の姿を造りまして、兒女の祭るといふ所から、是は女子が成長した後、善い夫を持つ樣に御祭りを爲るのだ、又其へ膳部などを供へるのは、世帶を持つ時の下稽古だなぞといふ者が御座います、それも一通り理窟は有りますが、何やら餘り附會の樣ですから、私は其の説は取りません、が、今一つ申上げて置くのは、雛は、秀吉時代から三月三日に祭る事と、定りましたが所に依りますと、九月九日、即ち前申した重陽の日にも祭りましたので之を後の雛と申します、謂は丶一年に二度祭るのです、又地方に依つては八朔に祭る所も御座います、續五元集といふ書籍に、『穴いちに塵打はらひ草枕ひ丶なかざりていせの八朔』といふ狂歌が御座いますが、して見ると伊勢の邊でも八朔に雛を出した事とみえます、

才媛詞藻

佐々木信綱先生撰

（天）島　　高知　北川すて子

只一たび京にのぼりしものがたり
今もかたるよ沖のしまもり

（地）酒宴　　人吉　山田早苗子

かちきよの味しらでさけやくむ
笑ひさゝめく高どのゝ上

（人）島　　赤坂　廣津花

神のみ手にまづゝくられて日のみ子の
とはにしらさんわが大八洲

（人）摘草　　香川　月子

川岸に草摘みわきし幼子の
夢路をめぐる蒲公英の花

（人）島　　東京　生方てい子

われのみは此島影に朽ぬべし
都を戀ふる妹をいかにせん

（人）島　　伊東　德田政子

人住まぬはなれ小島にとしつきを
燈臺守りて思ふこともなし

（人）摘草　　東京　久保たか子

いもうとの夢なほ野邊に遊ぶらむ
枕にかをるすみれ一束

原作「わがいもは夢にや野邊に遊ぶらん枕のもさにくさの一束

秀逸

島　　南國　字武方秀

一歳に唯一度の祭ある島の一村神の代のむら

評　結句いまだし

島　　千葉　某女

旅のうさとみに忘れつ父ゐますはらからゐます島見にしより

原作、故の歌しはしさだへぬ父ゐますにらからゐます島や見ゆらん

島　　東京　岡田紫山

陸さほく人げもあらぬ島なれさ君さし住まば何か恐れむ

摘草　　兵庫　宮里哲子

眼おきて麓の小村見下ろせば霞の裡に鳥の聲する

酒宴　　神戸　杉田絹子

春の宵うたげに更くる高樓をかたぬの母子仰ぎつゝ行く

酒宴　　伊賀　村尾喬子

兄君を十年まちたる甲斐ありて今宵うたげのまごゐたのしも

酒宴　　大坂　絹子

手づくりのわりご開きて山陰に背子さ花見の小酒宴する

摘草　　大坂　田中しゆん子

ときめきし長者のやしき野さなりて里のうなゐ子摘草をする

酒宴　　和歌山　絢山すみれ

花の宴に殿の不興をかうむりてかへる二の丸月おぼろなり

摘草　　美濃　波津子

げめのこさ流草の響も聞ゆなり草つむ野への春ふかくして

島　　千葉　小出ひで子

みねそめぬはやみねそめぬ見ねそめぬあれ〳〵君よなつかしの島

摘草　　神戸　中村さかね

小さき手に菫にぎりて眠る子の夢なは野邊にうかれ居るらん

酒宴　　金澤　森美子

君行かむ難路の旅は風寒し盃せ今宵のあたゝかき酒

島　　和歌山　うらぶれ少女

青一つ又青一つあらはれぬ靄こめたる島のあたりに

つみ草　　伊勢　竹内道子

逝く水に籠の花束流しやりて花の行方を思ひ見る哉

摘草　　大坂　酒井みよ

春ごさにわらひなりにし山かげも人の垣根さ成りにけるかな

摘草　　神奈川　川井あさ子

昔わが若草摘みて遊びたるさころもわかず家居たちつゝ

酒宴　　小石川　朝さくら

にぎはしき酒のむしろをよそにして一人歌おもふおばしまのもさ

原作三句以下「すへり出てたをやめ一人をばしまにたつ」

摘草　　長門　杉山きくの子

たづねばや門田のくろに今日もきてせりつむ少女たが子なるらむ

島　　麹町　戸田みつ子

安[illegible]姫かふかき恨みを身にしめて[illegible]かれむる沖の二つ島

評　三句いまだし

島　　千葉　小出なみ子

名もしらす人もすまはぬこのしまは波さわれさのこのよなりけり

評　上句いひたらす

佳　調

摘草　　埼玉　松岸ろゑ

姉君さ共におそびてすみれつむ摘かごもつきぬ面白さかな

摘草　　赤坂　筧みさほ子

君さ共に草つむ野邊にうたはれし戀の名今は誠さなりぬ

酒宴　　大阪　安達文子

摘草の酒宴は果てゝ新緑のその山木になくほさゝぎす

摘草　麹町　宮内俊子

野に出てゝまゝごとなせるうなゐらにわれもましりて若草を摘む

酒宴　小石川　歆子

よの中のうさもつらさもわすられてゑひごゝちよきけふのまとゐよ

島　長門　梅田染子

島山の松に夕日の影落ちて沖よりかへるあまの釣舟

島　下谷　みき子

黒けぶりあげつゝすゝむ馬關より離れ小島の見えつかくれつ

島　岐阜　岩間文子

わがつまよみ國のためにつとめてよよし身は島の鬼となるとも

摘草　四日市　山内さみ子

今年より若菜に添へて老の世にうれしき事を摘んとぞ思ふ

島　伯耆　草野鈴枝

隠岐のしまはるかにみればそのかみのくろきの御所のしのばるゝかな

摘草　伯耆　草野鈴枝

亡きあにのをさなごふたり笑ましげにうちかたりつゝ摘草にゆく

摘草　神奈川　中山富子

こゝかしこかけありきつゝ草つみて入相のかねに家路いそきぬ

摘草　奈良　松本みどり

亡き乳母のかたみの菜籠手に下げて若菜つみけり裏の畑道

酒宴　奈良　松本みどり

朝よりの戰かちて丈夫のこなぎりしつゝ酒汲みかはす

摘草　奈良　松本みどり

摘草に來ませと云ひし手作りの菜籠送れり眞心の乳母

酒宴　岐阜　片田美波子

おもふどちうたげせる夜の盃にさすもゆかしき花の下影

摘草　麹町　山崎君子

歌ひつゝすみれつむ子の姿さへ髪さへかすむ春の野邊かな

島　三重　駒越くに子

あの島はむかしみかどのいませしと語る海人の千年またわかし

摘草　三重　駒越くに子

けいこなばおむ手やすめに弟と姉の花野につぼすみれ摘

摘草　伊勢　石井菊枝

籠もちてすみれつみたる小女子のほゝゑむ顔に夕日かゞやく

摘草　牛込　雪子

今しばししばしとけふもくれにけりさりなく野邊にすみれつみして

摘草　香川　神原すが子

青柳のいと長き日をわすれ草籠にあまる迄摘得つるかな

島　本郷　高眞子

明石かた沖邊はるかになかむれは朝きり深き淡路しまやま

摘草　山城　野口ふじ

春がすみ立ち添れたる嵯峨の野に大宮人のわか菜つむなり

酒宴　丹波　植村梅

あら玉の年のうたけに思ふどちこゝろの花も開きそめけり

摘草　佐世保　淺田久賀子

少女子らみな摘草の手をやめて過ゆく汽車の方を見つめぬ

島　長門　今藤ふじ女

夕日さす浮のうらなみ音たえてはなれ小島に千鳥なくなり

島　相州　白つゆ女

かずかずの島はあれとも大八州につぐべきしまのあらじとぞ思ふ

酒宴　岩代　澤野初子
くみかはす酒に興ある今宵拔音を語る古銃のあさ

摘草　美作　池田芳子
嵯峨までの汽車には乘らず春の野を草摘がてら友がり行かん

摘草　和歌山　郭　雲子
よめなつむ袖につゝみて歸らまし梅が香ふかき野邊の春風

摘草　芝　鈴木つた子
なき母と摘にし頃をしのひつゝ野邊の若草ひとりつむ哉

摘草　美濃　小川千秋子
川沿ひの小路ふみわけ芹つめるうなゐのせなに柳花ちる

摘草　備前　小山松枝
家づとにまづ嬉しさをかたらましつみし菫は子らにあたへて

摘草　熊本　豐子
若菜つむをとめがせなにねむる子のゆめも小蝶のおさや追ふらん

酒宴　鹿島　深尾栄
酒宴はてゝ家路かへる角力取の亂れしびんに春風のふく

島　信濃　岩間八重子
大海の中に浮べるはなれ島櫓もてかこむ城かとぞ見る

摘草　信州　山崎春枝子
鶯の寝覚にせんと寺跡の雲間の新草摘み集めけり

島　岐阜　山内みい
明石潟あかれまし〔ママ〕そふ夕はねの波間にうかふ淡路島山

摘草　大阪　波津子
あし引のやまひはいねぬいさや野に子ら打つれてつまむわかくさ

摘草　弘前　平山ちい子
少女らの摘みし菫をくらべぬる青柳堤かぜけぶるなり

しま　弘前　平山らい子
一つらの雁は霞のおくに消ねてしまの寺々いま暮の鐘

摘草　弘前　三宅宛子
打つれて草摘みに行く少女らのかげはいつしか霞に消えぬ

島　伊勢　植木美津子
弟に見よと促す沖の島早やかくれけり朝の霧に

島　土佐　霜子
青海原波のかなたに日はおちて沖の小島に月かげ淡し

摘草　高知　北川すて子
繪はがきに歌をかきたる山里のつみくささそふ文はとゝきぬ

摘草　石見　青柳ぶ子
妹を郷へやりてこの春は野邊の若草我ひとりつむ

摘草　但馬　梅窓
小女子かむつみあひつゝ學び家に行く道すがら摘める若草

島　大阪　田中瑜瑳子
のどかにも三人が島かけに羊飼ひつゝ春をむかふる

摘草　高知　北川すて子
かけゆきしをとめか跡に二つ三つ落ちこぼれたる土筆たんぽゝ

島　彦根　山元みどり
入日さす琵琶の水海なかむれは波路はるかに竹島黑し

摘草　美濃　坪内清子
道のべに車またせて郷女川くるゝまで若菜つむなり

島　同　同
朝な夕な船にすむ鏡山と見てやすぐらんもろ〳〵のしま

島　伯耆　蓬莱女史

舟出せし君は歸らず夜な〳〵に峯さく小島風下る見る

摘くさ　小石川　成瀬やへ子

摘草の少女の群の見ゑすなりて一面の花野夕もやこめぬ

島　東京　大江秋子

かしこくも御國のためにはる〳〵と遠き千島にひらく功

酒宴　和歌山　佐山靜子

水清し夕風涼し月皎しいざ此の船に酒酌まんかな

島　駿河　林すぎ子

島山に白きのぼりのなびくなり島守る神のまつりにやあらん

酒宴　陸前　松子

外國に渡りし兄の業終へて歸るを祝ふこのうたげかな

摘草　宮城　渡邊しげ子

ゆく〳〵もつみし若草さゝげまつる姉のおくつき朝風さむし

島　三重　織井爲登子

なつかしき我が友のせてゆく船をあはれかくせる沖つ島山

酒宴　石見　青柳秀子

さかもりもいつしかはてゝ朧夜の襖さびしく春の雨降る

摘草　若狹　辻のぶ子

少女子のすみれつみたる籠のほとりをしさや蝶のはなれがてなる

摘草　和歌山　田中實子

摘み取りし野邊の草花數あれどよろこぶ妹は既に世になし

摘草　伊勢　中島せつ子

みく靈のそなふるも緑子乙子女がもすそぬらして若菜つむなり

摘草　靜岡　松本綠子

若草のもゆる春野をあさりつゝ言の葉草もつむ少女かな

摘草　芝　川井滋久子

もろともに若草摘みし籠はあれさ遊びし友のなきぞかなしき

島　信濃　竹鼻はる子

信天翁空にむれたちなく聲もみにしみわたる鳥島のあさ

酒宴　安藝　松坂梅子

かち戰酒もりの聲勇ましや吳の濱のはるのよの月

酒宴　弘前　平山ちい子

朧夜をあけのをばしまうた姫の鼓のひゞき酒宴の聲す

島　弘前　平山ちい子

夕かげのなごりをうけて島山にあかき帆消ゑぬまたあらはれぬ

摘草　伊豫　渡邊繁子

少女等か笑もこぼれて見ゆるかな籠に餘れる野邊の若菜に

島　和歌山　上野山郁子

人もなく木もなく荒れし南洋の南とり島波しづかなり

島　京都　今邑しやう

やごとなき君流されておはします隱岐の島あたり七つ星見ゆ

酒宴　秋田　渝井まつ

村長の祝ひのうたけをさまりて月ふみ歸る里の老人

島　兵庫　小林恒子

ますらをもそゞろ袂をぬらしけんころしか島の秋の夜の月

島　伯耆　名和しれん

海遠くかすかに見ゆる隱岐の島古にしみかどの跡ぞかしこき

摘草　神戸　水仙女

こその春は病の床になやみしが今年は友と草を摘みつゝ

鳥　小石川　外河花子
ふしぎにもたゞよひつきて海中の人なき島に獣おくろかな

摘草　信濃　太田ひさ子
ちゝぎみの夕げの膳に上せんとゆきかきわけてつむ若なかな

摘草　下谷　みき子
少女子が友うちつれて今日もまた暮るゝも知らず若菜をぞつむ

鳥　下關　梅岡米子
旅人小舟こまて行手の雲はれて見ゆるは消さ雪の鳥山

酒宴　周防　大木國子
みいくさにわが子功ある知らせ得て嬉しさ酒くみかはす

摘草　佐賀　江口袖子
春風にあけの袂を翻はせて若菜つむ也村の少女子

摘草　肥前　石井安子
少女子が芹を摘む手も香るらむ梅の花散る春の里川

酒宴　芝　川井きく子
盃の琴の音もおもしろしいざこの月にうたけ開かむ

摘草　駿河　林すき子
摘子もてふし〳〵の唱歌うたひつゝつばなぬくなり霞かくれに

摘草　品川　深瀬かく
今日もまた隣の友の案内して野ゆき山ゆき若菜つむかな

摘草　長門　今藤ふじ子
姉君のおくり給ひし花かごに今日は七草これにつまゝし

酒宴　駿河　林すき子
外つ國に出陣ひする友さちを送るむしろの酒の香ぞよき

摘草　豊前　千鶴時子
つく〴〵と亡き母の君を慕ふかな霞のうちに小草つみつゝ

摘草　駿河　林すぎ子
逝きし友は何地にすみれつむならんたのしき野邊を後に見すてゝ

酒宴　麹町　福島うめ子
どよめきの聲をちかたにひゞくなり今ぞうたげの盛りなるらし

酒宴　和歌山　石井歌子
酒酌みて去年此船に語りしを君世を去りて我老いにけり

摘草　靜岡　節子
乳母が許こさゝふ野邊の道すがら澤田の若菜つみて行かまし

摘草　伊勢　石王敏子
霞より聲もれ出でゝ人見ねてすみれつむなり武藏野の原

摘草　下總　石橋たか
老ましゝ母をすゝめて日あたりの練兵場に若草をつむ

摘草　下谷　嵯峨淑子
父君の夕げの野芹摘もせで藁の束をあまた作りぬ

酒宴　日本橋　紫山女史
賤が屋に樂しき春の酒くみて宴すらしも笑聲洩るゝ

酒宴　山口　郡野茂子
みやびさと老木の下にむしろひらき酒にはあらで花にゑふかな

鳥　攝津　菊月
こゝかしこ遊船浮びて瀬戸内の小島が影も春めきにけり

酒宴　仙臺　山中芳子
旅を祭る酒の宴にうたふなる殿宴の小唄のふし面白き

酒宴　信濃　田中千枝子
みやびをが花見の宴か月かすむ山の下庵いと賑はしき

酒宴　松江　佐藤紫
赤誠をたき火にあたゝめつはものら今宵出陣の酒くみかはす

摘草　神戸　今村竹子
つみいれし若なは籠にあまれどもめづる母君いまは世になし

島　大阪　小野榮子
世の中を離れ小島に住む人の心やいかにのどけからまし

摘草　長崎　二本松はな子
君は土筆我は若菜を摘みたりし故鄉の野に似たる野邊かな

摘草　紀伊　しげ子
草つみて遊ぶ少女の袖の上に二ひら三ひら花散りかゝる

摘草　備中　大西政代
裳裾を風に吹かせて徒歩ながらすみれつみつゝ鄉の行きます

摘草　神田　原田ます
少女子の野邊にわか菜や摘むならんはるかに聞ゆ楠公の歌

島　伊勢　植木景子
さらばさきくいまやとたもと分ちたる君のみ舟は島にかくれぬ

摘草　相州　尾崎操子
春の野におほくの若菜あさりねてかへる家路に夕日かたぶく

摘草　新潟　柳原雪子
つくし〳〵籠にあまるまで摘まむとて長き春日を野べに暮せり

島　佐賀　大塚つる子
北海のいとも寒けき占守島守るわが背子如何にますらん

酒宴　下總　石橋たか
白酒をひなにそなへて乙女子の酒宴たのしき桃の下かげ

酒宴　香川　すが子
みやび犬なつさへ集めておぼろ夜に宴催す花の下かげ

摘草　信濃　岩岡八重子
みどり子と打ちたはれつゝ老人の小草つむなり春の川づら

摘草　佐賀　腹巻ゑみ
おさな兒が花かごさげて行くのべににほひみちたる花菫かな

島　佐賀　豐富きさ
世をすてしこの行末は如何にせんとりもかよはぬ沖つしま山

酒宴　秋田　梅田くに子
錦着て歸り來ませと諸人が共にすゝむる餞の酒

島　群馬　木村きみ
海原にさまよふ雲をやどさんとおきつ島根は立てるなるらむ

摘草　大阪　栗原安代
摘みためてまだおきたらずいざのべの限めぐりて若菜つみてん

摘草　神戸　中村菊子
自轉車につり行く人は摘草のかへるさならん花たばもてり

島　和歌山　山本美子
御軍に召されしまゝに歸りこぬ兄がかばねは高砂島に

酒宴　信州　山本こまつ
こゝちようなりぬこの醉さめぬまに君學されな我うたはんに

探梅　京都　角川まつの
花の香にさそはれて出てうなゐらかみちふみまよふ春の夕暮

酒宴　佐世保　山口丸子
たらちねのみさしいはひにひらかれしうたげのにはに梅の花ちる

島　和歌山　前山澄子
船はてし島の磯べに鈴菜さきて春日うら〳〵胡蝶とぶなり

漫筆

佐々木信綱

數多き應募の歌どもを見もてゆくに、一月は一月より一年は一年より、やう〳〵に進歩を見るは、最も喜しき限なり。されといつも前に選びし歌の趣向を襲ひとり、あるは古き集の歌、近き頃の歌なとを其儘なるが多きは、いとも歎かはしき極みならずや。古今の人情にかはりなければ、或は期せずして暗合する場合もあらめど、殊さらに人の趣向を襲ひ取りて詠出づるが如きは、淑女のなすべきわざにあらず。又應募の歌は端書一葉に歌一首を、讀みやすく記されたし。數首を細かに記せる、鉛筆にて走りかきたる、甚しきは書損ひたる上を異墨に塗り朱もて書きたるまた少なからず。これらは其人の人がらも見えすきていと卑しく、淑女の徳を損するものなれば、よろしく心し給ふべし。倘應募の歌の中にて、いひざまわしきは筆加へたるも少なからず、さる歌は原作を傍に記し置きつれば、讀み味ひて悟らるべし。若し諸嬢か研究の一助ともならは幸なり。

甲賞

春の野

弘前　荒井菊子

あさみどりなる空のけしきいとゞいみじう霞渡りて四方の梢もうちけぶりたるに心もそゞろ浮きたちて日頃春にはおくれじといひはこれる友かり靄かさばやと思ふ折しも二人みたり栞の月訪づれやよ友此頃の春けきに野邊の土筆や蒲公などと定めし我等を待つなるべしいざとそゞのかすにされぱさてものすいと清らかに澄み渡れる御空の光は我日の本の國振にも似てそゞろにそのかみをぞ思はるそこなる川に船をしもと打なびきたる青柳の水に匂ほへるもなかし遠山は眉の如くかすかに姿を裝はしかすみは尾の上の花をかざせるなどまたなくゆかし道は黄金の花もてしきつめられ小蝶のそれこれと戯るを見もて行けば野にはつばなたんぽゝすみれなどみち／＼ていづこを蹈むもあたらしき心地ぞせらる田道つたひ行くに里のうなゐのみたりよたり籠を片手に傍の小川をあさるあり芹にても摘むにやいとあどけなし道すがらこゝの草かしこの花と物しつ行くに松杉のいたく嚴かに生茂れる中にいでぬ此處はまたいままでの笑ろはしきながめに引きかへてさつ／＼たる松風谷間に歌ふこう／＼たる川瀬げに蓬萊の島とめでられし御國にしあらざれば何とてかゝる天地のあるべきと一しほ神々しく覺ゆ今までの浮きたちにし心さへ清められたるやうになりて心地いとすが／＼しくなりぬかゝりし程にいつの間にか日は西に傾き入相の鐘は用捨なく此山中の境をかすめぬあはれ殘り惜しのながめながら華胥の御國にてまたゝと家路にいそぎぬ

天地悠々寫し出す桃源境筆致優妙といふべし

初びなに人をまねく文

北信　ふじ子

このほどわざ／＼の御使を以て美事なる内裏雛一對外に御許様お手造のきぬつけたる京人形こなた初節句のいはひにとて御つかはし下されまことに／＼雛有初音がゆくゑもいかばかり榮へゆく事やと親ごゝろに嬉しう／＼おもひ申候御承知のとほり世にまだ呱々のこゑをあげざりし中はぜひ／＼男の子をと主人が無理の誂文もし女子ならばつゞれにくるみてなどゝ我を張り居り候ひしがやがて其希望空しう娘にて候ひしものから二月三日は喜悦のいろも見へ申さでそこゝの奥様がお手柄を例にひき口惜しなど申し候ものゝ、また無邪氣なる面に父を見てゑみたゝへ候やうになりては、さすがに愛らしきものとおもひてき、睦月の頃よりやよひびなゝうはと、御子もたせられぬ御許様きこしめさば可笑しうおもひ給ふらん、まことは愚なるものにて候よ、よべ十軒棚のあたりそゞろあるきのかへさすこしばかりの小さき調度かひもとめ、富嶽のそれにはくらぶべくもあらねど親が薄給の中よりさゝなのし段のもの、初音にとりては能ふかぎりのよそほひにて候、たまはりし内裏樣、こなた昨夜もとめしよりは美事にていと／＼嬉しく、それこれ飾りて三日には御許様御夫婦御まねき申度、ふつゝかなる料理、昔て講習にて學びしものをおさらへかた／＼饗へ申さんと存候忘れたるをば教へ

替へや。こなたの主人の申し候にに麗の御貴のうつくしき婦人さなりて、白酒に酔ひひさり白はの姿大夫など御耳に入れん。その代り御許様にはぜひ〳〵例のバイオリンを御願ひ申上たき由に候へば、當日は失禮ながら御車のはしに御持参たまはりて、久々うけたまはり度、子供に相成つてより音樂堂青年會館の演習へもおながれさなり、猶に鍛へなり候まゝ主人共々御願ひ申上候。

かれては御交際廣き且那様の御つさめ、御許様も從つて御多忙のさころ推し上候。花々しき御生活には人しれぬ苦痛もさもなひ申す者、何卒三日には外様御ことはり遊してもこなたへ御入りいたゞき度、むかし〳〵のおけしの時代にかへりて、かたり明かさんさ存候、其折はいろ〳〵申上んさお御案内まであら〳〵したゝめ候かしく

紅梅に添へて

弘前市元長町　三宅亮子

其後は一ひらの文も参らす打過ぎ候を、はやふく風もにほひさむろ頃さ相成候、御許様には、みけしき麗しくわたらせ給ふにや、御嬢様には、日毎に、御愛嬌づき、御成人遊ばされ候よし、花鳥の春をひさり御一家にあつめさせ給ふには御うらやましく存じ候。さて年ごろ、御賞美におづかりし庭の紅梅、昨日今日ひらき初め侍り、色香は昔も今もかはらず侍れざ、こぞしは一きはゆかしくなつかしきむ地いたし候、思ひおこせば、過ぎにし雪降りの庭に、ありし時、御の君より源波海の歌の御講話うけたまはりて、深き事もしらで妾は、何さなく袖がゆかしうてなざいひ侍れば、君は笑顔は顔にこそなぜ、あざけなきいさかいに、罪なき梅

もしばしは君が筆にうさまれし事も候ひにさなぞそゞろに御書の公にたへがたく候、何はさも此操の高くやさしきは、他に似ろ花も候はじ、あれし軒端に咲き出でゝ、色も香もうすくは侍れど、あやしき眼折のみよみそへんもいさほしうて、一枝君にはまゐらすになむ。昔しのぶの料さもなしたまはらば、花の面目のみかはさ存じ候、東風ふかば、御事づてしたまひて、御近詠もらさせ給へかし。あなかしこ

乙賞

別れて久しき友の許に

横濱市本町六丁目　近藤榮子

平沼の停車場におしき袂をわかちまゐらせしは紅葉色こき秋の頃に候ひしをひまゆく駒のあがき早く夢の間に年さへ改りて花さく春と相成申し候此程は如何御暮し遊ばされ候哉たゆねて御便りも申し上げず御わびの言葉もこれなく候さりながらこれさても、さら〳〵御忘れ申し上げての事ならればゆるし下され度候當地に御いでの時すら一日御目もじ致されば何さなう心淋しく覺え候ひしをかく東西に御離れ申し候てよりひたすらに御なつかしく日頃賜はりし御玉章くりひろげては御やさしき御むなうれしみ居候就ては御出發の以前願置候御寫眞いまだ御惠投なし下されず誠に物足らぬやうにていさゞ靈井のはるかなる眼ひせられ候當何本鵠州のさぶき流れにみがきあげ給ひし玉の御すがた拜ませていたゞきたく別に御うつしかへにも及び申さず候まゝ只今御手元にあらせられ候ものにてよろしく候へば貴方の心もくみ給ひて一日

も早く御めぐみ下され度願ひ上げ候扨て博文館發行の明治姫鏡は誠に有益なる書物さ存候に付き今春撮影の寫眞さ同封いたし小包便にて御送申上候間御笑納なし被下度御地は名にしおふ花の都さて御遊覽の場所も多く此春は嘸かしさ御うらやましく存上候花信御報願上候申上度き事は濱の眞砂の數つきず候へ共後便申殘し候かしこ

月夜梅林に遊ぶ

濱松　春野葉子

頃は、きさらぎの、末つかた、つれ／＼なるまゝに、文机に向ひ、讀みさしの、文ども讀みもて行くに、いかゞはしけん、心惹にあらねば、立て妻戸押し開き、庭の面をながむれば、木の間に、もれし夕日影、いつしか、西に、落ち、月は松の梢にいさよふか、面をあらはしたる様、いさをかし折りしも、何處よりか風のまに／＼、送られ



て、梅の香のかをりくるに、むさきめきて、我にもあらで、しをり戸、出でゝ、香なばたよりに、そこはかさなく、たどり行くに、此程の、梅園ありき、さてはさ、あなたこなたさまよひ見るに、降にし雨に、さそはれけむ、白き、紅き、さり／＼に、枝を交へて咲きみだるゝ色に、月影にさし、ゆかしき香は、そよ吹く風に、みだされて、身にしむばかりなり、あゝ此景色、見るからはむなしく過さむも、口惜しく、さ、ある石に、腰打をろし、或は近く、或は遠く、見れども、見れども、など、あかざるか、此ながめをぼろに匂ふ、月影ふみて、たねの、香につゝまれつゝ、ある間に、一ひら二ひら、はら／＼さ、ちる、花諸共に、吹きくる風の、身にしむまゝに、ふさきづけば、月は、ねんある、春の夜の、名殘さゞめて西に、かたむかんさすれば、今ぞさてかすかに殘る、月影しるべに家に歸りし後も猶、袖につゝまる花の香、あや

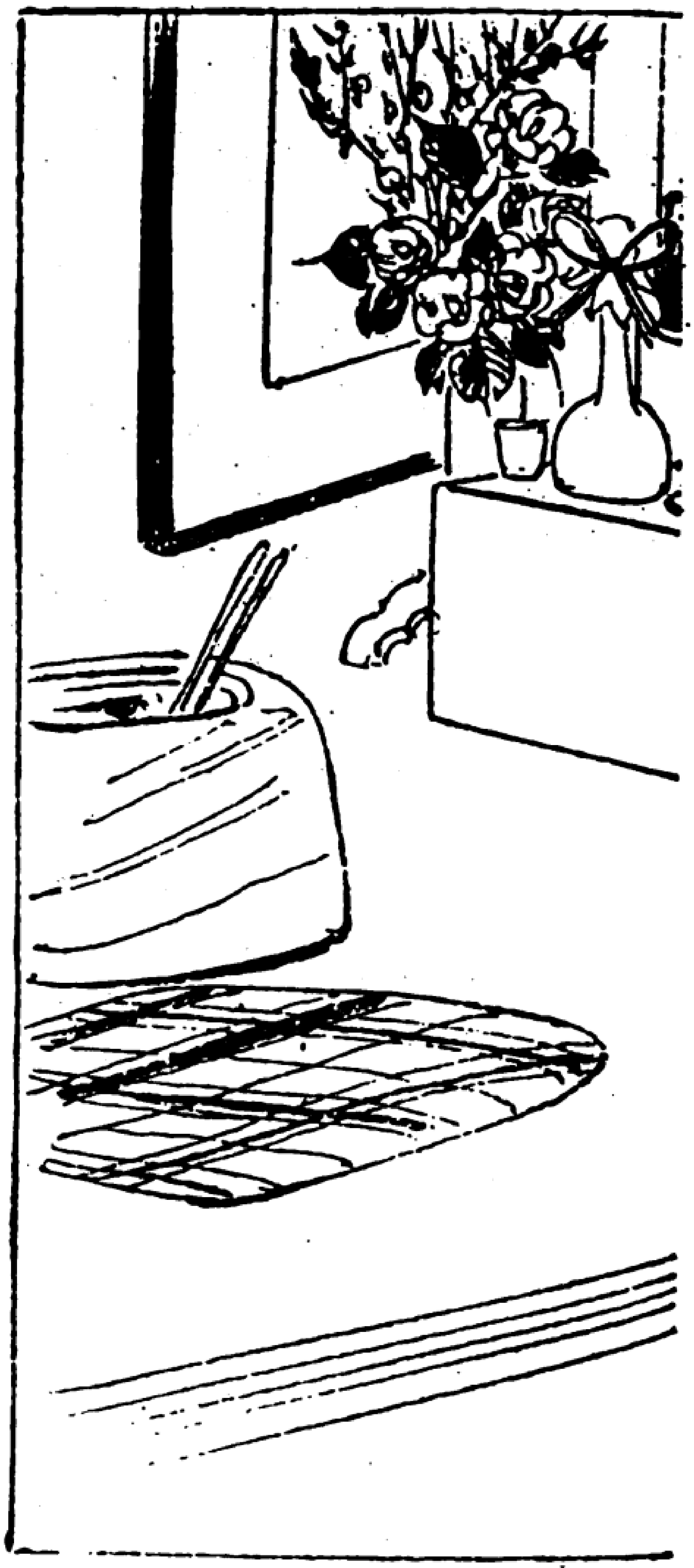
しう、かほるこそ、いよゝ、さりがたくてなむ。

靜かなる春の夜の風情描き得てよし

友のもとに

讃岐　松下ちとせ

今さら申すまでもありませんが、ちか頃の雲を見ましていつそう御地の空のみ、ながめてはさぞまあお寒い事さおさつし申して居り升よ其後はおかはりも御座いませんか雲のけしきはよいことでしやうがそが中をどんなにおひさりでおくらし遊すかさ思ふさまたも、其内御上京を〳〵さおすゝめいたしたいあなたも仰せに成りましたがもはや今日となつてしまひましておわかれいたした時もまゐりあの櫻花のさかりの中のまさゐもなほ〳〵しのばれますのね、こんなこさ申したさせていたしかたありませんがいつに成りましたらおめにかゝれるのでせうか同窓會の時だとて御上京もかなはぬあなたゝほんさに羽根でもからだにつけておそばにまゐりたいこされ、おかげさまで私は何の障りもなく暮して居り升から御安心下さいまし兩親や兄弟のそばに居りましてどうしてこんなにおなつかしいのでせうか、どうぞそれ、御身御大切になさいまして其内御上京遊され御兩親様や皆さまにも宜しく御傳言願ひますよ、それではおなつかしい御返事鶴首してまちあげます例のこしをれをあなた様御覧に入れ升ごきげん宜しう



ひさりのみ
　ながめたまふか
　　雪げしき
いかなるこさを
　よみおはすらん

丙賞

冬の夕暮

大阪　岡崎孤舟女

日ねもすの裁縫にも倦みて何となう一人物思ひに沈みし折柄軒近き梅の枯枝にけたゝましう百舌鳥の鳴き渡るにぞ驚きてふり仰げば日は早や西に傾きけむ陽炎はいともかすかに東の庫の棟のあたりに殘るのみ我窓らあたりそゞろ行きしてむさやなら庭に降り立ちていつしか柴折戸を後にしつゝ我唯一の友なる銀杏の下に来りぬあゝ見渡す限り哀れなるは枯野の様かな緑の色流る計り美しかりし木

木の梢は影もなく萌出る草の蕗に菫の花束作る少女土筆あさる童などあるは月澄み渡る秋の夜半磯に出でゝ招く海にひかれては鈴虫松虫の跡を尋ねて歌の趣求むる風流男など宵さり／＼に訪ひ來しものを今はさる影だになく昨日迄黄金の波漂はせし稲はいつしか刈られ野邊の千草もいろ／＼にうつろい果てゝ唯一人とり殘されし案山子は吹き來る木枯に弓持つ手も凍へむ許りなり、あゝ此樣見るに付けても思やらるるは人の世の榮枯盛衰なるよ我家の未だ此世に時めきし頃はあらぬもがなと思ふ者迄つどひ來て入らぬ諛ひ言など並べたてしをかく落ぶれては誰見返る者もなく見すぼらしき破家に父君と唯二人淋しき月日を送るとはさても頼みがたきは人の心かなと覺へず時ならぬ時雨に袖をうるほせしが不圖堤小高きレールの彼方にチリン／＼と鈴の音するにと見れば十四五なる童の馬子歌謡もいと輕く家路に急ぎつゝあなたなる森陰よりたなびく煙打眺めていと嬉しげに立ち止りぬ、童よ彼の煙こそ汝れが歸りをまち受けて母が夕げの支度なすならむ急げよ童、おゝそれよ我れも未だ夕げの支度せざりしをいたく時も移りたらむにさぞや父上のまち侘びて在すらむとさて立ち上る我袖に落ち殘りたる銀杏の葉ひら／＼と袖に背にふりかゝりぬ、いつの程にか日は暮れむ黙き雛は東の方より下り初めて何所ともなく入相告ぐる鐘の音遠くひゞきて長き餘韻はいともの哀れに又ものすごし

評　文なだらかにしてよくその實境をうつせり

ある夜

京都富小路御池南十八　前田美子

いみじう靜なる夜半讀終の木の一ふしをただに伺ひてましを生憎に父上は風のこゝちとて夕さりより引籠らせ玉ひ母上は例の御いたつきのさし重りたる昨日今日晝をだに夜にかへ玉へば御相手仕らんやうもなし弟さへにや明日の復習は了へつと許ふしど殿くるにやがて夢路の人となりはてゝわが影のみぞ壁には映れるあはれ靜なる夜やかやうの折にこそ日頃好める書繙きてましをと思ふものから此羽織とうものして送り參らさずばさぞな兄上の待ちわび玉ふらんとさまた更に燈火かいたてぬ、思へば過ぎつる方はたゞ夢の如しさいはんも餘りにたゞありながら現のやうに覺はねとのみ多き旅人の上も亦かくやあるらん忘れこそせぬ十年の昔學び舍にありつる頃ストーブの側に集ひて朋てゐまゝに行末のをなど語りあひつゝ興がりたりし古き夢のあとを尋ねて疑ふ來と共にくり出でゝ見ん、學びの窓にあられば世才に長けたる君をこそと先推されしに梅子の君なりき平らき的にも射あてられしよと肩打叩めつつきは君達のために露拂ひをこそつとめ侍らめ下手の何とやらん恥しうは侍れど好めるまゝに齒がく難に身を委ればやさなん思ひ侍るあなゆかしきみ心彼好きをこそ人も申せばおのれも亦日頃の望みのこと村夫子に嫁ぎて共稼ぎに村の少女を導き侍らん牛に牛連れとかやいふめるをいつに變らぬ君子の君のつゝましさありてこそ終には何某博士夫人の位置をも得玉ふらめ我は女醫とならばやと思ひ侍りと友子の君のいへば逃れぬ綠談おのれは藥劑師を望み侍れば何處までも共にこそと笑み傾けしは友子の君とならびて神酒徳利よとささへにうたはるゝ春子の君なりけり看護婦志願の方はおはさずやと呼ばる聲の下より我こ

そさ名のり出しは由子の君よいかでおのれも其中に加へ玉ばなんさ藤子の君のいひ出るに君しホ白き服つけ玉はんさにやさ不審がる面なみやりつゝ否さよ我は應募をこそさいひもはてぬに多くの若き君達ざつさ許笑ひどよめきぬ何のをかしきことさか侍るべき方々靜り玉はずやさ諫むるもさすがに年がひの見ゆる雄子の君なりけりわさの君達挨う靜り玉ひてよ時移りなばくやしかるべきにさいふさ眞面目なる面し玉ふもこさきらめきて中々になかしうなん。さもすれば溢れんさする笑ひをかみ占めつゝふくつけしさ笑ばれんさも家の業にたづさはらで月に花にあくがれ得べき家なこそおのれをほりし侍れど女の道學びたる人にふさはしからぬ音樂の主は容色勝れたる絃子の君なりき女は氏なうして玉の輿さへいへるものを才色の優れ玉へるのみかは地位も高うおはせばよしや君の望み玉はずさも彼方より長みてぞ御入らせを待ち侍るべしあゝさても幸多き君哉貴きになれたる身には日毎のたづきに苦しまんさも何をか厭ひ侍るべき心知れらん夫さ共に朝夕をのどかに送らんのみぞ春子がせめてもの願ひには侍るさのなつかしき音の葉にいたく感ずる折いざ美子の君さ促されてさてはわが上さもなりつるかおのれは母上の病多くおはせばさ僅にいひかゝる刹那うれしうもベルの響はつたはりぬ

多くの君達は各々志を得て世に時めき玉へるにひさりおのれのみは今も變らでさよしなきことゞも思ひつゞくる折母上のはゞかりにさ起き上り玉ふけしきに驚かされてやう〳〵われにかへりつふさむづけば昔なれの竹のさわきぞものすごうもきこゆる

行く水

攝津國豐能郡岡町　田中瑜瑤子

今はかくせちからき世に交りて汚れたる身さなりつれど妾さて元は谷間の清水人も通はぬ深山に生ひ立ち岩にくだけて響さなり石にふりては花さ散り或は白糸の瀧さ落ち樵夫の流す筏をのせつゝゆるやかに里川に出し時のいかに嬉しかりしよ堤は綠の若草生ひ茂り菫蒲花草は咲き亂れ黄なる胡蝶はひら〳〵ざ妾が調らぶる音樂につれて舞ひ狂ひ鳥は清き音に謠ひ春風の吹く度には種々の花姿が許を音づれ何鳥迄も共にさゝやきぬ。或る時は乙女が眞白き手に掬れ詩人に愛せられ氣高き百合花さ語りつゝ長き春日もみぢかしさ暮しけり。

げに世は皆かくさおもひつゝ希望かなう行末には是にいや益す樂しみの積りゐて妾を待てるかの如く想ひ居りき。

かくて森を横ぎり林を曲り流れ〳〵て行く程に未だ見知らぬものさ合ひ初めの程は好き友得つさ喜びしがなるゝが程に氣心合ず互にいぢめついぢめられつ漸々に世の憂き覺ね初るにつけそゞろ昔の春戀しうなりぬ。あゝされど如何せん流るゝ身を。

一日二日さ過つるうちいつか妾は人茂き市内にさ流れ來れり今はゆかしき昔の春を夢に見るひまもなく重き々船々を背らにのせられ折に聞こゆるものは汚れたる三絃の音のみこも初めのうちはいまわしく思ひしがごなるゝが程に聞くを樂しさみゝかたぶくる如うなりぬ。あゝ妾の心は汚れ初めたり。かくして妾は重きみふれを幾何さもなくのせて此大海へさたどり來れり。妾は驚きぬいづくを觀るも汚れたるさもがらのみ。いかにもして再び以前の小川に立ちかへらんさあせり狂ふうち妾もしらず〳〵から[illegible]身さはなりにけり。今は身も心も汚れはてぬ。あまり

の腹たたしさにおらき男波と狂ゐひ立ちあたりに漂ふみふれを思ひのまゝに弄びたりされどこも罪に罪なきぬろしわざゝ今は只だ色黒き海士が手にくまれてかまどの煙となり天つみ空にたちのぼる日をまつのはかなしあゝ。

叙事書のごとし

秀逸

家出したる従兄の許に其帰宅を促す文

在北海　志良由利子

春さはすゞごきさらぎの空朝夕はひさきわさに渡り候此頃を其君様には御すこやかに御暮らし遊ばされ候との御事人づてながら承はりいさいさ嬉しう存上候こなた御伯母上様御始め皆々様御機嫌よう入らせられ候間みも安う思召給はれかし今更にはわられどもげにや過ろに早き月日のゆくにはや君いまさずなり給ひてより茲に五月あまりの日を數へ申候「お正月がきたら「さうちやま」がかへる」と仰せられて樂みて待ち居給ひし充様の小さきお胸に描きたる可憐なる御望も今は空しう君居まさぬ御家庭に新玉の春を迎ふる其盃をさびしう〳〵取上げたまひし時の御人々の御心の程それぞと思ひはかり給へかしよしや一時の迷ひの雲霧は君が御胸に棚き渡りつる眞如の月の光を遮りしとはいへさしも篤行の聲高かりし名よもや故山を忘れ果て給ふ事はなはすまじ平和なる温かき家庭をよそにしてそこともわかずさまよひ出給ひてより御行衛を慕れおぐみ給へる御母様の御歎きのさまはた御嫁ご様のうきにやつれし其御瘁子又今を可愛き盛の充様が「さうちやま〳〵」とてこびわび給ふ其御様等の御夢にせめては思ひ出で給はずや御一人ならぬ御家出なれば御母様の御嫁子様に對して切りに御氣の毒に思召居御様子な御發明なるお綾様それとさとりて猶更にやさしう母上に仕へ參るさましみ〳〵と御可哀想に御座候お綾様は晝は御店のお帳場に君の御座を占めて雇人を指揮し給ひ暮方よりは早うれむくなりてむづかりたまふ充様をそされむらせ置て後再びお店に出でゝ其日の帳簿の整理を擧りてよりお姑様の御そばにお出に相成りまこゝろやさしき御手に御肩脚などさすりたまひ御胸のうき思ひしひて〳〵笑顏に隱して罪もなきお物語りして慰め奉りつゝ更たくるまでみとり遊ばさるゝさまお氣の毒とも何とも申上やうもなはしまさず候一夜みぞれの軒にたばしる音に夢驚かされし私枕を擡げてかたへをみれば御伯母様は此頃の御物思ひに顏のあたりにやつれのみ見させたまふを今しすや〳〵とねいり給ふ其御側に母様の御側に添寢したまひし充様がふくやかなる御手を夜着の外に出して眠れる樣の愛らしさ私は覺へず腕をのべて御手に觸ればひゐ氷のやうなるにそとこを中に入れ参らすればひさりにこ〳〵うち笑みたまひて晝の間いつも日鋒に私にお尋なさるゝ口調にて「父ちやまはおしたかへるのほんと……うれしいな」といひたまふにお顏をのぞけばはや可愛き御軒のみとては夢にても見給ひしがいとしの御心故現にも猶かく泣こひ給ふかご不憫やと孤子の私同情の思ひやるせなくそゞろ涙にむせび申候お綾様は例の優しき御氣質に君の御家出も畢竟我身の至らぬ故と只管御身をせめたまふも御いたわしく存候。

君よかく泣やさしき御方々の御歎きをよそにして人のふみにじりたる

蕾梅の花のあだなる色香に心を移しお家をそこになし給ひし事日頃の御心にも似たまはずといとも惡しう存候よく／＼御考へ遊ばされ一日も早くお歸りありて親子團欒の樂しきまさゐにけふを昔語りとして御笑ひ遊ばさるゝ樣申上候君がお出の處を私に迄知らせ呉候人の情けのうれしきに失禮をも顧ず思ひせまりて申上候差出がましき者と御叱りなくま心より出る此語御きゝとり下され候にはいか計り／＼お嬉しう何卒望みある御かへり給はり度かしこ

梅見の記

なでして

遠山の殘りの雪はむらぎえて霞さかはり、谷の戸出づる鶯の聲さへ、ものめづらしく軒端の梅も笑みそめぬ、垣の小草はのどかなる日影に萠へ池の厚氷も温なる春風に解け、日頃病になやめる妾さへ何となく心浮き立つやう覺へぬ。折しも幸子の君音づれたまひ、かゝるのどけき日に家にのみとぢこもらんも、いとおしく侍る、いでや岡本あたりへものしたまはずやとそゝのかされ、げにもとて打連れだちて出で行きぬ。行くことさ見え半里ばかり、丸木橋を渡りて東に曲れば吹き送る風の香いと清く漸く登り行くに左右みな梅なり。これぞめざせる岡本の梅林にぞありける。今を盛りと咲き匂ひたる梅花はさながら香のある雪かと思ふばかり。折々は梅花の袂にかゝるもゆかし。花の下蔭には老も若きもむれつどひ、互に遊びたはむるゝあり、ひさごたづさへ千鳥足に下りくるわかうどあり、妾はそこを打過ぎて人むれ遠き木蔭にたゝずみこの花をめでたまひし昔の古事など語りあひつゝ各其好む所を云ひ出でぬ。

あゝ梅よ、げに堪へがたき風雪を凌ぎて咲き出でしかひに、今長閑なる春にあひて時めくにこそ、其いさぎよき節操、其けだかき香、四君子の一種として愛でらるゝも理りなり。されどかの風霜に苦しみつゝある折は一人として音づるゝ者なきに時めけばかくも人の心の淺ふかさ、妾は異樣の感にうたれて思に沈みぬ。

あゝ此時久しく結ぼれたる我心はさみにさけぬ、亦固き決心もなりて、しばしにても世をうらみし事の今更にはづかしうなりぬ。遠山寺の入あいつぐる鐘の音に驚かされ友をうながし家路にこそはつきにけれ。其夕後日のいましめにもと破窓のもとにてかくなん。

滊車を見て

米澤市 みつ子

開らけし御代の惠みの露うるほはざる處なくあまねく至る處のみ民の露にそぼちつゝ一日の中に百里が間も行きかふぞいとうれしき極にこそ戀き故郷を放れて遠き旅路に出でたつに何の苦き事之れあらんやは情深き父母が朝の心を夕に通はし母が寒さ加へぬれば文机の元もさぞや冷かならんさて遠き都に文學ぶ我が子を思ひつゝ昨日仕立し衣服も今夜は我が身にまとひ暖かく文讀むも皆この滊車の惠みぞかし昔なりせば如何にやありけむ百里の道に旅せんには七日はおろか十日も費さざれば行く事叶はず山に臥し野に臥れてからくも目ざす地に達するを今の御代にはかゝる事はつゆあらず惠みも情も父母が心のそのまゝに來るぞげに／＼我等が幸福なる世に生れしと昔の人の羨む限りならんかし。

さてこの汽車に乗り居る人は貴賤貧富の別ちなく老若男女の別ちなく知る知らす語りあふ中には親が危篤の報に接して涙ながらに早き汽車も遅きが如く心急きつゝ故郷さして歸る人もあらんはた多年螢雪の功成なりて目出度目的の學校を卒へ卒業證書を携へ嬉しく校門を辭して歸省する人もあらんさて停車場に着にし時は顔色青ざめてありし荷物を車に乗せ迎へる人もなく家路さして車を急がせつゝ行く人ありこれぞ一時も早く親が最後の名殘に一度の面會もせばやさ急ぐためりそばに見る目もいさわびし傍には汽車を下るや數多の人に迎へられ微笑滿面にたゝへつゝ優しく切符を渡し車に上り悠々さ四方故郷の景色をながめつゝ行くありこれぞ父母が我が子の目的の地に達せるを悦びて山海の珍味を膳にならべて待たるゝ人ならん又彼方には罪を犯して已が地に止る事を得で逃げ來るものあらんはた又風雲を働らき望みし品物をうづ高く車中に積みて人氣おちつゝ來るものあらんげに數多の人はよろこび悲しみつゝ汽笛に驚かされて空を仰げば何心なき空の景色も何處も同じさ照らす月影も見る人により清くも深くも見るぞかし實にこはたゞ細き二本の鐵を渡したるのみにて數千貫目さいふ重きものをのせ山をぬけ河を渡り野に出で畑に出でゝ一分間に何哩さ云ふを走るこれも開らけし御代のわざさいへ驚くべき業にこそ。

出産を祝ふ

京都　氷室浪子

御兄さま、今度は、まあ御目度事れ、しかも男の御兒で、其上御二人共御丈夫とは、どんなに嫂さん、御喜びですかは、御察し申し上ます。

昨日の朝、御葉書が來ました時、妾もう嬉しくつて嬉しくつて、思はず知らず、お母さんまあ御目出度事さ、大きな聲出して、笑はれました位です。

お母さんも、大へん嬉しがつて、まあ何にしろ、早く行つて、姉さんの丈夫な樣子さ、赤ン坊の顔を見ましやう、さ大喜びで、今朝急いで、仕度をして御出掛けに、なるのよ、それに昨日直ぐ、鹽釜様へ、御神酒を御供へして、御禮を申上げました。

小兄さんは、僕あ、もう叔父様だぜ、汝は叔母さんだ、もし十六の叔母さん、これからは、泣いちやいけないぜ、さ被仰るのよ。

妾しは十五日に小兄さんさ參ります、其時毛糸の頭巾を編んで、赤ちやんに、持つて行きますから、抱かして下さいよ、ようござんすか。

作末姉さん、御身、御大切に御養生なさいまし、お母さんが、御出立の節、この手紙急いで書いたのですから、亂筆御判りにならないかも知れませんが、種々お母さんに、御言傳へを願つて、置きましたから、若し御判りになりませんでしたら、御尋ね下さい、さよなら。

寒夜讀書

岩代國　小林美武子

宵より小やみなくふりつむ雪は、はや尺にもあまりぬ。いつさて訪はるゝ者なき山里の、わきてさびしけれさ、日頃怠りがちなる文よむには、よき折なりさ、机のちり打ち拂ひ、小暗き燈火かきたてて、古き文さもよみはじめぬ。時々小竹をすべる雪の音のかすかに聞ゆるさ、犬の遠ぼねの彼方の山にひゞきて、物凄くきこゆるのみ。物の音はひもさね思ひ

もすみ、燈臺の霜なるも知らで、よみつゞけしが、夜のふくるまゝに、やうやうみ心の出でくるに、烈しき寒さは肌をさし、身うちふるはれいかにしてもたねがたくて、いざ今宵は此まふにし、又、あすの夜こそよむべけれとて、巻をおほはんとせしが、否々、あすといはゞ如何なる障いでこんも計りがたし、螢を集めて照さし、文よみ極めし古人もありとか、其時の寒さはいかにありけむ、それを思へばよき明りをつけ、日暮を厭き作ら、寒しさてやむべしや、かゝる怠り心にまかせなば、いつの世にか運開らむる時あらむ。嗚な愧かしき事よと氣を取りなほし、又よみ初むるに、心からにや寒さもいと薄らぎたる心地していつとはなしに一巻を讀み終へぬ。こもひとへに古のたまものなれや。

曾句々々

嫁ぎたる妹に母の寫眞を送るにそへて

周防　大木國子

まらぬだに、しめりがちなる藤衣に、涙の露のいやます種とは存じ候へ共、母上の御寫眞一葉、送りまゐらせ候間、よくよく生前の御風を思ひ浮べて、朝夕、れもごろに御回向なされ度候。やうやう世心づきて、ひとへにかしづき奉らんと、思ふ間もなく、母君には逝ぎ隔ひて、子養はんと欲すれば、親またずてふ言の葉も、今更らのやうにおもはれて、悲しさ擬なき、いはんかたなく候。御許には、御二方共、つゝがなうおはします事故、今一層御孝養をつくされ、妾とひとしき後の悔悟、なからんやうに、おつゝしみの程、ひとへにねんじまゐらせ候。かしこ

夢

五百枝子

夢はをかしきものなりけり思ひ絃の それはさしもありぬべけれどかけはなれたる事を見るぞあやしき人しれぬ嬉しき事などありと見つゝさめてはまづあたり見まはされて人なきに心おちゐぬへべけれど枕や知るらむとうらはづかしく思ひたらむこそあはれなるべけれ夢の通ひ路人目よぐらむとは如何にをかしくしたろなから ひなりけむさばかりつゝもなほあひ見ろがをかしくはたゞはゞかりの關をもおかぬ思ふごちもさめてのなごりをかしか りぬべし悲しくわびしきことを見高き山よりまろび深き淵に沈むとおぼねてさめたらむは汗あゆる心地はしてもそのはかなきをよろこぶかくよきにもあしきにも うさましくもあらず嬉しからぬものにも思はれぬはいさゞ をかし如何なる事にまれ戀しさにねたへずなくさ見れば 現になりてもあやなくほろほろと 涙のこぼれぬ袖に別れはらからをすてたる旅の夜な夜な通ふは故郷の 川故郷の水なつかしき父母はらから身はいつしか 其むれにありてともに樂む さてふさおざろけばさ もし火ほの暗くして住みなれぬやごりに心づくもいさくあはれなるべしなき人にあはむはこれがよすがならずしてはあられじよ幽幽所を異にすれば相思 ふとも相かたらひがたきをこそ寫眞にものこれ唯夢の浮橋わたるまで心のまゝにこさゝひかはしもせらるゝ見むさして見ねず見ねじとても見ゆあやしきかな此夢五臓のつかれといへどそれも何ならず さしはかなきをも おかぬものにはいひけたて樂しきものになすもあながちならじなげに夢はをかしきものなりけり

都にある弟のもとへ

長門　植村精子

去月二十日御差出しの御文たしかに披き申し候、此頃の寒さ强きに御身にも壯健にて御勉强の由母上樣始め安心致し候、當方にても一同無事に暮し居り候まゝ御安心被下度候。

扨て四月には愈ゝ卒業の御事故一層御勉强必要と存じ候、申迄もこれなく候へども父上樣御逝去の後は母上樣かよわき女の御身一人の力にて學資金を御調へなされ候事をよく／＼考へて御奮勵願上げ候。

今小包にて手織の袷一枚御送り申置候間御受取なされたく候之れは母上樣と妾とにて織りしものなれば其心なされ度く候、又金三圓これは妾の仕事の賃金に候へば卒業試驗につき御勉强の爲め体の丈夫なる樣卵なり牛乳なり滋養物を御求め下されたく候。

まづはあらましの用事まであら／＼可祝。

寒さくれ／＼も御體大切に御用心第一に候。

故山の春

但馬　小西やを

軒端の梅うちけぶりふる春雨もいとしづかに雁の二つ三つかへり行く夕まぐれ故鄕のことなど思ひつゞけられいとさびしあゝわがめでし國の櫻は今年もかすみのひまににほふらん妾が摘し野草の若菜も此春雨にもえいでぬらん遊ぶ小供も梢のうぐひすもかはらず天の樂をや唱ふらんあゝなつかしの故里の空や父母や如何に友やいかならんあなこひしの故鄕や事あらば我ひま取てかへる頃まで散らざれ花よかはらざれ春の花よ

初雪

東京　神谷よし子

奇しき女神の翅き搖もてぬき散らすたゞの羽毛がさぞいそぎ出でゝうけさめつゝと見るまに早くも消え亡せて朝の露のそれより果敢なき今朝の初雪しかすがに草葉の上にはあはれ蝶のこぼしゝおしろひかとさぞ思はるゝ程かゝりてありけれどそれもやがてはだれに露のあとさめるのみ

さはれ一夜の中に玲瓏銀世界と化せしむる汝雪てふものよふれ／＼降りて積りて我等を樂しましめよ舟に棹さしてはた高樓に盃めぐらしつつ汝等の飾る清く麗はしき自然をめでなんげに愛すべきものは雪にこそありけれ

されば／＼思へば恐しあゝ身の毛をも慄立たしむるよあゝ雪……

千軍萬馬の其中も雨あられとふりくる彈丸ものかはと鬪ひ鬪ひ／＼て攻め敗りがたき／＼城廓をしも難なく拔きし兵士もなか／＼に汝等のためには尊き其の命を奪はれしよあゝあはれ赤きその血の熱誠もたけく勇ましき其大和魂をしもあゝ今はかくはかなく消えたる汝等の爲にー

我は汝を深く愛すはた其美を一愛すされど／＼かゝりし事を思ひ出でゝ見ればあゝやさしき女神も忽として惡鬼となり笑まひも怒にして汝に盡せむ汝の力の恐しきかな

さはれそはちさよす神の定めおきし其人の運命なりとやいはましか
さらば果して然ならばやよ汝今年はかゝる運命にかゝれる人のありや
なしや神は何といひけるややよ刹那！

菫

大阪　田中しゆん子

窓に萌づる春風にそゞろ浮かれて一日柴の折戸を立ち出で、花野を足にまかせてさまよひしが、ふと紫の色こきは美しき菫を見出しけり。われは心なきわざとは願ひながら、そを根こぎして家に帰り、小さき鉢に植ゑて友なき魂の友となし、あしたに夕に水かけ養ひしが、哀れ菫は一日一日と紫の花褪せ青き茎やせて昔のあてや姿かなるは消にうせぬ。われは問ひつ。あゝ菫よ我があつき情をよそにしてかく悲しむは、優しき蝶と共に菫の甘露に酔ひて、森蔭に輝くみ空の星をながめ、野川のさやきを聞きし楽しがりし昔をしのびてか。折しも吹き来りしそよ風に菫はうなづきて、鉢を持てるわが手にほろりと落つる一滴の涙。

冬のもゝ

孤蝶少女

渚遠く水涸し堤には鳥の跡もとゞめず、古びたる舟は空しく浮びて流るゝこともなし。日は傾きぬ、星一つ二つ出でゝ影を寒水に砕く

物かゝんとて朝さく硯とり出づるに、あはれ残りの水氷りけぬ硯は二つに倒れて墨すらん術なきぞくやしき

夜はふかし霰は軒を打つ、洋燈油つきて眠れるが如く火鉢に火は消にて灰のみ白し、顧みれば日課中をだに果さず、無情の時計はたゞ刻みに刻みて進む

小夜ふけて吹雪す、あはれ誰が子ぞ泣きながら辻堂の軒に立てるは

林外に夕日高し、小松の疎かなる庭里の少女の二人三人落葉かきて帰り来るあれさんかむりの手拭は白かりき

入営せる兄の許に

大阪　田中俊子

兄様には何のお障りもご座いませんか、こちらは皆々無事で暮して居りますから御安心下さい。先日はお写真贈つて下さつて有がたう、可笑しな物ですわね頂いてから前の様に淋しくは有ません、真実によく写つて居てよ、兄様とお呼び申したらお返事遊ばしそうですわ。毎日午後三時頃になりますと野山をかけ歩くのだからさぞお腹がすくだらふ、兄は甘い物が好きだからと母様が仰しやつて、床にかざつてある貴方のお写真にお菓子をお供へ遊ばすのですよ。此間も母様が一心に新聞をながめていらつしやいましたから、何だらふと思つてのぞいて見ますと大演習の画でした。そして若も此のなかに居るんだらふと仰しやいました。四五日前も兵隊が通りましたので、母様も私もとんで出て見て居ましたら、中程にそれは〳〵兄様によくにた方が入らつしやいました。其晩は一だんと兄様がなつかしくつて、十二時頃まで母様とお写真を見たり、之まで頂いたお手紙を皆取り出して読んだりして居ました。何時だ

したか新聞に兵士の虐殺事件が出て居ましたらう、夫れを母様がお讀み遊ばして大變貴方の事を御心配なさいましたが、兄様はあんなにお優しい方ですから、上官やお友だちにうけが可いに違ひないです、おにくまれ成さる様な事は必ず有ませんと私がくり返しく申しましたので、ほんにそうだ子と御安心なさいました。僕は大きく成つたら兵隊の大將に成り○○兵と戰つて勝つのだと弟は威張つて居ます。唱歌は世界一週が一番好きですの、皆様が坊ちやんは中々お上手だとほめて下さる位ですから、當人は大得意です。或日無線電信を買つて下さいなと云ますから何にするのだと聞きましたら、兄様に世界一週の歌を聞かせてあげるのだと申しましたので、母様も私も大笑致しました。大方學校で無線電信のお話を聞て來たのでしやう。何事にもよく氣をつけて人に憎まれない様になさい。追々寒くなりますから風邪をひかぬ様にと、母様からのおことづてです。

貴方が山から引いて入らつしやつた萩は此頃美しく咲いて居ます、花の盛をあるじに見せずに散つて仕まふのは何ぼうか本意ない事でしやう、せめて一花でもと摘つて手紙のなかへ封じて置きました。

かき淋り大空を仰ふげば秋の月冴わたり。あゝなつかしき兄上此の月に對しての感。何如や

雪の日

西多摩　千代子

昨夜よりふり出し雪の今にやみなくふりしきる中を學校歸りと見ゆる十三四才を頭に八九才位の小供等勢ひよく雪中行軍の唱歌をうたひつゝ來りしが年上の一人立ち止りて皆どうだ此處で雪合戰をしやうではないかと云へば一同勇み立ちて金チヤンの云ふ通り其れがよいやと一人が云へば皆々賛成と手を打つを見て金チヤンは大將然として夫れでは皆早く家へ歸て本や何かを置て來やうと云へば皆ちりくに己が家をさして行きしが程なく面々寄りつどひしかば金チヤン側の通り先きになつて人數を調べ此れで皆集まつたさあ二ツに別れるのだと西と東にたちわかれ己の方が日本だお前の方が支那だといづれも大さわぎ敵味方とも大將ありて學校の先生が體操の時に號令をかける様な調子でやつてゐる双方入り亂れて益々ふりくる雪の中をものともせず夢中になつて今や戰の最中大將は一段高き丘の上にありて日の丸の旗を手にもち聲はりあげて號令を下す有様の勇ましさしばしたつ内やつと計りに東方の軍勢押入り敵の大將の面前へ行くよと見る間に彼の旗をうばひとりしかば山もくづるゝ程のさはぎ小供等は大聲に大勝利を連呼し勇ましく凱歌を唱ふ無邪氣なるは小供の常とて今まで敵よ味方よとあらそひしに今は双方互に手をとりかはしてさあ此れから雪中行軍をしやうと隊伍堂々として進み行く様のさても雄々しき事よ男子は幼少の内より此の様に勇しきに女子は深山の木の様で一生社會に入れられず其の上男子は女子を玩弄物のやうに見なして居る女子とても社會に出でゝ女子相當の事業にあたり入りては圓滿なる家庭をつくり共に共に助け合ひつゝ世を過してゆきしならばいかに樂しき事ならんなどゝ窓によりてふる雪をながめつゝ空想にふける折柄遠く聞へる唱歌の聲彼等少年の行軍隊ならん

評　あどけなし

親しき友の許に

伊波岸江

昨日今日何時も春の光にみち渡りてさし入る日ものどく／＼しう覚ね候御新君には其後も恙なくて家事御いそしみ遊され候や心もとなう存しつゝもおろそかに打過しつる罪はさる方にゆるさせ給ひてよ妾は當にもまして健かに暮し侍れば他事ながら御安心めさせ給へ 君の嫁かせ給ひしは昨日の如く覚ゆるに早や三月あまりに相成候今日はむもうき立つまゝにかぞいろの君嘗かし参らせ君より送り越されしてふうつし絵拜し参らせ候嫁り給ひし御姿の様も世なれていしくも似合せ給ひつるよ他いゝ給はぬせかこちて笑はせ参らせ候御顔の肉さへ増させ給ふやう見参らするは妾の眼目にてもあるまじく候かぞいろの君の溢るゝばかりなる笑もらし給ひて御噂に餘念なき御有様を見奉るにつけても君の幸多き事よ御孝行も是にて十分盡され申候何も／＼嬉しうてなん楽しき御ホームの御有様もつぎには漏しうもらし給ひてよかへるさ何かは知らず獨りほゝゑまれし候御なつかしさやる方なく夜に入りてかくなん余は又の御便にとあら／＼かしこ

添削依頼の文

周防 象崎たつ子

當は花鳥の好時節と相成申し候畫師の君には定めて相替らず御繁多の御事と山々御察し申上候さては先達て伺ひ候折一寸御願申上置候旅日記やう／＼取まとめ候間誠に御いさまなき御粗忽れ入候へ共何時にても御心向かせられ候節御昇下正され候やう一重に希ひ上参らせ候親しく御教へを請ひ居候ひし時だにともすれば後れがちなりし身の今はいさゞ家井に忍びなされ候文の林の覚束なさのみ増り候て猶も顔けあへぬ言の葉草うら恥かしき限りながら難波津もたゞ／＼しかりし頃より道の栞とたのみ慕ね奉りしなればと包ましさも打捨さて御取直しの程願ひ上候なほ御まのあたりにと何も草々申のこし候かしこ

陶器ひさぐ翁の話

長門 植村せい子

昔京の町はづれに一人の陶器ひさぐ翁ありけり。此翁陶器を擔ひては京の町なる得意先きを廻るを常とせしが、或日某の邸に至りぬ。其家には數多の下婢ども召し使はれしが、翁の貧しく賤しげなるを見て、あざけり顔に翁に向ひ、京の町は人の往來しげき故若し衝き當りて籠を覆し柔く陶器のこはれたらんにはいかゞし給ふと問へば、翁は、さる事のあらば貧しき翁なれば資本とてもなしたゞ問屋へ行き品を借りて賣らむと云ひぬ、下婢ども重ねて、再びあらば如何したまふやと責むれば、翁はゝゝみて、然らば再度問屋にても借られまじ其時こそ他人の内に下男にも住むべけれと答へしかば、下婢ども己が身の此の貧しき翁よりも賤しきかと耻らひて止みしとぞ。

こは一の物語なるが世の中の人々はこゝに心をとめずして、いたづらに他人を嘲り己をほこる者多し、或は其時こそ響ともなる可けれど此の響は眞のほまれにあらざれば、後に至り消ゆうせて悔むに至る可し、たとへいかほど悔むともせんなし。かゝる事は誰も知れることとたやすきこと

なれど知つて行はざるもの多く。知つて行はざるは、知らざるにまさるとかや、まして女の口數多きはいと見惡きものなり。よく／＼注意すべきことにこそ

名古屋　鈴木禮子

我が日々登校する道に一つの車夫の家あり四疊半二間にて小さきながらに床の間も佛間もありさゝやかる庭にいろいろの樹木をうゑ傍には心地よげなる菜畑さへあり二三の子供の衣類もきたなげならず歸宅する頃にはあるじも歸りて妻子そろひてにこやかにうちむかひ一家睦まじきさまそゞろに主婦の心ばせもおしはかられたり

これに少しはなれていと大なる糸屋あり商家に稀なる構へにて土藏の三棟もうちつられ店には數人の番頭もある身なれど不幸にも妻は先年數人の子供を殘して黄泉の人となり本年來りし後妻は稍少教育あるよしなれどいかなる事か家治まらず常に風波の絶間なくつかへる女中も一ヶ月と居たりしものなしとか

あはれなしへずとも常に一家を整へ自ら女子の本分を盡し車引きても天を樂しむものありたれか之を美と爲はざらむむろに多少敎へある身の一家を治めかれあたら月日を風波の中に送るとはなげかしき事ならずや古人は云へり一家整はざれば一國亂るとさて一家整ふと否らざるとは一家の主婦にありと。かの有名なる英雄「ナポレオン」は戰ふ毎に先づ其國の女を捕へて國の强弱を見たりとか女子の責任また重からずや今の女子少し學識を得ばわれは女博士にならむ生涯男の力はからずなどゝ獨立を主張する者ありこれ可ならざるにはあらざらむされど事は體に身体本に用ゐざれば其用をなさずとかいかに勉むればとてよも男子には及ぶまじかくて進きをしたはむよりはむしろ女子たる天賦に從ひて其性に適する家政をつかさどりやがて國家に有爲の子女を養はむこそ女子の本務を盡すの近道ならむ況んやかしこき御方を始めまつり大方の諸先生の女子教育に力をよせらるゝは西洋諸國の如く女博士女社員を養はむが爲めならずして國家に必要なる良妻賢母を養はむが爲めなりときけるをや

親しき友に送る

四ッ谷　梅子

梅も咲き鶯も訪ひ來て何ゞ無く春の心は致され候へども餘寒去りがたきけふ此頃いかゞいらせられ候や

さだめし日々御たのしうにぎ／＼しく送らせ玉ふ御事と存じ上候こなた何の障も無く御かげ樣にて妹も病氣全快致し昨日退院致し候まゝ乍憚御休神被下度候遲れたり先立てはやす／＼と御産の紐とかせられやすらかに玉の御男子御出生とか御主人樣かれてよりの御望に候故さぞ／＼御滿足とりわけて御母上樣の御よろこびさこそと存じ上候御許樣には御初産にてあつぱれの御てがらあらはし玉ひし御事ゝ北上靨いささかの御さはりもなく御母子共に御日立ちの御事いよゝかたまる松野家の御いしづへ萬々御目出度御祝ひ申上候かれてより家庭育兒てふ事には御趣味深く入らせられし御事故一家の女皇としてまたは未來の國民の母上としての御責任は誠に重へはおもふほど輕ろからず候殊に失禮なれども御母上樣にはよろず舊例によらせられて育兒の事の萬事萬般御相異の點もまぬかれがたくおはすならんとは充分におさつし申候

まりながら此間のけじめこそ大切にて事は異れかの並木様がよいおて本かさ存ぜられ候何も事新らしく申上すこもさくに御こゝろ得の上なれご親しき仲さてつゝしみなく思ひのまゝを申上候

いつか御話し申たる三宅博士の家事衛生にくはへて三島博士のはゝのらさめ今朝小包にて差出し申候間御うけさり被下度御覧ひのしるしに何をかさ存じ候へども何事もいふかひ無き身のこゝろざし御受下され度願上候皆々様にも御よろしく時から御いさひ第一さ存じ候かしく

山里なる乳母のもとに

岐阜 なでし子

昨日今日はさびしい寒さ、變りもなく御暮しなの。此間は色々さ深切な送物を有がたう。其新村の人の話には今年はまだ例のレウマチスも起らぬつて誠に何よりの事よ。あのまあ栗の大きな事、坊やが見て是は何て名なのさきくので、丹波栗さ云つてきかせたら夫なら桃太郎の御供をして鬼が島へ行った奴れさ大喜びよ。あれも明くれば四つになるし、もう色々の御伽話など解るやうになつてよ。早いものね、私が和女の膝の上できかして貰つたのは未だ昨日の様だのに。夫からあの縮地の一反和女が畫から飼ひ立てゝの手織さ聞いては綾や錦にもまして嬉しく直に京へ染めにやつておいた故今に出來てくるだらう、來春の初午にはあれを着て坊やを連れて見せに行かうさ樂しんでゐるよ、和女も樂しんでまつてゐておくれ。此襟巻は私の仕事のひまひまに編んだもの、和女の深い〳〵むつくしには及びもつかれど後の山も早白くなつたこの事朝夕の露霜に御養蚕の節の手仕事も寒からう風邪等ひかぬ様しつかり巻いて要まつてゐておくれ。外の一包は和女の持病薬懇意な御醫者のこしらへたのだからもしふさつたら又いつでも送つて上げやう。息子さん嫁さんにも宜しく二人さもよく優しくして上げるそうれ和女の仕合せなのよ。かへすがへす身体を大事に無理のない程に働いていつまでも達者にしてゐておくれよ。何もは來春逢つてゆるりさ御話しすることにしませう里のお母さんからよろしく。

花

村上琴子

四季折々に咲く花もてさ多かれごゝりわけ櫻こそうるはしけれ山櫻の緑の木々さ交りて咲きたる八重櫻のまりの如くにかたまりて咲きたるいづれも見所ありてめでたし紫陽花虎尾など花の形かはりて面白し紅梅のもゆるばかりなるを瓶にさしたるは優にやさしきすがたあり山吹の黄金色なるかきつばたの紫なるが水にうつろうさまも一しほの眺めあり萩桔梗女郎花など秋草なればにや人の心をしめらせて中々にあはれなり菊も違らずしてまがきの下などに咲き出でたるはゆかしきものなり何れの花も人手にて造りためたるはいやしげなりたゞ天然に育かずして己がまゝに咲き出でたるぞなか〳〵にゆかしき。

古戰場の夕ぐれ

東京　佐々木和子

夕日はいつか沈ンで空にたゞよッていた紅雲遂に紫となり藍となり
夕靄川の面から立ちこめて天地は全く夜の幕に蔽はれてしまッたあた
りはたゞもう闇さ靜か鳥の聲さへ聞ねない
すぐ下の川には夕汐が一杯に滿ちているボッンさ何の音か今出たばか
りの月にきらめきて水上には波紋あざやかである
うら枯れて草の間に墓の影濃つ苔むして恨は深しゆきし人の魂いまい
づこをさまよふているであらう朝に夕に訪ふものはたゞ淋しい風の音
ばかりである
あゝ夕ぐれの淋しさをこゝひさつに集めたやう
空には星のまたゝき靜かにて恰も何事をかさしやいて居るやう遠く風
の響が葉すれの音がさらさらさ

觀梅記行

南郊女史

午前十一時新橋發の列車は、十分遅れにて停車場を出た。今日紀元節の大祭日に日曜を加へ、加ふるに梅時節を以てす、客車が何も込合ふて居るのも無理はない●薄氣雲の重なつた天、愛宕赤坂臺の西は乳汁よりは濃く炭灰よりは白く彩色られ、建物や森が青みを帶びて、影畫のやうに白圖不規則の線を畫いてゐる。品川沖の東は鉛色よりも淡く、一部分薄れた雲の間から太陽の光線を洩し落して、金魚の鱗のやうな波が燦々さする。そして黝多い鈍色の帆の中に砲臺を包み、前景には瀬戸物細工に似た小舟が幾艘さなく出て、●符合に結合せた竿を持つた小人形が切々さ働いてゐる、貝でも採のであらう●品川までしさ/\であつたが、品川から向ふは尚更ら、去月末から二度降重なつた雪がまだ殘つて、北向の屋根にはすざりすざつて危く軒端に引懸り、蔭陸の麥畑にに半分が程に敷忘られてゐる。此を新に咲出た梅さ見迷ふ人も有らうけれど、自分には其よりか、遠くの水田が白く光つてゐるのを、殘の雪では有るまいかさ思はれた●入梅園の入口には俗な赤い旗が交叉して有る。米字の中に金字を染込んで、確か金光社さか銘打つて有つたやうだ。棚の數いて有るツル/\坂をグル/\ゐ登ろさ、廣場の北半分は白い幔幕で一直線に仕切られてゐる。「此より内貸切」さか「各教會事務所」さか貼札が出て、金光宗の園遊會」さか總會さかいふので有らふ。會員はまだ集まつてはゐなかつた●變なものに變な處を占領せられてゐるのは、餘り善い氣持もしないが、其の御陰には、餘り五月蠅く茶屋の小女に付纏はれなかつた●餘計な事に走て肝心な梅を忘れやうさした。然り梅は先づ山下で二三分の咲加減、山上で已に七八分の咲榮である。尤も山下は株が少いし此處の梅さしいへば先づ山下中腹を指すのであるから、總じて既は今度の日曜から始まるさいつて宜から●電車は穴守行の人で暫時間斷の雜沓、大師行は右、穴守行はたさ一座極て有るやうなもの、、追懸けく來る客は規律も何も有つたものではない、さあ此が大師行、さあ此が穴守行さ、即座即座に車を極めるやうだ、左せんか右せんか乘客は甚だ適從するに迷ふもの、如くであつた●蒲田の梅園は、橋の前で一二株八分咲を見懸けた外、二三輪さ拾ひ歩くの有樣。十日も早いさ罵つた者も有つたが、正味一週間後さ見て置けば大した間違は有るまい●此處で能く見る中學生の盗足は今日も缺けては居なかつた●彼等は禁厭整備草鞋脚

界に、外套を着いて背負つてゐるが常であるが、其の遠慮なく俵屋に腰打懸け、持参の竹皮包を押抜き、握飯を頬食してゐる所は、何となく末頼母しい心持もする●此庭には景物の孔雀がゐる、自慢さうに翼を擴げて左顧右眄見る者をして喜ばしめたるは、願る飼主の意に適つてゐたらしい。實草の切符は其の門口で賣つてゐる●序に穴守に行つて見ると、今日翌午に作らず此庭を註度の賑ひである、御園満も供物満も守下満も目の廻る程で、更に飴屋、天麩羅屋、料理屋、玩具屋は貧乏揺のならぬ大當りである。突飛な自轉車乗も大分あつた、高粉子に髭のある尤らしいのも吾妻コートの分別盛なのも可なりに在つた、が其大部分は低大聲さ見本る神職、素端くれらしいお嬢さん、御心善ささうな村の兄さん、可不可の間に在る小供であつた●「岩谷天狗奉納の花火百五十發」は眞鬼の鳥居に廣告されてあつた、そして廣告に違はず右手の田甫にズドンズドンさやつてゐた。中央新聞の時計臺は取分け目立つて居たが、惜いとには止つてゐた。鼠提灯は可なりの實行であつた●此庭で雨に逢つたのは一寸奇であつた。雨は本神降で出店の騒ぐ割には全脱者——寧ろ遊行者——は悠々たる者である。そして正眞目な鳥彩に張子の達摩や猫の木鳥を昇いでゐるのが、如何にも温かさうに見えた●大師の森も見なつた、矢張一通間狭を潤せなければなるまい。丹頂の鶴が池の洲に寛鳥さ遊立つてゐた、此庭にも孔雀がゐて其から鳥の大籠が据わつてゐる。矢張鳥は憎むを辨へない子供への餘興……景物でがなあらう●川崎から小向井に行く時はもう午後五時前で、此途一月後れの正月さ見へて、御目出度うで御辭儀を仕合つて居る店があり、又羽子を突いてゐる庭があつた。梅事は至る庭頭の上で唸つてゐた。いや吾皆忘れてゐたが、大森から此方頭の梅さいふものが更にない。少し急ぎもしたが、此の途で藤汗の審に混むを覚れた●槇木梅園に着いて見るさ、大方は人散じ茶店を仕舞ふ少し前であつたで、實に物靜かで、梅の木下を潜り〳〵、奇麗に掃除してゐる人が實に床しく思はれた。梅は紅梅の若木が彼方此方に咲いてゐるばかり、白の老木はまだ什々笑いさうにもない。此庭でこそ十日も早いさ言つて不可なからう。尤も角善き庭に席を撰んで暫し休んでゐるさ、朝來の疲も出で我知らず恍惚さなる。乃で偶然なく愛を拂ふの微風がある、面を上ぐれば頭さ平行して眞圓な月が出てゐる。——低い森の上凡二年が處、二重三重になつて苔蒸す梅の梢に、甚だ大いなる黄金の月が織込まれてゐる。

雛祭

本郷　齋藤はな

彌生三日。雛まつりの節句まゐる、上は案の雲たちこむる大内山の宮居より、下はこゆるぎの磯うつ波にかづきする海士のさま家に至る迄、心毎に待ちもうけて今を盛りさ桃のうつらふかげは氷に、盃浮かして唐大和のうたごも咏みすさび、あるひは床間に列しつらひ、美しき餘束ける雛すゐならべて幼き者の遊び草になすめり。我家にも、いはけなき妹の爲めに、年毎飾りひろげてうち〳〵ながら遊はしむを、言はしさしけるが、今年また綾絹のいさきらびやかなる古代の數物にやう〳〵しく揃へられたる、内裡の雛の見えも忘れぬ笑顔ゆかしく、何くれの調度も、小瓶にさせる花のかづ〳〵、白酒ざては草のもちゐを、うち〳〵しつらひに添れたるは、其幼きが失せてあらぬはなかるべし。思へば、飛鳥川の淵瀬定めぬ世なりけり、去年迄は此雛のあるじさかしすがれにし人、今ははや冷かなる奥都妻の中の主人さなり給んぬ。よろず見聞くにつけてこひしうありし昔の面影の、身にそくて只夢路分けゆくやうなるにも、あはれ昔の中にさらぬ別れのなくもがななど、獨言たるゝも、かつはをりなしや。

我友よ（甲）

神田區北神保町四　村瀬靜子

すみれは咲けり雲は高し
鳥はうたひて蝶は舞ふ
樂しき今日の春の野に
いざやあそばん我友よ。

かゞやく光り野邊に満ち
水は美妙の音たてゝ
春の平和をさゝやけり
見よ我友よ我友よ。

若草もゆる此野邊も
夕べは秋の愁ひあり
清き小川の流れにも
あしたにつらき冬もあり。

さはさりながら我友よ
こもたゞ一時やがてまた
ふたゝびかへる春の日に
すみればにほひ蝶はさぶ。

あはれつめたき人の世の
さだめになげく我が友よ
習し涙の目をあけて
樂しき野邊にあそばすや。

評　言ひ得てよし、結句殊に面白し

漁夫（乙）

長門國豐浦郡長府村米提　植村せい子

日は沈み　影はおぼろに
霞こく　遠山うすし
日々の糧　よき代ねんさ
赴きし　漁る舟は
歸り來て　濱邊につきぬ
妻なるか　幼兒いだきて
只一人　沖をのぞめり
遅れしか　終りに一つ
舟つきぬ　若き漁夫
妻はまづ　叫び出せり
喜びの　溢れしものか
夫ならん　おうさいらへぬ
よきえもの　多かりしならん
笑ふ聲　高くひゞきぬ
船具もつ　夫歩みぬ
籠をもつ　妻つゞきたり
平和なる　彼等の日々よ
長へに　譽らされかし

評　平和なる漁夫の生活を歌ふたるいさめでたし

竹（丙）

北多摩郡小金井梶野小學　工藤京子

嗚呼如何なれば斯ばかり
　優れしものぞ竹の身は
土を破りて生まるゝや
　皮に節をば守りつゝ
昨日上げしと見るまゝに
　今日は長にも餘りけり
如何にわらるもさかるゝも
　破竹の聲にいさぎよく
露恥しき色見せず
　霜はさゆるも常盤に
緑の色をかへぬなり
　雪の積りて堪へざるも
直なる節はつゆまけず
　一聲高くくだくなり
筆となりては文藻に
　金石聲を放たしめ
能者をしては玉腕の

踏を眞情に傳へしむ
笛となりては人界の
　心耳澄ませる瀏喨の
天の音色を傳ふなり
　嗚呼優れたる竹の身や
我は君をば規矩として
　むのたけを貫かん

評　言まはしに未だしき所はあれど、籠る才藻あり。

籠の鳥

遠江　新村ますす子

（一）

有明月の影淡く、
　窓はやう〳〵白みたり、
靜けき床を起き出でゝ、
　故郷の空にかけらむと、
心はいかにあせれども、
　せんすべあらず籠の内

（二）

朝日も今は故郷の
　山又山をいろどりて
霧の中より匂ふらむ
　戀しき吾家を照らすらむ
友の窓邊にきら〳〵と
　嗚呼なつかしの故郷や

（三）

行衞知れざる吾戀ひて
　母はいかにかなげくらむ
友は何處に迷ふらむ
　噫夢にてはあらざるか
いつまで吾はさらはれて、
　苦しき思ひする者ぞ。

（四）

思へば去年の春なりし、
　樂しく遊べる野寺の塔、
共にうたひし梅林、
　今はたゞはぬよその空、
あゝうらめしや春の風、
　戀し故郷の海と山。

寺男

三河　らく葉

暗に迷へるなき魂を、
しづけきよみに送りゆく、
夕の鐘をつきおへて、
高く聳ゆる鐘樓の、
飛檐にひさりそめば、
遠く塒鳥の呼びあり。
ひと日の名殘惜まれて、
空にたゆたう紅も、
久しかるべき影ならで、
やがて寄せ來る暮の色。
麓の里の燈火は、
柴垣もれてほのめきぬ。
偲ぶ、十年の其かみの、
愁は夢かまぼろしか、
薄命のわれ幼くて、
ふる郷出でゝ草枕。
世の荒波に漕ぎ出しか、
弱きこの身の堪ねすして、
希望は失せつ病得つ。
涙の淵に沈むとき、
心安きを求めてぞ、
我から望む寺男。
賤しきわざと云ふ勿れ、
今ぞ平和の歌聞こゆ。

梅一枝

なにがし

軒端に近く咲く梅の
　花ほのつき朝ぼらけ
木かげに立てる若き尼
　姿をつゝむ墨染の
袖にはならぬ香あり。

はかなき己が影うつす
　鏡の如き井のうちを
みたすは花の雫かや
　右手に提げたるあか桶に
涙と交ぜてくむ清水

雨ふきおろす山風に
　たゆ〳〵唱ふ經の聲
かはきもやらぬおくつきに
　にほへる梅の香と共に
苔の下にも通ふらん

救ひてよ神

須藤かなめ

其一

花にくもりて朧氣に　月は窓よりかげさして
友が寝顔をてらしけり　頬のくれなゐ色あせて
やつれし面に黒髪の　亂れてさけぬ胸の内
慰め兼ねて今は唯　同じ嘆にくるゝ身を
倚頼みてか細き手に　我が手を握り果しなき
思ひにつかれ眠りたる　いとしの友を救ひてよ
天にまします愛の神

其二

樂しかりし元の身に　返さんものと夜晝に
つくす心のかひもなく　日に細りゆく友の身の
深きなやみを思ひては　泣くまじものと忍ぶれど
瞼しれくるあつき露　あはれ見えにこぼるゝなる
心なぐみて愛の神　亂れもつるゝ玉の緒を
繋ぎとめてよ愛の神

海によせて

小夜千鳥

いさゝ小川も大川も、
　流るゝ儘にせき入れて、
水や空なるわたつみの、
　廣きは海の心かも。

溢れる時は足引の、
　大山なしてさかまきて、
磯うつ浪の音高し、
　強きは海の心かも。

岩に碎けて散る浪は、
　冬も得知らぬ雪と降り、
岸に知られぬ花と咲く
　奇しきは海の心かも。

廣き海をば心にて、
　ゆがみし柱草の庵、
涙に沈む佗人を、
　あはれと恵む人や誰ぞ

強き海をば心にて、
　屍はしり肉せめく、
偽り多き世の中を、
　洗ひそゝがん人や誰ぞ

奇しき海をば心にて、
　ミューズの神のます國に、
音樂の花を匂はせて、
　いみじき詩をば誰かよむ。

流るゝ水

刈谷都筑博子

里の小川に月落ちて、

眠る柳の下かげに、
恨むが如く泣くが如、
水は咽びていひたりき。
留めたまひそ岩の君、
一と夜の契り高嶺の、
深き情は忘れねど、
前途をいそぐ己が身の、
はかなき赤縄いかにせん、
恨は瀬の音となり、
涙は淵をたゝふとも、
とゞまりがたき水の身の、
流の末はわだつみの、
からき憂世の潮にいり、
愛も希望も生命をも、
空しく涙に葬りて、
誠もあらずならんとき、
つらき歎きを君や見ん。

うき世

長野　丸山操子

たゞこゝろにも偽りの　無き世なりせばいかばかり
人の言の葉うれしくて　人をも身をも恨まずに
戀しき君ともろ共に　ゆかしき君と諸共に
今日と暮して住なまし　きのふとすごし飛鳥川
ふち瀬かはらじ末の松　波も越じと守きたけの
ふしを合せて契りつゝ　縁の糸のをだまきの
めぐるが如く吾が思ふ　まに〳〵ならば樂みは
なにかは是に杉の戸の　過ぐと思へどまゝならで
やさしくひらく春の花　くまなくてらす秋の月
満ればかくる定めにて　咲なばやがて散るものを
咲て散らずや咲ほどの　なにかは長きもの寧の
満てかけずや満るさの　なにか久しき世の中の
人の心のあすか川　昨日の淵は今日の瀬と
變りはてたる憂てさよ　かはれば末の松山も
波うちこゆて泡沫の　はかなく消ゆる吾が思ひ
憂さみし身の戀しさに　衛士の焚火の夜は燃て
ひるはきゆつゝ久方の　空うち仰ぎあくがれの
地に伏つゝこしかたを　偲び悲しみて伊勢の海
千尋のはまに拾ふとも　何てふかひも荒磯の
岩うつ波のおのれのみ　千々に砕けて思ひしが
悟ればゆめの世の中に　たのむまじきは人心
末たのもしと思ひてし　心づくしも仇なれや
偽り多きよの人の　一時をかざる赤心も
あらへばさめて紫の　かはり果たる紫陽花の
花のむはたれかしる　人の心はたれかしる
悟ればさても吾身ほど　愚なる者はなかりけり
さはいへもしも偽りの　なき世ならせばいかばかり
人の言の葉うれしくて　人をも身をも恨まずに
戀しき君ともろ共に　嬉しく此世おくりてん
ゆかしき君と諸共に　楽しく此世すごしてん

あはれの乙女

名古屋　鈴木禮子

楽しものまで父は死に
その枕邊になく母の
たくらむ音もなき夕
涙おさへてわらをうつ
乙女の身こそあはれなれ

君の姿

播磨　岡本もと子

春は櫻見菫摘み、　共に遊びし君と姿、
夏は川邊に舟泛べ、　螢狩りせし君と姿、
秋は月見に紅葉狩り、　共に語りし君と姿、
冬は夜毎歌留多とり、　笑ひ興せし君と姿、

＊　＊　＊　＊

戀しき故郷ふりすてゝ、　學びの道に志し、
遠き都にたゞ一人、　君在すよ幸やあれ、
千山萬野はなるとも、　なとで忘れん君と姿、

女學世界定期增刊春の卷

第參卷第四號

花にしき

（三月十五日發行）

いばらの花に春風吹き、緑の野邊に小牛あそぶ、小川の水はかゞやきておのがまに〱走り歌ふ、是れ誰が爲めに來し春ぞ、汝が身獨りの爲めならず、我身獨りの爲ならず、のどかな日蔭わたゝかき風、春の光は野に山にいたらぬ世界のはてもなし、ア、うるはしき春の日よ、女學世界の定期増刊「花錦」はこのうるはしき春の季節の土産なり、春淺ふして梢は未だにしきを成さねど我が文壇の花は梢の花に魁けてひらきぬ。江湖才媛が花のごとき文章收めてこの一篇にあり、全篇二百八頁中收むる所の▲小說十五種▲和歌三百種▲新體詩三十種▲消息文三十種の外▲課題文各三十種正に是れ百花戲發、爛熳として千巻の錦を織り成すものゝ如し猶附錄として左記の九篇を收め口繪には山光水色の奇抜なるもの十二頁を添ふ。

附錄

▲西比利亞の孝女　某宣教師夫人談

妙齡十八歳の少女父の寃罪を訴んと欲して、單身二千里の西比利亞を橫斷して露京ペートルブルク府へ達せし孝女の壯烈談なり、途中風雪の慘害、山賊の暴虐、艱難具さに到るの狀眞に偏人をし奮起せしむるに足るべし

▲美術家の妻　藤本夕颸

▲はな衣　露月女史

▲乳母車　國木田はる子

可憐無邪氣なる少女と消沈にして陰氣なる家翁と兩々その天眞を發揮して茲に此の孤々たる家庭小說を作る

▲貧婦の貞操　上村左川

▲お幾の誤解

▲ルーマニア夜話　千葉紫艸

白雪皚々千古消らざる高架索山の麓に一佳人あり其の名をマルカといふ。志操高くして孝心深く誠に隣人の譽なりき、佳人一たび敵の襲撃に遭ひ傷きて病を養ふ偶々敵將人より來つて婚を求む、豈圖らんや其の夫婿は即ち敵の間者ならんとは。

彙報

●彰仁親王殿下の薨去

小松宮彰仁親王殿下には過般來御腦症に罹らせられ橋場の御別邸にて御療養中の處藥石効なく去二月十八日午前三時と申すに終に御薨去あらせられたり殿下は故伏見宮一品邦家親王第八の御子にして弘化三年正月十六日を以て御誕生あらせられ弘化五年正月仁和寺相續被仰付嘉永元年四月五日仁孝天皇の御養子と爲り安政五年三月名を嘉彰と賜ひ親王の宣下あり同年九月仁和寺に入て得度あらせられ御法名を純仁と稱せらる慶應三年十二月九日復飾仰出され同日二品に叙し隨身の兵仗を賜ひ議定職仰付られ御名を嘉彰と復せらる明治元年正月三日軍務總裁に轉じ爾後外國事務總裁海陸軍務總督軍防事務局督兵部卿軍務知官事の諸官職を經て明治二年七月更に兵部卿に任せらる其間征討大將軍として錦旗節刀を賜ひ伏見鳥羽に御出征會津征討には越後に總督として出征あらせられ功を以て永世賞典祿千五百石を賜ふ茲年東伏見宮と稱せらる明治三年より五年に至る間英國に留學あらせられ六年十一月陸軍少尉に任せらる七年佐賀の役には征討都督を命せられ役後陸軍少將に任せらる十年西南の役には新選旅團司令長官として出征あり功に依て詔書並に金幣を賜ひ十三年三月陸軍中將に任せられ十五年大勳位に陞叙し菊花大綬章を賜ひ同十二月東伏見宮を改めて小松宮と稱し御名を彰仁と改めらる廿三年六月七日陸軍大將に進級あらせられ其間或は近衛都督として或は近衛師團長として常に禁衛の貔貅を統率あらせられ二十八年日清戰役中熾仁親王の薨せらるゝに及んで其後を襲で參謀總長の職に補せられ同年四月大總督府を率ゐて遼東の地に前進し給ふ八月廿七八年戰役の功に依て菊花章頸飾及び功二級金鵄勳章を賜ひ三十一年一月二十日元帥府に列せられ特に元帥の稱號を賜ひ三十五年大不列顛國皇帝皇后兩陛下戴冠式參列の爲め四月十九日御渡歐の途につかせられ伊佛西英獨露の各國帝室及び大統領を御訪問ありて八月中御歸朝遊ばされ各國より數多の勳章を御受領相成りたるが殿下には又赤十字社事業總裁として御盡瘁遊ばされ去年十月二十五年紀念祝典を擧げられ玉ひしことは近く人の知るところにして其他殖産興業に御心をよせ玉ひ文に武に御熟達あら

せられ國家の重鎭たりしに今や則ち溘焉御薨去あらせらる悼い哉

◉貞子女王の御入輿

北白川宮第二女王貞子殿下は豫報の如く去月六日有馬伯長男賴寧氏に降嫁あらせられたり入輿の摸樣を承るに午前八時老女等の介妁にて禮服に改められ廣間に於て御母富子、御兄弟成久王、恒久王、輝久王、武子、擴子各殿下と對顏あり此時兩陛下より御使を以て御當主成久王へ御酒一荷鮮鯛一折を貞子女王へ紅白縮緬二匹を御祝儀あらせられ又皇太子、同妃兩殿下よりも御酒一樽、鮮鯛一臺、紅白縮緬二匹を御贈與ありたり續いて參邸の各親王並に妃殿下と對顏あり畢りて告別の爲め御靈殿に參拜せられ正午一同と午餐を共にせられたる後御出門の準備を整へ午後一時發駕せらる行列は前驅に警部二列騎馬、次に儀仗近衛騎兵二列、次同二列、殿下の馬車は貴賓用にて松岡老女陪乘兩脇及び後部には騎兵一騎宛警衛し次に宮家の田中家令、麻生家扶、田中有馬家令何れも馬車にて隨從、次儀仗騎兵二列の順序にて紀尾井町より麴町通に出で順路を經て淺草橋場なる有馬伯爵家に著輿せらるれば賴萬伯及び媒妁人各夫妻、親戚の人々玄關に出迎へ殿下は媒妁人の先導にて先づ控所に入り暫時休憩の上大廣間に導かれ伯爵夫妻及び親戚の人々と對顏し畢りて樓上の廣間に於て賴寧氏と盃事あり玆に目出度婚儀を終り引續き祝宴の催ふしありたりと御降嫁に就き御調度の一班を伺ひ奉るに御召物其他の御調度は昨年來宮内省御用達玉寶堂外三十七名に御沙汰ありしがいづれも美を悉したるものなるが中にも玉寶堂主に命じて調製せしめられし御頸飾は大小八十餘箇の金剛石と二百餘箇のルビー其他の寶石を以て飾れる美麗を極めしものにて又其他の御手道具等は概ね殿下の御意匠に成れるもの多しといふ有馬家は小松宮殿下の御緣家なるに今亦た貞子殿下の御降嫁あるは同家に取りては無上の榮譽といふべく舊藩地久留米地方よりは祝賀の爲上京する者續々あり殿下にも來る三月中旬には賴寧氏も御同伴にて同地方へ御旅行遊ばさるべき御都合なりと承る

◉中島歌子刀自の長逝

曩に横井玉子刀自を失ひたる我女學界は月を同じうして又女學者の大家中島歌子刀自を失ひぬ、女史や和歌

に書に才藻並び至り、德操高く女學界一世の師範として仰望されたりしに、病を以て遂に一月三十一日なき人の數に入らせられぬ、その死するに臨んで特旨を以て從七位に叙せらる今刀自の經歷爲人を記さんに刀自は天保十二年江戸日本橋北鞘町に生れ幼名をとせといふ埼玉縣入間郡大江村大字森戸中島又左衛門の次女なり父又左衛門は後に小石川傳通院前池田利右衛門の養子となりしが池田方は水戸藩の郷宿を業とし水戸の家臣の來り宿する者多き内に緣ありて文久元年年十八にして同藩士林忠右衛門（二百石）に嫁しぬ忠右衛門は有名なる天狗黨の一人にて當時の名士廣岡子之次郎の實兄に當り黑澤忠三郎及び大關和七郎の甥なり忠右衛門は武田藤田等と共に王事に盡し下野國都田野原に於て戰死を遂げしが刀自はこの事件に坐して水戸藩反對黨の爲に捕られ獄に在る事數月なりしも優悠自適更に憂色なかりしといふ累解けて獄を出づるの後加藤千浪を歌の師として故伊東祐命等と共にその才藻を競ひしが其調の優美なると共に世に知らるゝに至り爾來この道に盡す事三十餘年、上は梨本宮御息所等金枝玉葉の方々を初め鍋島侯爵夫人天野爲之夫人佐々木醫學博士夫人等の貴夫人より有名なる女流小說家にして明治の小說史に異彩を放ちし故樋口一葉女史及び文學博士三宅雪嶺夫人花圃女史等も多年の薫陶を受けて今日の名を成すに至りしもの其他其門下に師と仰ぎし者顯門高貴の子女を合して實に千名以上に達す以て其學德のいかに世に尊信せられたるかを知るに足らん近年日本女子大學校に聘せられ生徒の信賴厚かりしが五年前より肋膜炎にて藥爐相親しみ病床に在る事多かりしが頃者鍋島家の執奏にて高崎御歌所長より御歌所に奉職すべき旨の内命屢々下りしが刀自は其病身なる故を以て辭し奉りしが今回の叙位は蓋其御下命のありしが爲なりと布衣の身として叙位の恩命を享けしは未聞の事といふべしさて刀自は昨年十一月頃より病やゝ重り新年に入り一週日前より病俄かに革たまりて駿河臺杏雲病院に入りしが同病院主佐々木醫學博士の夫人は刀自の薫陶を受けたるの故を以て刀自に盡す事恰かも母の如く看護至り盡せしも天壽とてその効もなく不歸の客とはならせ玉ひぬ、今際に至るまで心亂るゝ事なく眠るが如く瞑目したり刀自の家庭は甚はだ武士的にして子弟に對する頗る嚴格なるも又溫容自ら人をして親しましむるものあり、されども今は再びその謦咳に接するを得ず、嗚呼

●日本水兵の母

日本水兵の母として昨年十一月の本誌に紹介せしミスマークレン嬢は過般我帝室より嬢が多年の熱誠を奇特に思召され勳六等に叙せられ寶冠章を玉はりたり尙嬢の奇特なる行爲に就て記さんに嬢や齡正に七十、尙矍鑠として元氣よく、我軍艦回航員等の彼地に赴くときは、滿面に喜色を湛えつゝ艦上に見はるゝを以て例とす殊に名譽ある戴冠式參列の爲め特派せられたる我艦隊の入港を耳にするや、東奔西走普く世の慈善家に計りて寄贈を募り、書籍袋等を造らんが爲め十數日の間夜を以て日に次ぎ、睡眠時間の如きも連夜二三時間に過ぎざりしと云ふ、古稀の高齡を以て苦を忘れ勞を厭はず、燃ゆるが如き熱誠もて唯々寸時も早く愛らしき子供等に會せんことを期せしとて、眞情面に溢れ我艦員を見ると慈母の赤子に於けるが如きものあり、其兵員の倫敦見物等に至りては、而かも二百餘人の指揮官となりて、車馬の來往最も劇しき熱閙中に馳驅し、或は議院に、或は府知事の官邸に個人としては到底出入し能はざる所も自由に觀覽せしめ、動植物園より水晶宮の如きも無料にて入らしめ又買物の爲めには商會に導き、忽ちにして汽車に搭じ、馬車に乗り、終日鬱々として案内の勞を採りたり嬢は元と相當の資産を有せしも日本人歡迎の爲め遂に蕩盡するに至りしと、吾人は實に謝するに辭を知らざるなり、蓋し我艦艦のテームス河畔に來れるもの多きを以て、嬢は寓を此に移し日夕樓に上りて我日章旗を飜せる艦影を待ちつゝありしなり、何ぞ夫れ邦人に對する友愛の深きや、嬢は明治六年に我國に來り九ヶ年を經て歸國せりと、其以前は五ヶ年の間支那におりしと云ふ、故に支那語を操り日本語に至りては最も熟練せるものなり、嬢を呼ぶには阿母さんと云ふ時は頗る得意なれども、お婆さんは其尤も嫌ふ所なり、又た戯れに彼は日光を見給ひしかそは結搆なりなど洒落るも可笑し、支那に在りし時病に罹り日本に轉じたる由なるが、温和なる氣候と清淨なる空氣に病根を洗ひ去り、健康舊に倍せしを以て、日本は大に恩義ある國なりなど語られたり、嬢が日本人を愛するもの此等が其動機となりしやも知るべからず、今尙ほ日本の明媚なる山光水色を追慕して止まず、其室内には日本風の裝飾をなし、我至尊の御眞影を掲げ奉り、旭日の御旗より軍艦旗等を飾りつるが如き、我國士を敬愛するの情に至りては、他鄕

に寄寓せる我邦人と雖も及ばざる所あり、斯く熱誠なる嬢の名聲は天下に鳴り渡れると同時に其の特權も極めて大にして多く意の如くならざるはなく、汽車賃の割引より我兵員を伴ふ時は街鐵幾多の馬車を止めて通行するが如き、其他慈善家の聞えある者に向て、日本の水兵を連れ行くべければ宜しく願ひたしなど、半命令的の照會をなして赴くことあり、而して嬢の照會を受けし者も亦敢て難色なく直ちに之に應じ、之を以て至大の名譽とするもの丶如しと與に日本水兵の母と稱するも又過言にあらじ

●明如上人の葬儀

本派本願寺第二十一世法主伯爵大谷光尊師が去一月十六日午後六時、來迎佛の御迎ひに導かれて遙かに穢土を後にせられしより日を經ること三週にして二月七日葬儀の式は執り行はれぬ、他力本願の御法を仰ぐ門徒の衆は云ふに及ばず法雨の雫にさへ霑はざる外道門外の輩までも今日の野邊送りを拜み見て其盛なる式儀を郷黨への語り草にせんとて四方十方より馳せ集るほどに洛中洛外は遙かに人に充ち滿ちて其雜沓は云はんかたもなし今其光景の一班を記さんに葬儀の前夜は通行の道筋に各戸無紋の高張を點し白の幕を張り花屋町油小路邊は露店軒を列べ六條境內の旅店は旅客を以て盈れ宿を得ずして毛布又は幕を被りて露宿するもの多く式場には篝火を焚き人夫夜を徹して働き七條通大和大路の青街門脇假屋には消防夫詰切りたり又本山にては門を鎖し內部には參列席を設くる爲め職人、人夫を以て終夜働かしめたるがさて午前五時集會鐘にて入門を許すや門前に蝟集したる人々の混雜名狀すべからざりき又葬儀を拜觀せんと豫て四方より集りたる地方門末の善男女六條境內に充滿し堀川通、御前通、油小路、七條通に當れる道筋に雲霞の如く居流れたるは稀有の盛況にして此の中を行く行列は八千の寺院三千の門徒加ふるに儀仗兵を以てし裝束、羽織袴、洋服、高張、竹杖、松明、剱帽は燦爛として人目を射る計り前驅已に式場に入たるに後驅は猶油小路七條に在り扨又棺は外面巾三尺一寸三分に横巾四尺三寸內面三尺一寸八分に四尺八寸の檜造にして之を行ひ此を入れたる輿は重さ三百貫目白衣差貫の力者五十人交代にて此を舁けり次に式場の摸樣を記さんに三十三間堂脇の式場は矢來を以て圍ゐ南門に車止あり爺鷹堂に至るの間塀を以て巡路を造り左右詰所には參列者資格の名札を立て看護

婦の一二其間に往き戻りし龕堂前には燒香臺あり金銀の造花あり百味の飲食を供へ堂内蓮花坐の上に輿を据られたり次に順路の摸樣を記さんに道筋の家々は悉く拜觀人を以て滿され一人前三四十錢より七八十錢までの料金を取り其さへ午前十一時頃には貸切りとなりて高瀬川には講中の舟を買ひ切るあり舟を並べて一人前四五錢宛にて乘込ませるあり其の他辻々には彌が上に人を以て折重り又た棧敷を拵へて十錢より三十錢位の坐料を取るあり七條磧には人波打ち川に溢れ込み京都高等女學校の生徒は豐公廟前に慈善財團特別會員は青衛門左側、智山派學林の生徒は智積院門前にて拜觀したり斯かる雜踏なりしかば立すくみ坐りすくみの人を當込み辨當茶行列の繪など賣歩くものあり中には床几を連べて一人前六七錢より十錢前に貸したるものもあり扨又式場附近の光景を記せば拜觀人の最も群集したるは式場前大佛通にて北は豐國神社前より山を築き松原署の警官必死となりて雜沓を制すれども力及ばず一時は人雪崩打ちて老幼婦女の叫ぶ聲凄しく南は瓦屋町より立錐の地なく前通に筵を敷て坐らしめ辛じて混雜を防ぎたり此を奇貨とし筵代を徵集して引致されたるものもあり御影堂及び阿彌陀堂の勤行中各參列者は何れも堂前白洲に控へたるが其の數僧侶六千五百普通參列者二萬五千に餘れりと七條停車場は期日の切迫するに從ひ次第に下車客を增しつゝありしが六日には二萬三百六十四人次に、九、十兩日は葬儀に參列したる重なる者に齋を饗應せしが而して其の數凡そ一萬の見込にて三百名宛交換せしと

◉近郊の梅信

◎杉田梅園　東京よりするものは先づ橫濱驛に下車して伊勢佐木町通りを左へ黃金橋近傍に出で其處にて杉田通ひの乘合船に乘るを便とす一人前十五錢位なるべし斯くて堀割川を經て海に出で一文字に杉田に上陸すべし此村は全村悉く是れ梅とも云ふべく盤舍盤牡其間に點綴して自然の景致最と愛すべし見頃は三月上旬なり

◎新月ケ瀨　青梅鐵道の開通と共に世に知られたる多摩川南岸吉野村の内字下村の梅をいふ滿開の頃に至れば一村皆な寒玉の裏に埋もれて雪萼霜蘤一齊に天香を吹き淸氣骨に沁して塵界の何處に在るやを疑はしむ大和の勝區月ケ瀨に擬したる名稱寔に空しからずと謂ふべし土地の人の書信に依れば昨今春色正に闌に

して汽車に便して花下に集來する人日毎に群を成す許りなりとぞ其他臥龍梅木下川等見頃は三月上旬なるべし

●和洋裁縫女學校（九段坂上）

本校は麹町區飯田町九段中坂上にあり、明治三十年二月の創立にして、斯界の泰斗堀越千代子氏の管する所なり、和服裁縫の外洋服裁縫をも併せて教授する正則の學校は實に本校を以て嚆矢とす、尚は本校の目的は文部省及東京府の裁縫科教員試驗撿定に應ずる女子の爲めに相當の學力を準備せしむるに在りといふ、而して其の教科を七科に分てり、即ち普通科は一年半の學期にして専ら和服裁縫を修業せしめ、速成科は其學期を六ヶ月とし既に和服裁縫を修業したる者の學ぶ所なり、高等科は普通科及速成科を卒業し進んで高等裁縫を學ばんとする者の爲に設け洋服裁縫をも併課す、土曜科は平素餘暇なき者の爲に設けたるもの、試驗豫備科は女子高等師範學校高等女學校及び小學校裁縫科教員志望者の爲めに設けたるもの、別科は本科の裁縫以外各種の隨意科目を學ぶ所なり、今本校の各科に通ずる學科及び術科教程表を擧ぐれば即ち左の左し

（寄宿費一ヶ月六圓　月謝普通科一圓　速成科一圓四十錢　土曜科六十錢　高等科一圓六十錢）

修身	人倫道德の要領
和服裁縫	和服裁縫の全体、其理論、實地及雛形、外裝束物全体雛形、及和服其他普通外の者數十種
洋服裁縫	洋氣遜掛、前掛、男女シャツポ、ポンチット、襟飾、シャツ、及ツポン下、等より初め數百種大禮服まで其裁方理論、實地雛形、及其付屬品、佛獨英米正則にて
教育	教育學、教授法、（裁縫教授法を主とす）管理法、心理學等、（以上筆記）
國文學	文典及其他日記物語類數種及作文
漢文學	漢文讀本、小學、孟子、論語、文章軌範等
習字	行草及假名
家事	衣食住、家政要旨、育兒法、看護法、交際法、衛生學、經濟學大意、家計簿記等
（隨意科）編物刺繡造花細工物和洋割烹活花點茶	

●女子高等師範學校國語體操科

同校にては、今回新に私費國語體操專修科を設置し、主として高等女學校に於ける國語體操科の教員を養成

せんとし、生徒募集に着手せしが、募集員は三十名にして、入學志望者は品行方正身體健全にして、修業年限四ヶ年の官公立高等女學校生、若くは之と同等の學力を有し、年齢十七年以上三十年未満にして、夫を有せざるものに限る由にて、本年三月二十日迄に願書を差出せば、四月上旬試驗の上入學を許可せらるべしといふ。

●本邦婦人間の新計畫

今回鍋島侯爵夫人、鳩山夫人、山脇夫人下田歌子外有力なる女子教育家の間に婦人會館設立の議成り近々其計畫に着手す可といふ右會館は例ば婦人教育會の如き婦人衛生會の如き若くは女子共立慈善の如き各面に分れたる婦人の事業を一所に集め一致して婦人が社會的活動に便ならしめ演説に宴會に或は外賓招待の如き總て婦人會館に依て取行ふを得るの計畫也と

●日本女子大學校生徒募集

同校にては本年四月新學期開始に付家政、國文、英文、の三學部各一年級英文學部豫科一、二年級幷に附屬高等女學校一年級より五年級まで各級に入學を許可するよし申込期日は三月二十日なるが申込の順序を以て入學を許可すべきに付豫定人員に達すれば期日内と雖ども願書を受付ざることあるべしと云ふ因に記す同校にては目下校舍増築中にて寮舍も増設計畫中なりと云ふ

●女子講學會

東京府教育會の附屬として今回新に女子講學會なるもの設立せられたり同會は通信教授の方法に依り高等女學校の學科程度に基き一般女子に必要なる學科目を教授す其講師及受持學科は左の如しと

一修身科	篠田利英
一國語科	佐方鎮子
一地理科	伊藤貞勝
一歴史科	高木みつ子
一理科	林吾一
一家政科	下田歌子
一裁縫科	喜多見佐喜子
一作法	小笠原清務
一兒童心理	文學士 松本孝次郎
一女子衛生	鷲山彌生子
一割烹科	赤堀峯吉

術講義錄附錄として毎號（初號二月三日發行）朝野名家の論說會員其他の投稿にかゝる作文和歌俳句をも揭載すといふ

●靜和女塾

從來芝區櫻川町十四番地に在りたる同塾は過日同區葺手町に轉じ地方等より出京し安心して宿泊すべき所なき婦女子を預り各其の父兄の好に應じ晝は相當の學校に通學せしめ、朝夕は塾主守田チエ子氏自ら家事科を敎授し、且つ嚴重なる監督をなせば、東京に知人なき人は其の子女を托するに最も適當なり、本塾は寺田勇吉氏の指揮命令に從ひ、良妻賢母を造るを以て目的とし敢て學者を造らんとするにはあらずと云ふ

●婦人の柔術

高等師範學校々長嘉納治五郎氏の創立に係る小石川下富坂の柔道敎授所講道館は日に月に門弟多く益々斯道の繁昌を來し今は婦人さへ妝容するに至れり中にも芦谷スエ子孃と云ふが如きは嶄然頭角を現はして漸く段に入るの勢なり一意蘊奧を究めんとて夙夜其道を講ずるは鬚髯の男兒をして後に瞠若たらしむる槪ありとて嘉納橫山富田の諸氏多く同孃に囑望せりとなり其が爲め奮起せしものが講道館別道場たる五番町には多く綠髮紅顏の人を見るに至れりといふ。

●女學生用袴

名古屋市永東呉服店より賣出せる櫻織女袴は地質堅牢なるが上に體裁優美なれば、女學生用として恰好のものなりと。

●英國皇女驛遞總監に戀慕す

桑港エキザヨナー新聞の報に據れば英國殖民大臣チエムバレインの長子オーステンチエムバレインは同國第二の皇女ヴイクトリアーに戀慕し居り皇女も亦オーステンを慕ひ居る由なりオーステンは現に驛遞總監の職にありて內閣の敏腕なる一員たり年齡は三十九歲にして莫大なる資產の相續者なるのみならず非常なる美男子なり而して皇帝は皇女の愛に就きて甚しく興味を感じ居ると云ふ皇女は本年三十四歲なり

女學世界第參卷第五號記事要目

（四月五日發行）

每月五日發行

定價表

一冊	（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊	（三ヶ月分）……	前金七十五錢
八冊	（半ヶ年分）……	前金一圓四十五錢
十六冊	（一ヶ年分）……	前金二圓八十錢

内｛定刊數……十二冊／增刊四回……三、六、九、十一月價格同一

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	中頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……		割引三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置ゝ切目等御照會次第御報可致候

注文規畧

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。

●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。

●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。

●総目錄御入用の方に二錢郵券相添申込あれ。

明治卅六年三月五日發行　第參卷第參號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

博文館發兌

幸德秋水君著

兆民先生（全壹册）

▲正價金貳拾錢｜郵税四錢

著者其先師を悼むの情に堪へず涙を揮て大筆を驅り一編豪宕淋漓の文を成す兆民先生の面目紙上に活躍せり卷末に大石正巳君先生を哭する演説あり字是涙句是血

內田不知庵君著

社會百面相

▲正價金五拾五錢｜郵税十錢

犀利鋭拔の觀精緻流麗の筆相待て巧に現代社會の異相を穿ち其奸醜を照破す其文趣味豐富にして讀下無限の興を添へ喜怒哀樂の情に堪へざるものありて終に倦むを知らず

[illegible]著

草木實驗

盆栽仕立秘法（全壹册）

▲正價貳拾五錢｜郵税六錢

盆栽は一の小天地なり、數十丈の古樹を、寸尺の盆鉢に縮め、亭々百尺の森林を、寸胖中に培養す、實に人生樂事の清秀なるもの、本書其仕立法の秘を闡き、江湖同好の士の一粲に資す

西芳菲山人校閲　木村小舟君著

春夏秋冬理科手引草（全壹册）

▲正價金三拾八錢｜郵税八錢

本書は動植物兩界に亘りて少年讀者が日常の玩讀に供せん爲めに勉めて章句を簡にし趣味の深からんことを期せり故に讀者の四季折々の實際觀察に便し更に理科研究の楷梯たるは本書の特色にして又社交時進應答の好適品なり

明法學士 山口慶一君編

新舊對照

刑法蒐論

▲全壹冊洋裝紙數六百六十餘頁

▲正價金八拾錢郵稅金十六錢

刑法改正案出でゝ世論の沸騰を招き賛否騒然二期の議會を經て未だ決せず本著者玆に見る所あり法曹界に最も用ゐらるゝ學者の意見を蒐め改正案と現行法とを對照して其理由を擧け判決例の適用を示し岡田博士の校閲を經て本書をなす

蠶業新報記者 池田榮太郎君著

桑樹栽培全書

▲全壹冊洋裝總クロース金字入美本

▲正價金壹圓貳拾五錢 郵稅十八錢

栽桑に關する著書少からずと雖一方に偏せずして全般を詳說したるものなし、本書は著者積年の辛苦を經て調査せられたるものにして栽桑に關する事項は細大洩さず加ふるに石渡學士の校閲を經たれば眞に斯業者の寶典たり

破竹居士著

健康と遠足

正價卅錢 郵稅六錢

破竹居士健康の術を講せらるゝこと二十年本書は其結果として世に公にせられたるものにして實驗に偶するに學理を以てし而も實用に適す且行文暢達にして流麗なる讀者倦くことを知らざるべし

下田歌子女史編

女子用文習字帖

全二冊 和裝

▲正價金八拾錢 ▲郵稅八錢

巧なる文庫も筆蹟醜ならざれば人之を卑み筆蹟美しきも文章拙なければ人之を侮る之に反して筆蹟文章兼れ全ければ先づ其の人を見ずして其人を敬ふ其事女流の日用文に於て殊に然り此書は文も書も天下の雙絕を集めたれば江湖の諸嬢是非購へ玉へ

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

後付の二二

（後付の

(後の付五)

文學博士重野成齋先生序
質軒 岸上操先生編

明治二百五十家絶句

▲全壹册洋裝上製金字入
▲正價六十錢 郵税八錢

本書は當時詩壇に名聲籍甚なる大家二百五十家の秀逸各十首の自選を集成したるものにして全編悉く金聲玉振を以て滿ち秋霜烈日を以て蔽はる蓋し詩壇の偉觀なり

發兌元 博文館

鶯亭金升著

風雅文庫

全部十二冊洋裝寸珍

第壹編 都々一の栞
第貳編 冠句の栞
第三編 狂歌の栞
第四編 狂句の栞
第五編 狂体句の栞
第六編 雜俳の栞

正價一冊廿錢
六冊一圓十錢
郵税四錢

發行 博文館

文學博士井上哲次郎君述

巽軒講話集

正價七十錢　郵稅十二錢

井上博士は現代哲學界の泰斗なり本書は其平生の所論を集めたるもの該博の識斷新の見一讀再讀彌々深く愈々廣し江湖の讀書家是非一本を供へられたし

博文館藏版

松林東玉講演

菅公

正價卅五錢　郵稅八錢

紅梅殿訣別の圖……古洞筆

講演家の泰斗松林東玉氏が最後の講演たる菅公一代記を依田先生の精密なる校閲を經て世に公にせる全篇を松竹梅三卷に分つ叙述明晰快辯縱横近來の好演史

博文館藏版

文學博士井上圓了君述

甫水論集

正價五十錢　郵稅十錢

本書は東洋哲學の新研究に吾國宗教の大改革に絶大の貢献をなしたる圓了博士千篇の論文中より其精華を拔て一書となせるもの讀一讀其風教に學術に益する所大なり

博文館藏版

女學世界
毎月壹回五日發行
明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可
第參卷第參號
明治參拾六年三月五日發行